

---

# プリキュアオールスターズD X 3 Revival 導いて！幸福の成す奇跡

桔梗 刹那・F・セイエイ シルバー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プリキュアオールスターズDX3 Revival 導いて！幸福の成す奇跡

### 【Nコード】

N1030Y

### 【作者名】

桔梗 刹那・F・セイエイ シルバー

### 【あらすじ】

プリズムフラワーを巡る激闘から数ヶ月後、雨牙真夜「キュアセイバー」の前に現れたのは、存在だけで世界を滅ぼす力を持つ最強の敵！そのとてつもない威力に、彼女は最大の危機を迎える。そして、その敵を追い、23人のプリキュアたちに別世界から三人の『天上人』が姿を現す。彼女たちに導かれ、プリキュアたちが足を踏み入れたのは、誰も知らない未知の領域だった！新たな冒険とともに、伝説の戦士の最後の戦いが始まる！その敵の名は……『

幸福  
』。

## 最初の挨拶

みなさん、おひさしぶりです。桔梗です。

2011年11月1日本日、この度遂に私は最後の作品を執筆することを決意しました。

思えば私にとって記念すべき小説第一作『プリキュアオールスターズDX2NEXT 新たな伝説 銀河最大の超決戦!』（以下『DX2NEXT』）を執筆してから早いもので一年が経過し、その後も『仮面ライダースカルVSキュアムーンライト』『プリキュアオールスターズDX2THE LAST 光と闇 最後の戦い!』（以下『DX2THE LAST』）『真プリキュアオールスターズ!』『花妖 蒼い追憶』『CureRebellion Episode:Blood』といった計六作の作品を書いて参りました。

しかし、筆者として小説を書く限界というものを徐々に感じていき、本作を最後に筆を置くことを決めました。これまで私の作品を読んできてくださいましたみなさんにはたいへん申し訳ありませんが、私は悔やんでいません。本作完結後は普通の読者に戻り、みなさんの作品を楽しませていただく次第です。

さて、本作は私の小説第一作と第三作『DX2NEXT』『DX2THE LAST』の続編で、また刹那・F・セイエイ氏作『プリキュアvsプリキュア』との競演作品コラボという形にもなっている刹那氏ともう一人、シルバー氏も含めた三人による共同企画作品であります。なので初めて読む方は先述した三作品を先に読むほうをお勧め致しますし、むしろそうしたほうがより本作を楽しめると思います。

一応来年（2012年）3月17日公開予定の映画『プリキュアオールスターズ 最新作（仮）』（注）までの完結を目指しています。

フィナーレ

最終作に相応しい作品になるように全精力を入れて頑張ります。  
長い本文を最後まで読んでいただき、ありがとうございます。  
それでは、本作を最後までごゆるりと、お楽しみください。

(注) 『プリキュアオールスターズNew Stage みらいのともだち』と公式に発表されました。

## プロローグ

「また・・・、別の世界へ飛ぶの？」

そう、茶の色をした短髪の少女は目の前の少女に問いかける。『また』という言葉に紫のツインテールの少女はつい苦笑いを浮かべると、仕方なさそうに首を縦に振る。

「うん・・・すぐに来てほしいって『彼女』から緊急に連絡が入ったの。しばらく『この世界』を留守にするわ」

「・・・あのさ、だったら私も・・・っ!？」

『一緒に行こうか?』と言葉を続けようとした口を人差し指で閉じられ、短髪の少女は少しだけ狼狽の色を浮かべる。少女の口を封じたツインテールの少女はそつと指を離すと、その口から漏れるはずだった言葉の問いに答える。

「悪いけど、今度はあなたを連れてはいけない。今度の出張は私もまだ詳細を聞いていないの。もしかしたら長引くかもしれない。もし、あなただけを連れて行ったら、『夢原のぞみ』キユアドリームがまた頬を膨らませるでしょ？」

「・・・」

『夢原のぞみ』の名を出され、短髪の少女は黙らざるをえなくなる。というのも、今『夢原のぞみ』は自分がそばにいて支えてあげないと精神が崩壊寸前にまで追い込まれる・・・は大袈裟としてもそれに近いギリギリの状態を保っている。自分以外にも彼女を支えてくれる人はいるのはいるが、万が一暴走に至ったら、誰か止められるだろうか。短髪の少女はほんの少しだけ黙考し、いないと結論を出す。もはや『夢原のぞみ』の中で自分という欠片ピースが不可欠となっている。彼女が暴れたら、張り手を食らわせてでも自分が抑えなくてはならない。

とはいえ、『この世界』が地獄に変わらなければ、『夢原のぞみ』もああならなかったはずだ。

しかし、現実はいつだって自分たちの目に嫌になるくらい焼きつける。

この地獄では、自分たちは世界の敵と人々に認識させられていた。かつての栄光が一体どうしてここまで転落していったのか、それは被害者の自分たちも知りたい。世界中から敵と仕立てられた自分たちはいつしか『世界破壊派』と『世界守護派』に分かれ、仲間同士で戦いの火蓋が切られ、現在も続いている。これから先も醜い争いが続くのが確実の中、自分までが一時とはいえ地獄から逃れたら、きつと『夢原のぞみ』はさぞかし恨めしく思うだろう。

「……分かった」

短髪の少女は肩を竦め、嘆息を漏らした後で『この世界』に残ることを選ぶ。彼女の返事を聞いたツインテールの少女は「ありがとう」と一言礼を述べると、静かに短髪の少女の首の後ろに両腕を回し、きゅっ、と抱き締めた。

「なるべく早く帰るから。『のぞみ』<sup>ドリーム</sup>のこと、お願いするわね」

「オッケー、任せといて……」

そう返答を聞き、ツインテールの少女は親友『美墨なぎさ』<sup>キュアブラック</sup>と別れたのだった。

『美墨なぎさ』と別れた後、ツインテールの少女は指定の場所へと到着する。すでにひとりの少女が待機しており、彼女は声をかけた。

「来てたの……」

「遅かったわね」

「ちよつと親友とお別れをしてて……ね」

背中には翼なのだろうか、アルファベットの「？」状に生えている青と白を基調とした衣装の少女「天上刹那」が指摘すると、少女は再度苦笑いをした。

「……それで、用件は？」

が、それもすぐに引き締まった表情に変わり、緊急召集の件について尋ねる。すると、刹那は無表情のまま一言だけ伝える。

ハンディング  
「狩り」

ターゲット  
「?・?・? 標的は?」

刹那は再び一言で返した。

「『幸福』」

「『幸福』・・・?」

理解できずにいると、刹那は無言でファイルを手渡した。表面にずらつと標的のデータが綴られている。ツインテールの少女はそれを取り、何も言わずに速読していく。次第に少女の表情に狼狽が見え隠れし、全ての文字を読み終えた頃には口の開閉を何回か繰り返したが、出てくるのは「あ・・・」とか「う・・・」ぐらいの言葉にならない声が続くばかりだった。

「こんな・・・本当にこんな怪物が存在するというのは?」

「『ヴェーダ』が計測し、すぐに私たちのほうで調べた。間違いはない」

「その怪物が今、別の世界に確実に存在している・・・と?」

「そう。しかも厄介なことに問題はさらに深刻化しようとしているかもしれない」

「?・?・? どういうこと?」

刹那の言葉にツインテールの少女が疑問を口にする、無表情だった彼女は一瞬眉間にしわを寄せ、ばつの悪い表情をしたが、すぐにその重い口を開いた。

「・・・ついさつき私たちの他に『幸福』に近づく存在が確認された」

数時間前。

一軒の邸宅に四人の少女が門扉の形状をした物体の前に集結していた。

「サバーニャ、これ頼まれていたデータ・・・」



「ありがとう、バインド」

バインドと名を呼ばれたルビーのように紅い瞳の少女からデータを受け取り、サバーニヤと名を呼んだ左眼に眼帯を掛けた右眼の蒼い少女は黙読と同時に脳裏に数多の情報を詰め合わせをしていく。幾多の情報をわずか数分で記憶したサバーニヤは即座にデータをゴミ箱へ放り投げた。

「『永遠の楽園』・・・か」

「何？それ」

ふいに口から漏れた言葉に反応してざんばらに短く切った金髪の、美少年にも見える少女が問う。サバーニヤは視線を合わせることなく返す。

「『獲物』が住処としている所よ。今から私たちはそこへ向かい、『獲物』の帰還を待機する。詳細はおいおい解説すわ」

「へえ・・・でもさ、何もそんな回りくどいことしなくても、『獲物』が今滞在している位置を確定すればいいじゃない・・・」

「アンタ馬鹿あつ!？」

しかし、彼女の台詞は突如眼帯している以外はサバーニヤと瓜二つの少女による呆れ声により中断される。「えっ？」となる彼女に少女は眉を顰めたまま人差し指を指して肉薄する。

「デスパイア、アンタもう忘れたの？『レポートゲート』は一つしか世界を渡れない中傷的な欠点があるってことに。もし現時点『獲物』がいる位置に飛んだとしても『獲物』が次元を超えて逃げたら、あたしたちはそう易々と追いかけることはできないでしょうがそれよりも住処としている場所に先に飛んで確実に『獲物』を捕獲できる罠を仕掛けたほうが賢明ってモンでしょ？」

「あ、なるほど・・・でもグライファア、どうやって『獲物』を捕獲するのさ？」

「それは・・・」

「グライファア、あたしが答える」

すると、サバーニヤは懷から拡音機に似た形状の拳銃と三、四の

銃弾を三人に見せた。三人の視線が自身に注視されているのを確認して、サバーニヤは説明を始める。

「拳銃は『ノイザスピーカー』、凶音波発信式拳銃よ。そして銃弾は『マインド・カードリッジ』、標的を捕捉して引き金を引けば特殊音波が放たれて相手を洗脳するよう改造してある。この二つで『獲物』を完全に捕獲できるはず・・・」

「『はず』？テストしてないのか？」

「何しろ『獲物』が『獲物』だからね・・・でも」  
ジャキ。

サバーニヤは拳銃に銃弾を装填し、音を鳴らした。

「一発で決める。『この世界』のためにも・・・」

「・・・」

その台詞に込められた彼女の覚悟と決意に三人の少女はもう何も言わなかった。

そんなこと、自分たちだって百も承知だったから。

卑劣な陰謀に嵌められたあの日から、少女たちの世界は大きく変わり始めた。

行き場を失い、地獄と化した『この世界』。

自分たちを蔑み、簡単に存在を弾き出してくれた『この世界』。

今は『監視者』の名のもとで文字通り、監視をしているにすぎないけれど。

いつか必ず、『この世界』に思い知らせる。

創造の前には、破壊が必要ということを。

「さて、そろそろ行きますか」

『レポートゲート』が扉を開く。

『獲物』を求め、四人の少女は未知の領域に足を踏み入れた。

『幸福』に接近する者の存在についてツインテールの少女が何者なのかを尋ねたが、刹那は力なく首を振り、分からないと伝える。

「ただ・・・」

「ただ？」

「唯が言うにはわずかだけど闇の気配を感じたみたい。少なくとも同業者じゃないのは確か。もし『幸福』が邪悪なる者の手に渡り、しかも最悪『この世界』に現れたとしたら・・・」

「『この世界』は滅びの危機を迎える・・・わね」

そこから先の言葉をツインテールの少女が継ぐと、刹那はうなずく。

「だから、そいつらよりも早く私たちがその怪物を仕留めなければならぬ・・・そういうことね。話は分かったわ。で、その怪物は今どこの世界に？」

刹那はその質問にすぐに答えた。

「『救世主と堕天使の世界』・・・」

その世界の名に少女は少しだけ首をかしげる。

「・・・あまり聞いたことがない世界ね。そこにも『彼女たち』は存在しているの？」

「現時点『その世界』の日本では23人の存在が確認されている。

ちなみに『その世界』にも『美墨なぎさ』キュアブラックや『夢原のぞみ』キュアドリームの存在

が確認されている。無論『この世界』とは全くの別人だけだ」

「・・・ということは、『花咲つぼみ』キュアフロッサムと『明堂院いつき』キュアサンシャインも？」

「・・・存在している」

「・・・・・・」

別の世界とはいえ同じ顔と声を持つ親友が存在していることに少しだけ歓喜を覚え、会ってみたいとほんの欲が芽生えたツインテールの少女だったが、『花咲つぼみ』と『明堂院いつき』のふたりも存在していることも知り、すぐに憂鬱に変わる。

彼女からしてみればその理由は至極当然なのだが、その説明は後々後述する。

「あとアメリカ・ニューヨークに一人・・・いや、二人というべきか」

「?・・・どういうこと?」

「百聞は一見に如かず。これが彼女・いや、彼女たちのデータ」  
再度刹那がデータを手渡す。即行で黙読し終えたツインテールの少女は得心がいった表情でデータをファイルに戻すと目を閉じ、しばらく黙考に耽った。

「『幸福』狩りには日本にいる『彼女たち』の協力が必要となるかもしれないけど、そのふたりは・・・どうする?」

黙考を続けていた少女はやがて瞼まぶたを開けて瞳を刹那に向ける。

「・・・正直言つて危険があるわ。光と闇の両方の力の持つのなら、なおさら・・・」

「でも神様は意地悪がお好き、みたい・・・」

ふいに背後からの声にツインテールの少女は急いで振り返る。さ  
らり、と金の長髪を優雅に風になびかせた少女「天宮唯がふたりに  
接近を試みていた。彼女の登場にツインテールの少女が口を開くよ  
りも早く、唯は言葉を続けて伝える。

「『ヴェーダ』が『幸福』の現時点での位置を特定したわ。『幸福』  
は今ニューヨークよ」

「!・・・」

「ニューヨークに限らずだけど、大都市は人口が集まり、その分欲  
に飢えている人が数多く存在する・・・『幸福』にとってはまさに  
持つてこいの場所なのよ。どうする?」

ちっ。

軽く舌を打つ音が聞こえ、刹那と唯は少女を注視する。少女が苛  
立ちを抑えているのは火を見るよりも明らかだった。

どうしてこう厄介事は悪い方向へ転がっていくのか。こちらら、  
早く任務を終わらせたいのに。

せめてこれ以上厄介事が悪くならないのを祈るばかりだが、そう  
もいかないだろうと少女はあきらめにも似た吐息を吐く。

「・・・私がニューヨークに飛ぶ」

結論として、少女はニューヨークには一人で行くことを選択した。

やむをえない。こうなったら、厄介事がさらなる花を咲かせる前に自身の手で早急に芽を潰すのみだ。任務は迅速且つ早急に遂行しなければならない。それが『この世界』を滅ぼすかもしれないのなら、なおさらだ。

ただし、万が一の場合というのもある。厄介事は増やしたくないが、如何なるケースも想定しておかなければ、遂行すら不可能に入る。

だから、少女はふたりに伝えた。

「私が想定したケースに入った場合、刹那と唯は、日本の『彼女たち』に接触を試みて」

「・・・分かった」

「それじゃあ、ミラクルライトの準備を・・・」

ふたりの返答を聞き、少女は小さなスティック状のペンライトを手に取り、スイッチをONにする。ミラクルライトに閃光が炸裂し、瞬時に三人の身体を包み込んだ。

「『救世主と墮天使の世界』へ！」

ツインテールの少女「水澤睦月」の声に応えて閃光は弾け、一瞬で少女たちをその場から掻き消す。

幾多の次元を渡り、少女たちを包んだ光は着々と目的地へ接近していく。

世界から滅亡を回避するため。

『天上人』の名を賭けて。

## プロローグ（後書き）

きつと『DX2THE LAST』よりも長い、最長プロローグに  
なっただと思います。

次回『救世主と堕天使の世界』に突入します。

## 前兆

アメリカ・ニューヨーク。

メトロポリス

マンハッタン島に浮かぶ巨大都市では今日も数多の人々が行き交っている。

商談成立のために歩行を急ぐビジネスマン。

手を繋いで仲良く笑いながら歩く家族。

娯楽を求めて仲間と楽しそうに出歩いている若者。

いつもと変わらない時間が今日も始まっている。

本当、つい数ヶ月前まで滅亡の危機に追いやられていたなんて、信じられないな。

すでに見慣れた光景に、雨牙真夜はランチのホットドッグを頼張りながら外灯に背中を預け、そう感じていた。

かつて彼女が暮らすこの世界は二度も滅亡の危機に瀕し、しかも一度は寸前に迫られていた。

その首謀者は、他ならぬ自分。

キュアリベリオンという名を持つ自身の心の闇が生んだ邪悪の生命体だった。マイナス

一度は強大な光を滅びの力に変えて。二度目は別世界にて封印された魔王を蘇らせて。

怒り、憎しみ、悲しみなどの怨念を糧にするキュアリベリオンの

マイナス

魔の手は全世界にまで及ぼうとし、ことごとく破壊、蹂躪した。

そんな悪魔を全力で制止したのは、もうひとりの自分。

深い絶望の闇の中から煌く希望を手にして世界に降臨した光の戦士・キュアセイバー！

『プリキュア』という400年も古くから伝わる伝説の戦士に変身した真夜は他に数多く存在していた仲間たちとともに闇との戦いに臨み、キュアリベリオンの野望を打ち砕いたのである。二度も世界の破壊をプリキュア、そして光となった自分に阻止されたりベリ

オンは怨念の呪縛から解放されると同時に世界の脅威から永遠に消え去った。しかし、彼女は完全に消滅したわけではない。最後の最後で和解し、同じ自分である真夜の中に帰ったのだ。今も彼女は雨牙真夜の中で眠っている。

それはかつて自分が犯した罪を受け入れるため。そして精一杯生きて償いをしていくため。

過去の自分との決着を着けたが、それは同時に新たな戦いの始まりを告げていた。

「……ロモモ」

ふいに真夜は首に掛けているペンダントに手をやり、パートナーの名を呼ぶ。けれど現在ペンダントに変身しているロモモはお昼寝の真っ最中のように、かすかにだが寝息が聞こえる。ついロモモの寝顔を想像し、真夜は微笑を浮かべた。

思えばロモモにも色々と大変な思いをさせた。戦いの最中で自分がへこたれても彼はいつも自分を励まし、力になってくれた。父も母ももういない今の自分にとって、彼は離れたくないと思うほどよりかけがえのない存在になっている。今はそつとしておこう。と、真夜はペンダントを戻した。

さて、自由時間ももうすぐ終わり。そろそろ午後の講義に戻るとするか。

真夜は外灯から背を離し、食べ終えたホットドッグの包み紙を近くのボックスの穴に入れると、亡き両親が勤めていた国際医療本部に足を向けた。

陽の光がほとんど射すこともない薄暗い外路。

その一端に三人の青年がそれぞれ紙幣を一枚ずつ数えている。紙幣は自分たちのものではない。そんじょそこらにいる年下のひ弱な少年を脅して財布から奪ったものだ。いわゆる恐喝<sup>カッアゲ</sup>である。もつとも収穫はいまいちだったらしく、全枚数え終えた青年たちは舌打ち<sup>チンビラ</sup>



した。

「ち、シケてんな。これじゃ、遊ぶカネにもなりやしねえ」

「ほれみる。だからもちつとカネありそうなのを狙えつて」

「そんなヤツ、そうそういるかよ。この不景気なのに・・・」

「あゝあ、カネ欲し」

ちりん・・・

鈴の音が聞こえ、三人はその方角を見やる。

少女がひとり、こちらへと歩いてきていた。

年齢は11、12歳程度。栗色の長髪に黒のリボンが結ばれ、瞳は青く、小さな鈴の耳飾りを付け、裾や袖口からフリルが見えてスカートにもレースが施された上質な白地のワンピースを着ている。

が、それよりも驚いたのは少女の肌だった。顔といい、露出してい

る細い腕や肩といい、太股といい、どれもが着ている衣装よりも本

当に透き通るほど白く、薄暗い外路ではそれがほのかに光明を放つ

ているかにさえ思え、美しかった。いや、『美しい』など少女に相

応しくない。彼女に当てはまる文字はきつと『奇麗』が的確だ。濁

りすら見えない壮大な自然や光景を前にした時、人はあまりの『奇

麗さ』につい我を忘れる。少女は細かな外傷すらない穢れのない身

体をしており、チンビラ青年たちは事実少女に見惚れ、文字通り『開いた口

が塞がらない』状態であった。

「おにいさんたち、何をしているの？」

「「「！・・・」」」

にこ、とすました微笑を浮かべながら近づき、鈴を転がしたような声に青年たちはようやく我に返った。チンビラ

「え・・・あ・・・か、カネを数えてたんだよ」

「お金？」

少女はちよつと首を斜めにした。

「あ・・・そ、そうだよ。もうあっち行って・・・」

チンビラ青年は最後に『ろ』を言わなかった。言い終えるよりも早く、首をもとに戻した少女がこう問うたからだ。

「お金が欲しいの？お金がたくさんあったら、おにいさんたちは幸せ？」

「『え．．っ．．？』」

『金があれば幸せか？』と質問に青年たちは一瞬声に詰まるも、すぐに返す。

「当たり前だろ。死ぬほどカネがありゃ、もう俺たちサイコーに幸せだぜ」

すると、少女は再び微笑し、

「分かった。だったら、お金をあげる」と、言った。

「は、はあ？おまえ、何言って．．」

ぱら。

チンピラ

青年の前に何かが降った。すぐに目を下に移す。ジョージ・ワシントンの肖像画が描かれたドル札が視界に入った。

「え．．？」

と声が出たのも束の間。

ぱら。ぱら。ぱら。

チンピラ

青年たちの頭上からワシントンだけでなく、エイブラハム・リンカーン、ベンジャミン・フランクリンなどの肖像が描かれた大量の紙幣が次々に降ってくる。まさにドル札の雨。次から次へと降り続け、周辺を海にしていく無数のカネ。

「う．．うわあ、カネ．．カネだあっ！」

「やったぜ！俺たち金持ちだあっ！」

「うおおっ、よっしゃあッ！これだけありゃ、一生遊んで暮らしていけるぞおっ！！」

チンピラ

当初呆然としていた青年たちだが次第に歓喜に震え、即時に目の色を変えて紙幣をポケットの中にありったけに入れるなりと、醜く漁り始めた．．。

「よかつたね、おにいさんたち。幸せになれて・・・」

そこには何も無いはずなのに嬉々としながら次々と両手で？んではポケットなどに入れていく意味不明の行為を繰り返す彼らに少女は心から満足げに微笑んだ。

これでいい。また私は誰かを『幸せ』にできたんだ。

これでおにいさんたちは願いどおり、死ぬほどお金に困らない。最後まで『幸せ』でいられるんだから。

さ、早く次の人を『幸せ』にしよう。

この国には、たくさんの人が『幸せ』になりたいと願っているのだから。

ちりん・・・。

『幸せ』の音色を鳴らして長髪を優雅になびかせて、少女「『幸福』は外路から立ち去った。」

#### 次回予告

突如強大な力を感知し、急ぎ現場に駆けつける真夜  
そこで見た光景に彼女は愕然する

次回『異変』

そこは天国か、あるいは地獄か・・・

## 前兆（後書き）

刹那氏との共同作なので『プリキュアVSプリキュア』風に次回予告を行うことにしました。  
以降も続けていきます。

## 異変

約90分の講義がようやく終わり、真夜は外に出る。広い庭園の中程辺りでうーんと、伸びをした。

「んううあああああゝっ、肩凝ったあ！」

年寄りじみた台詞を吐き、首を左右に振って両肩をポキポキ鳴らす。

しかし、これで今日の授業はおしまいだ。帰ったら、ひさしぶりに大浴場で疲れを取るとするか。

その後の予定を決め、真夜は自分と似たような境遇に遭った子供たちの生活を保護している施設に足を向ける。が、結局真夜は浴場で身体を休めることは許されなかった。

ぽんっ！

首に掛けていたペンダントが煙を発し、驚いた真夜はその場で停止する。煙はすぐに晴れ、背中から羽が生えた白い子犬バートナー似の妖精、ロモモが姿を見せる。

「ロモモ？目が覚めたの？」

「真夜ちゃん、何をのんきなことを言ってるロモ！近くでもの凄い力を感じたロモ！すぐ行ったほうがいいロモ！」

出てくるやいなや、ロモモは凄い剣幕で訴える。

「もの凄い力？それって悪いもののなの？」

ロモモに限らず、プリキュアのそばにいる全ての妖精に共通することだが、彼らがこういう台詞を叫んだ場合は敵の襲来を告げる前兆だ。闇の者の纏う強大な邪気を感じてしまうのか、直前にみな急いでプリキュアたちに告げる。そして案の定、闇の手先が現れて開戦の火蓋が嫌でも切られるのだ。しかし、真夜の質問にロモモはなぜか難しそうな表情を作り、腕組みした。

「いや・・・違うロモ。どちらかというと『いいもの』のような気がするロモ」

「『いいもの』・・・？闇の手先じゃないの？」

「うーん、闇というよりもむしろ・・・とにかく行って見たほうがいい口モ！悪いものじゃないけど、強すぎるんだ口モ！」

「わ、分かった。分かったから・・・」

再び剣幕で肉薄してきた口モモをなだめ、渋々了承する。

全く、疲れているというのに面倒くさいなあ。

しかし、ほうっておいてさらに面倒が増えたら、余計困る。厄介事は大きくなならないうちになくしてしまうのが得策だ。口モモの言う『いいもの』の意味がまだよく理解できないが、少なくとも闇の者でないのなら人に害を与えはしないだろう。

とりあえず、見に行くだけ行って、ちゃちゃっとなるべく早く済ませてくるとするか。

口モモの案内を受け、真夜は走り出した。

先頭に行く口モモを追い、真夜は路面電車の線路の大通りを抜ける。

「こっち口モ！」

「口モモ、待って！」

小さな不動産の建物の角を曲がり、見えなくなったパートナーを急いで追いかける。すぐに宙で停止していた口モモを見つけ、文句を飛ばす。

「もお口モモ、早すぎるよ。こっちは疲れてるんだから少しくらいスピード・・・」

彼女は文句を最後まで言えなかった。眼前に広がる光景に口モモ同様愕然となっていたから。

大勢の人たちが、いた。数はおよそ30人。無論通りに人々が大勢いたって、別段それは珍しくもなともない日常の光景だ。ではなぜ真夜も口モモも驚いたまま動きが固まっていたのかというと、  
こたえ解答は簡単、人々が明らかに『普通』ではない状態だったからであ

る。

人々の表情は『幸せ』に満ち溢れていた。誰もが何の邪念もない笑顔や嬉々とした表情を浮かべている。

「ねえパパ、ママ。今度は家族三人でピクニック行こうよ。私とってもいい所知ってるよ」

「栄転だ！フランス支社の支店長だ！やるぞ！俺はやるぞおっ！」「あなたあ、もうすぐ二人目が生まれるのよ！今度は女の子が欲しいわあ！」

と、幾人かがそういった言葉も喋っている。しかし、その幾人も八十近くの老婆だったり、ダンボール暮らししているホームレスだったり、到底胎児ができそうにない身体を持っていたりしている。にも関わらず、みながみな『幸せ』になっている。目が開いているのに、とてつもなく楽しい夢を見ているかのようなだった。

何なの・・・一体これはどうしたっていうの？

第三者から見ればあまりにも異常な光景に真夜は何が何だかさっぱり分からなかった。

ふと、視線を感じる。幸福な夢を見ている人々のちょうど中央、そこに少女が微笑んでいた。

栗色の長髪、白地のワンピースに透き通りそうな白い肌。もしここが教会だったら、天使と間違えてしまうかもしれない。それだけ少女は愛らしく、そして『奇麗』だった。

「真夜ちゃん、あいつ口モ！あいつから強すぎる力を感じる口モ！」え・・・？

少女を指差したパートナーの声に真夜は無意識から意識を奪還する。一瞬でも我を忘れていたことに真夜は二度三度瞬きをした。

まさか私、あの娘に見惚れていた・・・？

再度少女を見る。にこ、と少女は微笑していた。そのあどけない微笑、悪意の欠片すらない結晶に真夜は、ひやり、と心臓を素手で撫でられたような感覚を覚え、なぜだか分からないが鳥肌が立った。何・・・？この娘は何なの？

気がついたら、真夜は後ろに下がっていた。「真夜ちゃん？」と、ロコモが不思議そうに振り向く。数歩とはいえ、どうして後退してしまったのか、自分でも分からなかった。

ただ、これだけは分かる。あの少女は危険な存在だ。

このままだと、周囲にいる人々と同じように自分もおかしくなってしまう。

人々を夢から醒ますためにもと、真夜はこの瞬間目の前にいる少女を排除すべき『敵』と判断した。

「っ、ロコモ！」

「分かつてるロコモ！」

ぽん、と煙を発し、ペンダントに変身するパートナー。真夜はそれを素早く取っては人差し指で弾き、唱える。

「プリキュア！セイント・リバーズ！」

白銀が炸裂し、真夜の全身を覆い尽くす。光のガーデンで踊りながらスキップをする彼女の身体に大量の羽毛が集まり、純白の衣装へと変わっていく。二の腕までの袖に天女のような肩飾り。開花の形に裾が広がるスカート。胸部に白の薔薇があらわれたリボンが施された後で黒い長髪が銀に染まり、水色のカチューシャが装着される。さらにその上に短く薄い透明のベールが被せられると、背中から透き通った鋭角な六枚の長い翅が生えた。

最後にペンダントを首に掛け、ふわり、と地上に舞い降りる。

「全てを希望へ導く救世の光！キュアセイバー！！！」

名乗った刹那、神々しい光が彼女の背後で煌き、弾けた。

ニューヨーク

この国ではサムライバーガーと名になっているテリヤキマックバーガーにするか、それともビッグマックにするかをひとしきり悩んだ後で後者を選び、ついでにコーヒーマも注文した水澤睦月は商品の入った紙袋をカウンターから受け取ると、マクドナルドを出た。

どこか昼食に適した場所はあるかと探していると、近くに小さな



公園を見つけ、そのベンチに腰掛ける。公園は睦月の他に人はなく、せいぜい鳩が数羽歩行している程度だったが、気にせずに睦月は紙袋からビッグマックを取り出して包み紙を開くと、ぱくつと頬張った。さすがはアメリカ。肉も厚いし、サイズがモノをいう。次にコーヒーの入った紙コップを手に取り、口に運ぶ。だがこちらは口に合わなかったらしく、睦月は瞬時に顔をしかめ、紙コップをすぐに置いた。

仕方なく再度ビッグマックを口につけようとして、空気の流れが大きく変わったのを感じし、睦月は上空を見上げる。間違いない。今回の標的が動き出した。このままだと光と光の衝突が起きてしまう。

「いけない！」

睦月はすぐに立ち上がり、近くのボックスにビッグマックとコーヒーを投げ捨てて現場に急行する。

標的の力は強すぎる。何しろ、存在だけで世界を滅ぼすことさえ可能とするのだから。

力の強さをもしこの国に存在しているプリキュアが察知して接触したら、さらに事態は深刻になる。いや、もうなっているかもしれない。

回避しなければ、と睦月は走りながら片腕に嵌めている腕時計を眼前にさらし、変身コードを唱える。

「プリキュア・リジエナイト・ユニゾンー!!」

## 次回予告

人々を幻惑から醒ますため、謎の少女に戦いを挑むキュアセイバーところが少女はまだ癒えていない彼女の心の闇に突け入る

次回『夢の中の再会』

悲劇と苦痛に満ちた現実の中で生きる必要は、ない

## 異変（後書き）

気づいた方もいるかもしれませんが、ラストの睦月の描写は『プリキュアvsプリキュア』の『04 孤高の天上人』の回のオマージュです。

## 夢の中の再会

純白の戦士・キュアセイバーに変身を遂げた真夜は即座に専用武器・リリイフシンバルを両手に召喚、前方に佇む少女を見据えるも、そこから少しも動こうとしなかった。

隙がない。いや、本当は隙だらけなのだが、あまりにも無防備で、かえってそれが疑心暗鬼にさせる。また目の前にいるのが今まで戦ってきた闇からの異形者ではなく、どこにでもいそうな少女の外見をしているというのもセイバーを躊躇わせている要因のひとつなのだろう。それに少女は人々をおかしくさせてはいるが、誰も傷つけてはいない。

だからといって、プリキュアとしてこの状況をほうっておくわけにもいかない。セイバーは色々と思案した末、『セイバー・サウンドウェイブ』でしか状況を打破する他ないと結論づける。『セイバー・サウンドウェイブ』。リリイフシンバルを強く叩くことで強力な音波を発生させる技。音波を直に浴びると、邪悪なる者は即座に鼓膜が悲鳴をあげ、ひどい時には吐き気を感じるほどの頭痛に喘ぐことになる。強力だが、特に外傷を負うことはない。『幸せ』に浸っている人々には少し嫌な思いをさせるが、今は少女を排他しなければならぬ。これ以上、事態が重くならないためにも。

そう決定を下し、セイバーはシンバルを持った両腕を大きく開いて『セイバー・サウンドウェイブ』を撃つ準備を始めようとして……少女が視界からいなくなっているのに気づいた。

「……どこに……っ!？」

開いた両腕を降ろし、急いで左右を見る。

ちりん……と、鈴の音が背中の中からはうきうきと聞こえ、すぐに身体ごと振り返る。

途端に青い瞳と目が合った。

「ひ……っ……」

この娘、いつの間に・・・いや、どうやって一瞬で私の後ろへ・・・！？

小さな悲鳴をあげた瞬間、セイバーは全身から力が抜けていくのを感じた。すとな、と腰が抜けたように身体が崩れる。

少女はあどけない微笑を浮かべたまま、座り込んだセイバーの顔をそつと両手で触れる。少女の手は温かく、優しかった。セイバーは青い瞳を覗き込んだまま、何も言わなかった。身体全てから力が抜け、言うことを聞かない。頭の中は今にも真っ白になりそうで、くらくらした。微笑している少女のかわいい唇が動いた。

「・・・おねえさん、幸せになりたい？ 幸せになっていいのよ。私がおねえさんを幸せにしてあげる」

その声が聞こえなくなると、視界がふいに弾け、何も見えなくなつた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一瞬、何が起きたのか分からなかった。恐る恐ると両目を見開く。視界は別の光景に変わっていた。

「えっ・・・・・・・・？」

菜の花畑の中に、自分は立っていた。周囲を見渡しても黄色い春の花が広がっている。頭上は爽やかで、雲ひとつない澄み切った青空が見えていた。

「ど・・・どうなっているの？」

気がつけば、変身が解かれていた。純白の衣装ではなく、いつもの私服姿にさらに戸惑う。

「そうだ、ロモモは・・・？」

と、真夜は人前では普段首に掛かっているはずのパートナーがいないのに気づき、急いで探そうとした。

「「真夜」」

その声に、背後から呼びかけられ、ロモモを探していた真夜の全身が一瞬にして硬直した。

鳥肌が立ち、鼓動が早鐘を打つ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

真夜は探すのをやめ、ゆっくりと振り返った。

「お・・・お父さん・・・お母さん・・・っ」

そこにはもう帰ってくるはずがなかった人が立っていた。

その顔、その姿、まぎれもなく懐かしい父と母だった。

「真夜・・・、会いたかった」

母の優しい声に、真夜の胸が一気に締め付けられた。

「ど・・・どうして？お父さんとお母さんは・・・」

「マヤ」

またも懐かしい声に呼ばれ、真夜は振り返る。

サッカーボールを片手に持った12歳くらいの少年が笑って立っていた。

「テッド・・・」

両親とともに真夜が支援活動を行っていたアフラート共和国ゴザドック村で友達になった少年、テッドが最後に見た姿そのままだった。けれど両親だけでなく、彼まで現れたことに、真夜は余計混乱を覚えた。

父母もテッドも、一年前に突如地球に飛来した邪悪の化身の手にかかり、真夜の目の前で無残に消されたはずだ。どんなに祈っても帰ってくるはずがないと思っていた。

その人が、今、目の前で確かに存在している。

自分の頭がどうかだったのではないかと、混乱せざるをえなかった。

「い・・・一体どうなってるの？お父さんもお母さんもテッドもみんな死んだんじゃない・・・」

「なに言ってるんだよ、マヤ。そりゃいくらなんでもひでーよ」

ぴょん、と跳んでテッドが真夜の腕に抱きつく。夢ではない確かな感触に、真夜は混乱を一層激しくするが、父親母親が目の前まで来て、それは停止する。腰を少しだけ曲げて、母は愛しい娘の顔をそっと触った。

「ごめんね、真夜。ずっとひとりにさせて」

「今まで本当によく頑張ったな」

「………」

ああ……この声、この手、間違いない。本物のお母さんとお父さんだ。

瞳の奥から込み上がってくるものを堪えきれず、ぽた、ぽた、とこぼれていく。

一瞬にして、記憶も気持ちも幸せだった頃に戻っていく。

国際医療スタッフとして、世界各地で人災や自然災害に苦しむ人々を懸命に助け回る両親を真夜は心から尊敬していた。いつかは両親と同じように人々を助けていく仕事をしたいと夢を見て、一生懸命勉強もした。そしてゴザドック村でいつしかサッカー選手になりたいと夢に向かっていたテッドや子供たちと友達になり、未来への希望が灯ったその笑顔がもともとと広がっていきますよう願っていた。

けれど、その夢も願いも一瞬で絶望に碎かれ、大切な人たちの死を真夜は心から嘆き、悲しみ、怒り、狂い、世界を憎んだ。悪いことだと分かっているにも、このような理不尽な世の中を破壊せずにいられなかった。けれど……。

「もうずっと一緒に、真夜」

「ずっと……」

「ああ。もうおまえをひとりにしない。私たちはずっと一緒だ」

「マヤ、俺もずっとそばにいるよ」

「テッド……うん……うんっ！」

愛する人たちの誓いの言葉に、真夜は泣きながらも満開の笑顔を咲かせていた。

「真夜ちゃん！真夜ちゃん！一体どうした口モ！？」

口モモは一生懸命叫び、真夜の頬をぴしゃぴしゃ叩いた。けれど

真夜は目を覚まさない。アスファルトの地に座り込んだまま、真夜は閉じた目から涙を流しながら微笑していた。

「やい、おまえ！一体真夜ちゃんに何をした口モ！？」

夢から覚めない真夜から栗毛の少女に目を移して口モモは血相を変えて怒り、ありつただけの眼力で睨んだが、少女は答えずに『幸せ』に浸っている真夜の頭を優しく撫でた。

「どの世界もすべからく悲劇に満ちている。人はただその心の痛みに苛まれ、それでも生きていくしかない……だけど、私ならあなたたちをその苦しみから解放することができる」

そして、少女は歩き出し、真夜と同じように幸せの夢に浸る人々の中央で足を止めた。

「あなたたちは十分に苦しんだ……だからもう幸せになつていいのよ。私が連れて行つてあげる。永遠の時間の中で、幸せに暮らしなさい……」

「何を……？」

ちりん……

口モモが言い終わるよりも早く、少女は鈴の音を鳴らし、周辺を光に包んだ。あまりのまぶしさに口モモは目を閉じる。光はすぐに消え、口モモは急いで目を開け、驚愕する。通りには誰もいなかった。少女も。人々も。そして……真夜も。

「真夜……ちゃん？」

口モモは急ぎ、周囲を見渡して真夜の名を何度も叫ぶ。だがどんなに叫んでも、真夜は出てこなかった。

「そんな……まさか真夜ちゃん、あの娘に……っ！？」

目頭が熱くなり、唇を噛んで懸命に堪える。ぐっと我慢し、宙で大きく深呼吸して、口モモはありつたけの声で真夜の名を呼ぼうとして、

「真……ぐふっ……！」

口を手で塞がれた。もごもごしていると、上から声が降ってきた。『全く、あんなに私の名前を呼んで、誰かに見られたら即座に研究

所か動物園行きよ。やる前にちよつとは考えなさいよ、この馬鹿妖精」

「ぶはっ」

その聞き覚えのある声に、ロモモはようやく塞がれた口を解放されて上を見、

「ま、真夜！・・・ちゃん？」

歓声をあげようとして、妙な違和感に気づく。

ロモモの口を塞いでいたのは、雨牙真夜だった。だがロモモの知る真夜とはどこか違っていている。まず第一にこの真夜は漆黒の制服を着、右眼に黒の眼帯を掛けている。言葉違いもいつもの真夜と違う。極め付けが彼女の全身を纏う邪悪さ。身体が戦慄し、小刻みに震えてしまうこの恐怖を、ロモモは知っている。まさかと最悪の予想をしてしまい、ロモモは神妙に尋ねた。

「おまえ・・・誰ロモ？」

すると隻眼の少女は、ふん、と鼻を鳴らした。

「雨牙真夜アマキミヤ・・・またの名はキュアリベリオンよ」

「！！・・・」

最悪の予想が当たり、ロモモはすぐに彼女から離れた。

キュアリベリオン。

言うまでもなく、雨牙真夜のもう一つの姿にして世界を二度も破壊しようとした史上最悪最凶のプリキュア。その凶暴性と非道さを十分に知っているロモモは瞬時に真夜と同じ顔を持つ少女に対し、警戒を強めた。

「そう怖がらないで・・・とは言わないけど、安心なさい。弱い者を虐める趣味はないから」

「ロモモは弱くないロモ！」

「そう、失礼」

「おまえ・・・、なんでまた現れたんだロモ？」

ロモモの疑問もつともだった。彼の知る限りでは隻眼の少女「キュアリベリオン」は最後の最後には改心したが、同時に怨念の呪縛



から解放されて全ての世界から永遠に消えたはずだった。そのリベリオンがどうして今になって、再び目の前に現れたのか？

すると、隻眼の少女は少し両肩を竦めた。

「最期の瞬間ときに言ったでしょ？私は消えるんじゃない、雨牙真夜の影の部分として戻るって。私はずっと真夜の中で眠ってたの。でも、強すぎる光に無理やり起こされて真夜から引き離されたのよ」

「強すぎる光？もしかしてそれ、あの娘このこと口モ？」

「おそらく」

「一体、あの娘こは何者なんだ口モ？」

「さあ？分かっているのはあの娘この光は強すぎて、非常に危険ということだけね。・・・そうね、そこから先は『彼女』に教えてもらおうかしら？」

「彼女・・・？」

「ええ・・・」

リベリオン 真夜はゆっくり背後へと首をねじり、左眼を細める。

「ちよつとそこ、さっきから私たちを窺っているのはバレバレよ。隠れてないで出てきたらどう？」

ふいに建物の影から誰かが姿を現し、一步步つ接近を試みる。

年齢は14歳程度。紫のツインテールに、青のレオタード上に紫の軍服を着服したような衣装。手は長袖で、衣服の下には濃い青のロンググローブが見え、紫の宝石をあしらった青いリボンが装飾されている。そして両手には拳銃が二挺握られていた。

陽の下に姿を露にした少女に、リベリオン 真夜は左眼を細めたまま静かに問う。

「・・・誰？」

「悲しみを終わらす、大地と海の守り手・・・」

少女は一旦口を噤み、すぐに開いた。

「キュアアルガティア！」

## 次回予告

リベリオン

真夜とロモモの前に現れた少女、キュアアルガティア

彼女と謎の少女との関係は一体何なのか、そして・・・

次回『射撃手対墮天使』

世界を滅ぼそうとした極悪人に教える義理など、少しもない

## 夢の中の再会（後書き）

大都市を舞台とした激戦描写、頑張ります。

## 射撃手対墮天使

背中にサブマシンガンとショットガン、腰元のホルスターにデザ  
ートイーグルを二挺、さらに閃光音響手榴弾、両手に二挺拳銃と、  
重武装した青と紫のプリキュア、キュアアルガティアの容姿に真夜  
は少しだけ眉を吊り上げる。

「キュアアルガティア・・・ふうん、射撃手のプリキュアなんて、  
これは珍妙ね」

「どうして私に気づいたの？」

真夜の感想などとうに分かりきっていたのか、アルガティアは無  
視して疑問を投げつける。無視されたのに軽くカチンと来たらしく、  
真夜は一瞬表情をしかめたものの、素直に問いの返答を返す。

「姿は隠せても気配を隠せないようじゃ、意味ないわ。特に私みた  
いな闇にとつて光はつい敏感になるからね」

「・・・なるほど。どうも勉強になったわ、雨牙真夜」

「!・・・どうして私の名前を？」

すると、アルガティアは隻眼の真夜を見据えたまま、続けた。

「あなたたちのことはすでに調査済みよ」

「?・・・どういう意味かしら？」

「知る必要はない」

年下のくせに人を冷ややかに見るような態度に、ほのかに憤りを  
感じる。

「・・・じゃあ質問を変えるわ。射撃手さんは何しにここに来たのか  
しら?あの娘と何か関係あるわけ？」

「真夜ちゃんはどこ行つた口モ!？」

「雨牙真夜はおそらく『永遠の樂園』に連れて行かれたと思うわ」  
自分ではなく、口モモに返事をしたことに真夜はより一層苛つい  
た。

「『永遠の樂園』・・・?」

「標的が住処としていた場所よ。彼女はきつとそこにいると思う。」

「もちろん、彼女とともに消えた人たちも。」

「そこはどこにある口モ？」

「・・・次元と次元の間に存在してるわ」

つまり、別世界ということか・・・と、口モと会話させたほうがいいと結論に至った真夜は顎に手をやりながら黙考する。

「そこに行けば、真夜ちゃんと会える口モ？」

「たぶん・・・ね」

「行く口モ！いや、連れてってください口モ！真夜ちゃんに会えるのなら、口モはたとえ火の中水の中にも突っ込む口モ！」

そう宣言をするが、アルガティアは少し困ったように微笑すると、駄々をこねる子供をなだめるように声をかけた。

「悪いけれど、そうもいかない。『永遠の楽園』は名前に『楽園』

と入っているけど、夢のような世界ではない。いうなれば、アマゾンのジャングルみたいで獰猛な動物たちも暮らしているむしろ危険な所・・・そんな場所にあなたを連れて行くわけには・・・」

「じゃあ私は？」

真夜が再び声をかける。ようやく反応し、顔を向けたアルガティアに彼女は交渉を試みる。

「真夜と私は一心同体よ。真夜がそこに本当にいるなら私も・・・嫌よ」

ところが即答で却下される。しかも『ダメ』ではなく、『嫌』の一言で片付けられたことに真夜は引っかけりを感じた。

「嫌・・・？」

「ええ、嫌よ。私はあなたと一緒に行くのは願ひ下げ」

「・・・理由を聞いていいかしら？」

「さつき言ったわよね？『あなたたちのことはすでに調査済み』って。雨牙真夜、あなたが過去に二回も世界を破滅に追いやるうとしたことも判明済みよ」

「・・・だから？」

「そんな悪魔を信用して、はい分かりましたって私が言つと思う？」  
それに似てるのよ、あなたは。

自己中心的に世界を人を見下して非道な行為を行い、弱いのに卑劣さだけは一人前の卑怯者<sup>あひて</sup>たちに。

「・・・それで？要するにあなたは私が嫌いだから、一緒に行きたくないというわけ？」

その問いに、アルガティアは皮肉たつぷりに言い返した。

「卑怯な行為を繰り返し、ろくに戦えない哀れな人なんて、足手纏いもいいところというわけよ」  
ぶちつ。

アルガティアの耳に何かが切れる音がした。いや、聞こえたような気がした。

何の音・・・？

そう反応すると、突如隻眼の真夜が宙に躍り出た。よく見ると、両手にいつの間にか三日月形の刃を煌かせた巨大な鎌が握られていく。アルガティアが注視していると、彼女は急降下を始めるとともに死神の鎌を一気に振り下ろした。

アルガティアはすぐ横に跳び、鎌は彼女がいた位置に思いつきり突き刺さり、アスファルトが深く抉られる。標的<sup>リベ</sup>を仕留め損ねた真夜<sup>リオン</sup>の周囲に無数の黒蝶が集まる。そのうちの一匹が手に留まり、漆黒に輝く口紅に変わった。蓋<sup>キャップ</sup>を取り、唱える。

「プリキュア・ダークネス・エヴォリューション！」

口紅から一筋の光明さえも射すのを許さない暗黒の闇が溢れ、彼女の全身を覆い尽くす。闇の中で身体をうねらせた彼女に黒蝶が無数に集まり、衣装へ変えていく。襟の立った二の腕までの袖の漆黒の衣装。首筋にぞんざいに掛けられた、締まっていないネクタイ。腹部に描かれた蛇眼の紋様。その下に施された黒と白のチェックのスカート。両足にブーツが履かれ、右腕に鋼鉄製の三本の鉤爪が装備されると、彼女は最後に髪を掻きあげ、二つの黒のリボンで結ばれたツインテールに変えた。大鎌『希望狩<sup>ウィッシュ・ハント</sup>』を両手で器用に振り回

し、幾多の邪悪<sup>マイナス</sup>を纏<sup>まと</sup>って地上に降臨すると、

「全てを無<sup>む</sup>へ誘<sup>いよな</sup>う漆黒の堕天使、キュアリベリオン！」

背後から大量の黒蝶を飛ばし、絶大な闇<sup>オーラ</sup>の邪気を周囲に蔓延<sup>まんえん</sup>させた。

突如奇襲を仕掛け、さらに闇の戦士に変貌を遂げたキュアリベリオンに、アルガティアは強い邪気を肌で感じながらも微塵の恐怖もない強い瞳で捉える。

「……いきなり何のつもり？」

「年上には敬語使えって、学校で習わなかった？」

「相手による」

「……本当、いちいちム力つくわね。まあいいわ。ム力つくやつほど鬨<sup>なび</sup>り甲斐があるからね。あなたに格の違いというものを教えて、嫌でも一緒に行くのをイエスと言ってもらうから……っ！」

「……これだから、野蛮人は。だけど、格の違いって言葉、そっくりそのままお返しする！」

言うなり、いきなり二挺拳銃を撃鉄音と同時にぶつ放す。が、瞬時に視界から消え、困惑する。

瞬間移動か……っ。

リベリオンが取る奇襲戦法の一つ。どこに現れるかも分からず、相手を幻惑させる最も効果的な手段だ。だが奇襲戦法というものは、大抵相手の目が届かない背後を狙うのが多い。アルガティアはリベリオンが消えて真っ先に背後に銃口を向け、二発鳴らす。不発に終わり、背後ではないのを確認する。

「ではどこに……っ!？」

「上よッ！」

急いで頭上を見上げ、再び死神の鎌が迫ってくるのを目の当たりにする。火花が散って金属音が鳴り響いた。リベリオンの大鎌とアルガティアの二挺拳銃が交差したのだ。目と鼻の先まで刃が近づき、リベリオンの剛力に押されていく。さすがに二度も世界を敵に回した実力は伊達ではない。「くっ……」と声が漏れる。だが、いつま

でも堪えているアルガティアではなかった。交わっていた二挺拳銃から離れ、素早く次の一撃を放とうと今度は下方向から鎌を飛ばそうとするが、そのわずか数秒の間がアルガティアに余裕を生んだ。アルガティアは左手に握っていた拳銃を捨て、すぐ背中のショットガン、通称ケルベロス？を取り、リベリオンの額を狙って砲身を向ける。

「・・・ッ！！」

銃口が火を噴いたが、リベリオンは屈<sup>かが</sup>んで砲弾を危うく回避した。しかし、それがアルガティアに反撃を与える隙となり、彼女は後方に跳んで一気に距離を取ると、拳銃とショットガンの二つの銃口から鉛弾<sup>ブリッ</sup>を続々と撃つ。リベリオンは大鎌を器用に振り回し、巨大な刃で全て叩き斬りながら急迫していく。最後の一弾を斬られ、リベリオンは眼前で鎌を大きく振りかざした。

もらった・・・っ！

振り下ろそうとして、アルガティアが一瞬で消失する。「え？」  
と思った瞬間に腹部に強い衝撃を受けた。

「ぐふっ！」

撃たれたと分かった時には肩や腕、太股にぽつぽつと穴が次々に空いた。致命傷にはならなかったが、やはり撃たれたら相当痛い。それが一発二発どころか何発もとなるとなおさら。

一体、どこから狙っている・・・！！？

周囲を見渡して、ようやく赤い何かが残像が見えるほどの超高速で移動しているのに気づく。両眼に神経を集中させ、それが全身を赤く発光したキュアアルガティアと分かった刹那、胸部に衝突が起こり、身体を激しく震わせた。

さすがはトランスモード。刹那<sup>チカラ</sup>の能力を借りたものだが、効果は抜群だ。二度も世界の破壊を目論んだあの悪魔が遂に倒れ込んだ。アルガティアは少しだけ心の中で鼓舞していた。データに記述され



ていた通り、キュアリベリオンは高速や俊敏に移動する相手が苦手らしく、対抗策を持っていない。力ならかつて単独で19人のプリキュアを苦戦することなく倒した経歴があるらしいが、その後彼女はレッドの種の力を浴びて光速で移動可能となった『花咲つぼみ』と『来海えりか』のふたりにいいように蹂躪され、敗れているのも判明している。このままならいける。と、肩で激しく息をしているリベリオンにまた銃口を向けようとするも、パチン、と彼女が指を鳴らした直後に邪悪な気配を察知し、踵<sup>きびす</sup>を返す。背後で黒く液化化したアスファルトから、ぬうつ、と生えた巨大な黒い『悪魔の手』に思いつきり殴られ、全身を強打した。

「……ッ！」

傷ついた身体を起こすも次々に周囲から『悪魔の手』が生え、巨大な五指で捕らえようとする。次々と襲いかかってくるのをかわすと、今度は遠吠えが聞こえ、黒毛に覆われた凶犬が数匹、体液を吐いて跳びかかる。

「小賢しい真似をつ！」

牙を曝した口に銃口を突きつけて、一匹を地獄へ送る。

ふと、気づけば、リベリオンがいなくなっていた。

『悪魔の手』と凶犬の二つの僕を駆使してなんとか急場を凌いだ、これも時間の問題だ。口惜しいが、彼女の銃火器の腕前は本物だ。あんな14歳の小娘が相当な修羅場を潜り抜けてきたというのか。

傷ついた箇所を抑えながら、リベリオンは三階建てアパートの脇道で呼吸を繰り返していた。撃たれた箇所は所々赤黒く血が流れて止まらない。もし自分が『普通』の人間だったら、とつくに死んでいるだろう。

ははは……二回も世界を滅ぼそうとしたこの私が、全く不甲斐ない。

力なく笑うもこれからどう反撃するか思考を練っていた。

「・・・あの」

ふいに声が聞こえ、リベリオンは横を向く。ロモモが心配そうな面持で宙に浮かんでいた。

「おまえ・・・」

「だ、大丈夫ロモ？」

「へえ、心配してくれるの？」

「い・・・一応、同じ真夜ちゃんだから」

「・・・・・・」

「あの、これからどうするロモ？」

「・・・おまえ、真夜を助けない？」

「え？」

「真夜を助けたいって聞いているの」

「そりゃそうロモ！ロモモは真夜ちゃんのこと、大好きなんだロモ！命を賭けてでも助けたいロモ！」

「・・・だったら、ちよつと私に協力して」

「協力？」

「真夜を助けたいという気持ちは私も同じ。大切な人を救うためなら、私はどこまでも卑怯になれるし、非情になれるわ。だから、手を貸しなさい」

リベリオンは口元をおぞましく微笑させると、懐から携帯を取り出した。

「ちよつと、面白いことするわよ」

そして、ある三つの数字をプッシュした。

## 次回予告

リベリオンを圧倒するほどのスペックを見せるアルガティア彼女に対し、リベリオンが仕掛けた逆転の策とは・・・

次回『選択』

さあ、撃てるものなら撃ってみろ

## 射撃手対墮天使（後書き）

双方の戦いに一応の終止符<sup>ピリオド</sup>が打たれます。

## 選択

両手に抱え、ありったけの銃弾を凶犬たちに浴びせたアルガティアは急いでサブマシンガンを投げ捨て、手首をうねらせて包囲している『悪魔の手』に榴弾を二、三投下する。光芒と衝撃波を炸裂した榴弾は一瞬で周辺の建造物の窓ガラスを粉碎、邪気を纏った『悪魔の手』も粉塵と化した。

しかし、アルガティアも無傷というわけにいなかった。二度は『悪魔の手』に殴打されたし、唾液を飛ばしながら奇襲を仕掛けてくる凶犬の爪牙に何度か軽傷を負わされている。当然呼吸も激しく繰り返されていた。

「・・・来るか」

邪な気配を察知し、ホルスターからデザートイーグルを両手に持ち、いつでも撃てるようトリガーに指を掛け、臨戦態勢を取る。陽が傾き、通りを照らす光が弱まり、静寂がしばらく続く。

わずかな静寂が打ち破られ、自身に急迫する存在をアルガティアは瞬間に知った。

「！・・・そこか！」

が。

「なっ・・・！？」

「こ、こんにちは口モ」

銃口を向けた先、エヘへと困ったように笑う白の妖精に彼女は両目を大きく見開いた。そのわずかな瞬間。本当に一瞬の出来事だった。後頭部を思いつきり殴られ、ショックで膝を着く。振り返らずとも分かる。リベリオンが今度こそ背後を取ったのだ。光の戦士の時の相棒とはいえ、無関係の妖精を囿にして隙を突くとはなんたる卑劣！

「ぐっ・・・！」

ツインテールの片髪を強く引っ張られ、思わず喘ぎ声が出る。

ふと気づくと、眼帯が外れたりベリオンの隻眼の瞼が静かに開く。  
まぶた  
暗く深い、紅が輝いていた。

催眠。

それが雨牙真夜から引き裂かれて幾多の怨念の集合体として蘇ったキュアリベリオンに備わった新たな能力だった。瞳のない、この血が溜まったような紅い右目を覗いた者は誰もが瞬間に意識が朦朧となり、ほんのりと瞳が赤く染まって自覚がなくなる。そしてリベリオンの命令を自分の意志とは関係なく動いてしまうまさに最強の武器といえた。

どうして自分にこんな力が新たに追加されたのかはリベリオン本人も知らない。数えきれない憎悪を背負い、世界の破壊を一人の少女に行わせるせめてもの代償としてリベリオンの中に巢食う怨念が新たに授けたのではないかと一説を立てたことがあるが、怨念の呪縛から解放された今やそれは永遠の謎だ。

もっともリベリオン自身そんなことどうだっていいと思っているし、他人を思いのままに操れるこの力を得たことを幸運にさえ思っている。その証拠にこの力のおかげで相手を傷つけずに勝利することができるのだから。

「私の言うことに従いなさい」

紅い右目をこれでもかと眼前に押しつける。アルガティアの両目が大きく開き、拳銃を持った両手がだらんと脱力した。力なく俯いたアルガティアに、リベリオンは？ んでいた片髪を離す。すとな、とアルガティアは前髪に隠れて見えない視線を下に移したまま、身体が崩れた。

「・・・立って」

ニヤツと口元を歪ませて冷酷に見下ろしながらリベリオンは最初の命令をする。アルガティアは俯いたまま何も言わず、すっと立ち上がった。よし、催眠にかかった。これで彼女は自分の忠実な奴隷

だ。この小娘には知ってることを全て吐いてもらい、護衛として付き添ってもらおう。敵に回すと厄介だが味方にすればこれほど心強いものはない。

「さ、私たちをその『永遠の楽園』って所に案内しなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

甘い声に従い、人形となったアルガティアはゆっくりと歩み寄り・  
・ピタ、と銃口を悪魔の胸に押し当てた。

「は・・・？」

「断る！」

衝撃が胸を貫通し、漆黒の衣装を纏った少女の姿をした悪魔の身体が大きく吹き飛ばされる。血飛沫が宙を舞い、悪魔は背中からアスファルトの上に叩きつけられた。

「がっ・・・は・・・っ！」

苦痛に表情が歪みながらも上体を起こそうとして、両腕の関節部分を撃ち抜かれる。再び喘ぎ声をあげたりベリオンの紅い右眼に銃口が押し当てられ、動きを封じられた。まさかの事態に口モモはあわわしながらもどうにもできず、宙に留まる形となる。一気に立場が逆転されたりベリオンは変身が強制解除され、黒の制服姿に戻ると、ごほごほと塩辛い血の味を噛み締め、苦しげに相手を見上げる。

「なぜ・・・私の催眠が・・・？」

「答えはこれよ」

アルガティアは標準を外さないまま、片手の指で両目から何かを摘む。二枚のコンタクトレンズが掌に転がっていた。

「これは『マインドシャウト』。目を通した催眠や洗脳を遮断する特殊コンタクトよ。あなたが右眼の催眠を仕掛けてくる可能性はすでに想定していた。何回も言ったでしょ？『あなたたちのことはすでに調査済み』とね！」

「そついう意味も含まれてたのね・・・」

アルガティアはコンタクトを両目に戻し、上から目線で悪魔を見

下ろす。

「残念だがあらゆる情報を得て戦いに臨んだ私の勝ちだ。相手の力量も測らずに愚かにも挑んだ猪武者との格の違い、よく理解できただろう？心配しなくても雨牙真夜は必ず救い出す。だからおまえはしばらく寝てろ」

ゆつくりとトリガーを引き絞ろうとするも、真夜の次の言葉にその指は止まった。

「確かにね。でも・・・おまえは一つだけミスを犯した」

「・・・何？」

「それはね、戦場にニューヨークを選んだことよ！」

突如サイレンの音がアルガティアの耳に届き、赤色灯を屋根に付けた白と黒の車両が何台も目の前で次々と到着する。言うまでもなく警察車両だ。後方にも到着し、警官が即座に拳銃を構え、配置に着く。突然警察が現れたことに宙であわあわとなっていた口モモは即時に煙を発してペンダントに変わった。

「なっ！？これは・・・っ！？」

しばらくして口髭の見える年配の警部補らしき人物が拡声器を手にとって大声で伝えた。

「そこまでだ！凶悪犯に告げる！速やかに人質を解放し、武器を捨てて投降せよ！繰り返し！速やかに人質を解放し、武器を捨てて投降せよ！！」

「凶悪犯？私が！？」

その言葉に、さしものアルガティアも表情が蒼白になる。それが隙となり、今度は真夜に余裕を与えた。関節を撃たれた左腕を気力で振り絞って伸ばして敵の左腕を？むと、黒い邪気が発生して双方の腕を拘束し、黒い手錠に変わる。

「・・・何の真似！？」

「あんまり暴れないほうがいいわよ。下手したら爆発するから」

「！？」

「この手錠はね、私の意志によって爆発するシステムになってるの。」



もし無理にでも外そうとしたり、壊そうとしたら即座に私が爆発のスイッチを押すわ。そうね、あなたのその左腕一本確実に身体から離れるわね」

「それを言うんだったら、おまえも・っ！」

「ええ、そうよ。でも、私は『普通』の身体をしてないからね。けど、射撃手<sup>ガンファイター</sup>にとって腕は命同然でしょ？」

「っ……！」

「あと、この警察もあなたが私の僕を相手している時に万が一のために呼んでおいたの。『無茶苦茶に銃を乱射している危ない女の子がいます、早く来てください』ってね。変身が解かれて無抵抗でいる私と何の武器も持っていない一般市民に銃口を押しつける少女、さてさて警察はどっちが悪い人と見るでしょう？」

「ひ・卑怯な！おまえ、それでもプリキュアか！？」

アルガティアがその台詞を吐くと、真夜<sup>リベリオン</sup>は待つてましたとばかりに歪んだ微笑を浮かべた。

「褒め言葉どうも でも生憎と、私は『悪』のプリキュアなんでね。大切なものを助けるためなら、私はいくらでも悪魔になってやるわよ。これ以上厄介は御免でしょ？私と口モモを連れて行くと約束したら、警察は私がなんとかするわよ。おまえが押しつけているこの真っ赤な右眼を使ってね・っ」

「く……」

こいつ、自分をも囷にして私を胃に嵌めたのか。なんて用意周到な・っ。

アルガティアが歯噛みしていると、真夜<sup>リベリオン</sup>は微笑を消し、催眠能力のない闇い<sup>くらくら</sup>左眼の瞳を静かにゆらめかせた。

「私を撃つなら撃ってみなさい、撃てるものならね。その前にこの手錠を爆発させて二度と拳銃を持てなくするかもしれないし、それ以前にここで私を射殺したら、途端に警察との銃撃戦が始まるのは明らかよ。仮に逃げられたとしてもあなたの顔は警察に覚えられた。その後は逃走中の凶悪犯として指名手配されるでしょうね。プリキ

ユアとして経歴に傷をつけたくないでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あなたの選択肢は二つ。私とともに死ぬか、私とともに生きるかよ！！」

「・・・・・・・・く・・・・・・・・くつつそおおおおおッッッッ  
！！！！」

屈辱に堪えきれなくなったアルガティアの咆哮が大都会上空に木霊した。

その後、紅の右眼から拳銃を離れたアルガティアは約束どおり催眠で即座に記憶を消して警察を引き上げさせた真夜のおかげで無事凶悪犯にされずに済み、計画変更の旨を通信で仲間に伝え、彼女と手錠で繋がれたまま、ミラクルライトに光を灯らせ、ロモモも含めて『永遠の楽園』へと旅立ったのだった。

同刻。日本。

「『プランB』に変更と、アルガティアから連絡だ」

「そう、やむをえないわね」

通信を切って天上刹那が伝えると、天宮唯は小さく吐息をした。ふたりがこれから行うのは力量の測定。世界を何度か滅亡から守ったと経歴があれども少しでも粘りを見せてもらわなければ、ただの足手纏いになる。少なくとも『獵犬』としての技量を発揮してくれることを祈る。存在だけで世界を滅ぼす最強の敵『幸福』を狩るための『獵犬<sup>イヌ</sup>』は多いほうがいい。

そう考えに至り、ふたりの少女は雑木林の中から奥を覗き見る。23人の少女たちが広場で幸福な時間を過ごしていた。

## 次回予告

幸せなひと時をともに過ごす23人の少女たち

しかし、その時間は一瞬にして打ち破られる

次回『機動兵器』

幸せな時間を壊されたことに怒り、少女たちは変身する

## 選択（後書き）

お待たせしました。新たにふたり加わった彼女たちが登場です！

## 機動兵器

晴れ渡る澄み切った青空。陽の光を浴びて緑の枝葉が瑞々しく煌く。

そよ風を爽やかに感じながら、23人の少女たちが草原の上で微笑ましく弁当を食べ合っていた。

「わゝ、その唐揚げ美味しそうだね、ほのか!」  
「欲しいならあげるわ、なぎさ」

「マジ!? やったあ! サンキュー、ほのか!」

「なぎささん、この玉子焼きも食べてみてください」

「おおっ、美味い! これひかりが作ったの?」

「はい! アカネさんに教えてもらって一生懸命作りました!」

「凄いよ、ひかり! 頑張ったじゃん!」

「ありがとうございます!」

「ねえ舞、そのハンバーグもらっていい?」

「いいわよ、咲」

「ありがとっ、舞! じゃあ代わりにこのサンドイッチあげる!」

と、ふたりの大食漢の少女がおかずのとりかえっこをした一方で、

「うわあゝ、美味しそゝ。ねえりんちゃん、そのタコさんウィンナ

ー私にちよーだい」

「何言ってるの? のぞみのお弁当にもウィンナー入ってるでしょーが」

「だってりんちゃんの作ったタコさんウィンナー、とっても美味しそうなんだもん。ダメ?」

「・・・はあゝ、もうしょーがないなあ」

「ありがと、りんちゃん」

「のぞみさん、私のカレーも食べてみてください!」

「え? うらら、お弁当にカレー作ってきたの?」

「はい」

「うらはらはどこ行ってもカレーだねえ・・・ところでこまちさん、そのお弁当何なんですか？」

「羊羹よ」

「いや、それは見れば分かりますって！なんでお弁当に羊羹が入ってるんですか？それもぎつしり！」

「あら、とても美味しいわよ」

「ああ、そうですか・・・で、かれんさん、そのお弁当は何なんです？」

「キャビアにフォワグラよ」

「いくらセレブだからって、ピクニックのお弁当に高級食材入れてくる人がどこの世界にいるんですか！？」

「ちよつとうるさいわよ、りん。せつかくのお弁当が楽しくないじゃない」

「ちやつかりキャビアやフォワグラをいただいているあんたが言うな、くるみ！」

と、まあなんだかんでワイワイガヤガヤしていた。

「・・・ラブ、あんたひよつとしてお弁当にドーナツ持ってきたの？」

「そのとおり！もうピクニックのお弁当にドーナツは必需品！」

「あんたが食べたいだけでしょーが！」

「まあまあ、それより美希ちゃんのお弁当凄く美味しそうだし、見かけもいいわね。これ、美希ちゃんが作ったの？」

「まあね そりゃなんでも完璧を目指す私だもん。お弁当作りも完璧じゃないとね」

「さすがね。でもせつなちゃんのお弁当もよくできてるわね。せつなちゃんも自分で作ったの？」

「あ・・・私は一応ひとりで精一杯頑張ろうしたんだけど、途中で瞬と隼人も手伝っちゃって・・・一応三人の合作なの。どうかしら？」

「うっん、凄くいいと思う。ふたりに感謝しないとね」

「ありがとう、ブッキー」

と、こちらでも微笑ましくしている一方で、

「ちよ、えりか！勝手に私のエビフライ取らないでください！それ、最後に食べようと思っていたんですから！」

「ありや、そーなの？でもまあいいじゃん。代わりに私のコロッケあげるからさ、つぼみ」

「食べかけなんていりませんよ！」

「えりか、人の嫌がることしちゃダメだよ」

「大目に見てよ、いつき。私とつぼみは超が付くほどの大親友なんだからさ」

「それとこれとは別問題ですよ、えりか」

「ちよ、泣くことないじゃん、つぼみ」

「えりか、あなた今自分が何をしたのか分かっているの？」

「ゆ・・ゆりさん？」

「あなたは軽い気持ちでやっただけかもしれないけれど、人の楽しみを取るということはその人の幸せを壊すということになるのよ。至福のひと時を人から奪つといて、あなたは何も感じないのかしら？」

「え・・や・・そんな大袈裟な。私、そんなつもりで・・」

「人の幸せを壊す行為に大袈裟も何もないわ。そんなつもりで取ったんじゃないんなら・・今すぐつぼみに返しなさい！」

「は・・はい（怖ッ！）」

一人だけ高学年の少女の睨みに、彼女だけでなく、他のふたりも思わず震えあがった。

「うわっ、凄いよエレン。このお弁当、エレン一人で作ったの？」

「ええ、そうよ。響たちも食べてみる？」

「えっ、いいの？」

「もっちゃん・・・それで、どう？」

「凄い・・美味しい。私より上手かも」

「ありがとう、奏。最高の褒め言葉よ」

「でも一体どうやって・・？」

「そ・れ・は・ね、音吉さんの本で勉強したの！」

「・・・へ、へえ、そうなんだ（音吉さんの趣味って、一体・・・）」

「（やっぱり、お祖父ちゃんからか・・・）」

「え？何か言いました？アコ姫様」

「『姫様』はやめて」

と、四人の中で最も最少年の少女が返したところで、そろそろ彼女たちを紹介するでしょう。

ここにいる23人の少女たちは全員、かの伝説の戦士と呼ばれるプリキュアだった。彼女たちはこれまでに全滅を滅びや不幸、悲しみや絶望で包み込もうとしてきた闇の脅威と何度も戦い、時にはどうしようもないほどの危機に迫られてもあきらめずに踏ん張り、世界を守ってきたのである。数ヶ月前には全ての世界を繋ぐという希望の花・プリズムフラワーをこれまで倒してきた組織の邪悪なエネルギーが宇宙で融合して誕生した邪悪の神ブラックホールから死守した経歴も持つ。

しかし、あの戦いは彼女たちにとって少々苦い過去でもあった。というのもブラックホールが僕として送り込んだ敵たちの中にはかつて自分たちと和解した者もいたからである。闇の世界の魔女、フリーズンとフローズン、サーロイン、シャドウはともかく、最後の最後には改心してくれたムシバーンやトイマジン、サラマンダー男爵までもが再び敵として立ち上がったのに彼らと一度拳を交えた夢原のぞみ、桃園ラブ、花咲つぼみは複雑さを隠し切れなかった。一応彼らを浄化した際にまだ残っていた邪悪な心をブラックホールが吸収し、同じ姿形で蘇らせた全くの偽者（コピー）と彼ら自身が説明してくれたが、それでも二度も戦いたくなかったと彼らを再度倒した三人は今も感じている。

また、彼女たちと多くの時間を過ごしてきたパートナーの妖精たちと永遠の別れを強いられたのもそうだった。僕たちを倒され、遂に姿を見せたブラックホールの猛威によって全員変身が強制解除さ



れたうえにプリズムフラワーが壊滅寸前にまで追いやられたのである。再び変身してブラックホールと戦うにはわずかに残されたプリズムフラワーの力を使うしかない。けれどそれを選べば最後、プリズムフラワーは完全に消滅して世界を繋ぐことが不可能となり、妖精たちはプリキュアたちのいるこの世界から強制退去され、二度と会えなくなるのだ。究極の選択に相当な苦悩をするも、離れていても自分たちと妖精たちは心で繋がっていると確信、ブラックホールの手によって世界を暗黒に染められるくらいなら、と彼女たちはプリズムフラワーに残る最後の力を使用することを選び、その光を浴びて再びプリキュアに変身した少女たちはそれぞれの必殺技を駆使して遂にブラックホールを撃破、妖精たちと永遠のさよならをした。  
・・・はずだった。

ところが奇跡が起こった。消滅したプリズムフラワーが種を残し、その種が花を咲かせ、再び世界を繋いだのである。プリキュアたちと妖精たちは涙の再会を遂げ、これからもずっと一緒にいられるこの喜びに感謝した。今の時間も妖精たちは彼女たちのそばで楽しくランチしたり、仲良く遊んでいる。そんな彼らの様子を一瞥して北条響は、くす、と微笑し、来てよかったなと本当に思った。

今日は響たちが他のプリキュアたちとともに時間を過ごせる数少ない日。前々から計画していたピクニックの日だった。各メンバーで同日同時刻同場所に集合、全員で話し合った末に決めたこの丘から眼下に町が見える景色を楽しみながらお弁当を食べ、その後は自由時間として仲良く遊んだりする予定で、響と親友の南野奏はもちろん、新しくプリキュアに仲間入りした黒川エレンと調辺アコも連れてきていた。

黒川エレンはもとは幸せの音楽の国・メイジャーランドの歌君だったが今年の歌君に親友且つライバルでもあるハミイが選ばれたことに不満を覚え、世界を不幸の悲しみに沈めようと企む悲しみの音楽の国・マイナーランドに寝返ったセイレーンというペルシャ猫に似た妖精であり、かつては響たちの敵として戦っていたが改心、さ

らにはプリキュアの力も授かり、ともに戦うのを決めたのだ（ちなみに彼女は過去の罪からか、今やセイレーンの名で呼ばれるのを嫌っているが、ハミィにだけはその名で呼ばれるのを許している）。

もうひとり、調辺アコは9歳の小学三年生という、中学一年生の九条ひかりと春日野うららよりも四歳も年下という彼女たちの中では最年少とそれだけでも驚くのだが、実はメイジャーランドの女王・アフロデイトと真の黒幕・ノイズに操られていた元マイナーランド国王・メフィストの娘に当たるお姫様であり、ノイズの脅威から響たちの暮らす加音町に逃げてきたのだが、悪行を繰り返す父を助きたいと想いからプリキュアの力を授かり、ともに戦うのを決意したのだ。現在では父親をノイズの洗脳から救出、来るべきノイズとの戦いに備え、プリキュアとして響たちとともに世界を不幸から守っている。

ちなみに初の小学生プリキュアの登場に、自分よりも歳が下のひかりとうららよりも背が低いのを気にしていた来海えりかは嬉々とし、彼女と「まあ一応最年少でなことで何かとプレッシャーを感じるかもしれないけど、ここはひとつよろしくね!」「べつにプレッシャーなんて感じてないわよ。それよりも先輩気取って馴れ馴れしくて・・・よく人に嫌われないのが不思議ね」「なにをおっつ、弟子入りするかこのこのっ!」と頬をつねながら挨拶を交わしたとかなんとか。

「それにしてもさ、本当に今日は晴れてよかったね!こうして『全員』で会うのなんて滅多にないからね!」

お弁当を食べ終わった後、美墨なぎさ、日向咲、のぞみ、ラブ、つばみ、えりかとバレーボールをしていた響だが、『全員』という言葉聞いた途端に彼女たちの何人かが困ったような笑みを浮かべているのに気づいた。

「?・・・何?私、何かまずいこと言った?」

「いや、そうじゃないんだけど・・・」

「響さんは会ったことないのでしょうがないのですが、実は私たち

の他にあと一人だけいるんです」

えりかの後につばみが説明すると、響はキョトンとなった。

「へ？みんなの他にもう一人・・・？」

「はい。私たちはその人と二回だけなのですが、一緒に戦って世界を守ったことがあるんです」

「へえ・・・その人は今？」

「今はニューヨークで頑張っています」

「ニューヨーク・・・はあく海外で暮らしているなんて凄いね。その人、名前なんて言うの？」

「雨牙真夜さんといいます。プリキュアとしての名前はキュアセイバーです」

「キュアセイバー・・・？」

はて、その名前、どこかで聞いたことがあるような・・・？

「一回会ってみたいね、その人に」

「まあニューヨークに住んでいるのですから、そう簡単には会えませんが、きつといつか会えますよ。友達なんですから！」

「そうそう！その時には響たちのことも紹介するって。でも今日はせつかくひさしぶりに会ったんだしさ、ドドーンツと、楽しもうよ！ドドーンツとさ！！」

えりかがそこまで言った時だった。

ドドオオオオンツツツ！！！！

「そうそう！こんな感じに・・・え？」

突然の背後からの轟音。瞬間に波打つ地面。妖精たちはもちろん、明らかに驚愕の反応をしている仲間たちの顔を見て、えりかは嫌な予感が100パーセントしてギギと、首を人形の動きの如く後ろにねじった。

「な・・・な・・・なんじゃこりやああああああっつつつつ！  
！？」

そこにあつたのは、二足歩行する巨大な機械<sup>マシン</sup>だった。全高は約5メートル以上、薄茶色の鋼鉄に覆われ蒸気が至る所から噴出している箱型の機体からは六の義手が伸び、あろうことか少し大きめの拳銃や剣が握られている。機体を支えている二足はなぜかバツタの後脚に似てて、爪先で歩いていて。それ一機だけでも十分驚愕するのにさらに五機、頭上から降下してきたのである。突如現れた謎の機械はある程度蒸気を噴き出すと、少女たちに全ての銃口を定めた。  
「みんなよけて！」

響が一番に発し、全員急いで弾丸の雨を回避する。草原に砂と土の噴水が次々に舞い上がり、突然の事態に妖精たちも驚き、急いで彼女たちに飛び込んだ。

「なぎさ、何事メポ！？」

「私を知るわけないじゃん！あんなのぶっちゃけありえないつつの  
！！！」

「つぼみ！これは一体何が起こったですう！？」

「シプレ！・・・分かりません。けど今は危険です！どこか安全な場所へ・・・！」

「ピーチはん！あいつら一体何なんや！？」

「私のほうが知りたいよ、タルト！あゝっもう！せっかくみんなで幸せゲットしてたのにいっつ！！」

ラブのその台詞に、響・奏・エレン・アコの四人が反応した。

「そうだよ！今日はせっかくみんなでひさしぶりに集まった大事な日だったんだよ！」

「みんな今日という日をとっても楽しみにしていた！」

「それを突然現れて・・・」

「みんなの幸せを壊すなんて！」

「・・・絶対に許せない！！！！」

その気迫に、五機の機体が停止する。23人の少女たちは全員幸

福の時間を壊された怒りを瞳に宿し、それぞれ妖精が姿を変えたものの、普段から携帯しているものをすぐさま手に持つ。響は背後に立つ仲間たち呼びかけた。

「みんな、変身よ！」

「……うん……！」

その返事を聞いた直後、全員がアイテムを起動させて大声で叫んだ。

「……レッツプレイ！プリキュア・モジュレーション！」

「デュアル・オーロラ・ウェイブ！」

「ルミナス！シャイニングストリーム！」

「デュアル・スピリチュアル・パワー！」

「……プリキュア！メタモルフォーゼ！」

「スカイローズ・トランスレイト！」

「……チェインジ！プリキュア！ビート！アアアップ！」

「……プリキュア！オープン・マイ・ハート！」

まばゆいばかりの閃光が23人の少女たちを包み、衣装を施して姿を変えていく。

響はマゼンダを基調とした衣装にピンクのツインテール。奏は白を基調とした衣装に艶やかなレモンイエローの長いポニーテール。エレンは青を基調とした衣装に淡い紫のサイドポニーに羽のような髪飾りが施されて長く束ねられる。アコは黄色を基調とした衣装に額に赤いハートのヘアアクセが施され、髪は両側に分かれたオレンジの長髪に変わる。

なぎさは黒を基調とし、桃の装飾をあしらった短いスカートとスパッツ。雪城ほのかは白を基調とし、青の装飾をあしらった膝丈のスカート。ひかりは鮮やかな桃の布地と金色の衣装を施した衣装。

咲は赤紫色を基調とした衣装とスパッツ。美翔舞は銀白色を基調とした衣装とスカート。

のぞみ・夏木りん・うらら・秋元こまち・水無月かれんは襟の立った二の腕までの袖に短いスカートの下にスパッツが見える桃・赤・

黄・緑・青の衣装。くるみは胸に青い薔薇が付いたりボンが施された紫の衣装。

ラブ・蒼乃美希・山吹祈里・東せつなはフリフリの衣装とスカート、髪飾りにイヤリングが装飾された桃・蒼・黄・赤の衣装。

つぼみ・えりか・明堂院いつきは花を象徴するように開いたスカートとブーツ、胸にハート型のエンブレムが装飾されたリボンが結ばれた桃・青・金を基調とした衣装。月影ゆりは前から後ろにかけて長くなるスカートと左胸に青い薔薇があしらわれた藤色を基調とした衣装。

光が消えると、『変身』を遂げた23人の少女たちがポーズを取り、順に名を名乗っていく。

「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

「爪弾くは女神の調べ！キュアミューズ！」

「っっ届け、四人の組曲！スイートプリキュア！」

「光の使者、キュアブラック！」

「光の使者、キュアホワイト！」

「ふたりはプリキュア！」

「闇の力の僕たちよ！」

「とつととおウチに、帰りなさい！」

「輝く命、シャイニールミナス！光の心と光の意思、全てをひとつにするために！」

「輝く金の花！キュアブルーム！」

「煌く銀の翼！キュアイーグレット！」

「ふたりはプリキュア！」

「聖なる泉を汚す者よ！」

「アコギな真似はお止めなさい！」

「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

「情熱の赤い炎！キュアルージュ！」

「はじけるレモンの香り！キュアレモネード！」

「安らぎの緑の大地！キュアミント！」

「知性の青き泉！キュアアクア！」

「希望の力と未来の光！華麗に羽ばたく5つの心！Yes  
プリキュア5！」

「青い薔薇は秘密の印！ミルキイローズ！」

「ピンクのハートは愛ある印！もぎたてフレッシュ！キュアピーチ  
！」

「ブルーのハートは希望の印！つみたてフレッシュ！キュアベリー  
！」

「イエローハートは祈りの印！とれたてフレッシュ！キュアパイン  
！」

「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ！キュアパッシ  
ョン！」

「レッツ！」

「プリキュア！」

「大地に咲く一輪の花！キュアブロッサム！」

「海風に揺れる一輪の花！キュアマリン！」

「陽の光浴びる一輪の花！キュアサンシャイン！」

「月光に冴える一輪の花！キュアムーンライト！」

「ハートキャッチプリキュア！」

「全員集合ッ！プリキュアオールスターズ！」

23人の伝説の戦士、プリキュアが最後にそう声を合わせて決めると、神々しい光が一瞬だけ煌き、すぐに周囲に弾けた。

「あれ何なの？あんなの連れてきていたなんて聞いてないわよ、刹那」

「かつて独立治安維持部隊アロウズが使用していた対人用無人機動兵器だ。私たちの世界の『花咲つぼみ』と『明堂院いつき』が『夢原のぞみ』への攻撃に使用したものを回収、独自に改造して進化させた。その時あなたはその場にいなかったから知らないのは仕方ない」

「・・・なぜ、彼女たちに？」

「一次試験よ。この程度で倒れるようなら私たちと戦う資格もない。大丈夫。拳銃は30・M1カービン、メタルジャケットで腹部を狙うようにシステム化しているし、弾丸はスパイヤーポイントで、低速で発射されて回転しながら敵を撃つものを装填している。腹部を撃たれても死に至ることはないから安心して。無論、相当の痛みに苦しむけどね」

「（・・・鬼ね、この人）でもまあ、一応準備はしたほうがよい？」

「そうね」

そう言つて、ふたりの少女は雑木林の中で変身コードを唱えた。

「プリキュア・リボーンズ・イノベーション！！」

「プリキュア・セラフィック・アドベント！！」

## 次回予告

謎の機動兵器と激闘を開始する23人のプリキュアたち

突然の強敵に、彼女たちは勝利できるのか

次回『奮迅』

彼女たちの絆は、そう脆くない



## 機動兵器（後書き）

ひさしぶりでしたけど、やっぱり歴代の中ではえりかが一番書きやすいです。

## 奮迅

まずブラックとブルームが突撃し、渾身の一撃を薄茶の機体に叩き込んだ。

しかし、ふたり分の鉄拳に鋼鉄の機体はびくともせず、地上に降りたブラックとブルームは赤く腫れあがった手をぱたぱたさせた。

「痛あゝっ！」

「なんて硬いのよ、あいつ！」

すると、ホワイトが爪先で歩いている二足に気づいた。

「・・・あの足を攻撃したらどうかしら？」

「そうだわ！あんな爪先立ちで歩いている足を攻撃すればきつとバランスを崩して倒れるはずだわ！」

イーグレットもホワイトの意見に賛成する。

「やってみる価値はあるわね。行くわよ、イーグレット！」

「ええ！」

ホワイトとイーグレットが駆け出し、身体を高速回転させながらダブルスクリーキックをお見舞いしようと跳躍の準備をする。ところが準備をする直前に機体がふたりの視界から消えた。

「えっ！？」

あんな大きいのが一体どこに？と探していると、突如頭上を巨大な影が覆い、ふたりは急いで上を見やる。見ると、あの鋼鉄の体がいつの間にふたりの頭上へと降ってくるではないか。予想外の空間から出てくると思ってもらえなかったホワイトとイーグレットは悲鳴をあげてすぐにその場を回避、間一髪で機体の下敷きにならずにすんだものの、地上に降りた時の衝撃と粉塵で軽くだが身体が吹き飛ばされた。

しかし、次の瞬間には全員目が丸くなった。爪先立ちの二足を活かして機体が、ぴょん、と跳んだのである。ちよつとでも突けば倒れてしまいそうなあの爪先立ちはそのためだったのかとホワイ

トが気づいた時には機体は四人から少し距離を取った位置に着地、三の義手が握る拳銃から無数の弾丸が撃たれた。

「はあっ！」

急ぎルミナスが絶対防御の虹色のバリアを張り、弾丸から仲間を守る。撃った数だけ弾丸が地にこぼれていく音が響き、機体は無駄だと悟ったのか、剣の刀身を煌かせて接近、正面から垂直に刃をバリアに斬り込んだ。

「く・・・っ・・・！」

バリアを通して衝撃がルミナスの身体に伝わり、わずかに表情が歪む。バリアは何度も叩かれ、遂に耐えきれずに亀裂が入り、直後に粉碎した。

「くくくくきやああああああああああああっつつつつ

！！！」「」「」

バリアが破壊された衝撃を受け、五人の身体が空高く吹き飛んだ。一方、プリキュア5も機体相手に苦戦を強いられていた。レモネードがプリズムチェーンで巨体を束縛して動きを止め、アクアがサファイアアロー、ミントがエメラルドソーサー、ルージュがファイヤーストライクを次々に発動させて炸裂するものの、機体は傷一つも付かない。それどころか剣を振り回してレモネードの束縛から逃れると、銃を乱射、直撃はしなかったものの衝撃で四人を草原に撃墜した。

「はあっ！」

「このっ！」

ドリームとローズによる拳と蹴りの連打が機体に次々と叩き込まれる。特にローズは単独でもプリキュア5以上のパワーを発揮するのだが、彼女の渾身の打撃を受けてもやはり機体は一步も退くことなく、振り上げられた義手にふたりは逆に弾き飛ばされ、地上に激突した。

「くきやああああっ！！！」

刀身を振り下ろしざまに発生した突風を受けてベリーとパインが

悲鳴をあげて吹き飛ぶ。飛ばされたふたりの名前を叫んだピーチは途端に銃口が自身に定められているのに気づかなかった。

「ピーチ！」

即時に走り出して体当たりし、彼女を庇ったパッションだったが代償として発射された弾丸が腹部を貫通して倒れた。

「パッション！しっかりして！」

「大・丈夫よ」

ピーチの腕に抱えられたパッションは彼女に笑いかけるもやはり激痛が相当のものらしく、痛みに歪んだ笑みとなっていた。かつては家族同然に暮らしたこともある親友を傷つけたことにピーチの怒りの火山が噴火した。

「よくもパッションをおっ！！」

パッションを降ろして瞬時に機体上空へと跳躍したピーチはそこで宙返り、踵に全力を込めて乙女の怒りを思いつきり叩き込んだ。一瞬、機体のバランスがぐらついたように見えたが倒れずには至らなかった。すぐに義手がピーチに急迫し、彼女を真下へと叩きつける。

「ブロッサム・スクリューパンチ！」

「マリン・インパクト！」

「サンシャイン・フラッシュ！」

ブロッサム、マリン、サンシャインによる特殊技が次々に機体に直撃する。プリキュアの中では最も特殊攻撃に長けているチームであるが、それでも機体は平然と蒸気を噴出している。歴代最強とさえいわれているムーンライトも鉄拳や蹴りといった打撃を叩き込みさらには「ムーンライト・シルバーインパクト！」と衝撃波を与えて爆発を起こしたが、機体は全く倒れず、四人はとも信じられなかった。それどころか剣の一振りで発生した突風に飛ばされ、背中を嫌というほど強打した。

幾多の激闘を繰り広げてきた先輩たちでさえも苦戦しているのに新参者のメロディたちが善戦しているわけがなく、

「ビートソニック！」

ビートが専用武器・ラブギターロッドを鳴らして光の音符の矢を撃ったり、ミューズが空間に虹色の鍵盤を召喚してエネルギーを飛ばしたがり効かず、

「プリキュア！パッションナートハーモニー！！」

ハート型ト音記号からひさびさにリズムと心を合わせた金色の閃光波を発射するも全然通用せず、反射神経を活かした二足による体当たりをまともに受けて倒れ、表情が激しい苦痛に歪んだ。

「・・・なにあの様。少しは期待していたのに全然じゃない。時間の無駄だった。戻ろう」

「オートマトン、ほうっておいていいの？」

「戦闘対象は私たちを除いたプリキュアのみに指定している。もし変身が解除されれば対象が一般市民に変わるから、撃ったりはしない。しかし、一応救急車を呼んであげるとするか」

携帯を手取る彼女だが、すぐにその手を止められる。

「？・・・どうした？」

「もう少し待つてほしい。別世界とはいえ彼女たちもプリキュア・・・失望するのはまだ早計と思う」

「しかし・・・」

その時、強い闘気を感じし、ふたりの少女は振り返った。

幾度となく飛ばされ、苦痛に歪んでも、少女たちは何度も立ち上がった。

全員が気迫に満ちた表情をし、壮絶な闘気オーラを飛ばす。

その闘気は『想い』。幸福の時間を破壊された怒り、もう一度時間をともに過ごしたいという願い、だから絶対に負けられないプリキュアとしての矜持が力を与えている。その気迫に気圧されたのか、

五機の機体がほんの一瞬だけ動きを止めた。

「たああっ！！」

ありつたけの『想い』を力に変えてブラックとブルームの一撃が再び決まる。一撃目はびくともしなかった機体が二撃目ではぼつこりと跡が残るほどへこみ、初めて後退を見せた。その機会を見逃さず、ルミナスとイーグレットが爪先立ちの二足に跳び蹴りを与える。衝撃を受けてわずかに傾いた機体を

「やああっ！！」

両腕に力を集約したホワイトが一足を？み、5メートル以上の機体を宙に浮かす。そこから先は言うまでもなく地面に撃墜した一機にブラックはホワイトと、ブルームはイーグレットと片手を繋ぎ、もう片方に力を溜めた。

「ブラック・サンダー！」

「ホワイト・サンダー！」

天から黒と白の雷がふたりの手に集められ、増強していく。

「プリキュアの、美しき魂が！」

「邪悪な心を打ち砕く！」

「プリキュア！マーブルスクリュー！マックス！」

最大限にまで増強した黒と白の雷が螺旋を描いて混じり合い、融合して機体に激突する。

「大地の精霊よ・・・」

「大空の精霊よ・・・」

ブルームとイーグレットも目を閉じてそれぞれ地面と空に宿る精霊の光を片手に集め、力へ変えていく。ふたりは目を開けた。

「今、プリキュアとともに！」

「奇跡の力を解き放て！」

「プリキュア！ツイン・ストリーム！スプラアッシュ！」

二つの光が水流の如く混合し、一つの光線となつて突撃する。二つの光線を受けた機体は当初こそ耐えていたが、徐々に全体が光に覆われて遂に爆発した。

プリキュア5のメンバーも反撃に生じていた。機体に個人技が通用しないならせめてと、再びレモネードがプリズムチェーンで動きを止め、ルージュ、ミント、アクアが今度は機体ではなく、義手が握る武器を狙ってもう一度技を発動する。これは成功し、暴発を起こした拳銃や剣は炎の花を盛大に咲かせ、使用不可能の状態にした。そこに

「邪悪な心を包み込む薔薇の吹雪を咲かせましょう！ミルキローズ・ブリザード！！」

ローズが起こした花吹雪に包まれて一輪の巨大な薔薇の中に封じられた一機は、

「プリキュア！シューティングスター！」

自身を流星と化したドリームの光速アタックに撃破され、消滅した。

ピーチたち四人はスタンディングスタートの体勢を取り、「レディ・・・ゴー！」のかけ声と同時に順に走り出す。

「ハピネスリーフ！セツト！」

まずパッションが手から赤のハートを生み、「パイン！」と投げる。走りながらパインは両手で受け取った。

「プラスワン！ブレイリーフ！」

赤のハートの隣に黄のハートが加わり、「ベリー！」と投げる。

「プラスワン！エスポワールリーフ！」

片手で受け取ったベリーはさらに青のハートを加え、華麗に跳んで「ピーチ！」と投げると、

「プラスワン！ラブラリーフ！」

桃色のハートが加わって四色のクローバーを完成させると、ピーチが機体に向けて投げ、締めを括る。クローバーは回転しながら巨大化し、頭上から包み込むように降下して機体の動きを封じた。

「・・・ラッキークローバー！グランドフィナーレ！・・・」

それぞれ自身を象徴する色の葉の上で四人が手を挙げて叫ぶと、クリスタル状の透き通った宝石のような物体が一機を中に封じ込め、

完全消滅した。

「花よ輝け！プリキュア！シルバーフォルテウェイブ！」

エンブレムから専用武器・ムーンタクトを召喚し、ムーンライトが銀の花弁のエネルギー光弾を発射、光弾は爪先立ちの二足に衝突し、機体はバランスを崩して倒れた。

「花よ舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト！」

サンシャインがシャイニータンバリンで頭上に灼熱の太陽にも見える光のゲートを作りだすと、

「プリキュア！フローラルパワー・フォルティシモ！」

フォルティシモ記号を描いた後にフラワータクトの先端を合わせて光を纏ったブロッサムとマリンがそのままゲートに突入、全身を黄金に染めてパワーとスピードを増強させると、

「プリキュア！シャイニング！」

「フォルティシモ！」

立ち上がれない一機に激突・貫通して撃破した。

次々に敵を撃破する先輩たちの活躍に後輩も負けてられない。メロディたちも残った最後の機に反撃に出た。

「プリキュア！スパークリングシャワー！」

ミューズが変身アイテムでもあるキュアモジューレの笛を吹いて大量の音符を周囲に召喚、一気に飛ばしてひるませると、

「翔けめぐれ、トーンのリング！」

「プリキュア！ミュージック・ロンド！」

「プリキュア！ハートフルビートロック！」

専用武器・ミラクルベルティエとファンタスティックベルティエを召喚したメロディとリズム、ラブギターロッドのボディをヘッドまで移動させてソウルロッドに変形させたビートが弧を描いて生み出した三重の光のリングを飛ばし、瞬時に束縛された最終機は、

「三拍子！1・2・3！」

三人が同時に振り返り、

「フィナーレ！」



のかけ声とともに起きた光芒と爆発に呑み込まれた。

戦いは、なんとか勝利で終わった。

しかし、突如現れた謎の機体にプリキュアたちはもちろん、離れて見守っていた妖精たちも状況を喜べず、むしろ不安な気持ちが一層強まった。

「あのロボットみたいなの、一体何なのニャ？」

開口一番にハミイが聞く。

「分からないナツ。今まで見たこともないどころか、明らかに『普通』じゃなかったナツ」

「なんだか嫌な予感がするココ。もしかしてまた世界を変えてしまうような恐ろしいことが起きようとしているかもしれないココ・・・」

ココが不吉な予想をすると、

「その通りよ」

「・・・・え・・・？」

声が聞こえ、突然プリキュアたちの頭上に立方体の何かが投げ込まれた。メロディが思わず見上げると、『それ』は強い閃光を炸裂、全員の視界を奪った。

「うわっ！」

視覚だけでなく聴覚も奪われ、メロディは静寂な闇の中をしばし過ごすも、それ以上は何も起こらなかったため、恐る恐る瞼を開いた。「えっ？」と声が出た。

そこはさつきまでの草原ではなかった。例えるならイタリアの世界遺産コロッセオで有名な闘技場に似た空間が目の前に存在し、周囲の3メートル以上の壁の上に誰もいないが観客席が見えた。

「メロディ！」

どうしてこんな場所に？と疑問に思っていると、背後から名前を呼ばれてすぐにリズムの顔が瞳に入る。リズムの他にビート、ミューズの姿も見え、メロディは自分一人ではなかったことに少し安堵

した。しかし、彼女たち以外の仲間の姿は誰も見えない。一体何がどうなっていると混乱がますます生じていると、

「！・・・メロディ、リズム、ビート！あそこ！」

ふと、ミューズが指を差した。

そこに少女がふたり、見える。さっきまで一緒にいた仲間の誰でもないのは明らかだった。

ひとりは青と白を基調とした衣装を着、背中に『？』に似た大きな翼が生えている。

もうひとりは西洋の誇りある騎士がそのまま天使に転生したような、長い金髪の白を基調とした衣装を着ている。

「誰・・・誰なの？」

思わずメロディが聞くと、ふたりの少女はこう返事を返した。

「破壊と再生の天上人・・・キュアエクス！」

「悪しき者を断罪する破邪の極光、キュアセラフ！」

#### 次回予告

23のプリキュアたちの前に現れた新たなふたりのプリキュア混乱のまま、プリキュア同士の戦いが無理やり開始される

次回『天上人（前編）』

この戦いに、彼女たちは何を見い出すのか

## 奮迅（後書き）

エクスとセラフ、登場です。

## 天上人（前編）

『ポードブル・リング』。天上刹那「キュアエクスと天宮唯「キュアセラフのふたりがプリキュアたちの頭上に投げた立方体のその機器は起動すると、閃光を発して一瞬で異次元空間を作り出すのを可能とする。23人もいるプリキュアたちを各チームそれぞれの空間に閉じ込めるだけでなく、起動させた本人たちを各空間に同時に彼女たちの目の前で出現するのも可能になるよう改造している。つまり、ふたりは各空間に自分たちの幻影、いわゆる分身を生み出せるのである。メロディたちだけでなく、他の空間で目を開けたプリキュアたちの前にもエクスとセラフは幻影として現れていた。ただし、この機械には欠点があり、作り出した異次元空間を保っていられるのはわずか15分。それ以上は耐え切れず、もとの草原に戻されてしまう。だからそれまでに自分たちの目で見極めなければならない。彼女たちが自分たちと組む価値があるかどうかを。」

「キュアエクス・・・キュアセラフ・・・？」

「もしかして、プリキュアなの？」

ふたりのプリキュアの登場に案の定の反応を見せるメロディとリズム。

「ねえハミィ、あの人たちもメイジャーランドに伝わるプリキュアなの？」

「知らないニヤ。あんなふたり、ハミィは見たことも聞いたこともないニヤ」

ビートが親友であるハミィに尋ねるが、ハミィもやや驚いた様子で首を振ると、

「・・・来る！！」

ミューズが凄まじい闘気を感じて叫び、しかし、一瞬で眼前に肉薄したセラフの猛拳を一番に受ける。辛うじて両腕で防御したが、威力を全身に浴びて吹き飛ぶ。壁にクレーターができるほど叩きつ

けられたミューズは「かはっ・・・！」と思わず声が出、かわいい顔が痛々しく歪んだ。

「よくも姫様を！」

挨拶もなしにいきなり攻撃を仕掛けてきたことに驚くも四人の中で一番の幼子であるミューズに痛手を負わせたことがビートの怒りを買った。シュ、シュツ、と怒涛の勢いで拳、蹴りの連打を繰り返す。

やはり、激情に駆られたか。怒りは原動力になるが、我を失って相手に余計隙を与えてしまう未熟者の持つ剣。新参者とはいえ、ただかだかその程度で己を見失うとは『この世界』のプリキュアもたいしたことない・・・とセラフはかわしながら正直に思ったが、今回ばかりは少しはプリキュアとしての矜持を守るためにも根性を見せてほしいとも願った。何しろ今回の標的はかなり厄介なうえにその厄介に自分たち以外に近づこうとする何者かがいる。アルガティア含めた三人だけでは正直厳しいかもしれない。だから、『この世界』のプリキュアたちの協力が必要と考えに至ったのだが、そのプリキュアがてんで弱ければ話にならない。一次試験をチームワークで合格したが、この最終試験にも合格してくれなければ、自分たちでは世界を災厄から回避させることは難しいかもしれない。

そこまで考えて、セラフはふと心の中で自嘲する。

結局自分たちのことしか考えていない自分は醜いな、と。

しかし、もう後戻りはできない。だから見せてみる。多くの強者を倒し、世界を闇から何回も守ってきたその実力を。

「プリキュア！セラフィム・インパクト！」

閃光を集約した掌から衝撃波を発し、ビートを吹き飛ばす。

ふとエクスを見ると、彼女はメロディとリズムに凄まじい斬撃を披露していた。

~~~~~

フランスの有名な世界遺産、モンサンミッシェルに似た巨大城上空でキュアサンシャインとキュアムーンライトと激戦を繰り広げて

キヤッスル

いた二人目のエクスは右手に握っていたエクスソードを折り畳みライフルモードに変換して粒子ビームを次々に浴びせた。

「ムーンライト・リフレクション！」

周囲に光芒と爆発が起こる中、ムーンライトが巨大な銀の円盤状のバリアを召喚し、激突した粒子ビームを本人に撃ち返す。回避し、地上に降り立つと、

「サンシャイン・フラッシュ！」

サンシャインが弧を描いた両腕から光の連弾を撃って仕掛ける。ライフル状のエクスソードを掌から消失すると、両肩のマウントラッチに固定していたキュアサーベルを掌握、迫り来る連弾を斬り伏せながら急迫を試みる。ある程度距離が縮まった位置で斬撃を叩き込もうとしたが、サンシャインはそれよりも素早く下方からの鋭い蹴りを飛ばし、危うく顎に決まる寸前でかわした。

自分の世界で一度だけサンシャインと戦いを交えたことがある。

あの時はトランスモードを発動し、反撃できる隙も与えないほどこちらがいい様にねじ伏せたが、『この世界』のサンシャインは少なくとも自分の敵ではなかったあのサンシャインよりは強い。闘気も凜としていて、少しも禍々しくない。トランスモードを発動しても彼女にはそう簡単には勝てないかもしれないと思うと、

「もう一人、いるわよ！」

突如背後を取ったムーンライトの鉄拳が迫り、寸前で双剣を交差して防いだ。

その威力、即座に身体が後退するも、これは期待できそうだと、エクスは腹の中でニヤリと笑った。

一方、かつては敵に『史上最弱』と不名誉な称号を与えられたこともあるブロッサムはセラフ相手に苦戦しているかと思いきや、

「ブロッサム・シャワー！」

彼女が掌から放った無数の光弾を花びらの舞で防御、全弾を撃ち尽くしたセラフに

「マリン・シュート！」

マリンが数弾の水の塊を発射、跳躍してかわしたセラフは

「プリキュア！セラフイムバスター！」

そのまま宙で身体を高速回転させながら手から光線を全方向に発射、何度かは地上に立つふたりにヒットして悲鳴をあげるものの、

「何のこれしき！行くよ、ブロッサム！」

「はい！私たちは絶対に負けません！」

身体から煙が上がっても不敵な笑みを消さない表情に一瞬だけだった、臆してしまった。

震えているの・・・この私が？

「・・・面白いじゃない」

ぎゅつ、と手を強く握り締めてセラフも不敵な微笑みを返すと走り出した。

~~~~~

キュアミントか・・・。

アメリカ・アリゾナ州を代表する自然世界遺産、グランド・キャニオンの地にて三人目のセラフは緑の円盤状の物体を盾にして双剣・セラフイムセイバーを防御するミントに若干だが、苦々しさを覚える。というのももかつて自分が暮らしていた世界で自分を瀕死の状態に追いやった張本人が彼女と同じ顔と同じ名前を持つ少女だったからである。危ういところをアルガティアが託してくれたセラフエンブレムからプリキュアの力を授かって助かったが、自分をあと少しで永眠させようとした彼女は今も自分たちの世界で犯した罪を反省すらせずにのうのうと生きている。それを思うと、別世界に存在する全くの別人と分かっていても心のどこかで燻り続ける感情を今にも抑えきれない気分だった。

「プリキュア！セラフイムフレア！」

発動すると同時に灼熱化した刀身が遂に緑の盾を垂直に斬り裂いた。裂けた瞬間に衝撃がミントを襲い、彼女の身体が悲鳴を轟かせて崖下へ降下するも、

「ミント！」

キュアルージュが慌てて片手を握って救出、思わず舌打ちした。

「プリキュア！プリズムチェーン！」

「！……」

ミントへの暴行に怒ったのか、キュアレモネードが険しい表情で光のチェーンを両手から放ち、セラフを拘束する。二重三重にも縛られ、身体の自由を奪われるセラフだが、

「なめるな！プリキュア！セラフィムウィップ！」

剣をムチに変換、伸縮自在に操作してチェーンを細かな塵へと切り刻んだ。驚くレモネードとルージュに対し、

「プリキュア！セラフィムスラッシャー！」

聖なる光を集約して長剣と化した刀身を素早く肉薄するとともに横薙ぎにさす、

「プリキュア！エメラルドソーサー！」

「！」

突如急接近してきた緑の円盤が長剣に激突、火花を大量に飛散させる。威力に押されるも力任せに円盤を叩き斬る。振り返ると、ミントが凜とした表情でセラフを見据えながらレモネードとルージュの前で大きく両腕を左右に広げて告げた。

「ふたりを……ふたりを傷つけないで！それだけは、この私が許さないわ！」

「！……キュアミント」

その台詞、嘘やまやかしのない本当の言葉に思わず胸を打たれる。ああ……そうか。この人はあのキュアミントとは全然違う。同じ顔、同じ声を持つけれどこの人は自分と刺し違えてでも仲間を守るうとしている。優しく、そしてとても強い人だ。自分はいつと重ねて、我を忘れていた。さっき心のどこかでキュアビートを侮蔑していた自分のほうがやっぱり醜い。

「ごめんなさい……」

セラフは心から謝った。彼女の謝罪にミントは一瞬不思議な表情をした。



自分の世界にいるキュアミントは許せない。たぶん、一生。

だけど憎しみゆえに高ぶらせていた感情から解放してくれた時点でそれで彼女の勝利であり、最終試験も合格は確定だった。

「・・・でも、あと少しだけ見せてほしいの。あなたの強さを」

セラフは再びミントを正面から見据え、剣を構え直した。

『この世界』のキュアドリームは、強い。

さすがに学年も性格も相性も異なる少女たちのリーダーとなってまとめ、周りが不安に明け暮れてもすぐに笑顔と希望を取り戻すカリスマ性を発揮して、二度も世界を組織から守ったことだけはある。この彼女が自分たちの世界に存在する『夢原のぞみ』だったら、どんなに絶望を強いられてもあきらめずに最後には笑ってVサインを見せてくれるのではないだろうか。それだけ自分の世界の『夢原のぞみ』は弱い。無論、状況が状況で日に日に悪化しているのだから、彼女でなくとも誰もが精神的に参ってしまうのは仕方ないと思うが、いつも誰かを支える役目だった彼女が今や誰かに支えてもらわなければ壊れてしまうかもしれない状態に近いと聞いたなら、こっちの彼女はどう思うのだろうと、ついエクスは考えてしまった。

キュアアクアの水の矢を次々に破るも瞬間に迫ってきた桃色の光速アタックを辛うじて回避し、ここはトランスモードを起動させるかと考えつくと、

「はあっ！」

ミサイルの勢いで飛びかかってきたミルクイローズの一撃をもろに片腕に食らい、倒れずに済んだものの、麻痺が止まらず、ぽろつ、と剣が掌からこぼれる。

「く・・・っ！」

天上人たるもの、たとえどのような理由があろうと相棒を不覚にも落とすなどあってはならない。激しい痺れを堪え、もう少しで地に着こうとしていた剣の柄を気力で奪取する。

「ッッ・・・！」

声もあげなくなるほどの痙攣に耐える。明らかに激痛を我慢している表情のエクスだが、ドリームたちは追撃を仕掛けない。気づいていないのか、それとも卑怯を好まない人間なのか。おそらく後者だろう。

もし、あの『夢原のぞみ』<sup>キュアドリーム</sup> だったらこの瞬間を好機と見て相手を躊躇うことなく殺<sup>や</sup>っていたかもしれない。冗談ではなく、本気で。甘いなと思いつつも、ああそうか、だから彼女はこんなにも強いのかと同時に得心がいく。

たとえ敵でも苦しんでいたら、様子を見て助けてあげたいと思えばまっすぐ自分の気持ちに正直にぶつかっていく。それは本気でぶつかるから相手も本気で応えてくれると分かっているから。

強いはずだとエクスはようやく麻痺が収まった片腕で剣を力一杯握り、表情を引き締める。

最終試験は合格だ。でも・・・少しでもいい。彼女の本気を垣間見たい。

ふ、と微笑をわずかに見せてエクスは双剣を煌かせ、三人に疾走した。

### 次回予告

それぞれ器量を發揮して『最終試験』に合格していくプリキュアたち新参者の『スイート組』ははたして認めてもらえるのか  
次回『天上人（後編）』

この戦いの末にふたりの少女が告げた言葉は・・・

天上人（前編）（後書き）

メロディ「ここで決めなきゃ、女が廃る！」

## 天上人（後編）

自分たちの世界でもそうだったが、『この世界』のキュアブラックとキュアホワイトも相当強い。二対一とはいえ、ふたりの完璧な連携プレーに押されながらも四人目のエクスは畏敬の念を抱いていた。それほどふたりの猛攻は凄まじく、反撃を与える隙も見せない。しかし、いつまでも押されるわけにもいくまいとエクスは日本の雄大な自然遺産、知床の地にて

「キュアエクス、トランスモード」

と、リミッター解除コードを唱えて全身を赤く発光、残像さえも見えない光速で移動。ふたりを包囲し、目で捉えられない速さで翻弄する。

「な・・・何コレ!？」

「疾<sup>は</sup>すぎる!」

即座に啞然となったブラックとホワイトに腰背部に装備したキュアダガーを次々に撃つ。右と左、上と下、縦と横、10分の1秒ごとの間隔で光の刃が胸や背中、腕や足に刺さり、ブラックとホワイトは悲鳴をあげて蹂躪されていく。よく頑張ったと褒めてあげたいがここでとどめと行くかと、エクスはキュアサーベルを再び両手に掌握すると、一気に急迫しようと試みるが、

「!・・・っ」

突然ふたりを包んだ虹色のドーム状の膜に、叩き込んだ双剣は瞬時に弾かれる。何が起こったのかは聞かなくても分かる。シャイニールミナスが絶対防御のバリアを張り、ふたりを守ったのだ。叩き込んだ衝撃が自身に跳ね返り、思わず身体が宙に浮いたエクスだがすぐに地上に降り、再度トランスモードを発動させようとするも、

「そうは・・・させるかああっ!!」

勘に鋭いブラックが右腕の拳に最大限の力を収束、一気に地上へ解放する。

知床の地が大きく震動し、周囲の木々から鳥が一斉に飛び散った。さすがに足場が波打てばトランスモードで接近して攻撃を仕掛けるのは難しい。不覚にもよろけたエクスにホワイトが素早く双剣を持つ両手を強く握り締めると、

「やあああああつっ!!」

一瞬で視界が180度回り、エクスは背中から撃墜した。すぐに転がって距離を取り、立ち上がるもやはりダメージは小さくなく、思わず肩で息を繰り返した。

力のブラック。

技のホワイト。

絶対防御のルミナス。

彼女たちだけでも十分どころか最高の良材に当たると確信する。

さきほど時間の無駄と言ったのは訂正しよう。

エクスは背中中の激痛をもろに感じながらも心の中で鼓舞していた。

連携なら、キュアブルームとキュアイーグレットも負けていなかった。突然知床など見知らぬ地に足を踏み入れたとしても慌てずに心と息をぴったり合わせ、精霊の力を発揮した連打でセラフを追い詰めていく。

「プリキュア!セラフイムブレイカー!」

光を収束した強力な回し蹴りで応戦するもふたりのバリアに跳ね返され、自分の攻撃に自らが受け、うめき声をあげる。

強い。正直悔っていたかもしれない。

自分たちの世界ではふたりは一応『世界破壊派』に選別されている。しかし、世界破壊の推進を行っている邪悪なる太陽と邪悪なる花が戦闘力としてはあまりにも劣るため、戦いを交えたことはなかったがおそらくふたりもそう強くないと判断に至っていた。そして違う世界であるうと、ふたりの強さは変わらないだろうと。

ところが、実際のブルームとイーグレットは相当強く、見事に長

けたコンビネーションで彼女の愚かな判断と自信を粉々に粉碎する。精霊の力を収束した拳と蹴りを正面からまともに受け、河原にあった3メートルほどの大岩に一瞬で亀裂が広がるほどの威力で叩き込まれた。

~~~~~

ブラックとホワイト、ブルームとイーグレットの完璧な連携に十二分に渡り合えるものがあるといったら、キュアピーチたち四人のチームワークの他にあるまいのではないだろうか。チームワークならプリキュア5、キュアブロッサムたちの四人も負けてはいないが、四人は彼女たち以上に心と息を合わせ、言葉を交わさなくても事前に打ち合わせしていたのではないかと疑惑が生じるくらい、華麗に独自の連携プレーを披露する。おそらくダンスレッスンを受けていた時の経験が活かされてるのだろう。世界遺産に指定されているモアイ像で有名なイースター島に突然空間が変わったというのに、実に綺麗で思わず魅入られそうな動きで五人目のエクスとセラフ相手に善戦している。

それだけでも十分にふたりを驚かせたが、何よりも驚いたのはキュアパッションだった。つい先ほどオートマトンに腹部を撃たれたにも関わらず、次々に繰り出される打撃は凄まじく、少しも緩まない。効いてないのかと疑念を抱いたエクスだが、すぐに彼女の額が若干汗ばみ、表情もわずかに歪んでいるのに気づいた。

まさか、ずっと耐えているのか。耐えながらも必死で力を出しているのか。

だとしたら・・・なんて健気なことか。

死に至らない弾丸ものを使用したとはいえ、痛みは相当のものなはずなのに。

「ねえ・・・あんたたちがあの機械マシンを仕向けたの？」

ふと、ピーチが低く冷静な声で尋ねた。こめかみに青筋がうつすら浮かんでいる。

あ、これは相当怒っている。セラフが気づいた次の瞬間、エクス

も同じくらい低い声で返答した。

「ああ・・・そうだ」

「!・・・そう。なら・・・」

途端に衝撃がふたりの身体に炸裂した。

「う・・・!」

「ぐううつ・・・!」

思わず吐き気を感じるほどの激しい苦痛にうめく。ふと見ると、ピーチが眉間に青筋を立て、見る者を一瞬で震えあがらせる眼力でエクスとセラフを睨み据えていた。あまりにものその怒りが決して小さくないことに恐れを感じて肌が反応して鳥肌が立つ。

「・・・ふざけないで!今日はせっかくみんなでひさしぶりに集まった大切な日だったんだよ!それを突然壊して・・・おまけにパッションを怪我させて・・・許さない・・・絶対に許さないんだからあつつ!!」

その叫び、相当の怒りを込めている。誰よりも人の幸せを願い、喜ぶ彼女だからこそ幸せを突如無残にされた怒りは誰よりも激しいのだ。それは彼女とともに時間を過ごしてきたパッションだけでなくキュアベリーとキュアパインにもその『想い』は伝染しており、それと同時に彼女の怒りに自身を傷つけられた分まで含まれている点にパッションはほんの少し嬉しく感じた。

「・・・・・・」

本当に、自分よりも人を思いやる優しい少女なのだな。だから強く、凛々しい。

そういうところは自分たちの世界で暮らす『桃園ラブ』とも共通している。あと、双方とも『東せつな』が大好きなところも。

一撃で怯ませるとんでもない怪物に、エクスは両肩の関節をポキポキ鳴らすと双剣を再び構える。セラフもセラフィムセイバーを召喚したて臨戦態勢を取って待機した。ふたりの強い闘気に、ピーチはすぐに凜とした面構えを見せて仲間と走り出す。

~~~~~

双剣を交差したまま、最初のエクスはおもいつき振り下ろした。『？』に斬り結んだ斬撃がメロディとリズムを思いつき吹き飛ばし、壁に叩きつける。

弱い・・・弱すぎる。プリキュアとして新参者とはいえ、あまりの弱さにエクスは失望した。

どのプリキュアたちも強さに長け、期待が大きくなったゆえに彼女たちの脆弱にこちらが苛立ちを覚える。なんだ、本当にそんなものかおまえたちの力は。その程度で世界を守れると思っているのか。自分たちはまだ戦いの経験も浅い新参者だと甘えているのだとしたら、それこそふざけるな。『経験が浅い』だの『新参者』などの言い訳で伝説の戦士がそう容易に務まるものか。これ以上、私を失望させるくらいなら・・・もうプリキュアなんてやめろ。いや、このまま私が断ち切ってやる！

「プリキュア！エクスサーベル・ハリケーンスラッシュー！」

双剣に力を収束し、瞬間に最大限の斬撃を撃つ。土埃が舞い、斬撃が瞬速の疾<sup>は</sup>やさでまだ身体を起こせないでいるメロディとリズムに浴びせられた。

金切り声に近い、空間を引き裂く絶叫が闘技場に轟いて膨大な量の砂煙が発生する。ビート、ミューズ、ハミィ、セラフが即座に注視する中、エクスは無表情のまま静かにキュアサーベルを両肩に戻そうとした。

「・・・ん？」

が、すぐに気づいて双剣を戻そうとした手を止める。次第に晴れていく砂煙。メロディとリズムが全身が傷つきながらもゆっくりと起き上がっていた。互いにしっかりと手を繋ぎ、凜とした表情で相手を睨んで膝をかくくさせながらもゆっくり、ゆっくりと立ち上がる。

まさか、耐えたのかと、エクスは瞬時に目を見張る。

「リズム・・・大丈夫？」

「平気よ、メロディ」



「リズム・・・私、今はとりあえず負けたくない。負けちゃいけないって思うの。だって、いきなり幸せだった時間を壊された挙句にこんな所に連れてこられて訳も分からずに戦わされるんだもん。要するに、私が言いたいのはね・・・」

「大丈夫。伝わっているよ、メロディの気持ち・・・」

リズムは繋いでいる手に力を込めた。

「私も同じ気持ちだもん。あの人は強いけど・・・私たちはふたりで『最強』ってことを見せてあげよう！」

「だね！リズムならそう言ってくれると思うってた！」

メロディも繋ぎ合う手に力を集約した。

ひとつになる、心と心。力の源である『ハーモニーパワー』がふたりの中で上昇し、それは淡い光となつて彼女たちを纏う。その光は徐々に強くなり、闘気をも増す。

その凄まじさをエクスも瞬時に感じ取る。キュアサーベルを両手にすぐに構え直し、奥義を発動した。

最後の一撃に賭けるか・・・いいだろう、本気には本気で相手になろう。同時にこれで見極めさせてもらう。あなたたちが世界を守るプリキュアとして相応しいか否かを。

「プリキュア！エクスサーベル・ハリケーンスラッシュー！」

「はああああああああああああっつつつつ！！！」

一瞬のうちに急迫して最大斬撃を飛ばしたのと手を繋いだふたりの突撃が激突したのがほぼ同時だった。爆発と噴煙、衝撃波が闘技場を広がっていく。再びビート、ミューズ、セラフが戦いの行方を凝視した。やがて消えゆく煙。徐々にシルエットが明らかになる。そして誰の視界が完全に明らかになった瞬間、三人の目が大きく見開いた。

立っていたのはメロディとリズムだった。至る所に傷を負い、呼吸を繰り返しているが凜とした表情は少しも崩れていない。そしてふたりの足元に両手に双剣を握り締めたまま両膝を着いているエク

スの姿があつた。

「エクス・・・」

思わず呆然とし、彼女の名を呼んだセラフにも逆転の余地は残されていなかった。

「プリキュア！シャイニングサークル！」

隙を突いてミューズがキュアモジューレの笛を吹いてセラフの周囲に四人の分身を生み、足場に五芒星に似たサークルを一瞬で描いて彼女の動きを封じた。

「うつ・・・！」

「ビートソニック！」

身体を拘束されたセラフにビートがラブギターロッドを鳴らして光の音符の矢を次々に浴びせる。

彼女が悲鳴をあげた時点で15分が経過し、『ポードブル・リング』が生み出した各空間は瞬時に消えて、全員をもとの丘に戻した。

「さ、いい加減に教えて。あなたたちは誰なの？」

「どうして私たちを攻撃してきたの？」

変身を解き、本来の姿に戻ったふたりの少女は同じく変身を解いた23人のプリキュアたちを代表して響と奏に迫られる。当然だろう。せつかくの大切な時間を壊され、何の説明もなしに無理やり戦わされたのだ。それ相応の理由が知らなければ納得できるはずもない。返答次第ではただで済むわけにはいかないとほぼ全員が高ぶる感情を抑えた表情で見据えている。

ふたりの少女はそれぞれ天上刹那、天宮唯と名乗ると、静かに腰を降ろし、頭を深く下げて跪いた。突然の行為に誰もが「えっ？」と表情をすると、まず刹那が口を開いた。

「これまでの数々の非礼、深くお詫びします」

「でも、どうしてもあなたたちの力量を知りたかったの。許して」

「え・・・えっ？力量？どういうこと？なんでそんなことを？」

響が混乱すると、次の刹那の言葉に全員驚愕する。  
「私たちは『ある者』を追って『この世界』に来た。その『ある者』は存在だけで世界を滅ぼす力を持つ……そいつを倒すためにも、どうか力を貸してほしい」

#### 次回予告

戦いを終え、協力を要請してきた天上刹那と天宮唯ふたりの話を聞き、少女たちは驚愕する

次回『世界の存命』

事態を聞いた末に少女たちが出した結論は……

天上人（後編）（後書き）

どうも自分はいついつい長く書きちゃうクセがあるみたいです。

## 世界の存命

「『この世界』に来た・・・？もしかしてふたりはナッツたちと同じ別の世界から来たナッツ？」

親友のココと同様にパラレルワールドに存在するパルミエ王国にて国王を務めているナッツが刹那の意味深な台詞に気づいて尋ねると、刹那と唯は首を小さく縦に振った。

「ええ、そう。私たちはその『ある者』が『この世界』に舞い降りたと聞いて、自分たちの世界から来訪した。『ある者』は存在するだけで世界を滅ぼす力を持ち、それに何者かが近づこうとしている。もしその者が邪な考えで『ある者』を利用しようと企んでいたら、最悪、全ての世界がわずか数日で滅亡の危機になりかねない」

「だから、そいつらよりも早く、私たちが『ある者』を仕留めなければならぬ。でも『ある者』が住処とする世界は私たちにとっても未知の領域・・・さすがに手こずるかもしれない」

「未知の領域・・・ムプ？」

「一体そこはどういう世界フプ？」

ムーブとフープの声に唯はしばし無言の後で返す。

「・・・『永遠の楽園』。神話や伝説上に登場したり、何万年も前に絶滅した動物たちが幸せに暮らせるようにするために『ある者』が異次元空間に作り上げた楽園よ！」<sup>エデン</sup>

「な・・・何やてえっ!？」

タルトが驚いた声をあげる。

「調べたところだとその世界で暮らす動物たちはみな自然の理<sup>しうり</sup>のまま生き、不自由を感じることなく暮らしているようなのだ。その数、軽く億を超えるそうだが、ただど自然のまま生きているとなると、当然私たちのような外敵には激しく敵意を剥き出して、動物の本能のまま襲ってくる可能性が十分高いと思う。私たちもある程度戦士としてどのような敵に対しても戦えるよう訓練を受けているけれ

ど、今回ばかりはさすがに厳しいと思う。野生の本能に忠実に生きるヤツほど厄介なものはないからね。自然なままの環境で暮らすということとは、みな『生きる』ということに必死になっているから・

「・・・それで？協力って、その存在だけで世界を滅ぼす力を持つヤツを倒しに私たちも一緒にそんなアブナイ場所へ来てほしいということ？そのために私たちをテストしたワケ？」

「・・・ああ。そうだ」

なぎさが刺すような目線を送っているのに気づき、刹那は慎重に顔色を窺った末に返事を返す。

「あ、そう。だったら、私の返事は分かるよね？答えは『嫌<sup>イヤ</sup>』よ！」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

予想していたのか、彼女の返事を聞いても刹那は無愛想な表情を少しも変えなかった。

「当然でしょ？だって私たちは前から楽しみにしていた今日という日をいきなり邪魔されて訳も分からないまま無理やり戦わされたんだよ。テストするにしてももう少しやり方ってものがあるじゃない？！しかも頼んでないのにテストさせたうえに協力してくれ？人を馬鹿にするのもいい加減にしてよね！！」

「なぎさ、気持ちはよく分かるけれど、少し冷静に・・・」

「ほのかは黙ってて！今、私すっごく怒ってるんだから！つぼみの言葉を借りるならまさに『菓子袋の袋とじがビリッビリに破れた』ってやつよ！」

「・・・・・・・・・・・・・？」「」「」

全員の目が点になる。なぎさに指名されたつぼみも「は？はい・・・？」と両目を二度三度瞬きした。すぐに呆れた表情でほのかの声がかかる。

「なぎさ・・・それを言うなら『堪忍袋の緒が切れた』でしょ？凄く言い間違えてるよ」

「へ・・・？」

「勉強苦手なくせに無理して言おうとするから、恥をかくんだメポ。せつかく決めようとしていたのに台無しメポ」

「う、うるさーいっ！そんなことはどうだっていいのよ！とにかく私が言いたいのは調子に乗るなってことよ！！」

顔が火に焼けながらもなぎさがメップルに一喝して刹那を指差さすと、

「そうだよ！なぎささんの言うとおりだよ！」

と、ラブも賛同する。

「あなたたちの言いたいことは分かったけど、たとえ私たちを試すにしても別のやり方があったはずだよ！なのにみんなの幸せを壊す真似なんかして・・・そのうえで人を傷つけといて力を貸してと言われても私たちがオツケーなんて言うと思ってたの！？ふざけるのもいい加減にしてよ！さっきも言ったけどあなたたちがやったこと、私、絶対に許さないんだからっ！！」

未だ収まりきっていない怒りの呪詛を吐き捨てる。ゆりも二本指でくいつと軽く掛け直しながらメガネの奥から思わず震えてしまいそうな冷たい瞳を向ける。

「そうね・・・あなたたちがどういう考えに至ったかは知らないけれど、結果として愚かな選択を選んだのに変わりないわ。さっきえりかにも言ったけれど、あなたたちは人の幸福を突然壊す行為を選ぶことに少しも胸が痛まないのかしら？もしそうだとしたら、そんな薄情な人に協力する義理なんかないわね」

「（ゆりさん・・・なんでここで私の名前を引き出すんですか？）」  
もう取り戻せない幸福の時間を奪われたのに怒りが鎮まらず、次々に激しく非難を浴びせる。唯は複雑さを隠せない面持で隣にいる刹那をちらと一瞥したが、刹那は全く表情を変えぬまま、かといつていつまでも無言でいるわけにもいかず、彼女は最終兵器を繰り出した。

「そこに雨牙真夜がいる、と聞いても？」

「「「「「！！？」」「」「」」

突然の名前に響たち四人以外の全員の表情が一瞬にして変わる。

「ど・・どうして真夜さんがそこで出てくるんですか？」

ようやくつぼみが絞り出すように言うと、刹那は続ける。

「あなたたちにオートマトンを仕向ける少し前にニューヨークにいる仲間から連絡があつてね、そこでキュアセイバー・・・雨牙真夜が標的によつて『永遠の楽園』に連れて行かれたのを知った。彼女は私たちが追つていた『ある者』に一番に接触した末に敗北したよ  
うね」

「そんな・・っ!？」

つぼみをはじめ、ほぼ全員が愕然となる。雨牙真夜をよく知らない響たちにはいまいちピンと伝わらなかったようだが、全員の表情と空気の変化を読み、すぐに事態は只事ではないのを悟つたようだ。やはり、切り札は最後まで取っておくものだな。刹那はプリキュアたちの心にうまく揺さぶりをかけたことに心中で薄く笑む。つい先ほどの水澤睦月からの連絡で雨牙真夜に起きた事態を聞いた刹那はその時点でこれは使えろと確信した。標的の毒牙にかかり、異次元空間に連れて行かれたという雨牙真夜にとっては不運な出来事だったが自分には非常に幸運で有力な情報であり、怒りが鎮静しないプリキュアたちへの武器としては非常に効果がある。一応、睦月からさらわれたのは光としての『雨牙真夜』で、影としての『雨牙真夜』は同じ自分を救い出すために睦月とともに異次元に渡つたのも聞いているが、今のこの流れを一転させるには余計な情報はまだ入れないほうが賢明というものだ。事実、さっきまで目が血走っていたり、冷ややかに非難していたなぎさ、ラブ、ゆりも異国に暮らす友の事態を聞いた途端に怒りが薄まり、混乱と躊躇が入り混じる狼狽さが窺える。

いいぞ、流れが変わった。これで一気に畳み掛ける。

「あなたたちの大切な時間を奪つた点に関してはさっきも言ったように心から深く詫びる。でも、仲間の危機を知ってあなたたちはほ  
うっておける？」



「……………」

「それに、あなたたちも伝説の戦士と呼ばれしプリキュアなのでしよう？行くのが嫌かどうかは別にして、『ある者』は数々の修羅場を乗り越えてきた私たちさえも手こずるかもしれないくらい危険な存在……。それがもし、よからぬ者の手に渡ってあなたたちの世界も破滅に導こうとしたら？たった数日で全ての世界が消えてしまいかもしれない……。それほど危機はすぐ目の前に迫っているかもしれないのにプリキュアとして黙ってられる？二度と全員で至福のひと時を楽しめなくなるのを耐えていける？」

「それは……。だけど……………」

言っていることは確かに正論だがどうにも腑に落ちない気もするも、なぎさは反論の言葉が出てこず、口を噤む。他の全員も同様の反応をしていた。刹那は一人ずつ表情を見通すと、

「……。とはいえ、いきなりで困惑しっぱなしの中で今すぐ結論を下せとは私も言えない。此度の非は私にあるのは事実だし、確かに『永遠の楽園』が危険な世界でもあるのだから無理にとは言わないだから……。明日まで待つ。今日一日よく考えて、一緒に行ってもいいと思う人だけはまたこの丘に来てほしい。来る来ないはあなたたちの判断に任せる……………」

と、最後に伝えた。

## 次回予告

短い猶予の中で葛藤し続けるプリキュアたち

幾多の記憶を思い返し、彼女たちは決意を固める

次回『使命と決断』

全ては、守るために……。それが彼女たちの運命<sup>さだめ</sup>

## 世界の存命（後書き）

次回は若干なぎほの、咲舞、ラブせつ、ひびかななど百合要素が見え隠れするかもしれません。

## 使命と決断

雪城邸。

ほのかの部屋の前の縁側でふたりは複雑な面持で腰を降ろしていた。

「なぎさ、まだ迷っているの？」

「当たり前でしょ！だって、あいつらとてもじゃないけど許せないんだもん。せつかくみんな楽しみにしていた大切な日だったのさ、私たちを無理やりテストさせたうえに協力してくれだなんて虫が良すぎるよ。ほのかだってそう思うでしょ？」

「・・・そうね。なぎさのいうことはよく分かる。でも・・・」

「分かっている。真夜さんのことだね・・・」

なぎさは空を見上げてため息を吐くと、頭をメチャクチャに掻き乱した。

「ああゝっ、もう！あいつらと組みたくないし、かといって真夜さんをほうっておくわけにもいかないし、一体どうすればいいのよおッ！？」

「だったらなぎさ、正直な自分のほうを選んでみたら？」

なぎさの叫びを聞いたほのかが隣から声をかける。

「正直な自分？」

「そう、正直な自分・・・なぎさは覚えてる？私たちがプリキュアになってからまだまもない頃、初めて喧嘩した時のこと」

「あつ・・・」

『あなたなんかプリキュアっていうだけで友達でもなんでもないんだから！！』

ふいに蘇る記憶。

ほのかのお節介になぎさはつい苛立って、ひどい暴言を吐いてしまった。その一言が一気にふたりの引き離し、互いに距離を置いてしまう。このまま自分たちはどうなってしまうのかと不安が募り、

プリキュアとして駆け出したばかりのふたりにとってはまさに最悪の出来事であった。

しかし、なぎさが文字に表現した自分の素直な気持ちをほのかに知ったことで互いに『想い』を確かめ合ったふたりは初めて名字でなく『なぎさ』『ほのか』と呼び合うようになって仲が急速に深まり、本当の友達になったのである。あの出来事は嫌な記憶でもあるが、でもあれがあったからこそふたりはパートナーとして強い絆を築き上げることもできた。

「あの時は本当にごめん。あんなひどいこと言って・・・」  
記憶を掘り起こし、深く謝罪するなぎさ。

「いいのよ。あれのおかげで私はなぎさの気持ちを知ることができたんだから。なぎさの正直な気持ちがかつたんだから、私たちは親友になれたんだと思う。だから聞くよ、なぎさ。なぎさはどうしたいの？あの人たちと組むかどうかは置いて、真夜さんがピンチだと聞いて助けに行きたくない？」

「それは・・・」

なぎさはしばらく考え込んでから言った。

「助けに行きたいよ。真夜さんは大切な友達なんだもん・・・」

「それじゃ、決まりね。一緒に真夜さんを助けに行こう」

「ほのか・・・」

ほのかは膝の上に置いてあるなぎさの手にそっと触れる。

「私も行くから。なぎさの気持ちも私が背負ってあげるから。ふたりだけでも十分心強いでしょ？」

「ほのかぁ・・・っ」

つい目頭が熱くなる。このまま泣いてしまってもいいかもとなぎさは思ったが。

ぽん！

ふたりのポケットが煙を発し、メップルとミップルがそれぞれのパートナーの膝に乗る。

「やーい、なぎさ。もしかして泣いてるメポ？」

「な、泣いてなんかないわよっ!」

「ほのか、ふたりだけじゃないミポ。ミップルとメップルも忘れちゃ嫌ミポ」

「うん、そうだったね」

「メップルとミップルだけじゃないですよ」

声が聞こえ、その方角に目を飛ばす。腕にポルンとルルンを抱いたひかりが立っていた。

「ひかり!」

「ひかりさん!」

「ひどいですよ、なぎささんもほのかさんも。私も真夜さんを助きたい気持ちは同じです。私だって役に立ちたいんです。私も一緒に行かせてください!」

「ポルンも行くポポ。お留守番なんて嫌ポポ」

「ポルンが行くなら、ルルンも行くルル」

ひかりは強い意志が宿った瞳を、ポルンとルルンは屈託のない笑顔に向けた。

「みんな・・・!」

全員の顔を見て、また目頭が熱くなる。けれどなぎさは右手で拭くと、「よし!」と立ち上がり、十分に入った気合を見せる。

「こうなったら、もうとことんやってやろうじゃん!」

~~~~~

海原市夕風町。大空の樹。

さやさやと風に吹かれ、瑞々しく緑葉を煌かせる大樹の根元に咲く舞は見上げながら腰を降ろす。

「やっぱり、ここはいつ来ても気持ちいいなあ・・・」

「本当ね。私たちがどんな気持ちでいても大空の樹はいつだって優しく迎えてくれる・・・」

「・・・ねえ、舞。舞は覚えている? 私たちは初めて会った時のこと」

「ええ!」

幼少の頃、ふたりは精霊の光に導かれ、大空の樹の前で初めて出会った。

そして数年が経過し、再び大樹の前で出会ったふたりはプリキュアとなり、親友になった。

辛いことや悲しいこともあったが、それらを全てひっくるめて大切な思い出となって心の奥にしまっている。

「舞・私ね、舞とまたここで会えてよかったと本当に思っている。舞と会って、一緒に過ごしてきた時間は今も私にとって大切な宝物だよ。今までだけじゃなく、これから未来も私は舞と一緒にいたい！」

「私もよ、咲。この町に引っ越してきたばかりの私に初めてできた友達があなたで本当に嬉しい。私も咲とこれからもずっといたい！だから……」

「……うん！」

ふたりは素直な『想い』を交わし、ぎゅっと互いの手を強く握り締め、決意を固める。

「なぎささんたちがあの人たちを嫌う気持ちも分かるけれど、私たちはやっぱりこの世界を、未来を見捨てることはできない。その存在だけで世界を破壊するヤツがどんなヤツかは知らないけれど、もし本当にいるならほうっておけないよ」

「真夜さんを助けるためにも、ね」

「うん」

「ほんと、咲はいつも馬鹿正直で困るラピ」

ポケットからパートナーのフラッピがひょっこり顔を出す。チョッピも舞のポケットから顔を見せた。ムープとフープもふたりに近づく。

「ちょっとフラッピ、馬鹿正直で困るってどーゆーことよ？」

「なんでも直結で考えて行動したりして、今までにも痛い目に遭ったのを忘れたラピ？」

「あのねえ……」

「でも、そこが咲のいいところラピ」

「え・・・？」

「相手を思いやって、そのために行動を起こす・・・欠点でもあるけど咲らしいところラピ。どうせダメと言っても行くラピ。しょーがないからフラッピも行くラピ」

「フラッピ・・・」

「舞、チョッピも力になるチョピ。一緒に行くチョピ」

「ムープも手伝うムプ！」

「フープもフプ！」

妖精たち全員の声に自然とふたりの表情が笑顔になる。ふたりは笑いながら顔を見合わせると、

「「みんな・・・ありがとう！！」」

と、頭を下げた。

「それじゃあ、今から準備しましょう。私、一旦家に戻ってくるから少し待ってて」

「あ、舞」

丘を下ろうと走り出した舞の背中を咲が制止した。

「咲？」

舞が振り向くと、咲は指で頬を掻き、照れくさそうにはにかみながらこう言った。

「もし真夜さんじゃなく舞だったら、私、迷わずにすぐ行くよ。舞は私の中で一番だからね！」

「咲・・・ありがとう」

舞は一瞬親友の言葉に驚いたが、すぐに頬が紅潮しながらも嬉しそうに微笑んだ。

~~~~~

ナッツハウス。

プリキュア5のメンバーは全員二階でテーブルを挟みながらソファや椅子に座りながらも無言で頂垂れていたり、紅茶を口に運んでいたりしていた。ちなみに現時点ではくるみはミルクの姿に戻り、ココとナッツ、シロップは逆に青年、少年の姿に変身している。

「私・・・っ！」

ふいにのぞみが立ち上がり、全員が注目する。

「私・・・やっぱり真夜さんを助けに行きたい。真夜さんは友達なんだもん。離れていても心が繋がっていればきつとまた会える・・・でも、もし真夜さんが消えてしまったら、もう会えない。そんなのは嫌だよ・・・っ」

のぞみの脳裏に蘇るのは、仲間たちと亀裂が生じた最悪の記憶。

全員が苦心して完成させた作品をのぞみが台無しにしてしまったことから始まり、自身の反省すらせずに他人のせいにするのぞみに憤りを感じる者、庇護する者と別れた仲間たちは互いに責め合い、離れ離れになってしまふ。さらに最悪なことにそこを闇の者に突け込まれて絶望に囚われてしまった。しかし、やっぱりみんなといったという、のぞみの最後まであきらめない強い気持ち仲間たちの心を救い、絶望を跳ね除けた。この事件がまだ固まっていなかった仲間たちの絆をより固め、強いチームワークを発揮するに至ったが、それでも苦い過去だ。もう二度と大切な仲間と離れ離れになることはないようにしたいと思っているし、それは異国の地で暮らす真夜に対しても同じだ。心が繋がっている大切な人ともう会えなくなる事態は避けたい。

その想いも含め、のぞみはみんなに伝えた。のぞみが言った後も全員無言でいたが、

「・・・ま、のぞみなら、きつとそう言うと思ってた」

やがてりんが立ち上がり、のぞみの肩に手を置く。

「正直あの人たちと一緒に嫌だけどさ、世界が危ないうえに真夜さんも捕まっていると聞いちゃ、黙ってるわけにもいかないじゃん、プリキュアとしても友達としても」

「りんちゃん・・・」

「私も行きます。少し怖いですけど、世界を滅亡から守るためです。一緒に行かせてください！」

「ううら・・・」



うららに続いて、こまち、かれん、ミルク、ココ、ナッツ、シロップもすました笑みを浮かべて立ち上がる。

「そうよね。りんさんとうららさんの言うとおり、私たちはプリキュア・・・」

「世界が滅びるかもしれないのに、その人たちと行くのが嫌だなんて言っている場合じゃないわね」

「ミルクたちの故郷、パルミエ王国を守るためにもここは行くしかないミル！」

「そうだな。せっかく復興したんだ。あのふたりのプリキュアが言っていた『ある者』が何者は知らないが、また滅ぼされるわけにはいかない」

「確かに。それに『永遠の楽園』という場所が絶滅したものや伝説上の動物たちの暮らす所なら、俺が培ってきた知識が役立つかもしれない」

「ま、いざとなったら俺が巨鳥に変身してココとナッツを安全な場所に避難させるからよ、おまえたちは気にせず真夜を探してこい」

それぞれの言葉を聞き、のぞみは笑顔が満開になる。「うんうん」

「と二度三度嬉しそうにうなずいた彼女は片手を挙げておなじみの台詞を決めた。

「よし、みんなで『永遠の楽園』に行って真夜さんを助けるぞ、  
けってーいっ！」

~~~~~

桃園家。

「大丈夫？せつな」

「大丈夫よ。傷はもう塞がったわ」

シャワーを浴びて浴室から出てきたせつなの腹部にそっと触れ、ラブが心配そうに尋ねると、せつなは彼女を安心させようと優しく微笑んだ。

「ひどいよね。同じ“せつな”なのにさ、あいつ最低だよ」

「ラブ・・・」

天上刹那を相当嫌ったらしく、ラブが彼女を『あいつ』と呼んだことにせつなは複雑ゆえに表情に少し翳<sup>かげ</sup>りが見えた。少し躊躇った後、せつなはラブに質問する。

「ねえ、ラブ。あの人たちと行かないの？『永遠の楽園』という所に」

「当ったり前だよ。いきなりみんなの幸せを壊し、せつなを傷つけた人になんて私が協力しなくちゃならないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ほぼ即答で戻ってきた返事にせつなは再び間を置いた後、静かに口を開く。

「ラブ、あなたの気持ちは分かるし、嬉しいとも思うわ。でも・・・それはきつと間違っている」

「せつな・・・？」

突然の親友の言葉にラブは不思議そうな表情をすると、せつなはラブの手を取り・・・自身の胸に触れさせた。

「！・・・せつな？」

「ラブ、私が一度イースとして死んだ時のことを覚えている？」

その名前に、ラブは思わず息を呑む。

イース。

ラブがプリキュアとして戦っていた敵組織・ラビリンスの幹部だった時の東せつなの名前。直接キュアピーチと拳を交えた経験もある彼女だったが、遂に寿命を迎えて死に至るも奇跡が起こり、プリキュア・キュアパッションに転生した。

「私がイースだった時、幸せとか笑顔なんて大嫌いだった。そして、そんなくだらしないものを守るために戦うキュアピーチ・・・ラブのことを心から侮蔑していたわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でも東せつなとしての姿でラブと何回も接触しているうちにあなたへの想いがだんだん変わってきて・・・プリキュアになったとはいえ、敵だった私を温かく迎えてくれたことに自分も少しずつ幸せ

を感じるようになったし、心から笑えるようになったの。私がここまで変わったのはラブのおかげよ、本当に感謝している。・・・でもラブ、自分より人の幸せを願うあなたがそんな気持ちで『行かない』という選択をするのはラブらしくないと思うの。あなたも聞いたでしょ？その『ある者』は存在だけで世界を数日で滅ぼす力を持つって。もし世界が滅びたら、幸せを求めて頑張っているみんなが明日という希望を迎えられなくなるのよ。それで本当にいいの？これはプリキュアとか関係なく、『桃園ラブ』として意見や気持ちを聞きたいの。答えて」

「せつな・・・私だって分からないんだよ。私はみんなの幸せや笑顔を守りたい。だけど、やっぱりせつなを傷つけたあの人たちを許すなんて・・・とても・・・」

「・・・ラブ、私を『理由』にしないで！」  
「！・・・せつな」

突如厳しい口調に変わったせつなにラブは思わず身体が硬直する。  
「これが美希だったら張り手をしたと思うし、ブッキーも強く言うと思うわ。ラブ、あなたの気持ちは半分嬉しいわ。でも、あなたがプリキュアとして戦うのを決めたのは一体何のため？本当にみんなの幸せや笑顔を守るためなら、私は嫌でも行くべきだと思う。私のために世界を見捨てるというのなら、それは間違いなく誰もが不幸になるわ。もちろん、私も」

「せつな・・・」

「もちろん、強制はしないわ。選ぶのはラブの自由よ。でも、私は明日あの人たちと行くわ」

「！・・・」

「全ては、世界を不幸にしないためよ」

「・・・」

ラブは頂垂れ、しばし黙していたが、やがて顔を上げた。きりりと強く引き締まった面構えになっていた。

「せつな、私決めた。行くよ」

「ラブ・・・！」

「せつなの言うとおり、私、あなたを『理由』にした。危うくプリキュアとして・・・ううん、『桃園ラブ』としても大切なことを見失うところだったよ。本当にありがとう、せつな」

ラブはせつなの首の後ろに手を回し、優しく抱き締める。突然の行為に少々驚くもすぐに微笑み、せつなも彼女を抱き締めた。

「いいのよ、ラブ。あなたは私の過ちから救ってくれたから・・・その恩返しよ。美希とブッキーにも伝えましょう。ふたりともきつと手を貸してくれるはずよ」

「そうだね。でも、もう少し・・・」

「もしかしてあんさんら、わいらのこと忘れてんとちゃいます？」

突然の声にふたりはすぐ反応する。ベッドの上に手でシフォンの両目を隠したタルトがジト目でふたりを見つめていた。即座に「ギクツ！」となり、身体が離れるふたり。

「うわあっ！？タ、タルト！いつからそこに？」

「最初からや。てか、ピーチはんがわいらを入れたやんけ。イチヤイチヤするんは勝手やけどシフォンにはこれ以上は教育上あかんさかい、いい加減止めたんや。見てるこつちが恥ずかしゅうなつたで」「あははは・・・ごめんごめん」

誤魔化すように笑いながら謝るも、ちょっと残念に思っていたラブだった。

~~~~~

希望ヶ花市。植物園。

つばみ、えりか、いつき、ゆりは木製のテーブルを挟んで議論を繰り返していた。もちろん、議題は『永遠の楽園』に行くか行かないかである。現時点では専ら反対派のえりかと賛成派のいつきが激しく口論している。

「どー考えてもおかしいっしょ？なんで私たちがあいつらに協力しなきゃなんないワケ？最初から素直にお願いしますって言や、私たちも行ってもいいと思ったのにさ」

「でもえりか、真夜さんがそこにいるんだよ。危険な場所なら、なおさら助けに行かないと・・・」

「そりゃ助けに行きたいよ、私だって。だけど、こんな横暴が許せるの？別の世界のプリキュアだかなんだかは知らないけどさ！」

「えりかは・・・嫌いなんですか？真夜さんのことが」

ふと、つばみが口を挟んだ。えりかは彼女に顔を向けた。

「つばみ、何言ってるの？今はそういうことを言ってるじゃ・・・」

「質問に答えてください、えりか」

詰問に近い口調にえりかはまだ途中だった言葉を切り、次の言葉を慎重に選んで口に出す。

「嫌いなわけではないじゃん。友達なんだから」

「私もです。えりか、いつき、ゆりさんは覚えてますか？ハピネスランドでの戦いでヤマタノオロチを倒すための武器を探しに空の神殿を訪ねた時のことを」

ふと、全員がプリズムフラワーを巡る戦いが起こる少し前のもうひとつの戦いの記憶を思い返す。

幸せの国・ハピネスランドの危機から世界の破滅を防ぐために彼女たちは魔王・ヤマタノオロチを倒すという伝説の武器を手に入れるために空の神殿を訪問、そこを守る守護者から条件として試練に打ち勝つことを聞き入れ、過去に世界を守ったというプリキュアの英霊と拳を交えたのだ。

「あの試練の場で私はキュアエルスというプリキュアに出会い、気づかされたんです。世界を守るのはプリキュアの使命ですが、私たちはただ単に世界を守っているわけではありません。その世界にある大切なものを失いたくないために守るんです。大切なものがあるから、私たちは強くなれるし、変わることもできたんです。はっきりと言います。私は真夜さんが好きです。だから真夜さんのことどうしても助けたいんです！真夜さんだけじゃありません。私はこの世界にある全てが大好きなんです！だから、絶対に失いたくなんかりません。たとえどんな危険が待っているようにとも、私は行きたいで

す！」

つぼみは言いたいこと全てを訴えると、思わず下を向いた。つい生意気なことを言ってしまった、反対派に嫌われたのではないかと思った。怖くて顔を上げられない。だけど……。

「……つづぼみ！」

えりかがぼん、と彼女の頭に手を置いた。「えっ？」と反応してつぼみが頭を上げると、にひひくと歯を見せて笑っているえりか、同様に優しく笑みを見せているいつきが視界に映った。

「分かったよ。つぼみがそこまで言うんならしゃーない。私も一緒に行きますか」

「えりか……」

「ボクは最初からそのつもりさ。一緒に真夜さんを助けて、ついでに世界を守ろう」

「いつき……」

ふたりだけでなく、シプレ、コフレ、ポプリの妖精たちも気合が入った表情で次々に言った。

「つぼみ、シプレたちも一緒ですう！」

「こうなったら、みんなで助けにいくですう！」

「合点でしゅ！」

「シプレ……あなたたちまで……」

「よし、それじゃあ残るは……あとひとり」

えりかをはじめ、全員の視線が一斉に同方向に集まる。視線の先にはずつと沈黙を守っていたゆりが座っていた。ゆりは全員が次々に賛成する中、眉ひとつも動かさずにいたが、やがて、ふう、と吐息をした。

「本当、あなたたちってお節介すぎるわね……」

静かに口から出た低い声に思わず空気が張り詰める。

「でも……一緒に行く人が嫌いっていうだけの幼稚な理由で断るわけにもいかないし、何よりあなたたちだけじゃとても心配だからやむをえないわね。急いで明日の準備をするわ」

「え？それって・・・一緒に行ってくれるってことですか？ゆりさん」

「当たり前でしょ。私だって守りたいものがまだあるんだから・・・」

「ゆりさん・・・っ！ありがとうございます！！」

緊張していた空気が壊れ、つぼみはつい感激のあまり、ゆりの身体に抱きついた。すぐに我に返って「すみません！」と離れたが、最初は驚いたものの、ゆりはすぐに微笑んで彼女の頭を優しく撫でた。

調べの館。

まだ未完成のパイプオルガンを前にして、響と奏が近くの段差に腰掛ける。ふたり以外は誰もいない。

「響、明日どうする？行く？」

「ん・・・まだ分かんない。私たちはその真夜さんのこと知らないから」

「・・・そうだよ。私たちは会ったことないからいまいちピンと来ないのよね。なぎささんやのぞみさんたちは明日行くかしら？」

「さあ？でも一緒に二回も世界を守った仲間だからね。やっぱり大切な友達だから、行くんじゃないかな？」

「友達・・・かあ。ねえ、響」

「ん？」

ふと、奏が呼んで振り向くと、彼女はすました笑みを浮かべたま意味深に呟いた。

「私たちも、色々あったよね」

「奏？」

「私たち最初は集合する場所を間違えたせいで喧嘩ばかりしてて一年もすれ違っちゃったじゃない？いつも今日も言い過ぎちゃった、どうしてこうなっちゃうんだろって悩んでた」

「ああ・・・そういえば」

入学式の日。

ちよつとしたすれ違いが一年もふたりの距離を離れさせてしまった。

「だけどハミイに会って、プリキュアになって・・・それでお互い誤解していたことが分かって・・・それからエレンやアコちゃん仲間になって・・・ピンチになったこともあったけれど、みんなの力で乗り越えてきたんだよね。それって、凄くない？少し前まで普通の中学生だった私たちが今や世界を守るプリキュアだなんて。それが幼い頃から仲良しだった私と響が選ばれたってことも」

「うん・・・そうだよ。よく考えたら私も未だに信じられない気分だよ。世界を守る柄なんてもんじゃないのに・・・でもさ、奏」「なあに？響」

「普通の中学生だった私がプリキュアとして今まで戦ってこれたのもいつも奏がそばにいてくれたからだと思うんだ。私があきらめそうになっても奏がそばで励ましてくれたから、私も頑張れた。今なら自信を持って言えるよ。奏が私のパートナーで本当によかったって」

「響・・・」

奏は響の手を取ると、彼女と目を合わせた。響も奏から視線を逸らさないまま、やがて笑みを浮かべる。

「奏、私決めたよ」

「ん？」

「私、行く。奏と一緒に守ってきたこの世界を簡単に壊されたらなんか口惜しいもん。奏は？」

「響ならきつとそう言うと思ってた」

「じゃあ、奏も？」

「うん・・・ふたりなら、きっと乗り越えられるよ、どんなことでも」「四人よ。正確には四人と一匹かしら？」

背後からの声にふたりはすぐ振り返る。館の入口の前に立つエレンとアコ、それからハミイの姿が見えた。



「エレン！アコ！」

「ハミイ！」

「水臭いじゃないの、ふたりとも。私たち仲間じゃない」

「ふたりどころか四人もいれば怖くもなんともないでしょ？」

「ハミイだって、お供するニヤ！」

得意満面の笑みを見せるふたり（と一匹）に響と奏は感激を覚え、瞳が思わず潤う。

そして目頭に涙が溜まりながらも声を揃え、最高の笑顔で伝えた。

「「ありがとう！！！」」

### 次回予告

それぞれの決意を胸にし、再び集まるプリキュアたち

彼女たちの想いを確認した刹那と唯は・・・

次回『旅立ち』

必ず帰ってくることを誓い、彼女たちの新しい冒険が始まる

## 使命と決断（後書き）

また長くなっちゃったなあ・・・。

## 旅立ち

正直に言えば、自分たちだってこんな奇襲を仕掛けるようなこと、やりたくなかった。彼女たちの強さを試すにしてももう少し別のやり方があったのではとも思う。

しかし、彼女たちには時間がなかった。今回の標的は存在だけで世界を滅ぼす力を持つかなりの強敵。しかもその存在に接触を図ろうとする者がおり、すでに『永遠の楽園』に向かっている。それぞれ離れた場所で暮らしている各チームをいちいち訪ね、模擬戦を申し込むなど回りくどい方法などやってられなかった。だから一同が一斉に再会する日を絶好の機会と捉え、選んだのである。

奇襲を選んだのはこれが『この世界』のプリキュアたちの強さを奥底まで確認するのに最良と判断したからである。確かに卑劣なやり方だったのは否めないが、いくら何度も世界を守ったとデータに書かれていても実際にその実力をこの目で確かめなければ決めきれない。それにこれから向かうのはふたりさえも足を踏み入れたことのない未知の領域『永遠の楽園』。そこで暮らす生命たちは動物の本能のままに襲いかかってくるだろう。敵は待つてはくれない。いつ、どこから襲ってくるかも分からない状況の中では並大抵の精神では乗り越えられない。その点に関しては自分たちの世界のプリキュアたちはほとんどがダメであろう。一部は見所あるも自分たち以外のプリキュアに失望してきたからこそ、こんな乱暴な手を使っても確かめなかったのだ。何度も世界を守ってきた経歴の持ち主のくせにこの程度でうろたえてパニックになり、実力を発揮できないようでは足手纏いにもなりかねん、と。

結果、彼女たちの実力はデータに書かれていた以上だった。刹那はんの少しだがその強さに感慨を覚えた。パワーだけでなく、息の合った抜群のコンビネーションとチームワーク。想像以上のガッツも見せ、おまけにタフだ。少々感情に流される点もあるが、その

感情。『想い』を力に変えて駆使している。その点是新参者のスイートプリキュアでさえも成長が窺えた。事実、相手は大多数のうえに殺さない程度に手加減したとはいえ、天上人として圧倒的スペックを持つ自分たちを惜敗させたのだから、なるほど、自分たちの世界を強大な闇から排除してきただけのことはある。彼女たちなら、樂園<sup>エデン</sup>という名の牢獄でも十分に生きていけるかもしれない。どんな危機的状況の中でも仲間を信じ、最後まで希望を捨てないのだから。とはいえ、確信できたのはいいが、これで彼女たちに協力を申し込んだところではいそうですかと簡単に了承してくれるはずがないのは百も承知だった。せつかくの大切な時間をこちらの勝手な都合で破壊してしまったことには刹那と唯だつて胸が痛んだし、彼女たちの怒りも当然と分かつていた。誰がどう見たって自分たちが『悪』だろう。

「しかし、それでも『プリキュア』だ」

刹那は声に出して呟いた。

たとえ得心がいかない、不条理だと思っけていても彼女たちはプリキュアとして選ばれ、自分たちの世界を守る力を授かったのだ。実際に彼女たちは自分たちの世界を侵略から守るためにいつも精一杯に戦い、勝利した。それは伝説の戦士としての使命でもあり、彼女たちにとっての大切なものを失いたくない理由があつたから。たとえ絶望しか見えない状況になつたとしても、彼女たちはあきらめずに奇跡を何度でも起こした。だから、自分たちの世界から大切なものを守るためなら、きつと来るはずだ。しかもその大切なもののひとつが危険な所にさらされているとあつては黙つてもいられないだろう。

「でも・・・確かにひどいことをした」

いくら世界を守るためとはいえ、本来彼女たちには関係ないこと。勝手に巻き込んでしまったことには深く反省しなければならぬ。嫌われても仕方ないし、それとは関係なしに本当に心からお詫びを申し上げるつもりだ。

予約していたホテルの部屋の窓から夜景を眺めていた刹那だったが、隣のベッドで唯が寝息を立てているのに気づくと、小さく笑みを浮かべ、自分も眠りに入った。

翌日を迎えた。

刹那と唯は予約していたホテルを出、昨日の丘に登った。

「・・・答えは決まったみたいね」

ふたりの前には、23人の少女たちと17匹の妖精たちがいた。全員が一瞬の躊躇も見えない決意を目に宿していた。

「最初に言っておくけど！」

彼女たちを代表してなぎさが前に出る。

「私たちはまだ納得できてないんだからね。あくまで真夜さんを助けるために行くんだから。ただそれだけってことは覚えといてよ！」

これは握手はできないようだと思わず苦笑しそうになるのを必死で堪え、刹那は丁寧に会釈した。

「それでいい。協力を感謝する」

そして懷からミラクルライトを取り出し、スイッチに触れようと  
する。

「覚悟はいい？」

「今さら？」

最後に聞いたが、不敵に返す彼女たちに刹那は唯と視線を合わせ  
てうなずくと、スイッチをONにした。

まぶしく、けれど温かくて優しい光が少女たちを一気に覆い尽く  
す。

少女たちだけでなく、光は丘全体に広がり始めた。

あまりのまぶしさに、全員が目を瞑った。

そして壮大な閃光が丘全体を包み込んだ瞬間・・・少女たちの姿  
はもう、どこにもなかった。

## 次回予告

目的地に向かう途中、自分たちの世界を語る刹那と唯  
その中でプリキュアたちはふたりの世界の実態に驚愕する

次回『最悪な世界』

別世界とはいえ、本当に同じ顔と名前を持つ自分たち・・・なのか

## 旅立ち（後書き）

次回は刹那氏の世界のプリキュアたちの実態を彼女たちが知ってしまします。

## 最悪な世界

ニューヨークからミラクルライトで次元を飛んだ真夜とロモモだが、その途中で彼女たちは睦月が別の世界から来たプリキュアであること、本来は西暦2312年から来訪した未来人でもあること、自らの贖罪のために現れたが現在では未来のために戦っていることなどを聞いた。それだけでも驚くべき話だったが、何よりも驚いたのは睦月のいる世界の現状だった。

「プリキュアが人々の敵にされ、仲間同士で本気で殺し合う世界？ しかも世界破壊派にキュアブロッサムたちの四人が属している？・・・マジなのそれ？」

「そんなの信じられないロモ！ブロッサムとマリンは真夜ちゃんを友達と言ってくれたし、絶望の闇から助けてくれたんだロモ！そんなふたりが世界を破壊しようなんて・・・っ！？」

「それは『この世界』でのふたりでしょ？でも私がいた世界では彼女たちは完全にプリキュアとしての使命や心を捨てて、世界の破壊に躍起になっている。特にキュアブロッサムとキュアサンシャインのふたりは卑劣な手でキュアドリームを倒そうとしたり、キュアピーチたちの変身アイテムを盗んで壊そうとしたり、拳句には関係ない人を躊躇うことなく戦禍に巻き込もうとした。私としてはキュアブロッサムたちに追い詰められたところを一度でも助けたのを本気で後悔しているぐらいよ」

思い出して怒りが込み上げてきたのか、睦月の額にうつすら青筋が立つ。それを見て真夜は、ふうん、と声を出すも彼女の話は真実なんだなと理解できた。と、同時に妙に複雑な気持ちになる。

ロモモの言うとおり、深い絶望に瀕していた雨牙真夜を闇から救い出してくれたのは『この世界』のプリキュアたちだった。特にその第一人者が『この世界』のキュアブロッサムとキュアマリンで、自分と純粹に友達になりたいという想いを真剣にぶつけてきてくれ



たからこそ、雨牙真夜は闇の中から光を見出し、希望を手に再びキュアセイバーに変身できたのだ。そのことに関しては雨牙真夜は現在も彼女たちに感謝している。なのに、その彼女たちが別の世界での存在とはいえ、世界を破壊しようとしているとは……同様に世界を二度も破壊しようとした自分としてはやはりどうにもやるせない気持ちにならざるをえない真夜だった。

「ちなみに、あなたの世界にも私はいるの？」

「さあ？」

即答で戻ってきた睦月の回答に思わず言葉を呑み込むも、これ以上は無駄かと悟り、口を噤むのを選択する。

なお、質問の答えはイエスで、睦月のいる世界にも『雨牙真夜』は存在していてキュアリベリオンに変身し、卑劣な手で弱らせたキュアドリームに勝利したキュアサンシャインを直後に完膚なきまでに叩きのめした経歴を持ち、その際近くではキュアブロッサムと戦っていた睦月もいたのだが、いち早くドリームを助けるしか頭になかった彼女はリベリオンと顔を合わせることなく、すぐにその場を去ったのだ。

「……ところで、ここはどこなの？まさかここがあなたの言っていた『永遠の楽園』？」

話を変えたつもりではなかったが、周囲を見渡して真夜は聞いた。ふたりは現在、川の畔に来ていた。川の水は泥のように黒く、触るとぬめぬめつとしていてとても泳ぎたくない。おまけに深そうだ。存在自体が強大な闇を象徴する真夜も思わず顔をしかめた。

「まさか。ここは入口よ。楽園はこの先にあるわ」

睦月が奥を指差す。川の奥も光が一筋も射し込んでおらず、洞窟のように暗黒の空洞が長く続いている。本当にこの奥に楽園など存在しているのだろうか。

まさか本当に泳いでいくんじゃないだろうかと思っていた矢先、暗黒の中から何かがゆらつと音もなく静かに現れ、ふたりは目を見張った。やがて四、五人ほど乗れそうな力ヌーをイメージさせる長

い木製の舟が一隻、視界に映り、誰も乗船していないのに舟がひとりでに畔へと近づく。

「どうやら歓迎のようね。ここはありがたく乗せてもらおうか。・・・ところで」

じゃら、と睦月は黒い手錠で繋がれている片腕を彼女に見せる。

「約束は守ったでしょ？ いい加減、コレ外してくれない？」

しかし、真夜は邪悪な微笑を浮かべてさりと返す。  
リベリオン

「悪いけど、外した途端にズドンとされちゃ敵わないからね。しばらく私とあなたは一心同体よ、嫌でもね」  
ちっ。

分かつてはいたが、予想通りの返答にやはり舌打ちせずにいられない睦月だった。

同じ頃、プリキュアたちも別の畔に来ていた。

まだ舟が来るまで余裕はある。それまで少し休むかと思い、刹那と唯は近くの岩場に腰掛けようとすると、

「ねえ、ところで聞いてもいい？ あなたたちの世界のこと」

突然、響がふたりに尋ねた。ふたりとも彼女に顔を上げた。

「私たちの世界？」

「そう！だって、ふたりは別の世界のプリキュアなんでしょ？ふたりが暮らす世界がどんな所か興味あるじゃん。ここで待ってるのもなんか退屈だしさ、聞かせてよ」

弾んだ声で言う響だったが、俯いた唯の次の言葉にすぐに言葉を失った。

「私たちの世界は・・・一言で言えば“最悪”な世界よ」

「えっ・・・？」

響だけでなく、全員がふたりを凝視した。ここは唯に話してもらうとすると考え、刹那は彼女に一任するのを決めて黙秘する。唯は視線を下に向けたまま、ぼつりぼつりと話し出す。自分たちの世

界ではかつて多くの強敵を退け、英雄として讃えられていたプリキュアたちが突如一転して人々から世界の敵として憎まれるようになったこと。プリキュアたちに絶望がひしひしと襲う中、意見の食い違いというちょっとしたことから『世界破壊派』と『世界守護派』の二組が彼女たちから生まれ、互いに憎み合い、遂に本気で殺し合うようになったこと。それは現在も続いており、いつ終わるのかも分からない絶望的な状況であること。・・・想像するも悲惨な現状に全員啞然とするしかなかった。

「・・・うつわあ、そりやなんてゆーか、大変だねえ」  
カチン。

悪気はなかっただろうが、他人事のように述べたえりかの感想に唯の逆鱗に触れたらしい。瞬時に額に血管が浮かび上がり、両目を血走らせ、仁王立ちした彼女の怒号が炸裂した。

「気安くそんなこと言わないで！あなたたちだって他人事と言えたものじゃないかもしれないのよ！！」

「…………えっ…………!?…………」  
「ど…………どうということなの？それ」

全員が反応し、奏が急いで聞くと、唯は語り始めた。『その世界に存在する自分たちのことを。』

『花咲つばみ』と『明堂院いつき』のふたりを中心にハートキャッチプリキュアの四人が破壊派に属し、自分たちの考えを否定する者、破壊活動の協力を拒む者の存在を卑怯な手を使い、人権の尊重を無視してでも徹底的に倒そうとしていること。プリキュア5のひとりでもある『秋元こまち』も破壊派に属し、プリキュアに覚醒する前の天宮唯を躊躇すらせずに危うく死へと追いやったこと。『桃園ラブ』を守るために『東せつな』がイースに再び変貌を遂げたこと。そして、あまりにも長く続く悲惨な現状に『夢原のぞみ』の精神がいつ崩壊してもおかしくない状態に追い詰められていること。

「……………………………………………………」  
「……………………………………………………」

別の世界とはいえ、そこで暮らす自分たちの状況に全員何も喋れず、しばらく沈黙が支配した。

「い・い・いい加減なこと言わないでよっ!!」

支配に耐え切れず、ようやくなぎさが沈黙を破り、唯に食ってかかる。

「つばみといつきが私やほのかと戦ってる？こまちがあんたを殺そうとした？のぞみの精神が壊れかけてる？なにふざけたこと言ってるのよ！？私たちの大切な時間を壊したり、変な所に連れてきていきなり攻撃したり、私たちに恨みでもあんのかあんたらは!？」

「信じられないだろうが全て本当だ。そもそも唯は聞かれたから答えたまで。あなたたちがまた怒ると分かっているのに嘘を吐いて何のメリットが私たちにある？」

ここで口を挟んだ刹那のもつともな意見になぎさは声が詰まる。

一気に花が萎えたように表情が色を失い、視線を下に向ける。全員も同様の表情をしていた。つばみは到底信じられないと思いながらも大きな瞳が潤い、思わず顔を両手で覆う。隣でえりかが彼女の背中を擦る一方でいつきはどこかやるせない顔で唇を噛んでいた。親友の背中を擦りながらふいにえりかが「ねえ、あんた」と刹那に声をかける。

「あんたじゃなくて名前と呼んでほしいね」

「せつなさんと同じ発音だからややこしいよ」  
バッション

「・・・じゃあ、エクスでいい。それで、何？」

「エクスの世界の私やゆりさんも結構ひどいことしてんの？」

「いや・・・」

刹那は首を左右に振った。

「私たちの世界の『来海えりか』と『月影ゆり』は破壊派に属しているけど、『えりか』は『つばみ』や『いつき』と違い、せいぜい『日向咲』と『美翔舞』を破壊派に勧誘した程度で現時点においてはそれほどの活動記録を見せてはいないわ。まあ本当は活動したくないのかもね」

「えっ・・・どういうこと？それ」

「・・・重度の頭痛に悩まされているのよ、私たちの世界の『えりか』は。『つぼみ』と『いつき』のおかげでね」

「はあっ！？」

「『馬鹿は風邪引かない』という言葉がぴったりなくらいいつも元気づけるえりかがですかあっ！？」

「ちよつとコフレ、それどーゆー意味よ！？と、とにかくそれマジなの！？」

「ええ」

刹那のあつさりとした返答に耐え切れなくなっただけらしい。顔を両手で覆っていたつぼみが大声で泣き出した。

「うああああああああっ！別の世界の私がそんなひどいことしているなんてっ！しかもえりかをそこまで苦しめているなんて・・・なんて最低な・・・っ・・・私・・・私・・・ッ！！」

「つぼみ・・・ちよつとあんた！」

キツと、えりかが唯を睨む。

「つぼみ泣いちゃったじゃん！他人事のように言っただけは謝るけど、別世界の私たちのことまで責任取れないよ！それなのに私たちをひどく責めてどーしろって言うわけ！？」

「そうですねっ！つぼみたちに謝るですうっ！！」

シプレもえりかの言い分に賛同する。

「べつに。ただ言われずにいられなかつただけよ。まあ確かに私も悪かったし、謝るけれど・・・」

えりかはよしよしと泣き続けるつぼみの背中を優しく擦り続けた。

一方でこまちは別の世界の自分が躊躇いもせず人を殺そうとした衝撃に表情に翳りが見え隠れしながら視線を膝の上に向け、そこに置いた両手をぎゅっと握り締めた。かれんが心配そうな面持で親友を見やる。せつなは大好きな人を守るためとはいえ別の世界の自分が過去の自分に<sup>スイッチ・オーバー</sup>変身した事実<sup>スイッチ・オーバー</sup>に衝撃にどう受け止めたらいいのかわからず、つい身体がよろけてしまった。「せつな！」とラブが身

体を抱え、我に返った彼女は「ありがとう、ラブ」と礼を述べ、すぐに体勢をもとに戻す。だが一番衝撃を受けていたのはのぞみだった。プリキュア同士が憎み合い、殺し合う真実。その状況の中でもうひとりの自分が絶望に吞まれようとしている。今まで強大な絶望と対峙してきても負けなかった自分を知っているのぞみは別の世界とはいえ同じ顔と名前を持つもうひとりの自分が精神が壊れかけてしまいそうなほど悲惨な状態に追い詰められていると聞いて、衝撃に戸惑いつつも一体自分はどうしたらいいのかと思考が頭の中でぐるぐる巡回続けていた。

「言っておくけど、助けに行きたいと言っても断る」

だが、その巡回を刹那が冷たく制止した。全員、彼女に注目する。「唯は他人事と言えたものではないかもしれないと言ったが、これは私たちの世界の問題。もうひとりの自分たちに関しても、これは自分で気づいて乗り越えなきゃ意味がない。たとえあなたたちが私たちの世界に来たとしても余計混乱を招く恐れもあるし、別世界とはいえ自分と同じ顔と名前を持つ人間に言われる筋合いはないと逆上させてしまうかもしれない。いずれにしろ、この件に関してはあなたたちは蚊帳の外にいてもらう」

「待つラピ！つまりそれって、咲たちは邪魔ってことラピ？」

「自分で話しといて、それはいくらなんでもひどいロプ！」

「楽園だかなんだか知らんけど、今はそっちに行ったほうがええんとちゃいまっか！？」

刹那の勝手な言い分に妖精たちも我慢できなくなったらしく、次々に言うが、彼女は首を横に振った。

「確かにそうかもしれない。しかし、それでもこっちを優先する。何回も言うが相手は存在だけで世界を滅ぼす力を持つ強敵だ。今なら私たちの世界もまだやり直すことができるかもしれないが、滅びてしまったら・・・もうやり直しすらできないでしょ？」

「それって、助けて・・・くれるの？別の世界の私たちを」

刹那の意味深な言葉にえりかが聞くと、刹那は不敵に微笑んで返

した。

「さあ？ただ、犯した罪は自分自身が償わなければ意味がない。それにまあ、私たちだって戦争とはいえ『人を殺す』のは好きじゃないからね。それは『彼女』も同じはず」

「『彼女』？あんたたちが言ってた他の仲間のこと？」

「ええ。まあそれは後で話すとして、今はたとえ納得できなくても理解して私たちに任せてくれる？私たちの世界のことを。必ずこの戦いはそう遠くないうちに終わらせる、少なくとも悲劇で終わらすことのないよう、全力を尽くすだけは誓うから」

「……………」

彼女の言い分に必ずも得心が完全にいったプリキュアたちではなかったが、確かに別世界の事情だし、そこまで言うのであればここは引き下がろうと結論に至り、複雑が混じり合いながらも全員うなずいた。

「礼を言う。……それと、東せつなキュアパッション」

突然名前を呼ばれ、せつなは弾かれたように彼女に視線を向ける。

「……何？」

口に幾分かの警戒と緊張を含み、せつなが聞くと、刹那は

「励ますつもりじゃないけど……」

と前置きして、少し肩を竦めた。

「私たちの世界の『桃園ラブ』は『東せつな』にこう言った。『イスがいなければパッションもいなかった』『イスだろうがパッションだろうが同じ“東せつな”に変わらない』とね。『東せつな』はイスに変身したけどそれはあくまで大切な人を守る力がほしいと願ったためで、以前のように人々を不幸にするためじゃなかったの。ショックかもしれないけど、少なくともイスになった『東せつな』は心まで悪魔に売ってはいない。そのところは安心していいと思う」

「そ……そう。ありがとう」

心までイースになったのではないと聞き、せつなは安堵の微笑を見せた。彼女が少しだけ元気を取り戻したことラブ、美希、祈里の三人も心の中で安堵したが、やはり衝撃を隠せず、どうにも複雑な気分で黙視していた。刹那は字は違えど同じ名を持つ彼女から目を離すと、次の少女に声をかけた。

「それから・・・夢原キュアドリームのぞみ」

「エクス・・・さん？」

混乱が頭の中で続いていたのぞみだが、刹那に声をかけられ、彼女と目が合う。刹那は少し息を吐いた。

「私たちの世界の『夢原のぞみ』だけど・・・まあそう心配しなくてもいいと思う。『美墨なぎさ』が一生懸命支えになってくれてるし、何よりあの娘こも一緒だから・・・」

「・・・あの娘こ？」

のぞみが聞くと、刹那は悪戯っぽく微笑し、そつと耳に伝えた。

「あなたも友達になった、もうひとりの『夢原のぞみ』・・・と言えば分かるでしょ？」

「！！？」

途端にのぞみの全神経が高まり、ぞわぞわと鳥肌が一齐に立つ。

まさか・・・！

脳裏に浮かび上がる、ひとりの少女。友達になったのに、もう会うことはできないと悲しみに暮れた。

その彼女が、別の世界で、『夢原のぞみ』と、一緒に、いる。

「それって、もしかして・・・っ！」

「時間だ」

黒い川の方こうから、五人乗りの木製の舟が五隻、静かに波を立てながら畔に近づく。全員は急いで乗り込んだ。乗船しようとしながら、のぞみは刹那が教えてくれた『彼女』に絶対の確信を持つ。と同時に『彼女』と再会を果たした『夢原のぞみ』に少しでも羨望を抱く。

なんだか、ずるいな。私はどんなに願っても、まだ会えずにいる



のに……。

やがて舟はひとりでに動き出した。

未知の領域へ刻一刻と近づく中、先頭の座席に座っていた刹那は全員に振り返り、口を開く。

「そろそろ私たちが狩りの標的とするもの……『ある者』<sup>ターゲット</sup>について話をしよう」

#### 次回予告

遂に刹那と唯の口から語られる強敵の実体

なぜ『彼女』は存在だけで世界を滅ぼす力を持つのか

次回『マルガ』

その純粋な魂は、強すぎたために災いを招く

## 最悪な世界（後書き）

今回の話に関しては色々苦悩もしました。

## マルガ

「私たちが追う『ある者』……それは『幸福』と呼ばれている」

「『幸福』って、あの『幸福』ですか？」

薄暗い闇を進む中、ようやく泣き止んだつばみが聞くと、刹那も唯もつなずいた。

「そう。でも、ただ『幸福』って呼ぶのもどうも具合が悪いから・  
・そうね、マルガと名をつけることにしようか。由来は災いと呪いを招くという神の名からよ。マルガは私たちが何度も言っている通り、この世に存在しているだけで世界をわずか数日で滅ぼしてしまう恐ろしい力を持つ。私たちはそのマルガに接近する者の存在を知り、現時点でマルガが住処としている『永遠の樂園』がある次元が一番近い『この世界』に来了。彼らよりも早くマルガを討伐するために」

「どうして世界を滅ぼす力を持つのにそいつ、『幸福』って呼ばれるのよ？」

アコのもつともな疑問に刹那と唯はしばし間を置いた。それは意味深な間だったが、やがて刹那が再び口を開いた。

「みんな、考えてごらん。もし、全世界のみながみな、幸福になったら、どうする？」

「………」

全員、顔を見合わせた。

「みんな幸福になったら……いいんじゃないかな？」

「そうだよ。みんな、幸せになりたいと心から思っているはずだよ」

「私たちは今、十分幸せだよな？舞」

「ええ、そうね」

祈里、ラブ、咲、舞の順で答えていく。そして素直に思う。自分たちは今、幸せだと。

自分も家族も健康で、友達と仲良しで、毎日笑って楽しく暮らしていける。伝説の戦士プリキュアに選ばれ、激しい戦いに身を投じることにもなったが、それを嫌とは思ってもいないし、プリキュアになったおかげで友達との絆をより深めることもできた。感謝もしている。

だが、話はそう単純なものではない。彼女たちの返事を目を閉じて二度三度うなずいた後で刹那が話を続けた。

「心も身体も全てが満たされ、世界は薔薇色に見えるようになる。怒り、悲しみ、憎しみ、苦しみといったマイナス面もまるで最初からなかったかのように消え失せ、醜い争いも激しい貧困もなくなる。当然差別もなくなり、人はみんな互いを親愛し合い、人にも世界にも幸福が満ちていく……。そこには欲望など少しもない。いつまでも笑顔でいられる永遠の幸福感だけが存在するの」

なぎさ、咲、のぞみ、ラブ、えりか、響をはじめとする大多数がぼかんとしていた。誰がどう聞いてもとてもいい話のように見えた。今も長く問題になっている戦争・紛争、貧困……。それが一気になくなってしまうえばみな喜ぶのではないだろうか。それこそが全ての人間が願う理想の世界であり、そんな世界を望まない人など一人もないのではないだろうか。現在でも人と人がくだらない理由で長く争い、激しい貧困による飢餓と病で毎日多くの子供たちが死んでいくと聞く。欲望が環境を破壊し、少しずつかもしれないが地球を確実に滅亡へと向かわせている。そこに、今を生きる人の利害などが絡んでいるとしても、本当はみな、永遠の調和と平和を願い、望んでいるのではないだろうか。

「みんながみんな、幸せになれたら……。もう最高じゃないのニヤ？」

「キュアキュア」

「ポプリもそう思うでしゅ」

妖精たちの言い分にプリキュアたちも大多数が同意見だった。  
「いいえ」

しかし、彼女たちの意見を否定する者がいた。ゆりだ。

「ゆりさん？」

響をはじめ、全員がゆりに注目する。

「もしみんなが幸せになったら・・・人は『進化』することができなくなるわ。全てが満たされたら、人は働かなくなる。そうになると世界はどうなってしまうか分かるわよね？」

「！・・・そうか！」

エレンがゆりの意を汲み取り、話を継いだ。

「もしそんなことになったら、都市機能は止まり、経済は破綻してしまうわ。それどころかそれが困ったとか、なんとかしないとかも考えられなくなってしまったら・・・文明は停止してしまい、それこそ最悪な事態を招く！」

「そしてああしたい、こうしたいという欲望までもがみんなからなくなってしまうたら・・・人々はもう死ぬしかない。世界は本当にわずか数日で滅びる・・・！」

最後のほのかの台詞に、全員表情が蒼白になった。そんなことは考えたこともなかった。確かに人は食べたり飲んだりしなければ生きられない。しかし、そんなことも身体が求めなくなるほどの幸福に満たされたら、人は幸せな気持ちのまま何かをすることなく死んでしまうのか。

「マルガはそれを可能とするのよ」

刹那に代わり、今度は唯が話した。

「考えてもみて。目の前で滅びの現象が起こっているにも気づかずに絶望するどころか最後まで幸せな気持ちのまま死んでいく・・・抗う気持ちも起きることなく、みんな何もできずに幸せなまま世界と一緒に滅びていくのよ。『恐ろしい』以外の表現がある？」

確かに、と全員思わず唾を飲んだ。『幸福』『マルガがとんでもない化け物のように思えてきた。』

「い・・・一体、マルガの目的は何なの？」

ようやく響が声を振り絞って疑問を投げる。ところが刹那はあっ

さりと即答した。

「ない」

「は？」

「ないんだ、目的なんて。マルガは純粹にみんなを幸せにしたいと考えて行動しているにすぎない。いわば『使命』と考えているの。マルガに邪心なんてものは少しもない。存在だけで世界を滅ぼす力の持ち主だけど、『彼女』自体はおそらく世界を滅ぼそうなんて気持ちもないと思う。ある意味、今まで世界を滅ぼそうとしてきた闇の連中よりも厄介な存在だ」

「『彼女』？マルガは女性なの？」

美希が質問した。

「私の仲間が雨牙真夜と対決した際にマルガの姿を見ているわ。かわいい少女の姿をしていたそうよ。もちろん、仮の姿なんだろうけど」

「一体、マルガって何なの？」

のぞみの問いにまたしばらく間が続く。刹那はしばらく黙考した末、口を開いた。

「マルガは……私たちプリキュアと同じ、強大な光の力が生み出したエネルギー生命体だ！」

「……光の力！」「……」

全員びっくりした。

「じゃ、じゃあ何？私たちと同じ力を持つヤツが世界を滅ぼすというワケ？」

すぐになぎさが急き込んで聞く。刹那と唯はうなずき、今度は唯が語り始めた。

「そう。マルガは私たちと同じ光の力を持ち、何の邪念もなく純粹な気持ちで人々を幸せにしようと活動している。でも、あまりにもその力が強すぎて全てを滅ぼしてしまうというのに気づいてないのよ。人々を幸せにしようとして、結局は不幸にしているという皮肉な結果にね」

「でも、悪いものではないんですよ？」

「「ひかり？」」

突然ひかりが尋ね、ポルンとルルンが彼女に振り向いた。唯は彼女を見つめ、うなずく。

「ええ。悪いものではないわ・・・むしろ『いいもの』なのよ」

「でしたら、なにも倒さなくてもいいのではないのでしょうか？説得とか他に方法が・・・」

「何て言うの？」

「えっ？」

「『あなたはむしろ世界を滅ぼす危険な存在です。消えてください』とでも？それってつまり、『あなたは世界に必要な』って存在そのものを否定することになるよね？」

「そ、それは・・・」

「それにマルガはそれを使命として、間違っていないと考えて行動しているのよ。それなのにそんなこと言ったら、マルガは生きる意味を失い、何をしでかすか分かったものじゃないわ。あなたたちプリキュアだって今の世界を守るのを間違っていないと考えているでしょ？それを誰かに『間違っている』『もうプリキュアなんて必要ない』と言われたら、自分が今までしてきたことは何だったんだろうつてショックを受けるでしょ？それと同じ。死ぬよりも辛いわよ」

「・・・でも、だからって倒すやり方なんて・・・てゆーか、そいつ本当に倒せるの？」

正論ゆえにひかりが口を噤んだため、代わりになぎさが聞いた。唯は自身の頭を指差した。

「マルガのデータは全部ここに隅々まで入っている。ヤツも生命体。仕留めるのは可能はずよ。もちろん、乱暴なやり方になるかもしれないけれど、少なくとも存在自体を否定されたうえで死ぬよりも何も知らずに殺されたほうが幸せじゃない？」

「幸せ？それ皮肉のつもりなの？」

「さあ？」

とぼけた様子で唯が返すと、「あのさぁ・・・」とりんが腕を組みながら声をかけた。

「どうもそのマルガつてのがいまいちピンと来ないんだけど、要するに私たちはそんなやつに対して、どうやって戦えばいいの？」

すると、刹那が一呼吸置いて返答した。

「マルガはあなたたちを幸せにしようと姿を現す。天使のようにかわいくて、美しい少女よ。花のように笑い、鈴の音を響かせる。邪悪な心など微塵もなく、ただただあなたたちを幸せにしたいと望んでいるだけよ」

再び大多数がぼかんとした。その、一体どこが悪いのか、少しも理解できない。

「マルガはあなたたちの望む幸せを与えてくれる・・・雨牙真夜はその毒牙にかかったのよ。でも、あなたたちは『彼女』の誘惑に負けないで、絶対に」

最後の『絶対』が強調され、全員一応はうなずいたものの、やっぱり雲を？むような話にほとんどがついていけずにいた。

自分の望む幸せとは一体何なのだろう？

そして、それを与えてくれるとは？

そんなことをマルガは本当に可能とするのだろうか？

少しずつ、少しずつと、プリキュアたちを乗せた舟は『彼女』が住处とする領域へ確かに近づいている。

## 次回予告

目的地に向かう途中、プリキュアたちは『ある世界』に到着するそこはこの世のものとは思えないほど美しい世界・・・だが

次回『何もない世界』

ただそれだけが存在しているだけで、あとは何もない



## マルガ（後書き）

共同となると、色々見解の違いが生じて本当に大変だよ・・。

## 何もない世界

「ポポ？」

「ポルン、どうしたルル？」

「あれは・・・何ポポ？」

前方に何かを発見したポルンの声に全員が反応し、すぐさま視界を移す。

「お・・・っ！」

思わず咲が身を乗り出した。

そこは海岸だった。プリキュアたちを乗せた舟は、そこから数メートル離れた蒼い海原に浮いていた。

「ひよっとして、ここ？『永遠の楽園』って？」

「いや、どうやらひとつ手前の世界に辿り着いたようね」

「ここは何の世界チョピ？」

舞のポケットの中から顔を出してチョップが刹那に尋ねたが、唯が答えた。

「『何もない世界』よ」

「・・・・何もない世界？」「・・・・」

全員が目を瞬きさせ、すぐに周囲を見回した。

どこか南国を印象づける美しく、奇麗な砂浜に美味しそうな果実が実った大樹。空はまもなく日没を示していて、水平線が橙色に輝き、入道雲もオレンジがかかっている。黒に染まるうとしている天空には無数の星が煌き、波は、ざざあ、と穏やかに砂浜に打ち寄せ、奏でる音がとても心地よく心と身体を癒す。ゴミ一つもなく、濁りすらない砂浜と海、瑞々しく咲いている花々に彼女たちはしばしその景色に魅入っていた。

「ここが『何もない世界』ってどういうことココ？」

ココが唯に聞いた。

「ここは、これだけしか存在しないの。今、あなたたちが見ている

この景色がこの世界の全て……ここ他には何もないの。美しく平和だけどその代わりにどこへもいけないし、時間すらない」

「時間も……ココ？」

「そう、ずっと夕暮れのまま……永遠に昼も夜も来ることはない」

「……」

プリキュアたちは啞然とした。今まで妖精たちの暮らす世界の他に『雲の園』や『時計の郷』、『鏡の世界』や『お菓子の国』、『おもちゃの国』といった色々な世界の存在も知ったが、まさかこんな世界が存在するとは思ひもなかった。呆然としながらも、彼女たちはしばしその美しい景色を再度眺め直す。

「時間がないんだったら、永遠に生きれるってことだね？」

「えりか……！」

ふと、えりかが思いついたように聞き、いつきが驚いた声を出したが、唯は静かにこう返した。

「永遠に生きたい？来海えりか」

「……いやあ、やっぱりダメっしょ。確かにいい世界だけどやっぱり自分の世界が一番！」

えりかの意見にみなうなずいた。

「そう。私たちはここでは生きられない。はたして、それは『幸福』なのか『不幸』なのか……」

「幸福……」

唯の言葉に奇妙な感慨を覚え、アコは思わず呟いた。

やがて蒼かった海原は再び黒く濁り、ぬめりのある川の水に戻り始めた。徐々に美しかった景色が遠くなる。視界から見えなくなるまで、全員眺め続けていた。

『桃源郷』という言葉が頭の中に思い浮かぶ。山奥などに忽然と現れる、美しい花の里。現実の世界から離れた、美しく平和で豊かな地上の楽園。それもただそれだけの世界なのだろうか。

人々が理想とする『永遠』が存在しているのに、人はそこで生き

ることができないという皮肉。それは『不幸』なのだろうか、それとも『幸福』なのだろうか。

『幸福』って何だろうな、とついつい考え込んでしまうプリキュアと妖精たちであった。

が、その考え込む時間は次の瞬間、全員の頭の中から消え失せた。  
「「「「「うつつわあああゝつつ！！！」「」「」」」」」  
なぎさ、咲、のぞみ、ラブ、つぼみ、響が大きく口を開く。

「「「「「すつつごおおゝいつつ！！！！」「」「」」」」」

ほのか、舞、かれん、こまち、美希、えりか、奏、エレンも思わず喚声をあげた。

「本当にこんな世界があるなんて・・・っ！」

「なんだかドキドキします！」

「まるでファンタジーそのものだわ！」

「・・・本当に違う世界なんだ」

祈里、うらら、くるみ、いつきが次々に声を出す中、ひかり、りん、せつな、ゆり、アコはあまりもの絶景に圧倒され、嘆息が思わず漏れた。妖精たちもほとんどが心がハイテンションになっていた。断崖絶壁の巨大な崖が視界の遙か彼方まで続き、ナイアガラをも超える何百本もの滝が並び、轟々と放水し続けている。飛沫が舞い上がり、水煙の中からは大きな虹が何千も折り重なっていた。空はどこまでも澄み切っていて青く、雲間から太陽の光が岩壁を照らし、より一層美しく輝かせている。滝の壁の対岸にはアマゾンのジャングルのような深い森が広がり、色とりどりに鮮やかに葉の色を煌かせている。まさに、凄い、の一言でしか言い表せない総天然色の大パノラマだった。

「もしかして、ここが！？」

興奮状態の響が振り返ると、刹那は首を縦に振った。

「そう、ここがマルガが作り、住処としている『永遠の楽園』。・・・

・目に痛い世界ね」

「キュアキュア！」

突然、シフォンが川を指差してはしゃいだように声を出した。すぐさまタルトがそばに寄る。

「なんやシフォン？川がどうしたんや？・・・って、どっわあ！？な、なんやこいつら？魚かいなあゝっ！？」

川はいつの間にか黒い濁水から太陽の光を反射して煌く天然水に変わり、その中を鱗が虹色に光る魚たちが舟と並んで泳いでいる。

しばらく虹の魚との追いかっこを楽しんでいたプリキュアと妖精たちだったが、やがて彼女たちを乗せた五隻の舟は見えてきた岸辺に到着した。

全員が降りると、また舟はひとりでに動き出し、徐々に見えなくなっていく。どうしたの？と奏が聞くと、役目を終えたからもとの場所に戻ったのよ、と唯は返答した。

「帰る時も迎えに来てくれるかな？」

「大丈夫！いざという時は私がなんとかするから！」

得意げに腕っ節を見せた響に奏は

「（嬉しいけどかえって心配増だよ、響）」

とジト目にならざるをえなかった。

未知の領域に足を着けたプリキュアと妖精たちは刹那と唯のあとについて、森の中を進む。森は全てが驚異に満ち、みな思わず何度も足を止めた。色鮮やかな葉と花もそうだが、漂う香りも素晴らしく、深呼吸すると、それだけで元気が出そうな気がするほどリラックスできた。点在する大きな湖の水面からも、マイナスイオンが発生しているのか、心身を癒すような匂いが立ち込めている。全てが生命力みなぎる世界だった。ここは『原始の森』なのだと理解できた。

ふと、咲が至る所に咲き誇る花々を眺めながら歩いているうちに何かに気づき、立ち止まって凝視した。途端に勢いよく飛び上がり、背後に立つ舞に急いで呼びかけた。

「ま、舞！これって・・・！」

「え・・・ええ。『妖精』だわ！」

それはフラッピやチョッピのようなプリキュアのパートナーあるいはサポートに回る別世界にて暮らす可愛い動物系の姿をした妖精たちではなく、体長1センチの小さな人の背中に明らかに昆虫のような羽が生えた一般的な『妖精』たちだった。花と花の間をひらひらと優雅に飛び交い、楽しそうに笑い合っている。幼い頃に読んだ童話そのままの光景に全員が思わず吐息を吐きそうになった。

「すごいでしゅ！ポプリとお友達になってくださいでしゅ〜！」

「あつ、ポプリ！」

興奮に耐え切れなくなったポプリが『妖精』たちに接近を図り、あわてていつきが止めようとしたが、遅かった。ポプリの登場に驚いた妖精たちはあつという間に散り散りになって逃げていく。まだ赤ん坊の年齢に至り、身体も小さいポプリだが、それでも『妖精』たちより一回り大きかった。彼女たちからは怪物に見えたのだろう。「待つてくださいでしゅ〜！」と嘆くも誰も耳を貸さなかった。すぐにシプレとコフレがポプリを叱る。

「ポプリ！怖がらせちゃダメですうっ！」

「そうですうっ！みんな楽しそうだったのにポプリのおかげで台無しですうっ！」

「だって、ポプリも一緒に遊びたかったんですうっ！」

「まあまあ、シプレとコフレもそのくらいで・・・」

「「いつきはポプリに甘すぎですうっ！」」

「シプレもコフレも騒がない騒がない」

「ポプリはまだ小さいんですから、仕方ないですよ。それよりも先に進みましょう」

と、えりかとつぼみの仲裁でようやくまた一同は歩き出したものの、行く先々で透明な蝶々や三葉虫の群れ、カラフルな色をした鳥たちに何度も目を奪われて立ち止まってしまふ彼女たちに、刹那と唯は気持ちは分かるが友が危機に瀕し、世界が滅びようとしている

かもしれない状況なのに緊張感のない連中だと、ほんと呆れ始めていた。

#### 次回予告

『永遠の楽園』に到着し、先へ進むプリキュアたち  
そこで彼女たちは楽園に存在する、とある村を訪ねる  
次回『楽園の住人』

『彼ら』は今のままで十分幸せで、それ以上は望まない

## 何もない世界（後書き）

予定ではあと二、三話で第一部終了です。



## 楽園の住人

森を抜けると、今度は谷だった。直線に切り立った崖は全体が綺麗なエメラルドグリーンの色をしている。所々ツタに覆われていたが、それでも輝きは失せるどころか一層増しているようにも見えた。

「まさか・・・これ・・・間違いないわ、翡翠よ！」

かれんが手を触れ、嘆息を漏らした。

「嘘っ・・・これ全部！？」

総重量何万トンになるのやら、とくるみは考えただけで気が遠くなりそうになった。

谷底にはこれまた綺麗な川が流れ、魚が跳ねている。川の両岸には粘土で固めたような褐色の建造物が並び、そこから子供たちが水遊びをしたり、母親らしき女性が洗濯をしていたり、老人が釣りをしていたりしているのが見えた。

「人も住んでいたのね」

「『永遠の楽園』はどんな動物も生きるのを許すからね」

ゆりが言くと、唯が笑って付け加えた。

谷の遥か奥には紺碧の天空を背景に純白の山脈が見えていた。全員、ため息が漏れた。

「きつれえ・・・！」

「本当・・・あゝっつ、カメラ持って来るんだった！」

響が目を煌かせ、えりかが口惜しそうに両手で頭を掻き乱した。

とまあ、こんな感じで退屈はしないのだが、その後も数々の絶景にプリキュアたちは感動して度々足を止めるため、一同がようやくその村に到着した時にはもう陽はかなり傾き、あと数分で地平線上から見えなくなる時刻だった。

突然の来訪者に村人たちは次々に家から姿を現したが、彼らは一同を警戒するどころかむしろ歓迎してくれているようで、子供も大人も邪心のない笑顔を向けている。みな色は異なるが、作務衣えびねに似

た衣服を着服しており、頭に頭巾<sup>フット</sup>を被っている。

「この村が楽園に存在する唯一人が最も多く暮らす中心部。きっとこの村の人たちなら、マルガが普段どこで棲息しているか分かるはず。私と唯はこの村長に挨拶ついでに情報を聞き出してくる。あなたたちはしばらく休んで」

「休んでてつて、言われても・・・どこで？」

舞は少々困惑げに周囲を見回した。刹那のお言葉には甘えたいが、ここは全員にとって初めて訪れた全くの未知の領域。しかもこう大勢に笑顔で注目されると、かえって面映くて休みたくても腰を降ろせない。しかし、全員この村に到着するまで結構歩き、疲労がピークに達している。足は両方とも重く感じるし、確かに些か休憩したい。

困ったなと思っていると、村人の中から一人、ゆりと同年齢に見える青年がプリキキュアたちへと進み出た。青年は小麦色の肌に金髪、おまけに瞳は緑で顔の形が整い、とても美形だった。

「わっ・・・すごいイケメン！」

「こんなカッコいい人とこんな所で出会えるなんて・・・！」

「本当・・・世界は広い」

イケメンの登場になぎさ、咲、りんは途端に頬が紅潮し、思わず緊張が走る。青年は、にこ、と全員に優しく微笑し、深々とお辞儀をした。その丁寧な振る舞いに美希は、もし彼が自分たちの世界でモデルとして売り出せばあつという間に人気が急上昇しそう、と思わず感嘆した。青年は頭を上げると、微笑んだまま静かに口を開いた。

「ようこそ、僕たちの村へ。長旅でさぞやお疲れでしょう？よろしければ、僕の家にいらせてください。僕の家はとても広いです。みなさんのことを歓迎致します」

とても流暢な日本語だ。どう見ても日本人に見えない彼がなぜ日本語を喋れるのか不思議だが、よくよく思い返してみれば、これまでも訪問した世界の住民はみななぜか日本語を話していた。タル

トとシフォンが暮らすスウィーツ王国に至っては国民全員が関西弁（？）を話している。そう思うと、深く考えるだけ無駄かもしれない。

まあそれはともかくとして、せっかく青年が自らの厚意で一同を歓迎しようとしてくれたのに断るのはかえって無礼というものだ。それにやはり少しでも足を休めたい。プリキュアたちは青年の親切に感謝し、彼の家に厄介になることにした。

家に招待される途中で分かったのだが、青年の名はゼルダというそう。ゼルダの家には数分後に到着し、全員が中にお邪魔する。なるほど、確かにゼルダの家は広く、プリキュアが23人、妖精が17匹厄介になってもまだ余裕があった。窓も複数あり、その一つからは牧場が見えた。牧場主らしい人物が牛に似た動物の世話をしている。その景色を眺めて、ふと、アコがゼルダに聞いた。

「ねえ、あなたたちの民族はずっと昔からこの森と一緒に暮らしてきたの？」

「はい。僕たちは何万年もずっとこの自然とともに暮らしてきました。森には危険な動物もいますが僕たちにはその動物を狩る道具も知恵も力もありますし、美味しい木の実も数多くあります。他にも自分たちで作物を作ったりもして豊かに生活しています。もちろん、大変なこともあるけど僕たちはとても幸せに毎日を過ごしています」

「幸せ・・・そっか、そうなんだ」

アコはこの楽園内に暮らす村人たちが自分たちと同じ人間に見えるのに、なぜマルガの被害に遭わずに暮らし続けているのかと疑問に思っていた。要するに、村人たちは『満たされている』のだ。今のままで十分幸せで、これ以上は望まないのだ。確かにこれでは村人たちは『進化』することはできないかもしれない。けれど、だからこそ村人たちはこの楽園内で永遠に暮らすのをマルガに許されたのではないだろうか。

「幸せをそれ以上に望まない人たちのもとへは、マルガも来ないのね・・・」

ゼルダの微笑から再び窓からの景色に視界を移し、アコはぽつりと呟いた。

刹那と唯がゼルダの家に来たのはそれから約一時間してのことだった。その時にはもう陽は地平線に沈み、楽園は完全に夜に入っていた。

やむをえない、今夜はここで泊るとしよう。

では、どうぞ私の家でお休みください。

戻ってくるなり、いきなり言い出した刹那に笑ったままそう申し出たゼルダに全員びつくりした。

「そんな・・・いくらゼルダさんのお家が広いからって、悪いわ」こまちが戸惑った表情で伝えたが、

「あなた方は客人です。遠慮はいりません。それに夜はとても冷えます。あなた方はともかく『そちら』はいかがでしょうか？」

ゼルダは妖精たちを指差した。確かにこの美しい世界にも気温は存在する。仮に野宿するとしても（もちろん、野宿したいとも思っていないが）自分たちは我慢できてもパートナーたちをうっかり風邪を引かせるわけにはいかない。中にはまだ子供や赤ん坊の年齢に至る者もいるのだ。

口を噤んだプリキュアたちにゼルダは相変わらず微笑のまま、

「決まりですね。では僕は足りない分の毛布を集めてきますのでもう少し待っててください。少ししたら食事もできあがりますので・・・」

「と言うなり、すぐに家を出て行き、仕方なく全員しばらく待機する。」

「刹那、ちよつと・・・」

ふいに唯が裾を引っ張り、小声で耳に囁いた。

「村長が言ってたこと、覚えてる？」

「私たちより先にこの村を訪れ、すぐに出発した二組の少女たちの

こと？」

「うん。二組のうちの片方はきつと・・・」

「ええ、『彼女』に間違いないわね。少しは待っててくれてもいいのに・・・」

「『もうひとり』が急かしたんじゃないの？何しろ分身がマルガの被害に遭って、この樂園に連れてきたんだから、一刻も早く助けようと無理やり・・・」

「自分が蒔いた種とはいえとんだ疫病神を背負ったものね・・・いや、死神か」

「うん・・・でも、それ以上に気になるのが・・・」

「ええ・・・もう一組の少女たち・・・きつと彼女たちがマルガに接触を図ろうとする者に違いないわね」

「でも『少女たち』ってのが少し驚きね。何者・・・かしら？」

「さあね。でも邪悪な闇の気配を『ヴェーダ』が感じ取ったのなら、只者ではないわね。いずれにしても彼女たちよりも早く、私たちがマルガを仕留めないと・・・もしマルガを自分たちの思うように利用するのを企むようならなおさら。幸い、村長がくれた情報だとマルガは一度樂園に来たものの、すぐにまた『救世主と墮天使の世界』に飛んだようだから、今夜中に接触することはないと思う。もっとも、その情報に関して私が喜んでいいのか分らないけれど」

「マルガはまた誰かを『幸せ』にしに行ったのね？」

「おそらく。だから、これ以上好き勝手させないためにも私たちの手で仕留める・・・必ず！」

「『彼女』は・・・大丈夫かしら？」

「心配ない。『彼女』の強さはともに近くで戦った経験もある私が保証する。『もうひとり』のほうも、まあ一応悪魔なりの生命力を持っているし、案外いいコンビになるかもしれない」

「余計不安なんだけど、刹那」

「ちよつとそこ、なにブツブツ言ってるの？」

ここでラブが不信感露にして声をかけたため、会話は終了となっ

たがふたりともすぐに「べつに」と、瞳を逸らして彼女のジト目から逃れた。

「……うつつまああいつつつつ……！」

ゼルダに仕える侍女たちらしい五人の女性が運んできたシチューらしい肉や野菜が入った白いスープを飲み、なぎさ、咲、えりか、響の四人が声をあげた。スープの隣の籠に入っているのはパンらしい。さらにブドウや梨のような果物がお皿に乗せてあった。コップには同様に果実を搾って作られたらしい赤やオレンジが見えるジュースが入っている。

はぐはぐとパンを頬張る響たちに刹那と唯も当初は呆氣に取られるもすぐに気を取り直し、スープに入った肉と野菜を口に運ぶ。

「ぶは……！食った食ったあ……っつ……！」

三杯もスープをおかわりし、満腹になった響がジュースに手を伸ばす。ほぼ同時に完食したなぎさ、咲、のぞみ、ラブ、えりかも口の回りを舌で舐めてからジュースを喉へと流し込み始めた。

「あの、これ何の肉なんですか？」

スプーンで掬い、しばし眺めてから祈里が傍らに立つ侍女に尋ねた。侍女はにこやかにこう答えた。

「はい。それはカエルの股肉でございます」

ぶはっ！

途端にジュースを飲んでいた一同が中身を吐き出した。他のみんなも思わずスプーンを持つ手を止めた。

「カ・カエル！？ちよつと、なんてものを食べさせるのよ！私、三杯もおかわりしちゃったじゃないの……っつ……！」

「汚いわよ。カエルの肉が入っていたからって、その程度でパニクらないでほしいものね。昔から食用力カエルはあるし、第一美味しかったんでしょ？」

すぐさま響が侍女に文句を言うが、冷静に刹那が制す。

「そりや美味しかったけど、そーゆー問題じゃないよ！あんな八工とかを食べたりゲコゲコ鳴いてるやつを美味しそうに食べてたなんて、あぁっつ、想像しただけで蕁麻疹じんましんが来ちゃう！！」

「あのね、北条響。戦いの中で生き残るためにはどんなものでも食べて生き延びなければならぬ時もあるのよ。時には草の根とか芋虫とかミミズとかイナゴとかを食べていかなきゃならないこともある。それに比べれば、カエルなどまだかわいいほうよ」

「やめてよ、芋虫とかイナゴとかって！まだ食事してる人いるんだから！」

「なんだか食欲がなくなってきたね・・・」

「わ・・・私も」

明らかに顔色が悪くなった奏とエレンがスプーンを皿の横に置いた時、

「お待たせしました、みなさん。ただみなさん全員分の毛布を・・・？・・・どうかなさいました？」

帰ってきた途端に恨めしげに見やる全員の視線を浴び、思わず身体が凍りついたゼルダであった。

### 次回予告

来るべき明日に向けて眠りに入るプリキュアたち

一方で他の二組も募る想いを語りながら眠りに着く

次回『銀河』

それぞれの想いを胸に抱いて、少女たちは未来に備える

## 楽園の住人（後書き）

次回で第一部終了です。



## 銀河

なんだかんだで食後、結局プリキュアたちと妖精たちはゼルダの家に寝泊りすることになった。毛布に包まり、寝心地の良さを感じるも多くが眠り着けない。思い返されるのはやはり別世界に存在する自分たちのことだった。

世界の敵に仕立てられ、プリキュア同士が憎み合い、殺し合う現実。その戦禍の中に違う世界の自分たちも巻き込まれ、多くが信じ難い変貌を遂げている。

『花咲つばみ』をはじめとするハートキャッチプリキュアの四人は『世界破壊派』の代表として完全な『悪』となり、他のプリキュアたちを卑劣な手を駆使してまでも倒そうと躍起になっているし、プリキュア5の一人である『秋元こまち』においては殺人未遂にまで至った。こまちと一緒にいることが多いナツツとしては、こちらの世界ではいつもみなを攻撃から守ってくれた彼女が別世界の存在とはいえそんな非道なことをするとはとても信じられないし、信じたくもない、というのが正直な感想だ。おそらくこまち自身も同じ気持ちだろう。もしその場に彼女もいれば、きっと必死で『こまち』を説得しようと働きかけたはずだ。

『美墨なぎさ』『夢原のぞみ』を代表とするグループは一応『世界守護派』に属しているものの、こちらも現状は決して良いとはいえない。かつての仲間同士が醜く争い合う現実に耐えられなくなり、『のぞみ』は精神が壊れかけている。一応『なぎさ』ともうひとりの影の自分が懸命に支えてくれているとの情報を聞き、多少は安堵したものの、いつ希望の戦士が完全な絶望にまみれ、暴走に至るかも分からない。

不甲斐ない。別世界の自分たちがここまで追い詰められているのに何もできないのか。ただ、祈ることしかできないのだろうか。

そもそもどうして今まで世界を守ってきたプリキュアが、突如一

転して世界の敵になってしまったのだろうか……そこまで考えて、ふと23人全員の頭にある考えが浮かぶ。

もしかしたら、プリキュアが突如世界の敵にされ、互いに戦い合うということ自体に裏があるのではないだろうか。つまり、この戦いの背景には黒幕が存在しており、それが人々にプリキュアを世界の敵と認識させることでプリキュアたちの間にも疑心暗鬼を募らせて戦い合わせることで全てのプリキュアを完全に消滅させ、その後にゆつくりとプリキュアが完全に消えた世界を我が物にしようとする算段ではないだろうか。

考えすぎだろうか。いや、だとしてもやはりプリキュアが突然世界の敵にされたのはどう考えても不自然だ。もし、この根本的な点から調べていけば、何か分かるかもしれないし、もしかしたらプリキュア同士の戦い自体が終焉に達する可能性もある。絶望的な現状が続く世界だが、まだ希望は残されているかもしれない。

明日にでも天上刹那と天宮唯に自分たちの立てた説話を話してみてもいいかもしれない。そして、もうひとりの自分たちがいる世界がマルガに滅ぼされないように全力で戦おう。

それだけが別世界の自分たちのためにもできるたったひとつのこと。どうしてこうなってしまったのかも分からずに滅びる運命だけは避けなければならない。まだ希望がわずかでも残っているのなら、世界も未来もいつだって変わるのを可能とするから。

決意を胸に、プリキュアたちは明日への戦いに向けて目を閉じ、眠りに入る。

全ての世界を破滅から救うために。

村から1キロほど離れた深い森林の中、小さな明かりが見える。パチパチ、と音を鳴らし、漆黒の衣装を纏った少女が小枝を火の中に投げる。キュアリベリオンだ。隣には彼女と手錠に繋がれた水澤睦月。キュアアルガティアも座っている。ふたりともプリキュア

に変身しており、手元にはいつでも戦えるようにそれぞれ自慢の相棒を置いてあった。ちなみに口モモはリベリオンの膝の上ですやすやと寝息を立てている。

「いい加減にあなたも寝たら？ 疲れてるんでしょ？」

「忘れたか？ ここは私でさえも足を踏み入れたことのない未知の領域・・・いつ、どこから何が攻めてくるかも分からないのに・・・」

「そのために私の犬たちを見張りに出したんじゃない。何かあればすぐ知らせしてくれるし、私とあなたで交代で見張れば・・・」

「いつ寝首を掻かれるかも分からない人を信じるわけにはいかない」  
「・・・随分と嫌われたものね、私も」

「当たり前だ！ こんな手錠を嵌めて脅すなど卑劣な手を使う輩のどこを好きになれと！？」

じゃら、と片腕を軽く挙げ、繋がれた黒い手錠を見せると、同様に繋がれたりベリオンの腕も少しだけ拳がった。

「あのねえ、確かに私は勝つためにはどんな手段も用いるけど、今はそうも言ってもらえないの。『幸福』から真夜を救ったり、このジヤングルの中を生き延びるためには予備知識を備えたあなたの存在が不可欠になってるのよ。何の考えもなしに来てしまった私だけじゃ無理。だから隙を見て殺そうなんて考えてなんかいないわよ、少なくとも今はね」

「ふん・・・」

鼻を鳴らし、アルガティアは腕を降ろした。やれやれ、とりベリオンはふと夜空を見上げ、嘆息を漏らす。

「・・・星が綺麗ね」

「あ・・・？」

つられてアルガティアも頭上を見上げる。ほお、と声が出た。

幾千、いやそれ以上の星がまるで散り蒔かれたかのようにひとつひとつが夜空で光り輝いている。例えるなら星の海、あるいは天然のプラネタリウムだろうか。本当にため息が出てしまうほど美しく、幻想的で、心が感動で震えた。

「手が届きそう・・・星をこんなふうに見上げたことなんてあまりなかったな」

「あなたの世界でも星は見えるの？」

「・・・見えるかもしれないけど、余裕なんてなかったよ」

「そう。・・・ねえ」

「何？」

「戻りたい？」

「は？」

「もしできるとしたら、戻りたい？あなたがいた未来・・・友達同士がまだ殺し合うことのなかった時間に」

「・・・」

リベリオンの問いに、アルガティアはしばし黙考した末、夜空を見上げたまま口を再び開く。

「そうね。戻れたらどんなにいいだろうね。あの時間は私にとって『幸せ』な時間だったから・・・私が大変な時にでもいつも支えてくれた仲間が大勢いた。その仲間が、私の目の前で・・・」

唇を噛み締め、俯くアルガティア。リベリオンは彼女から視線を逸らし、再度夜空を見上げる。

「幸せ、か。私はかつて世界の破壊に喜びを見い出していたけれど、それは『幸せ』と違う。むしろ『不幸』だった。光だった真夜はもう会えることのない父親と母親、そして友達との再会を幸福に感じていたのだろうけれど、存在自体が絶望の闇を象徴している私はどうなのだろう。ほんの少しでも自分にとっての幸福を願っているのだろうか。」

本当に『幸せ』って何なんだろう、とつい考えに耽っていたが、

「・・・寝る」

「は？」

面倒くさくなり、口モモをどかして丸太を枕にし、横になった。

「ちよ、ちよっと・・・」

「30分したら起こして。代わってあげるから」

「代わるって・・・」

と言うも、すぐに寝息が聞こえ、絶句するアルガティア。確認のため、彼女の<sup>まぶた</sup>瞼を開けてみたが本当に眠っているようだ。

なんだこいつ。無用心に眠ってしまうとは、本当に二度も世界を滅ぼそうとした悪魔なのか。どうも気が狂う。

「変なやつ・・・」

そう呟くも、どこか奇妙な感慨を覚えるアルガティアだった。

「本当、こんな綺麗な星、見たことない・・・」

地面に仰向けのまま上空の銀河を眺め、式波<sup>しきなみ</sup>今日子<sup>けいこ</sup>「キュアサバ

ーニヤは笑いながらぼつりと呟いた。

彼女を守るように囲んでいる天王自由<sup>てんおうみゆ</sup>「ダークデスパイア、綾波<sup>あやなみ</sup>

光<sup>あき</sup>「ダークバインドのふたりも夜空の星々を見つめ、感慨深く吐息

を吐く。サバーニヤとは双子の姉妹でもある惣流明日香<sup>そうりゅうあすか</sup>「ダークグ

ライファーも星を見ていたが、それ以上に同じ血が流れるサバーニ

ヤの、今みたいに自然に笑みが漏れるほど穏やかな表情を垣間見る

ほうが好きだった。

「このままずっと時が止まってしまえばいいのに・・・」

ふと、ストローを口に咥えたままバインドがそう漏らす。三人も

同様の気分だった。

こんなに穏やかで、平和で、美しい時間はつい最近まで経験したことはなかった。身体を楽にし、何も考えることなくただ眺めているだけでこんなにも心が洗われ、満たされていく。それは滅多に経験できなかったから貴重であり、だからこそもう少し長く、できれば永遠に続いてほしいとつい小さな願望を抱いてしまう。それは不可能だと分かっている。

「バインド、気持ちは分かる。けれど、ずっと止まっているわけにはいかないの。何が待っているようにとあたしたちは前に進み続けるしかないのよ」

「・・・分かつてる。言ってみたただけだから」  
「ならよし」

そう、サバーニヤの言うとおり、自分たちは進むしかない。世界に裏切られ、邪悪な闇をこの身に纏ったあの時から修羅の道を渡る『覚悟』はとうにできている。たとえ自分たちの身に何が降りかかるうとも、引き下がるのも止まるのも許されない。これまで流した血を無駄にしないためにも。

「『獲物』、見つかるといいね」

デスパイアが呟くと、横からグライファアがじろりと睨んだ。

「デスパイア、やっぱりアンタって、馬鹿？」

「な、なんでさ？グライファア」

「見つける程度じゃダメに決まってるでしょ。私たちの目的は『捕らえる』こと。捕まえるための網があるとはいえ、相手は大物なんだから、よく狙いを定めて絶対に生け捕りにしないと・・・」

「『<sup>ハンター</sup>狩人』と呼ばれるグライファアらしい考えだな」

「『<sup>マンハンター</sup>人狩り』と呼んでくれる？『<sup>パニッシャー</sup>処刑人』君」

「そのネームで呼ぶのはよしてくれ」

「グライファア、デスパイア、お喋りはそこまでにして」

サバーニヤが眼帯を覆っていない蒼の右眼も閉じたままようやく口を挟み、ふたりの会話は中断する。

「明日も早い。少しでも眠って備えるべきよ。おそらく『獲物』はそう遠からず、あたしたちの前に現れると思うから、力を温存しといて」

「・・・了解」

「分かればよし。バインド、見張りは頼むわ」

「了解。デスパイア、二時間後に起こすから」

「それはいいけどバインド、ストローを口に咥えたまま話すその変なクセ、いい加減やめたら？」

「口元が寂しくなるから・・・嫌」

「・・・分かったよ。じゃあ、おやすみ」

デスパイアは毛布を包まって横になると、しばしの仮眠に着いた。

プリキュアたち全員が完全に眠りに入った数時間後、ふいにムーブとフープは目を覚ました。誰かの声が聞こえる。眠たい目を擦り、声を辿って、主を確認する。

「ええ、こっちは今のところ問題ない。まだ私や唯に反感を持って  
いる者もいるけど、一応は協力を決めてくれた。睦月はお先に出発  
したみたいよ。心配？問題ない。彼女が容易く死ぬようなやつでは  
ないのは私がよく知っている。そっちはどうなの？そう、『花咲つ  
ぼみ』と『明堂院いつき』も現時点ではおとなしくしているみたい  
ね。ん？ただ『来海えりか』が今日も来た？で、GN粒子入りのサ  
ンドイッチをあげた？害はないって、あなたねえ……ん？『来海  
えりか』がカエルの肉は入れるなって？……く……つ……はははっ  
・ああごめん、こっちもカエルの肉でちょっとした騒動があつてね。  
そんな口を叩くようなら心配無用みたいね。そろそろ私も眠りに入  
る。分かつてる。私も長居をするつもりはない。なるべく早く戻る  
から……」

声の主は刹那だった。刹那はゼルダ家出入口付近の壁に背中を預  
け、両目を閉じたままひとりで長く話していた。誰かと会話してい  
るように見える。しかし、彼女以外は全員眠りに入っているはずだ。  
「独り言……ムブ？」

「だとしてもいくらなんでも長すぎるフブ」

すると刹那はようやく背中を壁から離し、静かに両目を開いた。  
「それじゃあ、また連絡する。おやすみ……アニュー」

開かれた刹那の両目を見た瞬間、ムーブとフープは悲鳴をあげそ  
うになるのを必死で堪えた。急いで熟睡している咲と舞を覆ってい  
る毛布の中に飛び込み、ガタガタと中で震え出す。

ムーブとフープは見てしまったのだ。

開かれた刹那の瞳の虹彩が、わずかに金色の輝きを放っていたの

を。

ちりん……。

鈴の音を鳴らして『幸福』。マルガはふわりと優雅にその地に降り立った。みな、幸せそうな笑みで彼女を温かく迎えてくれた。みんなの笑顔を見て、マルガも、にこ、と微笑で応える。

今日も誰かを『幸せ』にしてきた。相手は長く続く紛争の中に無理やり投与された約20人の青年兵の部隊。全員が特にといった訓練も受けず、初めての戦争に死の恐怖を覚え、身体の震えが止まらなかった。そして一刻も早く愛する家族や恋人のもとに帰りたいと、それが許されないと分かっているも心から願っていた。

マルガは彼らの願いを叶えてあげた。みながみな、愛する人との再会に、そして二度と戦争に行かなくていいという吉報に心から歓喜し、幸せになった。みんなの顔から恐怖や不安が消えて笑顔になったことにマルガは満足して、すぐにその場から去った。数時間後、敵兵部隊の襲撃を受けた彼らが何もできず笑顔のまま全滅したことも知らずに。

もとの住処に戻ったマルガは、ある一人の少女に近づき、そつと頭を手で触れた。幸せに微笑みながら目を閉じている彼女に、マルガもにこやかな微笑を浮かべて言う。

「あなたはもう悲しまなくていいの。苦しなくていいの。ここなら、あなたはずっと幸せになれる。幸せになっっているのよ、永遠に。」

そしてマルガは、家族と友達に再会した夢を見続ける少女。雨牙真夜から手を離し、次の幸せな夢を見続ける人へ優しく声をかけに行った。

それぞれの想いが交錯したまま、誰もが朝を迎えようとしていた。



## 銀河（後書き）

第一部終了。キャラクター紹介に入ります。

## キャラクター紹介？

『救世主と墮天使の世界』出身のプリキュア

現時点では『スイートプリキュア』をはじめとする23人のプリキュアとパートナー及びサポートを行う17匹の妖精が日本に存在する他、光と闇の両方の力を持つプリキュアとパートナーの妖精がアメリカ・ニューヨークにて確認されている。

## 雨牙真夜／キュアセイバー<sup>あまぎまや</sup>

『DX2NEXT』『DX2THE LAST』から引き続き登場。17歳。三年前は闇の勢力からパートナーのロモモとともに世界を守った光のプリキュアだったが、その後は異国にて邪悪の化身による襲撃で両親と友達を目の前で失った衝撃から世界に激しい憎悪を抱き、闇のプリキュア・キュアリベリオンに変貌を遂げたが改心、再び光の力を取り戻し、他のプリキュアたちと再び世界を守り抜いた経歴を持つ。さらに数ヶ月後には怨念の集合体として復活したキュアリベリオンと激闘を繰り広げながらも和解し合い、過去の自分との決着に終止符を打った。現在では過去の罪に贖罪の意識を持ちながらも亡き両親が勤めていたニューヨークに本部を置く国際医療団体の施設にて生活、福祉や医療関係の勉学に励みながらプリキュアとして世界を守ることに精力を注ぐのを決めている。専用武器『リライフシンバル』を駆使して撃つ『プリキュア・スターライトチャージ・クラッシュ』が最大必殺技。今回は存在だけで世界を滅ぼす力を持つ強敵・マルガに運悪く遭遇してしまったために最大の危機を迎える。

アマキマヤ  
雨牙真夜／キュアリベリオン

『DX2NEXT』『DX2THE LAST』から引き続き登場。真夜のもうひとつの姿で、初めて普通の少女が変身した悪のプリキュア。強大な闇の力の持ち主で、単独で19人のプリキュアを圧倒し、勝利したほど。また悪魔的な頭脳も持ち、相手の裏を掻く戦法も得意とするが、動きが俊敏な相手との対戦は苦手な様子。一度は世界の破滅を目論むも真夜自身が改心したことで消滅したかのように思われていたが、彼女自身の憎悪が幾多の怨念を結集させて身体を形成し、怨念の集合体として復活。再び世界の破滅のために行動を開始する。しかし駆けつけた真夜Ⅱキュアセイバーと激しく戦った末に和解、ともに破滅から世界を救い、幾多の怨念から解放されたことで彼女自身も姿を消した。だが完全に消滅したのではなく、雨牙真夜の影の部分として『戻った』のであり、真夜の中でしばらく眠りに着いていた。今回は強敵・マルガの強力な光の力で無理やり真夜Ⅱセイバーから引き離されて再度復活。拉致されたセイバーを救出するためにマルガを追う水澤陸月Ⅱキュアルガティアを脅迫、マルガが異次元に作り出したという『永遠の樂園』へとともに向かう。専用武器『希望狩<sup>ウィッシュ・ハント</sup>』の刃に黒い炎を最大限にまで溜めて放つ業火『プリキュア・リベリオン・ヘル・ファイア』が最大必殺技。

口モモ

『DX2NEXT』『DX2THE LAST』から引き続き登場。白い子犬に似た外見を持つ妖精で、真夜のパートナー。普段は周囲に正体が分からないようにペンダント状の変身アイテムに姿を変えているが、小さい身体ながらも勇敢で、一度は絶望の闇を受け入れて彼の前から姿を消した真夜を一年も探し続けた根気力もある。他にも口モモ自身も知らない強大な光の力を隠し持っており、それは

闇の力が暴走し、見境をなくした真夜を制止したほどの威力を発揮した。今回は強敵・マルガから真夜を取り戻すため、過去の真夜<sup>II</sup>リベリオン、水澤睦月<sup>II</sup>アルガティアとともに『永遠の楽園』へ向かう。

## 天上人

もともとはプリキュア同士が戦い合う世界の出身だが、マルガに接近を試みる何者かの存在を知り、急遽キュアセイバー他23人のプリキュアたちが暮らす『救世主と堕天使の世界』を来訪、マルガを討伐して世界を滅亡から阻止するために真夜やプリキュアたちと接触を図る。

## 天上刹那ノキュアエクス

『天上人』のリーダーにして、生体情報端末、イノベイド。14歳。<sup>ラベンダー</sup>薄紫のストレートの髪が特徴だが、髪質がさらさらすぎてストレート以外の髪型にできないのが小さな悩み。プリキュアの力を含め、ヴェエダによつて『造られた』存在であるが、当人はそのことを全く気にしておらず、むしろ自身を『進化した人類』と誇りにさえ思っている。しかしその反面、育った環境がイノベーターやイノベイド、コーディネイターなどに囲まれた世界のため、イノベイドの特性に無自覚であり、『怪物』呼ばわりされてひどく傷つく一面も。キャラクターモデルは『機動戦士ガンダム00』のアニニュー・リタナー。

## 水澤睦月ノキュアアルガティア

『天上人』のナンバー2にして、ガイアセイバーズ機動戦士ガンダム00支部の生き残り。14歳。装備している銃器は全て実体弾だ

が、ビーム兵器にしない理由は『大型のジェネレーターを抱えるのが面倒くさい』からのこと。二挺拳銃を得意とし、射撃においては他の追隨を許さないが、格闘戦がてんでダメで、当人曰く「エクスとは戦いたくない」らしい。最近の悩みは、銃火器に使用する銃弾の仕入れ先と、新装備を納入したついでにもらった無反動砲の処遇。キャラクターモデルは『魔法少女まどか マギカ』の睦美ほむら。

あまみやゆい  
天宮唯ノキュアセラフ

『天上人』の斬り込み隊長にして、大富豪天宮グループの御令嬢。14歳。プリキュアの力がどう考えてもガンダム装備によるものには見えないが、理由は『テレビ放映されていたガンダムを見て思いついた』から。武装も必殺技もガンダムを意識しているのに、実体剣を持たないのは『重そう』なのと『折れたら使い物にならない』という理由から。たまに必殺技を忘れかけてトンデモな技が発動することがよくある。

### 監視者

『天上人』と同様に別世界からマルガが作り出した『永遠の樂園』を来訪した謎の少女たち。マルガ捕獲を目論んでいるようだが、はたしてその目的は……？

しきなみ きょうい  
式波今日子ノキュアサバーニヤ

『監視者』のリーダーにして、明日香の双子の姉。14歳。右眼が蒼く、左眼が紅いオッド・アイで、そのコンプレックスからか、左眼は常に眼帯で覆い隠している。明日香とお揃いのカチューシャで髪をまとめ、両サイドだけを残したツーサイドアップになっているが、明日香もまた同じ髪をしているため、彼女に度々「髪型変えて」と

言われ続けている。なお、過去にもプリキュアのリーダーを務めていたらしいが、当人が一切語ろうとしないため、真相は不明。キャラクターモデルは『エヴァンゲリオン新劇場版：破』のユーロ空軍のエースパイロットであり、ユーロネルフ所属のエヴァンゲリオン2号機専属パイロット、式波・アスカ・ラングレー大尉。

てんおう みゆ  
天王自由ノダークデスバイア

『監視者』のナンバー2にして、睦月の数少ない親友のひとり。16歳。ざんばらに短く切った金髪が特徴で、その顔立ちも手伝ってか、『どう見ても美少年です、本当にありがとうございます』的なことをよく言われがち。戦闘においては圧倒的格闘センスを発揮するが、度々間の抜けたことを言っでは、明日香に「アンタ馬鹿あつ!？」と突っ込まれている。周囲から『処刑人』パニッシャーなどと呼ばれているが、当人はその渾名を嫌っており、聞く度に憂鬱になっている。キャラクターモデルは『美少女戦士セーラームーンS』の外部太陽系戦士リーダー、天王はるかノセーラーウラヌス。

そら とうめい ふう あすか  
惣流明日香ノダークグライファア

『監視者』の斬り込み隊長にして今日子の双子の妹。姉とお揃いのカチューシャで髪をまとめ、さらに同様の髪型もしているため、度々「髪型変えて」と今日子に頼んでいるが、実は真似をしているのは明日香のほう。度々間の抜けた発言をする自由に対し、「アンタ馬鹿あつ!？」と突っ込むのが日課となっているが、光には逆に突っ込み返され、今日子には言った途端に『お話』という名の鉄拳制裁が待っているため、実質自由専用のツッコミ台詞と化している。周囲から『狩人』ハンターなどと呼ばれているが、当人はその渾名をひどく気に入っており、自らを『人狩り』マンハンターと称するほど。キャラクターモデルは『新世紀エヴァンゲリオン』のエヴァンゲリオン式号機専属

パイロットであり、二人目の適格者の惣流・アスカ・ラングレー。

セカンドチルドレン

綾波光ノダークバインド

あやなみあきじ

『監視者』の砲撃隊長にして、今日子・明日香姉妹の幼馴染。14歳。シャギーカットの鮮やかな空色の髪と、ルビーのように透き通る紅い瞳のせいで、常に周囲からひどく迫害を受け続けてきた。そのため、黒いセミロングのウィッグと黒のカラーコンタクトが彼女の必需品だったのだが、明日香に「そうやって自分を偽るから、余計付け込まれていじめられる」と言われて愛用の二品を半ば強制的に処分され、余計沈鬱になっていたところへ自由が現れ、自身の容姿を「綺麗だ」と褒めてくれたのをきっかけに、彼女に心酔するようになった。ちなみにいつもストローを咥えているのは本人曰く「口元が寂しい」からであり、たまにストローが焼き鳥の鉄砲串に変わっていることも多々ある。キャラクターモデルは『新世紀エヴァンゲリオン』のエヴァンゲリオン零号機専属パイロットであり、最初のアースチルドレンの適格者の綾波レイ。

## 本作の敵

マルガ

別称『幸福』とも呼ばれている謎の少女。その実体は、プリキュアと同じ光の力が生み出した強大なエネルギー生命体である。人々が望む幸せを与える幻覚を永遠に見せる能力を持ち、その気になれば瞬く間に世界中の人間に対して能力を発揮することも可能とするため、刹那や睦月をはじめとする『天上人』からは『存在だけで世界を滅ぼす力の持ち主』と皮肉られている。だが決して『悪』ではなく、彼女自身は純粹に人々を幸せにしたいと考えて行動を起こして

いるにすぎない。異次元に『永遠の樂園』と呼ばれる未知の領域を作り、そこでは過去絶滅したものや架空・伝説上の動物などが自然のままに暮らしており、そこを訪れる者も彼女は歓迎したり、時には彼女自身が招待したりもしている。今回はその招待客のひとりに  
雨牙真夜Ⅱ キュアセイバーが選ばれてしまったが……？



## キャラクター紹介？（後書き）

これにて第一部終了。またしばらく休止します。第二部の執筆は12月からになります。

第二部ではもっと長くしてそれぞれの戦闘描写を多くし、さらに多彩なゲストも登場させる予定です。それまで楽しみに待っていてください。

出発点（前書き）

第二部執筆開始！

## 出発点

朝を迎えた。

全員は顔を洗うと、朝食へと移った。その際ほとんどの頭に朝食のメニューにも力エルの股肉が使用されているのではないかと疑惑がよぎったが、心配は無用だった。今日の朝食は焼きたてのパンに牛乳、鳥類の卵を使った料理に少々調味料を加えたものと新鮮な野菜と果物の以上で、みな安心して美味しくいただいた。

朝食を済ませ、ある程度の準備を終えると全員はゼルダに宿泊させてもらった感謝を述べ、村の出口へと移動した。出口には村長をはじめとする多くの村人たちが笑顔で待機しており、彼らから『お守り』として綺麗なビーズや色石で作られたアクセサリーを一つずつ受け取った。

「パーティーの用意、お願いしようかしら？」

太陽の光に反射して煌いているアクセサリーを片手で握り締め、刹那は思わず不敵に微笑んだ。

村を去り、しばらくは平たい道を進んでいたプリキュアたちだったが、ふいに前方で道が途切れているのに気づいた。いや、道は続いているのだが彼女たちのいる立ち位置から数歩先はなぜか柵で封鎖されているのだ。これには多くが首をかしげた。

「あれ？行き止まりだよ。間違えたの？」

「ううん、合っているよ」

咲が言ったが、唯が即答した。

「合ってる？それじゃあ、この先に行くの？」

「そうなるけれど・・・」

「ここから先は、変身したほうがいいわ」

「・・・・・・え・・・っ？」「・・・・・・」

美希の質問に答えようとした唯の口を中断して言い出した刹那の言葉にみなは驚く。すぐになぎさが矢継ぎ早に尋ねた。

「変身って、プリキュアに？」

「そう」

「ここで？」

「ここで」

「今すぐ？」

「今すぐ」

「なんで？」

「必要だから。すぐに分かる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

これ以上は質問しても無意味そうだな、と悟ったなぎさはほのかと顔を合わせた。ほのかも幾分困惑げな表情をしていた。敵が現れてもいない状況で変身するのは初めてだ。それは他のみなも似たような思いだろう。けれど、この『永遠の楽園』は自分たちにとって全く初めて踏み入れる未知の領域。美しく綺麗に見えるが、その分危険もあるだろう。少なくとも自分の身はいつでも守れるように心構えをしておくためにも、プリキュアに変身しておいたほうが確かによいのかもしれない。

とりあえず彼女たちなりにそう結論を下し、全員変身アイテムを手にする。

変身コードを唱えた瞬間、眩い閃光が少女たちの身体を覆い隠した。

「なるほどね。プリキュアに変身しろって言ったのもこりゃ納得だわ」

「全ツツツ然納得できません！なんでこんな所から降りなきゃならないんですかつ！？」

腕を組んで首を縦に二度三度振ったマリンに対し、ブロッサム可悲鳴に似た怒号が轟いた。

変身を遂げたプリキュアたちが立つ場所は断崖絶壁の頂上だった。

地上からの高さは軽く50メートルを超えているだろう。有名な一ノ谷の戦いでは源義経がかなりの険しさを誇る鵜越を数十騎で下り、背後から平家を襲撃して勝利へと導いた話があるが、この崖の険しさはおそらく鵜越をも超えている。地上までほとんど垂直に伸びているのを確認しただけで高所恐怖症のブロツサムは目が回りそうだった。

「今朝村長から聞いた情報によると、マルガはこの崖を下った先にある森に降りたそうよ。おそらくマルガに接近を試みようとする何者かも向かっているはず。一気にこの崖を降りて、一刻も早く私たちもマルガに接触を図らないと・・・」

「無理無理無理無理無理です！他に道はないんですか！？」

「あるみたいだけど、着くのは夕刻頃になるかも・・・」

「それでも構いません！お願いですから、別の道にしてください！」

「ブロツサム、怖いのは分かるけど、真夜さんを助けるためにもここは勇気を出して・・・」

「それでもこの崖を降りるのだけは嫌です！！」

「はぁ・・・もうしょうがないな・・・」

エクスにせがみ、サンシャインが説得を試みようとしても耳を貸さないブロツサムにマリンは軽いため息を吐くと、

「ああーっ！あそこに『ダイヤモンドのお花』が！！」

突如明後日の方向を指差し、とびっきりの大声で叫んだ。全員が反応し、マリンが指差した方向を見るがその『ダイヤモンドのお花』らしきものは見えない。ところが、

「えっ？『ダイヤモンドのお花』？どこ？どこなんですか？マリン」  
「あそこ」

普段から花や植物が大好きなブロツサムがここぞとばかりに大きく反応し、マリンが指差した場所へ瞬時に駆け出して目を皿にして探すも、

「どこなんですか？見当たりませんよ、マリン」

「そりゃそうだよ。だって・・・ウソなんだから」



「いたたた・・・」

「ブロッサム、大丈夫ですう？」

「な・・・なんとか」

後方に片手をやり、擦りながらも立ち上がったブロッサムを見て、崖上に立つマリンは再び腕を組むと、

「どーよ？これで遠回りする必要はなくなったっしょ？」

鼻から息を飛ばして、実に偉そうに踏ん返り返ったが、全員ジト目となり、ドン引きしたのは言うまでもない。

「ま・・・まあ、とりあえずブロッサムが先に行っちゃったし、私たちも行こうか？」

「ええ」

「よし、みんな一斉にこの崖降りちゃうぞ、けってーいっ！」

ブラックがホワイトに確認を取った後のドリームのかけ声に全員一斉に飛び降り、崖を駆け降り始めた。ルミナスはルルンを、ブルームはムーブを、イーグレットはフープを、ドリームはココを、ミントはナッツを、ピーチはタルトを、パインはシフォンを、マリンはコフレを、サンシャインはポプリを、メロディはハミイをと、それぞれ大切な存在をしっかりと抱いて滑走している一方で、

「ちょ、ちよつとビート、降ろしなさい！私は大丈夫だから！」

「姫様を危険な目に遭わせるわけにはいきません！」

「だから『姫様』はやめてってば！」

ミューズはビートに文字通り『お姫様抱っこ』され、羞恥心で顔を真っ赤にしながら崖を下っていた。

そんな恐怖心も全く見えず、むしろ楽しんでるかのようになり降りる彼女たちの様子を同様に駆け降りながらも逐一観察していたエクスは一緒にいて本当に飽きない連中だと正直に思うとともに、ああそうか、だから彼女たちはひとりひとはバラバラなのに強い絆が築かれて親友になれたんだな、と妙に納得していた。

なお、無傷のまま全員が颯爽と地上に降りた直後に激怒したブロッサムがマリんに「殺す気ですか！」と口から火を吐き、彼女の怒

りが鎮静するまでしばし時間がかかったのも言うまでもなかった。

#### 次回予告

マルガがいる森への第一歩を踏み出したプリキュアたち

途中、怪我をした子供を彼女たちは見かけるが・・・

次回『毒と罌』

その子を助ける必要はない、なぜなら・・・



## 出発点（後書き）

意外と本文よりも次回予告を書くのに悩んだりします。

## 毒と畏

崖の下の先にある森は昨日通ってきた『妖精』が存在する森とやや雰囲気異なっていた。プリキユアたちを歓迎してくれた村人たちが狩場とする森の、少々目に痛い極彩色とは違い、この森は少し暗い印象を受けた。それでも緑や青がとても綺麗だ。もし、この森の中を大量の蛍が一斉に飛び交えば、それだけで感動してしまいそうだが、生憎目に見えてくるのは古生代に生きていたらしい巨大トンボや体長30センチ以上の大トカゲといった爬虫類の連続だった。村長がくれた情報によるとマルガは昨夜この森に降りて北上しているのを目撃されているわ。今頃はおそらく、この森の中心辺りにいるはず」

「でもなんでマルガはこの世界の、この森にいるの？他にも山とか森はあるんでしょ？」

先頭に立って森の中を進んでいたエクスにメロディが聞くと、

「いい質問ね」

セラフが代わりに答えた。

「事前に調査していて分かったことなんだけど、どうやらここはマルガにとってお気に入りのようなの。何回も言っただけ、この森は過去絶滅したものの架空や伝説上の動物たちが自然のままに自由に生きている。マルガはそんな数々の生命体が暮らす場所を好むみたい。この世界で最も多彩な生命体が多い場所は三つの大きな森を有しているこの地域。あとは海だけど、泳ぐのが苦手なのか、あまり行ったことはないみたいね」

「生き物が・・・好きなの？」

「そうね。きつと自分が作った世界で多くの生命体は何の不満を抱くことなく幸せに生きている・・・それを何度も見るのを楽しみ、そして喜びにしているんだと思う。誰かの喜ぶ顔を見たくて、その誰かのために頑張るのと同じ。みんなも経験があるでしょ？」

「……………うん」

確かにそうだ。自分の頑張りや努力が人の役に立ち、喜ばれたらマルガでなくともみんな気分が最高に良くなり、幸福を感じる。時には自分たちのためにも頑張ってきたこともあったが、大部分は大切な人、大好きな人にいつまでも幸せで、笑顔でいてほしいから、そしてその笑顔の意味を知っているからプリキュアたちはどんな危機にさらされてもあきらめずに戦い、乗り越えてきたのだ。

「本当に純粹なんだね、マルガは」

「ええ。でも純粹すぎるの」

セラフは残念そうに首を小さく左右に振った。

「純粹すぎるゆえに『善』と『悪』を区別できないのよ。だから本人が望まなくても人を不幸にし、世界を滅ぼしてしまう……それに気づこうともしないから厄介なの。でも説得を試みるのも難しい。まだマルガの力は未知数。刺激して力を暴走させるわけにもいかない。だから『倒す』しかないの。勝手<sup>エゴ</sup>かもしれないね」

「……………」

しんみりとした空気が漂った。どうコメントすればいいのか全く分らない。

この世に生まれてきてはいけない命などひとつもない。

生まれてきたからには必ずその命には意味がある。

プリキュアたちはいつか聞いたその言葉をその通りだと信じて疑わなかった。しかし、マルガは存在するだけで世界をわずか数日で滅ぼしてしまう恐ろしい力の持ち主。本人が望むまいともそんな力の所有者が存在するだけで危険視され、この世からの抹殺を判断されるとは。

確かに自分たちの世界をそうあっけなく滅ぼされるわけにはいかない。けれど当人は少しも悪意のない純粹な結晶。いくら力が強すぎるとはいえ、話せば理解してくれるかもしれない。だが、自分たちはマルガにまだ会ったことはない。そもそも一体どこから話せばいいのだろうか。以前指摘されたように単刀直入に存在を否定する

ような発言をしてマルガを刺激し、力を暴走させるわけにはいい。

「あゝ、なんだか色々考えすぎて疲れてきちゃったなあゝ。……ん？」

脳に疲労を感じ、首を360度回したマリンはふと、気づいた。

「あれ？あそこ……『子供』が怪我してる！」

「……えっ……？」

マリンが指差した方向に全員が反応する。村の住民のひとりなのか、彼女の指差した方向に10、11歳くらいの作務衣を着た少年がうずくまっているのがエクスの世界に映った。よく目を凝らすと、確かに腕に切られたような傷が生々しく見え、血が流れている。少年の姿は他のみんなにも見えているようだった。

「これはひどい怪我ココ。早くこの子を助けるココ！」

「でも助けるって、どうするポポ？」

「誰かお薬を持ってないでしゅか？」

「大丈夫？歩ける？」

歩ける……？

「よかつたら、怪我を見せて」

ミントとパインが心配げに話しかけたが、少年はよほど傷が痛むのか答えない。

「仕方ないわ。ここは一旦さっきの村に戻って、この子を預けてもらいましょう。村にはきつと薬も包帯もあるはずよ」

「えゝ……ここまで来たのに戻るの？やだなゝ」

「しょーがないでしょ、ドリーム！誰も薬持っていないし、第一、こんな小さい子を森の中にほうっておくわけにはいかないでしょーが！」

小さい子……？

少年に語りかけたミントの台詞、アクアの提案に難色を示したドリームに言ったルージュの台詞にエクスは確かな違和感を感じた。しばらく顎に手をやって考え込むと、ふと周辺に青い花卉が開いた

朝顔が咲いているのに気づいた。ハッと朝顔を凝視し、やがて解答に至る。

なるほど・・・。

ふ、と不敵に微笑してエクスは右手に折り畳み式の実体剣を握ると、少年に静かに接近した。

「どいて」

「え・・・？」

エクスの台詞に、ミントとパインが振り返った瞬間。

斬ッ！！

一瞬の躊躇も見えない斬撃が少年の真上から降りかかった。

「……………なっ！？」

一同に衝撃が走る。セラフでさえも突然のエクスの行為に驚きを隠せないでいた。土埃と砂煙が舞い起こり、一同の視界から『怪我した子供』の姿が見えなくなる。やがて視界が晴れ、ようやく見えてきたのは剣の先端を何も無い地に突き刺しているエクスの姿だった。斬撃で抉られた跡から視線を移し、エクスは冷静に問いかける。

「・・・何のつもり？」

「それはこっちの台詞よ！あんた今、この子に何しようとしたのか分かってんの！？」

間一髪で斬撃から救出し、『子供』を抱きかかえたブラックが怒りと混乱に満ちた表情でエクスを睨んでいた。

「何って、見てのとおり、斬ろうとしたけれど・・・」

「なっ・・・！？あんた、一体何考えてんのよっ！？」

冷静に返事を返したエクスに完全にキレたブラックが？みかかろうとしたその時。

「！？……………」

突如エクスは胸倉を？まれる。すぐに瞳を移すと、かなりの血管が走ったメロディの両目が見え、片方の拳が今にも殴りかかりんばかりに震えていた。

「あんだ、本当にプリキュアなの・・・っ」

これはブラック以上に本気でキレている。意表を突かれたとはいえ、彼女よりも激戦を体験してきたブラックが呆氣に取られ、一瞬でも震え上がったほどだから。ブラックだけでなく、他のみなも普段は見たことのないメロディの本気の怒りに圧され、その場から一歩も動けなかった。ルミナスとビート、ほとんどの妖精たちに至ってはあわあわとなり、シフォンは今にも泣き出しそうになっている。だが、エクスは相変わらず無反応だ。胸倉を？まれた時は多少驚いたようだが、すぐに冷めた目のままメロディに向き直っている。その目がさらにメロディの頭の血管を切らす結果となった。

「・・・たとえ別の世界の人でもあんだはプリキュアとしてあんなりに人々を守るうと思っていた・・・でも、どうやら誤解だったみたいね。あんだはプリキュアとして最低よ！」

メロディはプリキュアとして人々を悲しみや不幸から守ってきたことを誇りに、そして自身にそんな力があることに喜びを感じていた。それはたとえ別の世界の人間でも同じはずだと確信を得、エクスに対してマルガを倒そうとはるばる自分たちの世界に来たのも彼女なりに人々を不幸にしないためだと信じていた。そのために多少横暴な手段を取ったとしても。

だが、この女は今、目の前で何の罪もない、しかも怪我をしている『子供』を躊躇いもなく殺そうとした。プリキュアの名を持ちながら、決してあるまじき行為を犯した彼女に同じプリキュアとして絶対に許せなかった。

「メロディ、少し冷静になつて・・・」

「リズムは黙つてて！さすがにこればかりは私も怒るよ！あんだはプリキュアとして・・・ううん、プリキュアどころじゃない！こんな『子供』を何の躊躇いもなく平気で斬ろうとするなんて、人間じ

やないよ！人間を捨てた化け物よ、化け物ッ！！」  
化け物。

その三文字の言葉が初めて無表情だったエクス顔に大きな反応を起こした。眉間にしわが何重にも寄せ、唇を噛み、両目にもメロディほどではないが力が入り、鋭さを増している。

「・・・何よ？言いたいことがあるんなら、言ったらどうなのよ？」

「・・・じゃあ言わせてもらおう。でもその前に手を離して」

「・・・」

とりあえずメロディが手を離すと、エクスは？まれていた胸部を直して両肩を竦めた。

「・・・とりあえず誤解しているようだけど、私は『子供』を斬ろうとしたのではない」

「・・・どうということ？」

エクスはブラックにまだ抱えられたいる『子供』を一瞥すると、驚くべき発言をした。

「その『子供』はね、幻覚なのよ」

「・・・え？」

全員が小さな驚きの声を発した。ついさっきまで激昂していたメロディでさえも一瞬で呆けた表情になった。

「幻覚って・・・『この子』が？」

「そう。『子供』なんてどこにも存在していない。私たちは早速幻覚という毒とそれを利用した罠に掛かったのよ」

エクスはブラックに答えると、自身の推論を述べ始めた。

## 次回予告

幻覚という罠に掛かったと言うエクス

だとすれば一体どのようなにして全員に同じ幻覚を見せたのか  
次回『種明かし』

分かってしまえば何の変哲もない、けれど見破るのは難し

## 毒と罌（後書き）

個人的にメロディは力強い目が魅力だと思います。



## 種明かし

そう、その『子供』は幻覚。全く声を出そうとしなかったり、怪我をしているのに少しも微動だにしないところを見ると、おそらく本当は木か、小岩と思うわ。

周りを見てご覧なさい。青い朝顔が咲いているのが見えない？それは空色朝顔といって、種子に幻覚成分が含まれている。その種子を使って、何者かが私たちに『子供』の幻覚を見せるように罫を仕掛けたのよ。おそらく少しでも時間を稼ぐために。

「嘘・・・そんなの信じられるわけじゃないじゃん！こんなはつきり見えているのに！」

「私もそう思う！仮に幻覚だったとしても、なんで『怪我した子供』なの？ここにみんなが同じ幻を見るなんておかしいじゃない！」  
ブラックだけでなくピーチも抗議すると、エクスは片手で少々頭を掻いた後で話を続けた。

確かにそうだけど、暗示することはできるでしょ？たとえば、誰かが最初に『子供が怪我している』と言うとか。・・・ほら、気づいたみたいね。来海<sup>キュアマリン</sup>えりかが一番にそう言葉を発したことに。彼女が最初にそう言ったことで、みんなにも『怪我した子供』がそこにいると思い込ませてしまったのよ。幽霊と同じ。示唆されると柳の下にそれっぽいものが見えてしまうようなものよ。

暗示された幻なら個人差があるはず。たとえば秋元<sup>キュアミント</sup>こまち、あなたさつき『歩ける？』と『子供』に聞いていたわね？それから夏木<sup>キュアルージュ</sup>りん、あなたは『その子』のことを『小さな子』と言ってたでしょ？ふたりはどうしてそう言ったの？

「え？それは・・・『その子』が足に怪我をしているから」  
「どうしてって言われても・・・どう見たって、四歳か五歳くらいじゃない」

そう・・・でもね、私の目にはね、どこからどう見ても『腕に怪我をした』『10歳か11歳くらいの少年』にしか見えないの。私はふたりのその言葉に違和感を感じ、そして周りに空色朝顔が咲いているのに気づいて種子の毒を使った幻覚だと分かったのよ。嘘だと思ふのなら、確かめ合ってみれば？きっと色々な『怪我した子供』が見えてくるはずだから。

エクスと言うとおりだった。ブロッサムは女の子に見えたと言ったし、ルルンは自分たちと同じようなモコモコとした動物系の妖精の『子供』に見えたとはつきり証言した。

「ひいててててて！マリン、いきなり何するですう！？コフレのほっぺをつねるなんて！」

「いやあゝ、幻ならつねれば覚めるかなあゝと思って。で、その『怪我した子供』は消えた？」

「いや、まだ見えるですう・・・で、だからって、コフレで試さないでくださいですうっ！！」

コフレがパートナーに怒鳴った一方でアクアはエクスのお話を熟考していた。

確かにエクスと言うとおり幻覚かもしれないが、如何せんまだ信じられない。それにコフレの言葉からしてどうやらちょっとやそつとの痛みでは解けそうになさそうだ。かなり強力な毒か、あるいは効力を高めてあるのかもしれない。

仮に種子をもとに作る毒だとして、身体に傷もないところを見ると、磨り潰して撒いたものを自分たちは吸わされたのだろうか・・・。

「ここを離れましょう」

アカアの声に全員が注目する。

「もし幻覚なら、離れればいずれ効力は切れるはずよ。そうすればはつきりするでしょ？」

なるほど、それもそうかもしれない。全員は納得すると、『子供』をブラックに預けたままその場から離れ、再度歩き出した。

一刻後。

「ほら、見たことか」

「うつうつうつうさあああああいつつつつ！！！」

冷たい目のままエク스에指摘されたブラックは瞬時に赤面し、あまりの恥ずかしさに抱いていた低木を上空の太陽に向かってレーザービームの如くぶん投げた。

「本当に・・・幻覚だったんだ」

「メロディ・・・」

「何？リズム」

声をかけたリズムにメロディは振り向くと、

「エク스에謝ったほうがいいよ」

「謝る？なんで私が？べつに私は悪くないじゃない」

「そりゃメロディが怒ったのも分かるけど、『化け物』は言い過ぎだよ」

「そうね、リズムの言うとおりよ」

ビートもリズムの味方をする。

「メロディが怒るのも無理ないと思うけれど、さすがに『化け物』はないと私も思うわ。エクスだって私たちと年齢が変わらない少女なのよ。確かに乱暴だったかもしれないけれど、エクスは私たちを

幻覚から覚まそうとただけなんだし、『化け物』なんて言われたらいくらなんでも傷つくわ」

「何よ！ふたりしてあの人の味方なんかして！まるで私のほうが悪人みたいじゃない！」

「そういうわけじゃ・・・」

「いいよ、べつに。謝らなくても」

どうやら三人のやり取りが耳に届いていたらしい。エクスは口を挟むと、少しも変化の見えない無表情で続けた。

「べつに『化け物』と呼ばれているのは慣れているし、嫌々謝ったところでそれは解決にならない。だとしたら、最初から謝らないほうがいい。そのほうがさらに傷が深くならずに済む場合もあるから」  
「なに、その言い方！」

もはやメロディは我慢を超えていた。幻覚だったとはいえ、『子供』を容易に斬ろうとした行為への怒りも完全に収まっていけないというのに、同じ14歳の少女の、実に居丈高で、人を上から見下すような態度に再び『堪忍袋の緒が切れた』のだ。両眼はエクスのみを睨み据え、頭の血管は次々に切れていき、リズムとビートに抑えられている全身が熱く火照っている。

「あつつそ！じゃあそっちがその気なら、こっちもご好意に遠慮なく甘えさせてもらうよ！もう何があったって、私は絶対に謝らないからっ！！」

メロディはそう吐き捨てると、踵を返し、その場から離れ出した。

「ちょ、メロディ！どこ行くの！？」

「どこだっていいでしょ！すぐ戻るから！」

「そんな、一人じゃ危険よ！」

「ほっというて！」

やがてリズムをはじめ、全員の視界からメロディの姿が見えなくなる。一同は複雑さが込み上がりながらもどうすることもできず、ただ見ているしかできなかった。

「ねえ、あなた・・・」

ふいにムーンライトがエクスに声をかけた。

「さつき『化け物』と呼ばれているのは慣れていると言ったわよね？それって、どういう・・・？」

だがムーンライトは途中で口を閉ざした。言葉を最後まで言う前にエクスが身体を回して彼女に背中を向けたのだ。どうかしたのだろうか。一同が訝しげに思っていると、背中を向けたままエクスは突然ブツブツと呟いた。

「・・・アニュー？いきなり何の用？脳量子波のチャンネル開いて・・・『えりか』が？」

「私？」

マリリンが自身を指差したが、エクスは独り言を続けている。

「定期検診は昨日のはず・・・『えりか』？・・・ハンティング狩り・・・

・・・分かっているわよ、手っ取り早く早く済ませて・・・」

「ちよつと、さつきから一体何を話しているの？返事をしなさい！」

当初は呆気に取りられたムーンライトだったが、遂に堪えきれず、彼女の左肩に手を置いた。すると、

「・・・ごめん、邪魔が入った。続きはあとで・・・」

最後にそれだけを口に出し、黙り込んだ。彼女の左肩に片手を置いたまま、ムーンライトがしばらく待機していると、やがて、ふう、と吐息が聞こえた。

キョアムーンライト

「・・・月影ゆり、あなたが言ったださつきの質問、聞きたい？」

「え？ええ・・・」

すると、少し間を置いてエクスは、

「これが答えよ」

身体ごと振り返り、一同に顔を向けた。

「ひっ・・・！」

思わずムーンライトは両手で口を抑えた。他のみなも表情に衝撃が一瞬で走り、愕然となった。妖精たちに至っては多くが恐怖している。

「刹那・・・そんな・・・！」

彼女と共同活動が多かったセラフも知らなかったらしい。一瞬で両目を見張り、顔色が蒼白になる。

天上刹那「キュアエクスの両目、そのふたつの瞳の虹彩は金色に輝いていた。まるで最初からこの目をしていたと言うかのようにその輝きは有無を言わせない効力を持ち、相手の身体を暫時拘束する。それは数々の激戦を経験してきたプリキュアたちも例外ではない。全員が全員驚愕の表情のまま突っ立っており、エクスのすぐ目の前にいるムーンライトさえも身体が小刻みに震え、声が一言も出なかった。」

「ま・・・またムプ！」

「また出たフプ！」

誰もが声が出ない状況の中、一番に発したのはムープとフープだった。二匹とも表情が怯え、身体を震わせながらもエクスを指差して言葉を続ける。

「昨日の夜、ムープたちは見たんだムプ！」

「みんなが寝た後エクスは今みたいに目を光らせてひとりで喋っていたフプ！」

「・・・そう。あなたたちだったの。あの時かすかに気配を感じたような気がしたから、少し気になっていたのよ」

「あなた・・・一体、何者なの？」

唾を飲みこみ、ようやくムーンライトが両目をもとの鋭さに戻して問う。ムープとフープから視線を移したエクスは、

「わたしは生体情報端末・・・」

淡々とした口調で、

「イノベイドだ」

答えた。

## 次回予告

遂に判明するエクスの本当の姿

仲間であるセラフさえも知らなかった彼女の秘密が明かされる  
次回『人造人間』  
人の形をしながらその存在、まさに怪物

## 種明かし（後書き）

ちなみに空色朝顔は本当に存在し、種子に幻覚成分のリゼルグ酸アミドが含まれています。



## 人造人間（前書き）

難解でしたら、すつ飛ばして読んでも構いません。

## 人造人間

月影ゆりが尋ねようとした時、私の脳内に信号が鳴り響いた。  
相手は分かる。私は彼女に背を向け、交信を始める。

《おはよう刹那、そっちの状況はどう？》

彼女、アニュー・リターナーの声が即座に聞こえた。

「アニュー？いきなり何の用？脳量子波のチャンネル開いて」

《ごめん。でも『えりか』がどうしてもあなたの安否を知りたいって言ってきたから》

「『えりか』が？定期検診は昨日のはず……」

《暇潰しに来たんですって》

《刹那》

アニューに代わり、別の声が聞こえる。この声も知っている。

「『えりか』？」

問うたが間違いはない。『来海えりか』だ。

《刹那、今何してるの？》

ハンティング  
「狩り」

またアニューに交代した。

《昨日の夜も言ったけれど、さっさと済ませなさいよ。リボンスがうるさいんだから》

リボンスか。確かにあいつはうるさい。このまま長引けばどれだけくどくど言われてしまうか。

「分かってるわよ。手っ取り早く済ませて……」

肩に手を置かれた。キュアムーンライトの手だ。何を話していると言っている。無視するわけにもいくまい。

《どうしたの？刹那》

「……ごめん、邪魔が入った。続きはあとで」

交信を切り、私はやむをえず彼女たちにこの金色の瞳を晒す。そこにあったのは予想内の反応。セラフも驚愕している。ああ、そう

いえば彼女にも初めて明かすんだっ たね。

一体何者だと問うムーンライトに私は淡々とこう返す。  
イノベイド  
生体情報端末だと。

「イノベイド・・・何なのそれ？」

蒼白な顔立ちのまま、次に蒼乃美希キョアベリが聞く。仕方あるまい。彼女たちは別の世界の存在なんだから。

「話せば長くなるけど、よく聞いて」  
と前置きして私は解説す。  
はな

イノベイドの前にまずはイノベイドの説明から始めよう。

イノベイド。太陽光発電を開発した技術者でもあるイオリア・シュヘンベルグがやがて現れるであろうと予見した、進化した人類。基本的には『脳量子波を扱え、意思疎通が図れる人間』のこと。理論的な寿命は普通の人間の倍近いとされ、細胞そのものが変異して人間とは比べものにならない身体能力と肉体強度を誇る・・・まあ、イノベイドの話は大体この程度でいいだろう。

イノベイドはそのイノベイドを模倣して造られた人造人間でイノベイドと同様に脳量子波を扱える。イノベイドは大きく二種類に分けられ、自身がイノベイドだと知らないまま人類社会に潜入し情報収集する情報収集型と、戦闘要員やエージェントとして活動する戦闘型が存在する。言うまでもなく私は後者のほう。『ヴェーダ』とリンクして応じた情報を意識下に取得して人より高い身体能力を持つ。・・・え？その前に『ヴェーダ』とは何かだって？分かった、来海キョアマリンえりか。あとであなたに分かるように説明するから。でも今はちよつとだけアニユー・・・私の『きょうだい』と話をする時間をくれる？まあいいけど？ありがとう。

《刹那、何かあったの？》

交信を始めた途端にアニユーの声が再び聞こえる。

「うつん、べつに・・・」

《・・・もしかして、そちらの人たちに話した？自分がイノベイドだって》

・・・相変わらず勘が鋭いな、アニユー。

《凶星なのね》

「・・・ええ」

《刹那》

また『えりか』に代わった。

《聞いた話だけどそっちの来海えりかは、随分呑気なんだね》

「呑気というか、能天気というか・・・おめでたい性格のようね」

でもプリキュア同士が戦い合っている中で『世界破壊派』のあなたが暇潰しにアニユーの所にいる点に関して言えば人のこと言えないと思うぞ、『えりか』。

《ところで刹那》

アニユーの声に戻る。

「何？アニユー」

《ちよつとくらい見栄張って『私は革新者だ』<sup>イノベーター</sup>と言つてもよかったんじゃない？》

面白がっているのか、アニユー。でも言えない。言えるわけがない。

「そんなこと言ったら、アニユーの恋人の僚友<sup>カレ</sup>に申し訳がたたないじゃない」

瞬間にアニユーの声のトーンが低くなる。

《ライル・・・刹那・・・》

「分かる・・・でしょ？アニユー」

《そう・・・ね。ごめん、刹那》

「いいよ」

《・・・もう報告することはなさそうね》

「ええ。じゃあそろそろ切るわ。『えりか』によろしく」

《分かった》

交信を終えて再び彼女たちに振り返ると、途端にキュアマリンのジト目が眼前にあった。徐々にもとの色に戻りつつあるとはいえ、まだ金色の輝きが瞳に残っているというのにもう恐怖心はなくなっ

たのか、この娘は。

「・・・ねえ、今呑気だとか能天気だとか言ったよね？それって、誰のことを言ってるの？」

「・・・ああ、それでか。彼女も妙に鋭い。しかし、ここは『知らぬが仏』。無視しよう。」

「アニニュー・・・って聞こえたけれど、誰なの？」  
ムーンライトが聞く。

「あえて言うなら、『もうひとりの私』かしら？」  
「どういうこと？」

またベリーが聞く。私は無言で懷に手を見せて、彼女たちに見せた。

「これは？」

「情報端末」

キョアアクア

水無月かれんは私の手にある情報端末に入っている顔写真データを指差した。

「あなた、ちゃっかり自分の顔写真のデータを情報端末に入れているのね」

「違う。それがつい今まで私と話していたアニニューの写真」

「！・・・嘘。嘘言わないで。これがあなた以外の誰だって言うの！？」

明らかに狼狽している。まあ無理もないか。

「私とアニニューは塩基配列パターンが同じだから顔立ちも同じなのは当然・・・」

「塩基配列パターン・・・遺伝子配列のこと？」

キョアホライト

雪城ほのかが尋ねる。さすがだ。

「そう。生体データと人格データさえあれば、今までの記憶をそのままに蘇らせるのも可能」

「どういうことなの？」

キョアリスム

南野奏が聞いた。

「私たちイノベイドは『死の概念』というものが存在しない。イノ

ベイドにとって、肉体はただの器にすぎない・・・のかもしれない」

イノベイドの肉体はヒトの遺伝子から合成された細胞を組み立てて構成され、完成した時にはすでに設定された年齢になっている。肉体に『ヴェーダ』内で造られた人格と記憶をインストールすることで完成する。いくつかの遺伝子データからタイプ別に分けられており、同じ容姿を持つ者が数多く存在するわけ。

イノベイドを構成する合成細胞は自力で新陳代謝を行えないため、細胞を完全に再構成するナノマシンを投与されており、その副次的効果で肉体的に老化・・・つまり成長しない特徴を持つ。また老化しないという関係上、『不慮の死の経験』は貴重な情報として、死亡寸前に人格データが『ヴェーダ』にバックアップされる。

ああ、そろそろ『ヴェーダ』の説明に入ろうか。

『ヴェーダ』というのは量子演算処理システム・・・分かりやすく言えば私たちの世界の現時点で世界最高の性能を有している量子コンピューターで、その情報ネットワークは巧妙に隠されながら世界中に張り巡らされている。でもすでにその複雑さゆえに機械生命体として成立しており、自我を持つけどその自我が機械的な精神構造のため、矛盾だらけの人の精神構造を理解するに至っていない。そのために開発されたのが私たちイノベイド。こういった生体情報端末は固有の自我を有するとともに常に『ヴェーダ』とリンクしていて、『ヴェーダ』に人間のデータをアップデートする一方で監視されている。そのため、計画に反する行動を取ったイノベイドは直ちに機能停止に追いやられるの。

なお、情報機密としてはレベル7まで存在し、そのメモリには様々な技術が蓄積されていて、情報のリアルタイムでの書き換え、さらに全世界のコンピューターへのハッキングを気づかせないまま行うのも可能とする。今回のマルガの存在も『ヴェーダ』で知ったわ。ここまですで何か質問はある？

「質問ある？・・・って聞かれても」

「難しすぎて頭痛いナリ・・・」

「いや・・・もう何が何だか・・・」

「あははは・・・ゼーんぜん分かんない」

ホワイトやイーグレット、アクアやムーンスライトといった知性派は完全理解し、彼女たちほどでないにしろそれなりに勉強ができている者たちも一応辛うじて理解ができていたが、ブラックやブルーム、マリンやドリームといったいわゆる『おバカさん』たちは脳が拒絶反応を起こし、理解不能になっていた。たぶん、塩基配列の時点でわけが分からなくなっていただろう（ちなみにミューズも理解できていなかったようだが、彼女はまだ小学生なので仕方ない）。

一応、分かりやすく説明したつもりだったんだが、無駄骨に終わったか。

エクスは少し失望した。

「つまり、あなたはその『ヴェーダ』に生み出され、『ヴェーダ』に生涯仕える人形・・・でことですか？」

「プロッサムがおずおずと尋ねた。エクスはしばらく考えて

「・・・どうだろうね」

とだけ答えると、

「そんなのおかしいです！！」

彼女は突然叫んだ。

「・・・おかしい？」

「ええ、おかしいです！人造人間だかなんだか知りませんし、親でもある存在に忠誠を誓うのも結構ですが、この世に生まれてきたからには自分のために生きてもいいはずですよ！なのにその『ヴェーダ』のためだけに行動をして、違反したら『殺されてしまう』なんて・・・そんなの勝手すぎます！あなたはおかしいと思わないんですか？自分のために生きようと思えないんですか？！」

「・・・私はそんなこと少しも気にしていない。花咲つぼみ」

「え・・・？」

エクスの言葉にプロッサムは思わず呆けた面持になる。

「私はむしろその『進化した人類』の仲間になれたことを誇りに、

そして喜びにさえ思っている。確かに相手に左右されることなく自由に生きるのもいい。でも、私を生み出し、素晴らしい体を与えてくれた相手のためだけに持てる力を出し切っても一生懸命に頑張る・・・たとえばこの命果てるまでになっても、それもまた自分のために生きることであり、私にとっての『幸福』なのよ」

「幸福・・・」

「どう感じるかはあなたの自由よ。でも私は少しも不満や後悔を抱いていないし、これからもうした生き様を貫いていくつもり・・・私の生き様を否定するなら、それこそ勝手じゃないかしら？」

「う・・・」

確かにそうかもしれない。第三者から見れば不幸かもしれないけども本人がそれで満足しているのなら、干渉する必要はないかもしれない。『幸福』にも色々な種類がある。持て余すほどの金で毎日贅沢三昧を行うのを幸せに感じる人もいれば、貧しくても不満を抱くことなく毎日穏やかに平和に愛する人との愛を確かめ合って暮らしていくのもまた幸せだ。その幸せを不幸だと第三者が決めつけ、変えようとするのは間違いなくエゴだ。

「本当・・・幸福って、何なんだろうね？」

マリリンが呟いたが、誰も答えられなかった。

「全く、リズムもビートも・・・なんであんなやつの味方なんかに・・・」

メロディはブツブツ呟きながら、森の中を進んでいた。歩いていれば少しは気が晴れるかと思ったが、余計腸が煮えくり返っている。このまま怒りが鎮まるまで森の中を歩いていたらたけれど、いつまでも戻ってこなければみな心配する。それに自分はこの森のことを少しも知らない。迷子になって、最悪森から出られなくなるのも嫌だ。

仕方ない。あいつの顔なんて見たくもないけど、まだ道を覚えて



いるうちに戻るとするか。

メロディはやむをえず来た道を振り返り、歩き出そうとして、ふと、頭上に気配を感じ、「ん？」と見上げる。  
う……。

瞬間に声がそう、メロディの口から漏れた。

#### 次回予告

メロディの危機にすぐさま駆けつけるプリキュアたち  
彼女が遭遇した存在にある手段を試そうとするが……  
次回『分散』

それが最悪の事態を招くなど、知る由もない

## 人造人間（後書き）

「それじゃあアニューさん、そろそろ私行きます」

「あら『えりか』、もう帰るの？もっとゆっくりしていてもいいのに・・・」

「いやいや、さすがにこれ以上厄介はできませんからね。お茶ご馳走様でした。美味しかったです」

「どういたしまして」

「また来てもいいですか？」

「もちろん。またサンドイッチ作ってあげるからね」

「あゝいや、それは・・・。とにかくまた来ます。刹那にグッドラックと伝えといてください」

「分かったわ」

『来海えりか』はぺこり、と頭を下げると、出口へと歩んだ。数秒後には彼女の姿は視界から消えてしまう。

「・・・待つて」

「?・・・アニューさん？」

気がつけば、アニューは無意識のうちに『えりか』を呼び止めていた。不思議そうに首を斜めにする彼女にアニューは「あ・・・」と声を漏らすもそれ以上は続かない。しばらく悩んでようやく選んだ言葉を口にする。

「ねえ・・・」

「?・・・はい」

「私たち・・・分かり合えてたよね？」

何かを確認するような口調に『えりか』は一瞬虚を突かれた反応を示したが、

「もちろんっしゅー!」

すぐに二カツと齒を見せた笑みを示し、ビシツと親指を立てると、  
そのまま扉を開いた。

## 分散

「・・・ところで話変わるけど、メロディ遅くない？」

「あ、そういえば・・・」

未だメロディが戻ってきていないのを指摘したミューズにリズムはようやく気づいた。彼女だけでなく他のみなもエクスの話に聞き入っていて（一部は半分も理解できていなかったが）メロディの存在をしばし忘れていた。

「もしかして、森の中で迷っているんじゃない？・・・？」

「うゝん・・・メロディならありえそうな気がする」

ミントが最悪の想像を口に出すと、リズムは額に人差し指を当てて低く唸る。

「じゃあ急いで探したほうがいいよ。まだ遠くに行っていないと思うし」

「どうやって？この森は広すぎるんでしょ？」

セラフの言葉にローズが言うと、

「ここはハミイにお任せニヤ！」

ぽん、とハミイが肉球で胸を叩き、すぐさま地面に鼻を近づけ、くんくんと周辺を嗅ぎ回った。

「！・・・コッチニヤ！」

脈あり、と顔をしたハミイは即座に駆け出す。猫みたいな姿のくせにおまえは犬かよ、とほとんどが心の中で突っ込まずにいられたかったが、ここはハミイの鼻を信じるしかない。プリキュアと妖精たちはすぐにハミイのあとを追いかけると、数分も経たないうちにメロディの背中が一同の視界に映った。

「メロディ」

「メロディ！」

すぐにハミイとリズムがほっと笑顔を浮かべる。プリキュアと妖精たちの間にも安堵した空気が漂った。すぐにリズムはメロディに

駆け寄る。

「もうメロディったら、遅いよ！でも怪我もなくてよかった・・・」

しかし、メロディの様子を見て言葉を切る。メロディは頭上を凝視したまま、棒立ちになっていた。ぴくりとも動かない。

「メロディ・・・？」

名を呼んだが、反応しない。どうかしたのだろうか。リズムをはじめ、全員がメロディの視線の先を追って頭上を見上げる。

「う・・・」

思わずエクスは小さく唸りの声を漏らした。

頭上、木の枝から大きな二枚の羽を持ったかなりの数の『妖精』たちがプリキュアたちを見下ろしていた。姿は大人の女性。鮮やかな若草色のふわふわとした毛に覆われた体。同色の大きな羽は蝶に似ていてそれはそれで美しいのだが、その羽に描かれている眼球をイメージさせる不気味な模様とまるでムカデの足のような触角、そして禍々しく光る紅色の複眼がひどく毒々しい。

「もしかして、これ・・・蛾？」

『妖精』を観察していたサンシャインがそう漏らした。無数の蛾の『妖精』たちはプリキュアたちを食い入るように見続けている。それだけで一同の頭の中を嫌な予感が次々によぎった。そもそも『蛾』という単語からどうしても悪い印象が出てきてしまう。

やがて蛾の『妖精』たちは枝の上で次々に立ち上がり、二枚の若草色の羽を大きく広げて一斉に飛び立った。瞬間にその羽から発せられる大量の黄色の粒子が辺り一面に雪のように降り注ぐ。すぐにエクスが叫んだ。

「いけない！これは毒の燐粉よ！吸ったら死ぬわ！」

「・・・やっぱいいっつ！！」「・・・」

一同は素早くその場から避難、周辺の大きなシダの葉陰に身を隠し、両手で目と鼻を塞ぐ。蛾の『妖精』たちは羽ばたきながら頭上を飛び回った。粒子の雨が細かな光を放ちながら飛散する。

「凄い数・・・これじゃ埒<sup>らち</sup>がない」

「！・・・そうだ。ルージュ、必殺技よ！」

「へ？必殺技？」

突然言ったドリームにルージュは呆けた顔になる。

「そう！虫の『妖精』なら、きつと火が突然出てきたらびっくりしてどこかに逃げるかもしれないし、火の勢いが強かったら、燐粉だって燃えてなくなっちゃうかもしれないじゃん」

「！・・・なるほど」

ドリームのアイディアにしては一理ある。

「それいいと思います！さすがドリームです！ルージュ、お願いします」

「・・・分かった、やってみる！」

「火・・・燐粉・・・」

レモネードが賛成したこともあってルージュが決意を固めた一方で、彼女たちのアイディアを聞いていたホワイトはつい顎に片手をやって黙考していた。何か重大なことを忘れている気がする。それが何なのか思い出せない。「ホワイト、どうかしましたか？」とルミナスが隣から聞いてきたが、彼女は返事しなかった。

「・・・よし！」

ルージュは目を瞑って精神を集中させて腕を交差し、両手の甲を光らせる。光が炎の一球に変わった刹那、両目を開いたルージュは片足を後ろへと大きく振り上げると、

「プリキュア！ファイヤーストライク！」

技名を叫ぶと同時に地面に向かって、炎のサッカーボールを思いっきり蹴り飛ばした。

「火・・・燐粉・・・火に燐粉・・・燐粉に向かって火・・・！！・・・いけない！ルージュ！ダメッ！！」

口ずさんでいるうちにやっと重大なことを思い出したホワイトが慌てて叫んだが、遅かった。ルージュが召喚した炎の球は地面に激突した瞬間に紅蓮の柱を立てたが、辺り一面に舞い散る燐粉が『起爆性』を帯びているなど彼女にはまだ学習不足だった。

「……きゃあああああああああつっつっつ！！！」  
「……」

鼓膜が破れそうなほどの爆音と膨大な光芒、強力な爆風が一度に起こり、それは一瞬で蛾の『妖精』たちも燐粉も吹き飛ばしたが、同時にプリキュアたちもバラバラに散開させる結果となった。

「プリキュアーツ！」

彼方へと飛んでいったドリームを追いかけようとココが走ったが、すぐに制止される。制止したのは大量の砂をその身に受け、土埃にむせていたエクスとセラフだった。爆発が起こる寸前、瞬時にそれを予測したふたりは自らの身を挺して妖精たちを死守したのだ。幾分か咳を繰り返した後でエクスは言う。

「やめときなさい。迷子になるだけよ」

「でもプリキュアが……」

「彼女たちだって伊達じゃないのは私よりあなたのほうがよく知っているはず。この程度で死ぬわけがないと信じたらどう？」

「でもあんさんら、言うてたやないか。この森には色んな動物がぎよーさんおるつて。バラバラになってしもつたら、ますます危ないんとちゃいまつか？」

「キュアア……」

タルトが反論し、シフォンも心配げな面持で見つめた。

「確かにそうかもしれない。けど、同時にこれは好機でもある」

「好機……ロプ？」

シロップが首をかしげると、

「おそらく今の爆発はマルガの耳にも届いたはず。大多数の人間がこの森に入ったのを知れば、きっとマルガは喜んで歓迎するわ。自身の力で相手を幸せにするためにね。このままマルガを追えば仲間にも辿り着けると思うわ」

「本当ですか？」

「信じるか信じないかはあなたたち次第」

どこかの都市伝説テラーみたいな台詞を言ったエクスに対し、妖

精たちは本当に信じてよいものか躊躇したが、ふたり以外にプリキユアたちがいない今、他に頼る者はいない。それに彼女たちは弱い自分たちを自ら身体を挺して守ってくれた。信じるに値するかもしれないし、どちらにしろ危険な森の中を散策するのなら、大勢でいたほうが有利だ。そのほうが早くプリキユアたちの気配を感じて見つけることが可能かもしれない。

妖精たちが同行するのを決めた一方でエクスは一つだけ心配事がある。しかし同時にマルガに接近する者たちの耳にも届いてしまっただのではないかと。

「・・・何だ？今の音」

「森が・・・揺れた？」

デスバイア、グライファーは背後から突如聞こえた轟音にすぐさま振り返った。一瞬地面が揺れ、森に暮らす鳥たちが一斉に木陰から飛び立つ。

「爆発・・・？」

思わず焼き鳥の鉄砲串を口から離し、バインドも呆然と呟いた。

「・・・」

サバーニヤは轟音が聞こえた方角を凝視していた。じっくり見据えたまま、少しも動こうとしない。

「・・・サバーニヤ？」

姉の様子に気がついたグライファーが声をかけたが、やがて返ってきたのは「ふん・・・」と鼻を鳴らしたサバーニヤの、不敵な微笑だった。

「戻ろう」

「え？」

サバーニヤの言葉にデスバイアが小さく驚く。

「戻る？おいおい、早く先に進まないと『獲物』が？」



「デスバイア、アンタ馬鹿？」

「は？」

瞬時に姉の意図を理解したグライファーにまた突っ込まれるも、彼女はまだわけが分からない。

「いい？『獲物』は好奇心旺盛だつていうの忘れた？一体何が起きたのかは分からないけど、爆発が起きたのなら『獲物』も気になつてすでに向かつている可能性もあるじゃない？」

「あ・・そうか。なるほど、そこを叩けば・・・」

「分かったのなら行こう。三人とも」

すでもと来たルートを辿り始めていたサバーニヤが三人に振り返る。

「あと少しで終わるかもしれないのだから・・・私たちは誰にも邪魔をされるわけにはいかないのだから・・・分かるよね？」

一瞬だったが、眼帯をしていないサバーニヤの、蒼い右眼に悲しみの色が帯びているのを三人は見逃さなかった。気を引き締め、深くうなづく。

「分かっているよ、サバーニヤ。僕たち自身のためにも、引き下がるつもりはないから・・・」

デスバイアはそう返事をする、グライファー、バインドとともに彼女に歩み寄った。

一方で爆発音はリベリオンとアルガティア、ロモモの耳にも届いていた。

「今のは何の音ロモ？」

「何かが爆発した・・・ようね」

ロモモの問いにリベリオンが答えると、突然アルガティアがその方角に向けて走り出した。

「うわっ!？」

だが、リベリオンと片腕が手錠で繋がれているのをすっかり忘れ

ていた彼女は途端に転倒してしまった。

「あらあら、無様ね」

「うるさいっ……ちょっとあなたね、いい加減外しなさいよ！  
私は今すぐあそこに行きたいのよ！」

立ち上がった爆発音がした方向を指差すが、リベリオンは相変わらず冷めた目つきのままだ。

「それって命令？生憎私は命令されるのは嫌いなんでね。そもそもあなたの命は私が預かっているということ、理解している？」

「っ……」

ええい、仕方ない。ここはハツタリだ。

「もしかしたら、<sup>キュアセイバー</sup>雨牙真夜に会えるかもしれないのよ！」

「……何？」

「本当口モ！？」

よし、食いついた！

「おそらく『幸福』はすでに向かっているはずよ。『幸福』を捕らえれば、雨牙真夜の居場所もきつと分かる。ぐずぐずしている暇なんか少しもないのよ。だから……外しなさい、手錠<sup>コレ</sup>！」

「……分かった」

よし。ようやくとこれで、自分は自由……だ？

「……なんで隣に並ぶの？」

「なんでって、私も一緒に行くのよ。無事真夜と会えたら、外すわでもハツタリだったら、困るんでね。……さ、とつとと行こうか？」

ちっ。

こいつ、自由になったら、即座に蜂の巣にしてやる。

苦々しさに三度目の舌打ちをするアルガティアだった。

「いったあ……」

痛む身体を起こし、メロディはなんとか立ち上がった。周囲を見

渡すと、群青の木立に苔や蔦が大樹の幹を覆っている。明らかに先ほどの森とは違う。あの爆発で自分はそんなに吹き飛ばされたのか。  
「！・・・みんなは？」

ふと、他の仲間はいなく、自身のみしかいないのを確認する。急に心細くなり、メロディはまず最も親しみの深い名前を呼ぶ。

「リズム！ビート！ミューズ！ハミイ！おーいっ！！」

声を精一杯出して叫ぶが誰の返事も聞こえない。ざざざ、と風が横切り、ますますメロディの不安を煽った。

もう一回呼んでみよう。そう思い、メロディは再び声を出そうとして・・・突如聞こえた咆哮に中断された。

「え・・・？」

背後を振り返り、大樹の影から何かが動いたのに気づく。

10メートル以上の体長。触れただけで痛そうな鱗。何でも引き裂いてしまいそうな爪とどんな硬いものでも飴玉の如く噛み砕いてしまうのではないかと思わせる強固な顎と数本の尖った牙。見る者を一瞬で震わせる光る両眼。

「ああああ・・・」

メロディは思わず腰が抜け、そのまま後退った。

「た・・・確かに絶滅した動物が暮らしているってのは聞いたけど・・・こんなヤツまでいるなんて聞いてないよぉっ！！」

それは世界最大の肉食獣とも言われ、現時点でも王者として君臨する恐竜界の猛者。

ティラノサウルス・レックス。

## 次回予告

バラバラになってしまったプリキュアたち

他のみなにも獰猛な動物たちが襲撃し、危機にさらされる

次回『ロストワールド』

生き延びるには逃げ切るか、戦うしかない

## 分散（後書き）

先に言っておきますが、今回の話を書き終えるまで『ジュラシック・パーク』の『ジュ』の字も思い出しませんでした。

## ロストワールド

ティラノは腰を抜かしているメロディを凶眼で見据え、ゆっくりとその巨大な顔を近づけた。嗅覚を駆使しているらしく、ひくひくと鼻の穴が開閉を繰り返している。やがて開閉を止めたティラノは明らかに唾液がこぼれ、数本の大きな牙が見えるその口を開き始めた。

「うわああああああああああっつつつつ！！！」

メロディに迫られた選択はひとつだった。瞬時に腰を抜かした身体を起こして後方に飛び退き、間一髪で牙の餌食から逃れた。が、ティラノは獲物を殺<sup>や</sup>り損ねたことで俄然食欲性が湧いてきたらしい。大空に目がけて咆哮を轟かすと、両足の脚力を活かしたダッシュを開始、一刻の猶予も与えない速さでメロディに再び迫った。

疾<sup>は</sup>やい・・・っ！

メロディは横に跳んで回避するが、

「うああっ！？」

次の瞬間、太い強靱な尾がムチの如く襲い、メロディを地面に叩きつけた。全身を強打し、苦痛に表情が歪んだメロディに次に迫ってくる爪牙をすぐにかわす力はなかった。

ダメだ、食べられちゃう・・・っ！

奥が見えない空洞を眼前にして、メロディは思わず目を瞑った。

「はあっ！」

だが知った声が聞こえ、「え？」とメロディは視界を開く。すぐに歓声をあげた。

「ビート！」

「大丈夫？メロディ」

ビートは跳躍し、片足を振り上げてティラノの爪牙を蹴飛ばすと、瞬時にラブギターロッドを召喚、

「ビートバリア！」

自身とメロディを青色のバリアで包み込み、すぐに襲ってきたティラノの牙を防御した。だが強固な顎を自慢とするティラノもあきらめていない。数本の牙と両手の爪を駆使した剛力に耐えられなくなり、バリアに亀裂が入り、広がっていく。

「そんな！」

メロディが愕然とした声をあげた瞬間、嫌な音とともに青い破片が無数に拡散し、バリアが粉碎される。

「嘘・・・ビートバリアを破るなんて！」

「さすが恐竜の王者だけのことはあるわね・・・！」

ビートもティラノの剛力に驚愕し、一筋の汗が流れていた。

「ビートソニック！」

ビートはラブギターロッドを弾き鳴らして周囲に青の音符を複数召喚、それを矢の形に変え、続々とティラノに浴びせた。矢の直撃を次々に受け、さすがのティラノも悲鳴に近い咆哮をあげる。少しだけだが、巨体が傾いた。

「今のうちに逃げるわよ、メロディ！」

「うん！」

ビートに返事し、メロディは即座に駆け出すが、途端に足を止める結果となる。

「何してるの！？このままじゃ食べられちゃ・・・！・・・」

ビートも気づき、足が止まる。

ふたりの目の前、わずか数メートル先に『もう一匹』いた。ティラノサウルスではない。全長はおそらく10メートル以上。鶏冠を持った細長いワニのような形の頭部。全体としては華奢な体つきで、背中には巨大な帆か扇に似た形のものが付いている。

「ス・・・スピノサウルス！」

「スピノサウルス？」

「ええ。推定全長は13から17メートル、推定体重は4から7トン、世界最大級の獣脚類のひとつに分けられている肉食竜で、背中の帆みたいなものは体温を調節するための内燃機関ラジエーターの機能を果たし

ていたと言われているわ」

「・・・ビート、なんでそんなに詳しいの？」

「音吉さんから借りたこの『恐竜図鑑』を読んで勉強したから」

「一体どこから出したのよ、その本！？・・・てか、そんなこと言ってる場合じゃないっ！！」

本当にどこから出したのかビートの持つ『恐竜図鑑』にツツコミするも、ふたりは即座に身体を180度回転、爪牙を曝してきたスピノから逃げ出そうとするが、さらに最悪が襲う。身体を回した直後にティラノの凶眼に睨まれ、ふたりは駆け出すのも不可能な状態に追い詰められた。

「も、もうダメだ！」

「待ってメロディ！なんだか様子がおかしいわ！」  
「え？」

確かによく観察してみれば二体の様子がおかしい。獲物を遂に追い詰めたというのに目をくれず、互いに敵意を剥き出し、睨み合っている。時折威嚇するように二体の間で咆哮が二度三度飛び交った。  
「い・・・一体どうしたの？」

「！・・・そうか。獲物である私たちを独り占めにしようと対立しているのよ」

一刻後、互いに頭突きし、ティラノとスピノの死闘が開始される。隙を突いてティラノがスピノの細長い首に噛みつき、皮膚の下に牙を深く食い込ませた。鮮血が首から流れ、スピノが喘ぎ声を出す。

「ああああ・・・」

メロディはただ呆然と立っているしかなかった。初めて目にする恐竜同士の命を賭けた死闘。壮絶で圧倒的だが、肌で直に感じてしまふほど生々しい。戦いに勝利した者だけが生き延びる弱肉強食の世界。これが太古からずっと続いてきた自然界でのルール。テレビや映画でしか見たことがなかったものを生眼で見てしまったからこそ、メロディはその迫力に圧され、一步も動けなかった。

「メロディ！なにぼうつとしてるの！？どっちが勝っても私たち食

べられちゃうのよ!？」

「あ、そっか・・・」

が、ビートの叱咤にすぐに我に返り、メロディは急いでその場から避難した。

数秒後、スピノの断末魔の咆哮がふたりの耳に届いた。

メロディとビートが避難したほぼ同時刻、ムーンライトとレモネードもまた危機に追い詰められていた。

相手は三体。体長は約2メートルあり、容姿はトラに似ているが、顔と頭部に獅子のような鬣たてがみが生えている。さらに顎には地面に突き刺せば地中深くまで食い込んでしまいそうな二本の大型の犬歯。

「ムーンライト、これは・・・？」

「おそらくスミロドン・・・サーベルタイガーの一種よ」

「！・・・サーベルタイガーって、何万年も前に絶滅した・・・？」

「ええ。今から300万年から10万年前に南北アメリカ大陸に生息していたと推測される太古の捕食者プレデターよ」

スミロドンは三体とも両眼でふた리를捕捉し、少しも離さない。歯茎も見える巨大な犬歯を光らせ、前足の爪も曝し、いつでも獲物を狩れるように体勢の準備ができている。

「レモネード、分かっていると思うけど、一瞬でも迷ったらダメよ。この自然界でのルールはたったひとつ・・・殺るか殺られるかよ！」

「は・・・はい！」

ムーンライトに返事し、両腕で構えを取るもやはり全身が強張り、表情に緊張が走る。なにしろ相手は今までのような邪な考えで自分たちに戦いを挑んできた連中ではない。ただこの世界で生きるためだけに全力を捧げるのだから。一筋縄でいくはずがないのは必至だった。

ムーンライトも目の前のスミロドン相手に鋭い両目で見据え、ゆっくりと両腕で戦闘の姿勢を取った。



一体が開始の咆哮をあげた直後、後脚を活かして三体が同時に跳躍した。

アルガティアとリベリオンは急ぎ、爆発音が聞こえた方角へ走っていた。

本来なら追加ブースターからGN粒子を爆発的に噴射してその場に急行したかったのだが、迂闊にリベリオンの怒りを買って命でもある片腕を犠牲にするわけにもいかない。彼女は自分の世界を二度も破壊しようとした悪魔。たとえ自身もひどく傷つこうとも赤の他人の片腕程度平気で？ぎ取るに相違ない。

忌々しいが『キュアセイバー雨牙真夜を助けたい』と想いが強い今、彼女も足のスピードを上げている。このまま手錠で繋がれたまま走り続けるしかないかと、アルガティアはひたすら前方を注視して駆けていた。

「ん……！」

ふいに前方にある『生き物』がふたりの視界に映る。馬に似た顔と細長の首。体は大きく、おそらく2、3メートルは超えている。両腕は後脚よりはるかに長く、鉤爪が生えており、まるでゴリラのように手の甲を地面に着けてナツクル歩行をしている。

「……まずい。これは！」

「わわっ!？」

アルガティアが突然急ブレーキして足を止めたため、今度はリベリオンが前に転倒するはめになった。

「ちよつと！さっきの仕返しのもり？」

「……そんなこと言ってる余裕はないと思う」

周囲を見渡し、アルガティアは手錠に繋がれていないほうの手で拳銃を握る。つられてリベリオンも辺りを見渡し、迂闊に刺激を与えないよう、静かに立ち上がった。ロモモはあわててリベリオンの背中に逃げる。

ふたりはいつの間にか数が増えていた『生き物』に包囲されてい

た。その数、五頭。全頭が開いた口から四角い歯を見せ、荒い吐息を繰り返している。

「こいつら、一体・・・？」

「カリコテリウムよ」

「カリ・・・？何それ？」

アルガティアが説明した。

「ヨーロッパやアフリカ、アジアにも生息していた推測される草食性哺乳類よ」

「草食性？」

「そう。あの長い手と爪で柔らかい木の葉や草の芽を食べていたと考えられているらしいわ」

「だったら、おとなしいんじゃない・・・？」

「馬鹿！この状況をよく見る！草食だからおとなしいという常識は間違いだ。アフリカでも人を殺すのはライオンではなくカバだと言われているほど草食動物は危険視されている・・・この自然界の中で生き抜く選択肢は『逃げる』か『戦う』かのどちらかだ！・・・言うまでもなくやつらは後者を選んだようだな」

「そのようね・・・」

リベリオンもようやく理解し、自身も左腕に装備した鉤爪を光らす。

圧倒的な肉体と鋭い鉤爪。繰り返される荒い吐息。どう見ても殺る気満々で、引き下がる様子はなさそうだ。

ぶおおおおおおおおおおつつつつ！！！！

法螺貝を轟かせたに近い咆哮で一頭が合図を送り、全頭が駆け出して総攻撃を仕掛ける。巨体なのに足が速い。見る見るうちに距離が縮まってしまう。

「くっ・・・！！」

迫ってくる一頭に、ふたりは即座にかわそうと走り出す。が、双方とも反対方向に駆け出したため、繋いである手錠がふたりを引き

止め、結果、彼女たちはまたも転倒に至った。

「つつ・・・もう！だから手錠コルいい加減外せって言っただろ！」

「・・・あなただって命令するなって言っただはすよ。だいたい年下のくせに口の利き方といい、少しは年配者を敬いなさいよ」

「おまえごとき悪魔を敬う気持ちなど、これっぽっちもない！」

「あつつそ。その悪魔に大切な片腕を預けられているのはどこのどちらさんですかね？」

「貴ツツツ様あ・・・、今すぐ蜂の巣に変えてやろうか!？」

「へえ面白い。殺れるものなら殺ってみなさいよ！大切な片腕を捨てる覚悟があるんならね！」

「ふ、ふたりとも、今は言い争っている場合じゃない口モ・・・・・・・・！・・・・き、来た口モ！！！」

「「!？」」

振り返った瞬間、双方の眼前に巨大な鉤爪が急迫する。直前にまで激しく言い争っていたふたりにそれを回避する余裕は一瞬もなかった。

「「あああああああああつつつつつ！！！」」

鉤爪に殴り飛ばされ、ふたりは仲良く地に激突した。

サバーニヤをはじめとする『監視者』の四人は爆発が起きたと思われる現地に到着していた。まだ至る場所に炎が燃え盛り、黒煙を噴いている。周囲は焦土と化しており、それだけで爆発の威力がいかに凄まじかったかを物語っている。

「サバーニヤ、空色朝顔の毒の他に何か仕掛けた？」

「いえ・・・どうやらこれは自然的に起きたもののようね」

デスバイアに答えた後、腰を降ろして周辺を見渡し、爆発をもろに受けたらしい毒蛾の『妖精』の死体は何匹か地に横たわっているのに気づき、サバーニヤはふと、爆発の要因が『妖精』たちの燐粉による粉塵発火の可能性を考える。だが粉塵発火の場合だと、当然

のことながらかすかでも火を要しなければならない。この森には架空や伝説上の動物も住んでいる。その動物は口から火を吐く力があると仮定するならば、それが運悪く『妖精』と遭遇して燐粉の雨の中で火を吐いたために爆発が起きてしまったのだろうか。いや、だとしても『妖精』の他にその動物の遺体があるはず。爆風で吹き飛ばされた可能性もあるが、痕跡が見当たらないのは解せない。せめて足跡ぐらいないだろうか、サバーニヤは地面を着目して、

「！・・・みんな、これを見て」

「・・・ん・・・？」

三人を呼んだ。そしてサバーニヤが指差したものを見、瞬時に目を見広げる。

「サバーニヤ、これは・・・！」

「ええ。どうやら、うかうかしてられないかもね」

なるほど、粉塵発火現象が起こったのもこれで納得したわ。

驚いて振り向いた妹にサバーニヤは両腕を組みながら淡々と返答し、不敵に微笑する。

四人の視界にはそう時間が経過していないと推測される明らかに人間の足跡、それに続く豆粒ほどの極細の足跡らしき痕跡が鮮明に残されていた。

## 次回予告

猛獣を相手に開始されるプリキュアたちの、生死を賭けた戦い  
その中でブラック、ピーチ、パッションの三人はあるエリアに立ち  
入る

次回『菓樹園』

そこはぶつちやけありえないけれど、誰もが見た光景

## ロストワールド（後書き）

これも先に言っておきますが、次回のタイトルは間違えていません。

## 菓樹園

ブラック、ピーチ、パッションは三人で森の中を進んでいた。幸い、見たことのない珍しい動物を見かけたことはあっても、遭遇した途端に襲ってくるような凶暴性を持つ獣類にはまだ遭っていない。しかし、先ほどのように毒蛾の『妖精』のような危険な存在にいつまた遭うとも知れない。そのため、三人は少しでも離れることのないよう、できる限り固まって歩行しているのだが。

「みんな、大丈夫かな・・・」

ピーチが少々翳りが見える表情で漏らす。

「大丈夫大丈夫。みんなそうヤワじゃないしさ、きっと無事だよ」  
「・・・だいいけど」

先頭に立つブラックが励ますが、やはり仲間の心配が拭えないらしく、ピーチの表情から翳りが消えない。それでもブラックはニツと笑いながら激励の言葉をかけた。

「信じようよ。たとえどんなに離れてても、私たちは心で繋がっている。プリズムフラワーの時に私たちはそれを証明できたじゃん」

「ブラック・・・」

「心配するのは分かるけど、大丈夫だって信じよう。信じていれば奇跡は必ず起きる。私たちの絆はそう脆くないんだしさ、きつとまた会えると信じよう。ほらほら、元気出して。ピーチにそんな顔は似合わないよ」

「ブラック・・・そうだね。立ち止まったら、前に進めない！みんなにまた会えると信じなきゃ！」

「そうそう。その調子！それじゃ先を進もうか・・・って、あれ？パッションは？」

「え・・・？」

元気が出てきたピーチに笑いかけたブラックだったが、ふと一緒にいるはずのパッションがいないのに気づく。ピーチも急いでパッ

ションを探していると、彼女が後方でふたりからかなりの距離を取った位置で歩いているのが見えた。

「パッション！」

「！・・・ピーチ・・・ブラック」

ふたりはすぐに彼女に駆け寄った。

「ダメじゃない、パッション。ちゃんとそばにいないと。私、一瞬生きた心地がしなかったよ」

「・・・ごめんなさい、ブラック」

「パッション・・・？」

謝ったパッションを見て、ふとピーチは彼女の様子がどこかおかしいのに気づく。歩いている時もそうだったが、彼女も沈鬱な表情を浮かべているのだ。ピーチと同じく、仲間のことが心配なのだろうか。

「パッション。パッションもみんなのことが心配なの？」

ピーチは聞いたが、彼女は首を左右に振った。

「ううん、確かに私もみんなのことは心配だけど違うわ。みんなのことは信じているし、きつとまた会えるって思っている。・・・ただ、私、エクスのことを考えていたの」

「エクス？」

なんでパッションがあいつのことを気にかけているのだろう。

確かに人造人間という点に関して言えば驚いたのは驚いたが、彼女は自分たちの都合のために幸福な時間を壊したり、幻覚とはいえず子供を斬ろうとしたりとあまり印象は良くない。そういう意味ではまだピーチは彼女のことを完全に許していないし、メロディが激怒する気持ちもよく分かる。メロディが？みかからなければ、自分がやっていたかもしれないとさえ思うのだ。おそらく人造人間であるうと関係なく。

「なんでパッションがあいつのことを思うの？」

「思うわよ。だって・・・あの人、昔の私に似ているもの。似すぎているくらいに・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを聞いて、ピーチは黙らざるを得なくなる。ブラックも空気を読み、口を噤んだ。

せつなの過去の姿、イースはかつてパラレルワールドに存在する管理国家ラブリンスにて在住し、国民の仕事や結婚、果てには寿命までも管理・支配する総統メビウスに自分の命を賭けてまで忠誠を誓っていた。全てはメビウス様のために。その言葉を復唱し、イースはただメビウスの命令のままに実行を移し、人々を躊躇いもなく不幸にしていた。メビウス様の言うこと成すことは全て正しい。メビウス様の喜びは自分の喜びだと信じて。

イースとして寿命を迎え、プリキュアに転生した際、彼女はメビウスと敵対するのを選択したが、それでも彼女はメビウスを恨んではいなかった。確かにメビウスが管理しているラブリンスは夢も希望も見えない世界だったが、彼女はそのことを当然だと思っていたし、不満も少しも抱いていなかった。それどころか本当にメビウスに心から忠誠を誓い、そのために働くのを喜びに感じていた。だから人々の幸せや笑顔の意味がどれだけ素晴らしく、そしてそれを壊すのが愚かなことが分かった時には自分にとって大切な存在であったメビウスにもその意味を理解してもらいたかった。結局、最後まで分かってもらえなかったけれど。

もし、メビウスが再び自分の前に姿を見せたとしても、パッションはそれでも理解してくれるよう訴えたいと今も思っている。母親も父親も知らないイース<sup>せつな</sup>にとってはメビウスのみが親のような存在だったから。

だから同じ“せつな”としての名前を持つ天上刹那「キュアエクス」の身の上はイースだった自分ととても似ているし、気にかかる。『ヴェーダ』に生み出され、『ヴェーダ』のために働き、不満を抱くことなくそれを喜びに、そして誇りにしている。彼女はそれはそれで幸福だと述べた。確かにそうかもしれない。けれど、それでいいのだろうか。たとえ人造人間でも生まれてきた意味はあるはず。



その意味までも親である『ヴェーダ』に捧げてよいのだろうか。本人がそれでもいいと頑なに言うのだったら、それまでだが。

「難しいことはよく分かんないけれど・・・だったらさ、パッション。一回エクスとじっくり話し合ってみたら？」

「話し合う？」

ブラックのアドバイスにパッションをちょっと小首をかしげる。

「そう。気になっていることをいつまでもうやむやにしているよりも一回話し合ってみれば、スッキリするんじゃない？そりやまあエクスはちよつとひどいと思うトコもあるけどさ、前にパッションのことを励ましてくれたじゃない。気難しいところもあるけど、たぶん不器用なだけで本当は優しいんだよ、あの人。そういう意味じゃ人間ものり弁当も変わらないと思うよ」

「のり弁当・・・？」

「あれ、違った？確かあいつ自分のこと、なんて言ってたっけ？えーと・・・」

「もしかして・・・イノベイドのことですか？」

「おおっ、それぞれ！」

「・・・」

どういう耳を持ったら、そう聞こえてしまうのか理解に苦しむが、ブラックの言った意味は分かった。確かに一度エクスと話し合ってもいいかもしれない。それで解決するかは疑問だが、何も行動を起こさないよりはマシだろう。

「ありがとう・・・」

パッションは微笑してブラックに礼を述べた。

「よし！だったら、エクスに会うためにもここは前を進んで・・・ん？」

ピーチとパッションに声をかけ、笑いながら先を進もうとしたブラックだが、途端に足を止める。嗅覚が何かを捉えたのだ。

「何？この香り・・・甘ったるい」

「「え・・・？」」

つられてふたりも嗅覚を駆使する。瞬間にほのかな香りがふたりの嗅覚を刺激した。どこか甘ったるくて、食欲を誘う香り。よだれが出てきてしまいそう……。

三人はその香りに誘われ、無意識のうちに方向を変えて歩き出していたのに気づかなかった。草木をかき分け、香りが誘う方向へとただただ進む。やがて三人の視界に入ってきたのは……。

「うつつわあ〜！」

ピーチが思わず歓声をあげた。

「ありえない……ぶっちゃけありえないっ！！」

ブラックはおなじみの台詞を漏らした。

「……………」

パッションは驚いたまま、ただ黙っていた。

三人の目の前に存在するのは文字通り『お菓子』のなる木々だった。ブラックやピーチの大好きなチョコやドーナツはもちろん、クッキー、ビスケット、大福、ケーキまである。色とりどりの種類のお菓子が木の枝になり、香りで誘っているのだ。

ぐうううう……。

途端、ブラックとピーチの腹部の音が鳴る。ふたりはすぐに腹部を抑え、互いに目を合わせて「えへへ……」と恥ずかしそうに笑った。

「そういえば、もうそろそろお昼だね……」

「うん。このまま無視するのももったいないし……ね」

「ちょ、ちよつとふたりとも、今は早くみんなを探さないと……  
ぐうううう……。

が、パッションも音が鳴り、頬を紅潮させてあわてて腹部に両手をやる。

「ほら、パッションも。『腹が減っては戦はできぬ』って言うじゃない。こーんなにあるんだし、ちよつとくらい大丈夫だって。行こ！」

「え？ちよつと、ピーチ！」

手を引つ張られ、パッションとピーチはドーナツのなる木々へと向かう。ブラックは好物のチョコレートの木に向かい、一つをジヤンプして？ぎ取った。両手のチョコに両目を煌かせ、よだれが垂れている口を大きく開けて早速一口味見する。

「うつつつまああああいつつつつつ！！！」

すぐに最高評の声が出た。ピーチもドーナツを二つ取り、一つをパッションに渡す。もらったのはもらったが、まだパッションは不審な目つきで両手のドーナツを見つめると、

「・・・ピーチ、やっぱりやめよう。毒かもしれないし、お菓子が木になっているなんてどう考えてもおかしいわ・・・」

「美味しいっ、幸せっ・・・！」

すでに一口食し、思わず片手で頬を抑えたピーチに啞然した。彼女の様子から観察するに『ほつぺたが落ちそう』なほどの美味なのだろうか。パッションはまだ怪訝な視線で見ると意を決して、小さく一口だけ口にする。

「！・・・美味しい」

それはいつもカオルちゃんが作るドーナツに匹敵するほど・・・いや、それ以上かもしれない。苦くもなく、甘くもなくサクサクとしたちょうどよい食感と香ばしさ。ピーチが思わず片手を頬にやったのもうなずける・・・と、無意識のうちに自身も頬に片手をやっていたのにパッションはすぐには気づかなかった。

しかし・・・確かに美味だったが、やはりお菓子が木になっているのはどう考えてもおかしい。もしかしたら、外見と裏腹に危険地域の可能性もある。ピーチやブラックには悪いが、ここはやはりすぐに離れたほうが賢明かもしれない。そう考えに至り、パッションはすぐにふたりに声をかけようとしたが、

「！・・・ピーチ？ブラック？」

ついさっきまでそばにいたふたりは、いつの間にか彼女の視界からいなくなっていた。

## 次回予告

ただひとり、吹き飛ばされてしまったパイン

動物をこよなく愛する彼女に新たな試練が待ち受ける

次回『愛護』

それはエゴかもしれない、けれどもどうしてもほつつておけない

菓樹園（後書き）

今回は短くできてよかったです。

## 愛護

「・・・綺麗」

パインは思わず感嘆のため息を漏らした。

目の前に広がるのは、一面深紅の、薔薇に似た大輪の花の大群生地だった。太陽の光をいっぱいに浴びて燃えるように咲き誇る花畑は一本一本が燐としていてたくましく、一瞬で目が覚めるほどだった。

そんな美しい景色の中、花畑に群れている者たちが見え、パインは注視した。それは鳥の翼と身体を持つが、顔は美しい少女をした妖精たちだった。彼女たちは花畑の中で優雅に翼を休めたり、遊んでいたりにしていた。

彼女たちの名は、ハルピュイア。古くはギリシヤ神話から、またイタリアの詩人ダンテの有名な作品『神曲』地獄篇にも自殺者など自身を傷つける人々の見張り番としても登場する怪物だが、まだ中学二年生の年齢のパインもそこまでは知らなかった。彼女たちの優雅な様子に思わずうっとりと思惚れていたパインはいつの間にか多くのハルピュイアたちに包囲されていたのにすぐには気づかなかった。

「!・・・何?」

ようやく気づいた時にはもう遅かった。にこにこ、と何の邪心もないハルピュイアたちの瞳は彼女・・・キュアパインに対しての好奇心に満ちていた。

「きゃあっ!!」

突如、ハルピュイアたちは一斉にパインを襲撃した。その鳥の足先の鋭い爪がパインの腕や身体をメチャクチャに引っ掻き、傷だらけにしていく。

「痛い!やめて!」

しかし、ハルピュイアたちは彼女が傷つこうが、痛みに叫ぼうが

全くお構いなしだった。思わず両腕を振り回して追い払おうとしても我も我もとたかりに来るばかりで少しもやめようとしな。むしろ、彼女たちは実に楽しそうだった。おそらく、彼女たちは相手を傷つけているとは思っていないのだろう。例えるなら、まだ幼い年齢の子供が好奇心ゆえに小さな昆虫の羽を残酷に<sup>むし</sup>雀り取るのと同じ。まだ『善』と『悪』の区別ができていないのだ。

恐るべき好奇心と、残酷な無邪気。彼女たちにその気はなくとも、その『遊び』はパインを殺してしまうまで続いてしまうだろう。

逃げなければ。そう思えど複数のハルピユイアたちに行く手を塞がれ、視界さえも利かない。耳にはけたたましい笑い声や鳴き声、羽音の繰り返しで、頭痛さえした。身体は次々に傷だらけになり、鮮血が飛び散る。

「きゃあああああつ！！」

パインが一際高い声で悲鳴をあげたその時。

「プリキュア！ラブサンシャイン！」

森の中からもよく知った声が聞こえた。

「フレエツシュ！」

森の中から、ピンクのハート模様が凄<sup>すごい</sup>いスピードで発射され、それはハルピユイアたちに思いつきり激突した。

ぎいあああああああああつつつつ！！！！

ハルピユイアたちは甲高い悲鳴をあげて次々と両翼を広げて宙に逃げた。まだ数は残っているが、視界が利くのは可能となり、両目を開いたパインは途端に歓声を出した。

「ピーチ！」

「パインから離れて！」

森の中から飛び出てきたのはピーチだった。彼女は手に持っているピーチロッドで再びピンクのハート模様を目の前で描いて発射、何体かが飛び立った後、残党に駆け出して次々に鳥の身体に強力な鉄拳と蹴りを叩き込んだ。思わぬ闖入者に残りのハルピユイアたちも驚いて、たちまち空へ逃げた。残っているのはハルピユイアたち

に襲われ、傷だらけのうえに羽まみれになって座り込んでいるパインの姿だった。

「パイン！大丈夫！？」

「ピーチ・・・ありがとう」

パインは礼を述べたが、さすがに元気はなかった。至る所を引っ掻かれ、血が滲み出している身体を見、ピーチは少し膝を曲げ、姿勢を低くして声をかけた。

「とりあえず怪我の手当てしよっか。あっちに川があったから、そこに行こう。立てる？パイン」

パインは川の水で傷口を洗った。幸いにも傷はどれも浅く、血はすぐに止まった。

「はいこれ」

止血し、木蔭で休んでいるパインにピーチはオレンジに似た果物を渡した。

「これは？ミカンみたいだけど・・・」

「いやゝ森の中をとにかく歩いていたらね、途中で色んな果物が実っている所に着いちゃったの。それでお腹も空いてきちゃったからさゝ、何個か取っちゃったの」

「ピーチが？」

「うん！どれも甘くてすっごく美味しかったよ。もう私、軽く10か15個は食べちゃった。それは特に美味しかったものだよ」

「へ、へえ・・・」

笑って果物を手渡したピーチを見て、パインはふと、先ほどの爆風に飛ばされ、一人になって森の中を進むはめになっても美味しそうな果物を見つけては喜んで？ぎ取っている彼女の姿を想像し、小さくため息を吐いた。

能天気あるいは楽天的にも見える彼女だが、一人になっても不安や心細さをもとしないその余裕は同時に彼女自身『強い』とも言



える証なのではないだろうか。自分も少しはそれを見習ってもいいかもしれない。

「本当、これ美味しい・・・！」

「でしょでしょ！待ってて。さっきの場所、ここからそう遠くなかったと思うし、もつと色んなの持ってくるから、探してくる！」

「あ、そんなべつに私はもう大丈夫・・・」

と声をかけるも、ピーチは元気いっぱい走り出し、すぐに見えなくなった。

川のせせらぎと、果物の甘さがパインを優しく包んだ。緊張で強張った身体が、ゆつくりとほぐれていく。パインはやっと安堵の一息を吐くとともに、少しせつなくなった。

「もう少し役に立たなきゃ・・・ようし！」

自分もプリキュア、戦う力があるのに逃げ回ってばかりでは何の意味もない。ピーチと一緒になれたのだし、彼女の力に少しでもなれるようパインは決意を固め、気合を入れた。

と、その時、パインの耳にか細い鳴き声のような音が聞こえた。

「ん？」と反応し、パインは立ち上がって、音が聞こえた方向に進んだ。草を掻き分けて進んでいくと、音は徐々に大きく、数を増している。やはり動物の鳴き声のようだ。

大樹の根元に、白い小さな動物が、十匹ほど固まって震えているのがパインの目に映った。子山羊たちだった・・・いや、子山羊に似ているがおそらく違ったろう・・・その子山羊たちの前に、胴体が10メートルもありサーベントうな大蛇が鎌首を持ち上げ、口から赤い舌をちろちろと見せていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！」

パインはその光景に声を失った。しかし、不思議と怖くはなかった。ピーチを呼ぼうとも思わなかった。

「助けなきゃ・・・！」

それだけしか思わなかった。身体は、自然と駆け出していた。

今にも子山羊たちに襲いかからんばかりの大蛇の前にパインは両

腕を左右に大きく広げて立った。第三者の登場に、子山羊も大蛇もしばし動きを止める。大蛇はちろちろと出していた舌を口の中に引っ込め、両眼でパインをじっと見据えた。何のつもりだ。なぜ私の前に立つと問うかのように。

分かっている。パインも心の中でそう返事した。そして理解していた。大蛇が子山羊たちを食するのは『悪』ではないことを。

この雄大な大自然の中では、どんな動物でも餌を求めて食べていかなければ生きてはいけない。大蛇にとってももしかしたら、この子山羊たちはひさしぶりのご馳走だったのかもしれない。そんな弱肉強食の世界で生きていくのに目の前でご馳走を前にしながらその食事を邪魔する行為を見せる自分のほうが『悪』かもしれない。

だけど、ごめんなさい。どうしても私はこの子たちをほうっておけないの。私だって、守りたいの。勝手なのは分かっている。でも今の私にできるのは、こういうことだから。だから・・・本当にごめんなさい。この子たちを食べるのはやめて。

そう強く念じる。伝われと願いを込めて。

大蛇は持ち上げた鎌首をしばらくゆらゆらさせていたが、

「え・・・？」

やがてゆつくりと向きを変え、森の奥へと消えていった。

「もしかして・・・伝わった？」

数秒後、パインは思わず両手をぐっと握り締め、二度三度その場を跳ね上がって喜んだ。

「やった・・・やった！」

さらに嬉しいことにパインに守られた子山羊たちが彼女に礼を言うかのように縫<sup>すが</sup>ってきた。ふわふわとした白毛の体をパインに擦りつけたり、ペロペロと顔を舐めてきたりした。

「あははは。くすぐりたい！」

愛らしい動物たちに囲まれ、甘えられて、パインは最高に『幸せ』な気分だった。

## 次回予告

巨大生物に遭遇し、襲撃を受けるルミナスとサンシャイン  
果敢に戦うサンシャインに、ルミナスは自身の戦闘力のなさを不甲斐なく思う

次回『情弱』

どうして自分はこつも弱いのだろう・・・

## 愛護（後書き）

以降、パインは長々くお休みします。  
パイン「え~~~~~~~~っ!？」

## 情弱

爆風に吹き飛ばされたルミナスとサンシャインだが、途中で大樹の枝葉に引っかかり、ふたりとも無事だった。

とはいえ、かなり遠くにまで吹き飛ばされてしまったらしい。地面に降りたふたりはしばらくこの場から動くべきか否かを悩んだ結果、前者を選んだ。おそらく他の仲間も行動していると思うし、動いていればポルンが他の妖精たちの気配を察知して仲間と再会できるかもしれないと考えたからである。

途中で天馬ベガサスや一角獣ユニコーン、さらには狩りを行っている半人半馬など伝説上の動物や精霊を生眼で次々と目撃したため、しばらくは退屈しなかったが、それも最初のうちですぐに見なくなっただし、空腹も来て、ふたりは徐々に疲労を感じ始めていた。

どこかに食べられるものはないだろうか、サンシャインが周囲を見回していると、ふいに「あの・・・」と、背後からルミナスが声をかけた。

「ん？何？ルミナス」

「こんな時に申し上げるのもなんですけれど・・・お聞きしてもよろしいでしょうか？」

と、ルミナスはサンシャインの目を窺ったうえでそう前置きする。

「私に答えられるなら・・・」

「では・・・」

彼女の返答を聞き、ルミナスはこう言った。

「サンシャインはどう思っていますか？エクスとセラフのいる世界の・・・もうひとりの自分のことを」

「！・・・・・・」

さすがにサンシャインの表情が幾分強張る。

「・・・すみません。ですが私、信じたくないんです。今までともに戦ってきたみなさんがお互い敵同士になって本気で戦い合っている

なんて・・・しかも『世界破壊派』のひとりにサンシャインがいるなんて、そんなの嘘だと思いたいです。別の世界とはいえ、私たちと同じ顔と名前を持つ人たちがそんな地獄絵図を描いているなんて・・・っ！」

「・・・ルミナス」

沈鬱になっっているルミナスの両肩にサンシャインはそつと手を乗せた。

「正直言つて、私も信じられないし、信じたくない。でもあの人たちは嘘は言っていない。目を見れば分かるよ。あの人たちも自分たちの世界でどれほど苦労してきたか・・・」

「サンシャイン・・・」

「もちろんショックだった。知りたくもなかったのも事実よ。けど・・・本当なら、受け止めなきゃいけない。たとえどんなに辛くても、そうしなきゃ前に進めない」

「前に？」

「そう・・・ルミナス、私はね、可愛いものが大好きで、でも病弱な兄を守るために一人前の武闘家としてそれを我慢していたの。もし可愛いものが好きだと認めてしまったら、一気に自分が弱い人間になつてしまいそうで、それで誰も守れないんじゃないかって・・・怖くてたまらなかつたんだ」

「・・・」

「でもね、気づいたんだ。可愛いものが大好きな自分も同じ『明堂院いつき』だつて。だから私は可愛いものを守るためにプリキュアとして戦うつて決めたんだ。私は可愛いものが大好きな自分を受け入れることで前よりもずっと強くなった。だから・・・たとえ別の世界の私だとしても私はその現実から目を逸らしてはいけない、受け止めなければいけないことだと思うの。確かに辛いと思うよ。でも、まだ希望はある」

「希望？」

「うん。エクスとセラフから聞いた限りだけど、もうひとりの私は

仲間を多く傷つけてはいるようだけど、まだ誰も殺してはいない。まだ間に合うと思うの。仮に・・・誰かの命を奪う行為を取ったとしても、人は必ずやり直せる。真夜さんがいい例でしょ？」

「!・・・・・・」

「私は信じている。きっと、もうひとりの私も真夜さんみたいに目が覚めて、罪を償っていくのを・・・また仲間とともに『悪』と戦うのを・・・!」

「・・・・本当に強いですね、サンシャイン」

「ルミナスだって、強いよ」

「いいえ。私なんてまだまだ・・・」

「ポポーツ!!」

突然、ポーチの中にいたポルンが大口を開けて絶叫し、ふたりは驚いた。

「ポ、ポルン、一体どうしたの？」

「嫌な気配が近づいてくるポポ。すごく怖いポポ・・・」

「嫌な気配？」

サンシャインが震えているポルンを見た直後、後方から何かが動く気配をふたりは瞬時に察知、急いで振り返った。

木立の間から何かがぞぞぞと動き、ゆっくりと姿を見せた。

「ポポーツ!？」

途端にポルンは再び絶叫し、すぐにポーチの中に隠れ、ルミナスとサンシャインも後退った。

八本の節足と青い複眼、漆黒のぞわぞわとした毒々しい毛が生えた五メートルを超える巨体・・・それは毒蜘蛛の化け物だった。

「ああああ・・・」

思わず恐怖したルミナスの震えた声に反応してしまったのか、毒蜘蛛は複眼の片方でギロリとふたりを捉えた。一時の緊張感がその場を支配する。が、やがて毒蜘蛛はふたりを獲物と判断したらしく、八本の巨大な節足を駆使して、接近を図った。

「サンフラワー・イービス!」

サンシャインが即座に巨大なひまわり型のシールドを前面に張り、毒蜘蛛の激突を防御した。突然現れた防壁に衝突した毒蜘蛛はぞぞと少しだけ後退する。

「ルミナスは下がってて・・・」

「え？で、ですが・・・」

「ここは任せて。あなたはポルンを守って。ポルンだけがもう一度仲間に会うための頼りなんだから」

「・・・分かりました」

ルミナスの返事を聞き、彼女が下がるのを確認したサンシャインは跳躍し、毒蜘蛛の顔を思いっきり蹴飛ばす。さらには空中で方向転換し、そのまま強烈なエルボーを炸裂した。毒蜘蛛はひるみ、前足を駆使して捕らえようとするが、サンシャインは余裕でかわし、から空きとなった腹部に連打を浴びせた。

「凄い・・・」

安全地帯に避難したルミナスはサンシャインの戦い様を見て、素直に感服していた。彼女が戦うのを見るのはひさしぶりだったが、いつ見ても彼女は勇猛だ。相手がどんなに大きくても恐れることなく、果敢に挑んでいく。

それに対し、自分はどうかろう。正確にはプリキュアではないとはいえ、同じ光の戦士であり、しかもとは光の園のクイーンの命だ。なのに自分は彼女のように戦えない。受け持った力もせいぜい強力なバリアで敵の攻撃を防御するか、もしくは動きをしばらく拘束するのみだ。同じプリキュアではないミルキイローズでさえも一撃で敵を仕留める力と個人技があるというのに。

不甲斐ない。自分はどうしてもっと強い力を持っていないのだろうか。いつも安全地帯でサポートに回ることしかできないなんて。けれど、自分は戦闘に不向きなのもルミナスはよく知っていた。単独だとともに戦うこともできない。

自分はサンシャインのように心も身体も強くなれない。別世界の自分の現実をも受け止めた彼女の強さを、悪いと思いつつもルミナ



スはんの少しばかり恨めしく思った。

「はあっ！」

サンシャインの蹴りが毒蜘蛛の片眼にまともに直撃した。さすがにこれは強烈に効いたらしく、毒蜘蛛はあまりの激痛に節足を振り回し、暴れ出した。その傍若無人に振り回した節足が次々に周囲の木々を薙ぎ倒し、毒蜘蛛はルミナスに直進していく。

「いけない！ルミナス、逃げて！」

だが遅かった。ルミナスはすぐにその場から離れようとしたが、それよりも早く毒蜘蛛の節足が彼女の近くに生えていた大木を倒し、それはまっすぐにルミナスのいる方向に倒壊した。

「きゃあっ！！！」

「ルミナス！」

大木の下敷きになったルミナスの悲鳴に、さらに最悪なことに激痛がようやく治まり始めた毒蜘蛛が反応してしまった。複眼を駆使して、ルミナスの姿を探す。

「くっ・・・！」

このままだとルミナスが見つかるのも時間の問題だ。サンシャインは急いで移動し、毒蜘蛛の複眼の前で止まる。

「こっちよ！」

目潰しを放った仇敵に、毒蜘蛛の視界はすぐにルミナスから逸れた。激怒したらしく、青い複眼が赤に変わり、八足を素早く駆使して猛速でサンシャインに急迫する。

ここは一旦離れて、ルミナスの安全を確保しないと。

そう考えに至ったサンシャインはくると身体を向けて駆け出し、背後から追跡する毒蜘蛛をその場から離脱させるのに成功した。

もう・・・嫌。これ以上、ここにいたく・・・ない。

今すぐ帰り・・・たい。

なぎささんやほのかさん、アカネさんや友達がいるあそこへ・・・

。

どうせ、私なんて足手纏いになるだけだか・・ら。

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

・・・・・

## 次回予告

いつの間にか、もとの世界にいたルミナス

彼女だけでなく、サンシャインにも変化が訪れる

次回『日常』

平凡で小さい存在だけど、それは確かな幸せ

「えっ？は、はいっ！」  
ルミナスは思わず目を覚ました。急いで上半身を起こす。すると、もう、ひかりったら、いつまで寝てるの？もう休憩時間はおしま。これから午後の支度するから、お店手伝ってよ」  
よく知った声が頭の上から降ってきて、ルミナスはゆっくりと顔を上げる。一瞬で両目が大きく見開いた。  
「アカネ・・・さん？」

## 情弱（後書き）

今回の話で少しは『プリキュアvsプリキュア』の世界のサンシャインのイメージが薄まればいいなと思いました。

## 日常

「アカネ・・・さん？え？どうしてアカネさんがここに・・・？」  
と、ルミナスは周囲を見回して小さく驚く。彼女がいたのはいつもの公園だった。『TAKO CAFE』と看板が掲げられているたこ焼き移動販売車も見え、その近くにあるベンチに腰掛けている自身を知る。さらに驚いたことに衣装も光の戦士としてのものではなく、いつもの私服だった。

夢・・・？

ついそう思うが、あんなにはつきりした夢があるのだろうか。

「なに寝ぼけてんの。もうそろそろお客さん来るから早く手伝って」  
「あ、はい」

しかし店主・藤田アカネに目の前で言われ、ひかりは何の抵抗もなくすぐに立ち上がり、エプロンを着服した。アカネが車内に入ったのを確認した後でテーブルを数点出し、表面を拭く。

「ひかりー！」

「ひかりさん！」

よく知った声が聞こえてひかりは振り返り、笑顔が輝いた。

「なぎささん！ほのかさん！」

「ひかり、ジャンボたこ焼き三つね！」

「なぎさ、そんなに食べれるの？」

テーブルに着くなり注文したなぎさにほのかは小さく驚いて尋ねたが、

「平気平気。私の胃袋はブラックホールなんだもん。アカネさんのたこ焼きなんて、いくらでも入るって！」

「もおゝなぎさったら。でも私も頼もうかしら。ひかりさん、同じのお願いね」

「はい」

ぽんっ！

ふたりのポケットから煙が放たれ、メップルとミップルもテーブル上に姿を現す。

「メップルたちも注文するメポー！」

「ミップルもたこ焼き食べたいミポ！」

「はいいつ！？あんたらも！？」

さらに

「ポルンも食べたいポポー！」

「ルルンもルル！」

「えーーーーーっ！？」

同様に煙を放ってひかりのポケットから現れたポルンとルルンの言葉になぎさはそう声を飛ばす。

「でもメップル、ミップルたちはお金を持ってないミポ。どうするミポ？」

「心配いらないメポ。いつもメップルがお世話しているなぎさがみんなの分を奢ってくれるメポ」

「はあっ！？」

「わーいわーい！なぎさ、ありがとポポー！」

「なぎさがルルンたちの分まで奢ってくれるルル！」

「ちょ、ちょっと待ってよ！なんで私があんたらの分まで奢らなきゃならないのよ！？そんなことしたら、私のお小遣いが一気になくなっちゃうじゃない！！」

「じゃあなぎさは食べなくていいメポ。だいたいジャンボたこ焼きを三つも食べたりなんかしたら、一気に太ってますます男の子にモテなくなるメポ。たまにはダイエットしたほうがいいメポ」

ぶっちいいいいいっ！

「な〜ん〜だあ〜ってえ〜っ！そんなことを言うのはこの口かあ〜っ！？」

顔が真っ赤になり、頭から湯気が沸いたなぎさはすぐにメップルの両頬を？み、メチャクチャに引っ張り出す。「メポーッ！？」と悲鳴をあげるメップルだったが、そんな両者を見て、ほのかも妖精

たちも声を出して笑っていた。もちろん、ひかりも。

平凡だけど平和で、愛する者たちと笑い合える日々。こんな毎日が変わることなく、いつも送れるのなら他には何もいらぬ。

ひかりは、とても『幸せ』だった。

ルミナスから毒蜘蛛を大分引き離すのに成功したサンシャインはその毒々しい顔を二度蹴飛ばした後でとどめを刺すのを決めた。

専用武器・シャイニータンバリンを召喚し、優雅に踊るように軽快に叩いて響きよく鳴らしていく。

「花よ舞い踊れ！プリキュア！ゴールドフォルテバースト！」

数えきれないほどの無数のひまわり型光弾が一気に発射され、毒蜘蛛の巨体に次々と直撃した。動きを止められ、抗うこともできず、毒蜘蛛は徐々に浄化の光に包まれていく。タンバリンで弧を描きながらサンシャインはほっと一安心していた。これで障害は消えた。毒蜘蛛を倒したら、すぐにルミナスの救出に向かおう。場所はそう遠くないし、大丈夫であろうと。・・・それが彼女の油断になった。光に完全に覆われる直前、毒蜘蛛が最後の力を振り絞って口から何かを吹いた。シューッ、と音がして、それはサンシャインに浴びせられた。

「！・・・何！？」

毒蜘蛛が消滅した直後、サンシャインは思わず片手で口を抑えた。ひどい吐き気を感じた。前を見ると、視界はゆらゆらと歪み、物が二重三重にも見える。さらに頭痛まで来た。

まさか、さっき吐いたのは毒息か！？

立ってもいられなくなり、サンシャインはゆっくりと身体が崩れ、そのままうつ伏せに倒れた。はぁ、はぁ、と呼吸を繰り返し、なんとか前進を試みるも、すぐに全身に力が入らなくなる。

ダメ・・・だ、眠ったら・・・。

ルミナスが・・・待ってる。



両者が作り出した緊張感は会場全体の空間を支配した。つぼみもえりかもゆりも一言も漏らさずにいつきの試合に集中している。

確かに相手は手強い。迂闊にこちらが動けば負けるかもしれない。だが、いつきは集中力が切れ始めていた。額から汗が一筋流れ、頬へ伝わる。

まずい。もし相手に集中力が切れかけているのを見破られて攻撃を仕掛けられたら、動かずとも身体の反応が鈍る。こうなったら・・・一か八か！

いつきは相手にではなく、自分自身に全神経を最大限にまで集中させた。指先から足の爪先にまで力を溜め、いつきは軽く息を吸う。そしてすぐ吐くと同時に、身体を素早く相手の眼前にまで移動させた。

「なっ・・・！？」

相手は決して油断していなかった。少しも隙を見せていなかった。勝敗を決めたのは精神の集中力の使い分けだった。

相手はいつきに対して、いつきは自らに対して・・・それだけだった。

「はあっ！」

相手の片腕を取り、いつきは思いつきり力を込めた。次の瞬間、相手の少女はいつきの目の前で背中から倒れた。

「一本！」

審判の判定が届く。しばしの沈黙の後、歓声が轟く。

「やった・・・やりました！」

「優勝おめでとう！いつきなら絶対やると思ってたよ！」

「ありがとう、ふたりとも！」

「明堂院さん・・・」

つぼみとえりかに笑顔を向けたいつきに声をかけたのは試合相手の少女だった。彼女はいつきに深々と頭を下げた。

「お見事でした。私の完敗です」

「そんな・・・やめてください。ボクが勝てたのは運が良かっただ



けです」

「おめでとう、いつき」

背後から声が聞こえ、いつきは振り向く。長髪が特徴な兄・明堂院さつきが微笑を浮かべて立っていた。

「お兄様・・・」

「さすがだね。僕はいつきのような妹を持てたことを誇りに思うよ」

「いえ、そんな・・・」

「どうだろう、いつき。家に帰ったら、一緒に散歩に出かけないかい？今日はいい天気だし、また太陽の光を浴びながらちよつとそこまで歩いてみないか？」

「・・・お兄様が望むのなら」

「ありがとう、いつき」

さつきは手を差し出した。いつきは少し両頬を紅潮させてその手を取る。

試合に勝って優勝したのも嬉しかったが、大好きな友達や家族に喜ばれ、ともに過ごす時間・・・それは優勝以上の喜びを感じた。

大切な人がいつもそばにいる。それだけでほつとする。

いつも当たり前に思っていて、なかなか気づかないかもしれないけれど、確かに存在している『幸せ』。

そんな『幸せ』に囲まれていたいつきは、ふいに試合相手の少女が10歳くらいの栗色の長髪をした青い瞳の白地のワンピースを着た少女に姿を変え、ちりん・・・と、両耳の鈴を鳴らしながらその場を立ち去ったのに気づかなかった。

#### 次回予告

お菓子だらけの森を嬉々として突き進むブラックとピーチ  
満腹になって幸せの絶頂の中、ふたりは思いがけない者との再会を  
果たす

次回『王子と夢の国』

彼女たちにとって、これ以上の幸福など存在しない

## 日常（後書き）

ルミナス「あの、もしかして・・・」

サンシャイン「私たち・・・」

はい、お休みですよ。

ルミナス・サンシャイン「やっぱり・・・」

## 王子と夢の国

「はあゝ．．．食った食ったあっ！！」

両腕に抱えていたありとあらゆるお菓子を食べ尽くし、満腹になったブラックはつい座り込む。すると、今度は眠くなってきた。

「ふあああゝっ．．．ちよつとだけ」

あくびをし、ごろん、と横になる。すぐに意識は下へと沈んでいった。

．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．  
．．．．．

．．．みさん．．．みす．．．さん．．．美墨さん！美墨さん！

「んゝ．．．なあに？今私とっても眠いんだけど．．．」

「美墨さん」

横から声が聞こえ、ブラックは上半身を起こして目を擦りながら振り向くが、

「！．．．．．」

振り向いた途端にブラックは眠気から一気に覚めた。

「え．．．ええっ！？ふ．．．ふふふふふ．．．藤P先輩！？」

「おはよう、美墨さん。ぐっすりと眠ってたね」

彼女の憧れで、現在も片想い中の先輩、藤村省吾はそうブラックに笑いかけた。瞬間にブラックの脳内が大混雑を起こす。

ええゝっ！？なんで藤P先輩がここに？

てゆーか、寝ているところを見られた？うわっ、恥ずかし〜っ！  
もう先輩と顔を合わせられないよ。

あああああゝゝゝってか、消えてしまいたいゝゝゝつつつつつ  
！！！！

頭から蒸気が噴射し、熟れたトマトよりも顔が赤くなったブラツクの心を知ってか知らずか、先輩は微笑を浮かべると、

「さ、行こうか、美墨さん」

「えっ？」

ブラツクに片手を差し伸べた。

「行くって・・・どこにですか？藤P先輩」

ブラツクが聞くと、先輩は笑ってあっさりと答えた。

「結婚式だよ。僕と美墨さんの」

「！？・・・・・・」

ブラツクは一瞬息が詰まった。

「せ、せせせせせ・・・先輩！い、今なんて言いました？け、結婚式と聞こえたような・・・」

「そっだよ」

「誰と？」

「僕と」

「誰の？」

「美墨さんの」

「私と藤P先輩の・・・結婚式いつ！？」

ぶんぶんぶんぶんっ！

ブラツクは急いで首を何度も左右に振った。

「ありえないありえないありえないありえないありえないありえない！絶対ありえない！私と・・・ふ、藤P先輩が結婚だなんて！？」

「嫌なのかい？美墨さん」

「嫌・・・だなんて。むしろ嬉しい・・・けれど、でもまだ早いってゆーか、そ、そもそも私なんかでいいのかなって・・・っ、うわあっ！？」

ブラツクは突如先輩に身体を抱えられた。憧れの人の腕の中、両者の顔の距離が一気に近くなる。

「せせせせせせせ先輩！近い近い近い近い！！」



「ラブ！」

彼女が幼い頃からずっと大切に生きてきたウサギのぬいぐるみ、ウサピヨンはピーチの胸に飛び込んだ。

「ラブ、またこうやってあなたと話ができて嬉しいわ」

「ウサピヨン、どうしてあなたがここに？」

「私だけじゃないわ。ほら」

「え・・・？」

ピーチの視界に飛び込んできたのは、いつか来たオモチャの国で出会った住人たちだった。子供たちに捨てられたことを恨みに思い、一度はピーチと敵対したが、彼女たちの活躍によって怨念から解放された彼らはとても柔らかな表情で笑っていた。

「みんな、どうして・・・？」

「みんな、ラブに感謝しているのよ。ラブたちのおかげで、みんなもう一度子供たちを信じて一緒に遊んでもらって、幸せになれたから」

「幸せに？」

「そう。そして『彼』も・・・」

「『彼』？」

ウサピヨンが指差した方向を見、ピーチは軽く驚く。そこにいたのは・・・。

「トイマジン・・・」

かつて子供たちに捨てられた恨みから数多くの憎悪を集結させて強大な力と巨体を得、オモチャの国を支配していたトイマジンは座っていた。といっても、今は怨念から解放され、本来のテイベアの姿をしている。トイマ진은ゆっくりと顔を上げ、つぶらな両目をピーチに向けた。

「トイマジン・・・」

「ありがとう、キュアピーチ。ピーチのおかげで僕は子供たちと一緒に遊んだ記憶を取り戻して、もう一度子供たちを信じることができた。今、僕はとても幸せだよ」

「幸せ・・・本当に？」

「うん。新しいお友達は毎日僕と一緒に遊んでくれるし、ちょっとやそつとで汚れたり、傷ついたりしてもすぐには捨てたりしないから。本当によかったと心から思ってる」

「そっか・・・そっか！」

ピーチはふと微笑んだ。

プリズムフラワーを巡る戦いの際、偽者とはいえ再び敵として立ち上がったトイマジンを倒してしまったことにピーチは心を痛んでいた。本物のトイマジンは幸せに暮らしているはず。頭ではそう理解していても、それでも戦いたくはなかった。

けど、ここで本物のトイマジンと再び出会い、彼が幸せなのを再確認できたことに彼女は嬉しく思った。トイマジンだけでなく、オモチャの国で暮らしていた住人たちも幸せゲットできたのを心から喜んだ。

「みんな・・・本当によかったね！」

微笑みながらそう伝えると、胸の中にいるウサピョンが

「ラブ、みんなはね、ラブにお礼をしたくてショーをすることになったの。そのために今日は来たんだって」

「え？いいよ、お礼なんて。みんなが幸せゲットできたんなら、私はそれで・・・」

「ダメよ、ラブ。みんなの気持ちはちゃんと受け取らなきゃ。みんなラブを喜ばせようと、今日のために何回も練習したんだから」

「僕からもお願いするよ。僕たちからの感謝の気持ちを受け取って欲しい・・・」

トイマジンからもお願いされ、ピーチは断れなくなった。ふう、と軽く息を吐き、腰を降ろす。

「分かった。それじゃあ見せて、みんなのショー」

「ラブ、ありがとう！」

「ありがとう、キュアピーチ」

「よし、ショーの始まりだ！今日はキュアピーチさんを思いつき



「楽しませるぞ！」

「おおっ！」

喚声があがり、オモチャたちは即座にシヨ一の準備にかかった。まずはブリキロボットたちの玉乗りレースから始まり、その後は人形たちによる華麗な柔軟体操、マジックや綱渡り、空中ブランコまで披露し、ピーチは「すごいすごい！」と何回も拍手した。

友達や幸せになった者たちとの再会を果たし、またこうしてともに時間を過ごせたことにピーチは心から『幸福』を感じていた。

## 次回予告

恐竜から逃れ、森の中を突き進むメロディとビート  
メロディはビートからエクスンの秘密を聞き、衝撃を受ける

次回『自省』

「化け物と呼ばれて傷つかない人間」なんていない

## 王子と夢の国（後書き）

ブラック「ねえ、もしかして私たちもお休み？」

いえ、おふたりはまだ出番ありますよ。

ピーチ「よかった」

ただ、恐ろしい目に遭うかもしれないけど。

ブラック・ピーチ「えっ！？」「」

## 自省

マルガを探し、エクスはセラフ、そして妖精たちと森の中を進んでいた。幸いなことに、現時点で猛獣には遭遇してはいない。遭遇したところで一刀両断に斬り伏せる自信はあるが、ただこちらは非戦闘員を数多く抱えている身。仮に遭遇したら、役立たずは即座に近辺の茂みの中に身を隠すよう伝えてある。

やむをえないとはいえ、とんだ面倒を抱えたものだ。

エクスは思わずため息を吐きそうになる。当然だが、妖精たちは身体が小さいうに大半がまだ子供だ。一步一步の足取りが彼女と大きく違う。中には宙を飛行する者もいるが、それでも歩行者との距離を離さないよう、付き添っている。エクスは少しずつだが苛立ちが募ると同時になぜ自分がこんな厄介を引き受けなければならいいのかと理解に苦しんだ。

毒蛾の『妖精』たちの燐粉から生じた粉塵爆発。あれに炎系の必殺技を繰り出すように伝え、実行したのはドリームとルージュだが、さらに要因を辿ると、メロデイに行き着く。そもそも彼女が怒って単独で森の中に入ってしまったために毒蛾の『妖精』たちに遭遇するはめになった……そう考えるのは強引だろうか。

子供を斬ったのは幻覚だと確信があつたし、目の前に障害があれば速やかに取り除く。それがエクスが今まで戦ってきた中で得た持論だった。もしもあそこで素早く斬りかからなければ、さらに毒性は強くなって全員が危険にさらされた可能性もある。だから、エクスは己の行為を当然と考えていた。

それに、万が一にも子供が敵の一員で、隙を狙って仲間の命を奪ってしまったらどうか？

戦場では男も女も子供も老人も関係ない。たとえ自分よりもずっと低い年齢の子供が相手だとしても、敵である以上、おそらく自分は容赦なくその子を斬るだろう。

そんなことが容易にできると自信を持って言える私は、やはり人間ではないのだろうか……。

化け物。

メロディに言われたあの言葉が脳裏に蘇る。人造人間として生まれ、普通とは違う身体を持ったことに喜びを感じているのは事実だが、同時に周囲の人間から冷たい目で見られ、蔑まれ、『怪物』と呼ばれ、石を投げられた。

ただ普通とは違う。それだけで。エクスはその痛みにも何度も苦しみ、泣かされた。

化け物は死ぬまで化け物。

決して人間になることはない……残酷な真実によって。

皮肉だな、とエクスは思った。

この身体を得たことに喜びを感じている自分の裏で、普通の人間になりたいとほのかに願っている自分が確かに存在している。否定したくとも。

キョアフロッサム

ある意味、花咲つばみの言うとおり、自分は普通の人間として自由に生きたいのだろうか。そんなこと、あるはずがないと思いたいが。

「（化け物……か。私はどうすればいい？ ティエリア……）」

ふと空を見上げ、ある人の名を呼ぶ。当然、その人が答えてくれるわけがない。

ふ。エクスは微笑した。

自分としたことが、何をやっているのだろうか。

「エクス……どうして言ってくれなかったの？」

ふいに背後を歩いていたセラフが声をかけた。質問の意味は分かる。『なぜ自分が人造人間イノベイドだということを今まで黙っていたのか？』ということだ。エクスは立ち止まり、静かに返した。

「……話す機会がなかったから。それだけよ」

「でも……っ」

「私が人間じゃないと知って、怖くなった？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エクスはセラフに振り向いた。彼女の表情はどうにもやりきれぬ苦しみと悲しみに満ちていた。

「・・・そんなことはないと思う。確かにびっくりはしたけれど、でもそれ以上に私とエクスとの距離が遠くなっただような気がして・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それも仕方ないか。もし立場が逆だったとしても、自分もセラフと同じ想いを抱くかもしれない。今まで仲間だと思っていた人が実は自分とは異なる存在だと知った衝撃は大きく、受け入れるには抵抗がどうしても出てしまう。自分はそういった人の醜さを嫌になるほど知っている。だから、自分をも傷つけてしまう。何度経験をしてしても、これだけは慣れない。慣れるものではない。

「あのおゝ、あんさんら、ちとええでつか？」

気まずい沈黙を破ったのは、誰であろうタルトだった。フェレットごときが一体何だというような表情でエクスが振り向いた瞬間、「プリプー！」

「なっ!？」

突然、シフォンがエクスの胸に飛び込んだ。さすがのエクスも両目を大きく見開き、しばし呆然となると、

「エクスはん、ちとシフォンを抱いてくれまへんか？」

「は？なに急に？どうして私がこの赤ん坊を抱かなくちゃ・・・」

「ええからつべこべ言わんと抱けやつ!!」

タルトの迫力に負け、エクスは仕方なくシフォンをきゅつと軽く抱き締める。「キュアキュア〜!」と喜んでいるようだった。セラフも他の妖精たちも両者を思わず注視する。

一体この行為に何の意味があるのだろう。この赤ん坊は何を喜んでいるのだろう。エクスがますます理解に苦しんでいると、  
「温かい・・・」

ふいにエクスの腕の中でシフォンが微笑みながら言った。

「温かい・・・？」

「そーやで」

タルトがエクスに言った。

「エクスはん、正直言うてわいは難しゅうことはよう分からんし、あんさんが人造人間ゆーてもいまいちピンと来ん。せやけど、あんさんはセラフはんと一緒に爆風からわいらを守ってくれたやないかなんで守ってくれたん？」

「それは・・・気がついたら、体が動いて」

「そうか。けど、本当はとっさにこの森は危険さかい、わいらまで吹っ飛ばされてバラバラになったらますます危ないと考えたんとかやうか？それで身を挺してまで守ってくれたんやないか？そしてそれは人間としても一番大事なこととちやうか？」

「人間として・・・？」

「そうココ！」

ココが言った。

「エクスは自分の身を危険にさらしてでもみんなを守ってくれたココ。そんな優しい心もあるキミは間違いなく人間ココ。化け物なんかじゃないココ」

「化け物・・・じゃない？」

「そうナツ！」

ナツも口を挟んだ。

「それに今シフォンはエクスの胸の中にいて、『温かい』と言ったナツ。それは人間としての温もりがエクスにもあるという証拠ナツ」

「温もり？」

「そうナツ。たとえ人造だろうと関係ないナツ。誰がなんと言おうと、エクスは間違いなく人間ナツ。化け物じゃないナツ」

「そうムプ！」

ムープとフープも声を出した。

「確かに最初は怖かったけど、エクスは本当は優しいとフープたちも分かったフプ」

「本当に悪い人なら、シフォンがエクス腕の中でそんなふうに笑わないムブ」

そう言われて、エクスは再び腕の中のシフォンを見やる。シフォンは無邪気な笑顔を満面にしてエクスに笑いかけていた。

妖精たちの言い分に心を動かされたいらしい。セラフは最初のうちこそ目を瞬きさせていたものの、

「・・・エクス」

彼女の名を呼ぶなり、

「ごめん」

頭を下げた。

「セラフ？」

「私、間違っていた。確かにびつくりしたけど、エクスがどんな人だろうと関係ない。エクスはエクスに違いないもの。たとえ同じ顔を持つ人が何人もいたとしても、エクスは世界でただ一人・・・私やアルガティアの仲間だもの」

「セラフ・・・」

彼女の視線は逸らすことなく、しっかりとエクスを捉えていて、表情も幾分悟ったかに見えた。

「私もあなたを化け物だとは思わない。同じ『天上人』として、あなたとこれからも一緒に戦っていきたいと思っている。・・・いいかな？」

『聞く』のではなく『確かめる』ようにセラフはそう尋ねた。エクスはその『確認』に相変わらぬ無表情で立ち尽くしていたが、

「・・・勝手になさい」

と、誤魔化すように身体ごと向きを変えてセラフの視線から逸らした。

その一瞬、彼女の目から小さく光る粒子が弾けた・・・よう  
な気がした。

エクス腕の中で、シフォンが変わらずに笑い続けた。

「イノ・・・ベイド!?」

「そう。エクスは本当に『人間』じゃないのよ」

ティラノとスピノの死闘から逃れたメロディはビートからエクス  
の秘密を全て聞き、衝撃を受けた。いきなり頭を殴られたようで、  
一瞬視界がぐらりと歪んだ。

「へ・・・へえ、そうなんだ。本当に人間じゃなく、化け物だっ  
たんだ。なるほどね、人造人間なら子供を斬るのも朝飯前だよ  
ね・・・」

「!・・・メロディ、あなたまだそんなことをっ!」

エクス of 秘密を知つても嫌味たつぷりに返したメロディに、さす  
がの親友も頭に血が上り始めたらしい。眉間にしわが重なり、メロ  
ディを激しく睨む。

「メロディ・・・あなたがエクスに怒つたのも確かに分かるわ。で  
も、正直あなたには失望したわ」

「失望？」

「そうよ。あなたがこんなにも強情で嫌な人だったなんて、知らな  
かったわ!」

「何よ嫌な人つて!だって、そうじゃない!イノベイドだかインベ  
ーダーだか知らないけど、人造人間なんて、思いつきり化け物じゃ  
ん!」

「じゃあ、私は何なの!？」

「え・・・?」

ビートの台詞にメロディは言葉を切った。

「メロディ、あなたも知ってるでしょ?今でこそプリキュアだけど、  
この私がかつてマイナーランドの悪の歌姫・セイレーンとして多く  
の人たちを不幸にしたり、あなたたちを苦しめたり、ハミィを何度  
も騙したりしたのを!」

「!・・・」

メロディは声を失う。ビートは悲しげに目を下に向けて言葉を続



けた。

「今は『黒川エレン』と名乗って、こんな姿になっているけれど、あの黒猫の姿が本当の私なのよ。私だって人間じゃない。それどころか、たくさんの人たちを何回も不幸のメロディを歌って、悲しませてきた。世界中が不幸や悲しみに包まれるのを本気で望み、少しもそれを悪いと思っていなかったのよ。・・・人間でもなく、そんな悪行を平気で重ねてきた私も、エクスと同じ化け物じゃないの！？」

「そんな・・・！ビートは違うよ。だって、自分で気づいたし、みんなを守るためにも一生懸命に戦ってくれてるじゃん！」

「だったら、エクスも分らないじゃない！やり方はひどく見えるかもしれないけれど、あの人も私たちと同じプリキュアとして世界を守ろうとしている！たとえ出生がどうであろうと、みんなを守ろうと戦っている以上、あの人も立派な人間に違いないんじゃないの！？少なくとも、そんな意志がある限り、化け物じゃない！！」

「ビート・・・！」

いつの間にか、ビートの目から涙がこぼれていた。彼女は両手でそれを拭くと、

「っ・・・！！！」

「ビート！」

涙を振り撒きながら疾走、森の奥へと徐々に見えなくなっていく。  
「ビート、待つて・・・！」

と叫んだものの、メロディは後を追おうとはしなかった。彼女も視線を地面に向け、反対方向にトボトボとした歩幅で歩む。

自分は間違っていたのか。そんな想いが身体の中を巡る。

けれど、人造人間であるエクスに化け物は言い過ぎたかもしれない。実際、そう言った直後、エクスの無表情が初めて変化を見せたのではないか。激しい嫌悪と悲しみが混ざり合った表情に。

いかに本人が気に入り、誇りに思っていると明言していようと、自分の身体を気にしない人間がどこによいか。普通とは違う、造ら

れた身体を第三者に激しく差別されれば人造人間でも傷つくかもしれない。

自分はその第三者として、彼女にひどいことを言ってしまったのだろうか。

謝るべきか。でも、いきなり説明もなしに子供を斬ろうとしたのはどう考えても相手に誤解を与える。その点に関しては絶対にエクスのはうに非があるのではないだろうか。

だけど、いつまでもこのままでいいとは思えない。それは中学入学から一番の親友とずっと喧嘩し、後悔を繰り返してきた自分がよく知っている。

「あああゝっ、もう！一体どうすればいいのよおっ！」

頭を両手で掻き乱しながらメロディが前進していると、  
ぼふっ！

何かにぶつかった。

「ぶはっ！何これ？・・・クリーム？」

身体の至る所に真つ白なクリームが付いていて、メロディは慌ててその場から二歩三歩後退した。やがて彼女の視界に見えてきたのは・・・。

「え・・・えええええゝっ！？こ、ここって・・・！」

そこにあっただのはカップケーキやロールケーキ、バームクーヘンにフルーツパフェが山盛りに存在している・・・スイーツの国だった。

## 次回予告

突如現れたスイーツの国に驚くメロディ

そして彼女と離れ離れになったビートもあるエリアに到着する

次回『忘却の彼方』

嫌なことなんて、全部忘れてしまえばいい

## 自省（後書き）

エクスも少しは可愛げがあってもいいと思うんだ。

## 忘却の彼方

「何これ？スイーツの国？・・・！・・・まさかこれも幻覚！？」

そう思い、メロディは近辺に空色朝顔を探してみるが、どうやら一つも咲いていないようだ。試しに頬を強くつねってみたが痛みを感じ、身体に付着したクリームも舐めてみたところ、甘かった。

「・・・じゃあこれ本物？でもなんで森の中にスイーツがこんなに？」

「ここはスイーツの森だもの。当たり前だよ」

当然の疑問を口にした途端、声が聞こえ、メロディは視線を飛ばす。昨日の森で見た小さな人型の妖精たちが背中から生えた羽をパタパタ動かしながらシュークリームやスイスロールなどのスイーツを頬張っていた。

「スイーツの森？」

妖精が突然言葉を話してきたことに戸惑いながらもメロディは彼らに尋ねる。

「そう。ここは誰もが好きなだけスイーツを食べられる夢のような所だよ。このスイーツはただ美味しいだけじゃない。どんなに食べても太らないし、虫歯にならないんだ」

「嘘！？本当ッ！？」

好きなだけ食べられるうえに太ることも虫歯になることもないと聞いて、メロディは一旦は両目を輝かせたが、

「・・・でも」

スイーツ大好きな彼女にしてはこの時は珍しく渋り、行動に移らなかった。

普段の自分だったら、迷うことなくスイーツの山に飛びついたであろう。が、今自分は親友と喧嘩別れしたばかり。さすがにすぐに食欲が湧かない。

「ごめん。今はそんな気分じゃないんだ。また後でね・・・」

「そんなこと言わないで、ほら」

しかし断ろうとしたメロディに妖精たちが一個のカップケーキを30センチほどの身体で四人がかりで運び、手へと渡した。両手にあるカップケーキを見つめるメロディに妖精たちは口々に言う。

「食べてみて。とっても美味しいよ」

「でも・・・」

「これを食べたら、少しは元気が出るよ」

「元気に・・・」

「そうだよ。キミがそんな顔してたら、僕たちも美味しくなくなっちゃうよ」

「ご、ごめん・・・」

「謝らないで。さ、食べて食べて」

「うん・・・」

ぱく、と一口食べる。すぐにまるやかな食感ととろけそうな甘味が口中に広がっていった。

「・・・美味しい・・・」

「あは。笑った笑った」

「え？」

メロディはいつの間にか微笑みを浮かべていたことに自分でも気づいていなかった。思わず頬に片手をやると、妖精たちも嬉々として微笑みかけ、メロディの周囲をひらひらと飛び交った。

「ね？美味しいでしょ？スイーツには誰でも笑顔にし、幸せにする魔法があるんだよ」

「魔法・・・」

「うん。ここでスイーツを食べていれば、誰でもずっと幸せでいられる。嫌なこともすぐに忘れてしまう」

「嫌なこと・・・」

「そうだよ。キミ、さっき嫌なことがあったから、あんな顔をしてたんでしょ？ここにあるスイーツをたくさん食べて、全部忘れちゃいなよ。忘れるのが一番だよ」

「忘れるのが一番・・・そうだね」

メロディは妖精たちを見てうなずいた。

「嫌なことなんて、忘れちゃえばいいんだ！」

メロディはもう迷わなかった。妖精たちと笑いながら、一緒に次々にスイーツを手に取り、口にし、楽しんでいく。

不思議と、ビートと喧嘩別れしたことなんて、頭に浮かんでこなかった。

ビートは一人で森の中を歩いていた。目頭にはまだ涙が溜まっている。

歩みながらビートは思っていた。メロディにひどいことを言ってしまったのだろうか。

自分にとってメロディは親友であり、恩人でもある。敵として悪行を重ねてきた自分を許し、受け入れてくれたのだから。少なくともハミイの次に大切な存在であるのは確かだ。

しかし、ビートも先ほどの件に関してはいかにメロディといえども譲れない部分もあった。確かにエクスに対し、メロディが憤怒したのも分かる。その点に関してはエクスにも非はあっただろう。

だがメロディも明らかに言い過ぎた。エクスも『化け物』と言われた時には本心では相当堪えたのではないのだろうか。事実、彼女は本当に人にあらざる者だった。強がってはいるが、心のどこかでメロディが言った言葉に深く傷がついたのではないだろうか。だってそうだろう。生きとし生けるもの、種類は多彩なれど傷つかない存在があれば、それこそ『化け物』だ。

そこまで考えてビートはふと立ち止まる。

どうして自分はこんなにもエクスを庇うのだろうか。

「・・・やっぱり共感できるところがあるからかもしれない」

メロディにも伝えたことだが、自分も人にあらざる者だ。今は人間の姿で生活しているが、本当の姿はメイジャーランドにて暮らす黒猫の妖精。そして、不幸の歌を奏でる悪の歌姫。消すこともでき

ない忌まわしい記憶は今も彼女を苦しめている。たとえプリキュアになって人々を不幸から守ろうとしても、過去はどうしても消えない。

けれど、それでも決めたのだ。人々を不幸や悲しみから守ると。どんなに自分が傷ついても世界を悪の脅威にさらされないようにしようとして……そういう意味ではエクスも同じではないのだろうか。

無表情ゆえに読めないところもあるが、彼女だってマルガを倒そうとしているのも任務ではなく、ほうっておけば全世界が壊滅にさらされると考えたうえで行動を移すのを決意した自らの意志の表れではないのだろうか。そうでなければ、普通こんな危険地域に出向こうとはしない。仮にプリキュアの誰もが協力を拒否したとしても、彼女はマルガの脅威から世界を守るために単独で『永遠の楽園』に向かったのではあるまいか。だとしたら、人造人間と関係なく、彼女は立派なプリキュアと堂々と胸を張れるはずだ。

そういう点も含めて、メロディに理解してほしいのだが……まさかあんなに強情とは。

「……戻ろう」

とはいえ、このままでいてよくない。何よりもメロディをまた一人にしてしまった。再びティラノのような存在が彼女を襲う可能性も否めない。ただ、あんな喧嘩別れをしておいて、今さらどういう顔をして会えばいいのかと考えると、ビートはどうにも憂鬱にならざるをえなかった。

くく

ふいに聞こえた音楽に、ビートは再び足を止める。

そう遠くない。聞いているだけで、心地よくなる音色。とても癒される。

誰が奏でているのだろうか？ビートは方向転換し、音楽に誘われる

ように歩み出した。やがて広大なエメラルドグリーンの湖がビートの視界に飛び込んできた。そしてその湖畔で音楽は奏でられていた。

弦楽器や吹奏楽器、さらには太鼓や木琴に似た形の楽器をリズムに合わせて奏でる男性の精霊が七人、さらにその男性の精霊たちの前に若い女性の精霊が美しく、優雅に舞を披露していた。

その踊り、まるで風と一緒にいるようで美しいだけでなく、燐としたたくましさも象徴づけられ、思わず見入っていたビートは女性の精霊が踊り終えた途端、思わず拍手した。

「あ、ごめんなさい……」

自分のほうを見た精霊たちに謝るが、彼らは迷惑がるどころか優しそうな笑みを向けた。女性の精霊がビートの手を取る。

「え？」

そして、ビートは彼らの前に連れてこられた。

「え？え？私も踊るの？」

「踊れないんだったら、歌でもいいのよ」

「歌……でも私は……」

「下手でもいいの。大切なのは気持ちよ」

「気持ち……」

女性の精霊に言われ、ビートはしばらく呼吸を繰り返しての有酸素運動をして緊張をほぐした後、思いつき息を大きく吸った。

〃

気持ちを込め、ビートは歌った。木漏れ日が歌う彼女を照らし、自然の舞台を作っていく。歌っているうちにビートは心から楽しくなり、自分でも笑顔になっっているのが分かった。彼女の歌に合わせて、精霊たちも楽器を奏で、踊っていく。

心から歌い、精霊たちとの音楽を楽しんでいるうちにビートはメロディのことをいつの間にか忘れていた。



サバーニヤは足取りを急いでいた。彼女の後をデスバイア、グライファー、バインドが続く。

彼女はほぼといっていいほどの確信を得ていた。自分たちの他にマルガに接触を図ろうとする者が存在していることを。その根拠が爆発地点にあった足跡だ。

あれは明らかに自分たちのものではない。しかもできてからそう時間も経っていない。またデータではマルガがお気に入りとするこの森は村人には立ち入り禁止とインプットされている。以上からしてあの足跡の主は自分たちと同様に別世界からの訪問者の可能性が高い。また極細の足跡もあつたことから、その訪問者は小さな動物を数多く連れてきている様子でもある。

なぜ動物を連れてきているのか。それはマルガを感知するための手段とも考えられる。小動物の反応は人間よりもずっと敏感と聞く。実際に突如数多くのネズミやカエルが逃避行動を見せるのは大地震が起こる前触れとも言われている。自然のリーダーともいべき小動物も一緒となると、マルガをいち早く察知し、自分たちよりも先に接触するかもしれない。

冗談じゃない。そう簡単に先を越されてなるものか。このまま自分たちの計画を潰されてたまるものか。

とにかく自分たちが先にマルガに接触を図らないと、と少しずつ焦燥感を募らせ始めていたサバーニヤはふいに自分たちが歩んでいる大地が揺れているのに気づいた。

ドツドツドツドツドツドツ……。

佐渡の大太鼓のように力強く、重々しい響き。それは一秒間隔で

打ち鳴らされ、揺れは徐々に大きくなった。明らかに何か近づいてきている。

「な、何・・・？」

バインドが声を出し、後方を振り返った。続いてサバーニヤ、デスバイア、グライファーも振り返る。

濛々たる土煙の塊が、こちらへと接近しようとしているのが見えた。

#### 次回予告

突如監視者に襲いかかる猛獣の大群

遂に今まで見せなかった彼女たちの本当の实力が披露される

次回『無敵』

誰に喧嘩を売ったか、格の違いというものを教えてやる

## 忘却の彼方（後書き）

いよいよ彼女たちの戦いの描写を自分なりに表現致します。

## 無敵（前書き）

タイトルだけど『無双』のほづがカッコよかったかもしれない。

## 無敵

土煙の正体は、肉食恐竜の集団だった。その数軽く30を超える。もつとも、ティラノのような大型ではなく、体格は小さく、ほっそりとしている。頭は大きく、後肢に大きな鉤爪、前肢には鳥の翼に似た羽毛が生えていた。

地を蹴り、肉食恐竜たちは圧倒的数で四人の少女たちを包囲した。羽毛が生えた両手の爪が鋭しさを増し、首元まで切れ込んだ口と鋼のような牙を曝して、彼女たちをその両眼で見据える。集団を見返し、サバーニヤは呟いた。

「ヴェロキラプトル、か」

「ヴェロ・・・？」

目を瞬きさせたデスバイアに彼女は解説した。

「今から8300万年前から7000万年前の東アジア大陸に生息していた小型の肉食恐竜。化石はモンゴル、中国、ロシア東部から発見され、両手を見れば分かるように羽毛恐竜と考えられている。足の鉤爪は喉や首元の急所を集中的に攻撃したらしいわ」

「へえ・・・サバーニヤ、学者に向いているんじゃないかい？」

「バ力なこと言っていないで、どうする？サバーニヤ」

「当然・・・」

妹の問いにサバーニヤは殺る気満々のヴェロキたちに不敵に微笑を贈った。

「こちとら急いでいるのに邪魔されたくないんでね・・・どちらが狩りの対象になってしまったか、ヤツらに思い知らせてあげようか」

「・・・了解」

サバーニヤの回答に応え、三人も相棒を召喚する。デスバイアは外見からはかなりの重量がありそうな大振りの実体剣、通称GNバスターソード。グライフアーは両手の甲に五本、指の間に四本と合

計18本の鉄の鉤爪。バインドは大型の粒子砲、通称GNメガランチャー。サバーニヤも右手にビームライフル、左手にビームサーベル、背面にもビーム砲を装備し、それぞれ肩越しと腰元に配置した。「さあてと……死にたいヤツだけ来な！」

その挑発に乗るかのようにヴェロキたちは咆哮をあげ、次々に襲撃を始めた。一塊になっていた四人は同時にその場を離れ、それぞれのスキルを発揮する。

まずは一頭。デスバイアは太刀を両手で力任せに横薙ぎに払い、ヴェロキの体を両断した。いきなり一頭を仕留めた相手に他のヴェロキも驚いたのか、一瞬だけ動きを止める。その一瞬が命取りとなった。太刀が素早く彼らを襲い、長い首が刎ねられ、体は二歩三歩歩んだ時点で横様に倒れ伏した。

だがヴェロキらとていつまでも殺られているわけではない。一頭が自慢の鉤爪を曝し、デスバイアに急迫する。デスバイアは太刀を大きく払ったが、ヴェロキはこれをかわして跳躍し、鉤爪を急接近させた。

「ちっ……」

だがデスバイアは太刀で鉤爪を防御、逆に力任せに跳ね除けると、「せつかくこの『楽園』で不自由なく生きていたというのに、僕らと出会ったばかりに可哀想なもんだね。でも、ま、これもキミたちの運命と思ってあきらめてよ」

と、太刀を突如赤く発光させた。GN粒子を放出させたのだ。

GN粒子。機動戦士と呼ばれるガンダムの動力源に使用される半永久機関・GNドライブを開発する過程において偶然にて発見された変異ニュートリノ。

GNドライブ稼動時に自然に生成、空中に放出・散布されることで既存のレーザーシステムの完全無効化を可能とする。基本的には無害であるが、中にはT型と呼ばれる擬似が存在し、それが放出される粒子は兵器の出力が調節されると、途端に細胞を変異させるなど生物に対して有害になる。ちなみにオリジナルは緑色、T型が赤

色をしている。

つまり、デスバイアは有害なほうのGN粒子を放出して太刀の斬れ味を増したのだ。

「その自由、僕が絶望の底へ叩き落とす……！」

彼女がそう一言伝え終えた瞬間、太刀はコンマ一秒で肉薄を図ったヴェロキを斬首、さらに首の消えた体を細々な塵へと化し、周囲に飛散させた。

血と肉の雨を浴びながら、軌道すらも読めない斬撃で敵を鮮やかに、そして静かに地獄へと案内するのを喜びとする。

彼女が認めないとしても、その姿、まさしく『バニッシャー処刑人』。

彼女が嬉々としながら次々にヴェロキを葬っていく中、隙を突き、一頭が背後からデスバイアの肩に食い込もうと牙を飛ばす。

だが、一頭が彼女の肩に牙を食い込むのは叶わなかった。突如体が硬直し、すぐに横に倒れた。

「ん……？」

デスバイアは振り返り、倒れている一頭の眼球に何かが突き刺さっているのに気づいた。それが焼き鳥の鉄砲串だと分かった瞬間、デスバイアは彼女に笑いかけた。

「デスバイア、油断大敵……」

「すまない、バインド」

デスバイアはバインドに礼を伝え、鉄砲串が眼球に突き刺さったまま、体が激しく痙攣を起こしているヴェロキを真上からとどめを刺した。

バインドはやむをえずストローを代わりに咥えると、六頭が塊になっっているヴェロキの集団をメガランチャーを捕捉、砲口から強烈な閃光が炸裂したと思うと、瞬間にして六頭を火達磨にさせた。六頭が徐々に炎の中で煙と塵と化していく中、バインドは一旦メガランチャーをチャージ、代わりに拳銃を取り出すと、まずは閃光弾でセイントカートリッジ一頭を吹っ飛ばし、さらには狐火を発生させる幻炎弾を肉薄しようとしてきた五頭の足元に狙撃、突如幻の炎の壁を作り出し、幻惑さ

せた。

メガランチャーは圧縮したGN粒子を高出力のビームとして発射することが可能なのだが、チャージに時間がかかるのが欠点だ。だから予備のために特別な銃弾を装填した拳銃も携帯しておいたのだが、こんな雑魚にも劣る連中には十分効果的だろう。

拳銃を仕舞い、メガランチャーがチャージ完了なのを確認したうえでバインドはそろそろ炎の壁が消えるのを予測し、再び両腕で構え、標的を捕捉する。

「この『楽園』は、あなたにとってはきつとかけがえない光……唯一の居場所……でも」

砲口から粒子がちらちらと漏れているのを最後に見、バインドは冷静に呟いた。

「あなたのその光、永遠の闇の底へ拘束する……！」

炎の壁が消えた時、閃光の一撃が五頭のヴェロキの体を貫き、木っ端微塵にした。

次のチャージの間にバインドは再び拳銃で敵を倒しながら考える。とりあえずこれが終わったら、次の戦いのためにエネルギーパックを充填しよう。パックひとつに付き、二発の砲撃が可能となるのだから。

「あうっ……！」

がら空きとなった背中を鉤爪が襲い、グライファ―は思わず唸った。

幸い軽傷だったが、彼女は襲ってきた一頭を蹴り飛ばし、傷ついた背中に手をやる。べちよ、と指先がぬるぬるした感覚を捉え、やがて鮮血に染まった人差し指と薬指が彼女の視界に飛び込んだ。

「……………」

めらめらめら、と熱いものがグライファ―の中から噴き上げようとしていた。瞬時に彼女の周囲の空気が張り詰める。再度襲撃を囃



ろうとしたヴェロキらもそれを感知したのか、突然足を止めた。

複数のヴェロキらにグライファーは突然鉤爪が仕込んである両手を、まるで弧を描くようにゆっくりと動かした。ヒョオオオオ、と乾いた風に似た音が見る者の耳を刺激する。

「ねえ・・・アンタたちの血って、何色？」

グライファーが聞き、両手を素早く動かした次の一閃、ヴェロキらの首から鮮血が迸り、次々に地面に転がった。当然体もすぐに倒れ、動かなくなった。

その手の動き、仮にスローモーションで確認したとしても水面に浮かぶ水鳥の如き美しく、されど凄まじい殺傷力を発揮する。みなも

『ハンター狩人』と呼ばれる彼女の最強の狩具だった。

「ねえ、アンタたちがあたしたちを襲ったのはご馳走のため？それとも『獲物』をあたしたちから守り、『楽園』から排除するための正義？」

残党にそう問いを投げかけるグライファーだが、当然答えてくれるわけがない。

くす、とグライファーは笑うと、

「まあどうだっていいけど、仮に後者だとしてもさ・・・アンタのその正義も、いずれは闇の魔の手に捕らえられる！」

グライファーの片手が再び閃光と化し、残党の首から鮮血を次々に噴出させた。

そしてサバーニヤ。

ビームライフルでヴェロキの頭部から硝煙を噴かせた後は左手のビームサーベルを華麗に操り、残党の体を一閃の動きで急迫し、鮮血と肉を浴びながら綺麗に斬り結ぶ。熱断面を露にしたヴェロキを屍肉にした直後、四頭が彼女を包囲した。一頭が吠えると、それが合図というかのように全頭が鉤爪の生えた後肢で地を蹴り、一斉襲撃を仕掛ける。

「フアング・・・！」

アングだがサバーニヤは薄く微笑をすると、両腰と腰背部に装備した光

の牙を全機放出、無軌道に飛翔し、緋色の粒子ビームを拡散させた。緋色の閃光に消えていくヴェロキ。ようやく彼らも四人が恐ろしいほどに強いことに肌で恐怖を感知したらしい。もはや残党が六、七頭になったヴェロキは彼女たちに背を向けて逃避し出した。

「悪いけれど、あたしたちに喧嘩を売ったアンタたちに、もはや逃げる選択肢もない」

だが、サバーニャは背中を見せて疾走し出した残党を肩と腰に配置したビーム砲で補足すると、

「アンタのすべてをこのあたしが管理する……！」

彼らの今後を素早く管理した結果、死と決定づけた。

砲口から閃光が撃たれ、一頭も残すことなくその体を正確に、黒の塵へと変えた。

四人の少女たちの前には、ヴェロキラブトルのおびただしい屍肉と赤黒に変色した液体の溜まり場と化していた。けれど、彼女たちは少しも目にくれなかった。

「……行こうか」

サバーニャが三人に声をかけ、みな止めていた足を再び動かし始める。

やれやれ、余計な時間を食ってしまったな。

そうため息を吐いたサバーニャはふいに身体が宙に浮いているのにすぐには気づかなかった。

「……え？」

やがて両肩を強い力で？まれ、それが鳥の両足だと知った時、正体が分かった。巨鳥だ。巨鳥の足が彼女の両肩を？み、空中高くにまで身体を連れ去っているのだ。

アルゲンタビス。それが巨鳥の名だった。翼開長時には7メートル以上にもなる史上最大のコンドルであり、トーテムポール最上部の鳥『サンダーバード』のモデルとしても知られている。その巨鳥がサバーニャを標的として選び、巣へ運ぼうとしたのだ。

「サバーニャ！」

すぐにグライファアが足に力を込め、高度一万メートル以上まで到達可能な脚力で姉を救出しようとしたが、アルゲンタビスは一頭だけではなかった。三人も標的と選択した二頭が彼女の救出を阻むかのように頭上から出現したのだ。

「くっ・・・！」

「邪魔だ！どけ！」

「サバーニャ！」

巨鳥と激しく攻防を繰り広げながら三人が叫ぶが、サバーニャは視界からみるみる小さくなっていった。

「くっ、離せ！」

アルゲンタビスに身体を拘束されたサバーニャは約30メートルの高度からなんとか逃れようとしていたが、巨鳥の力は強い。どんなに暴れても離さない。

「フアング！」

フアング

やむをえず再び光る牙を使用する。緋色の光線が巨鳥の翼を掠り、アルゲンタビスは驚いてサバーニャを解放した。

「えっ？・・・わ、わああああああああつっ・・・  
・・・！！！」

しかし、自由になつた瞬間に彼女は30メートルの高さから地上へ降下していった。

## 次回予告

猛獣に苦戦するムーンライトとレモネード、そしてアルガティアとリベリオン

だが彼女たちは相手の意外な弱点に気づき、反撃に出る

次回『急所』

それは最強の武器だが、最大の弱点でもある

## 無敵（後書き）

ヴェロキラプトルは『ジュラシック・パーク』で有名になりましたが、アレのモデルは本当はディノニクスらしく、スピルバーグ監督が名前気に入って借りただけだそうです。

## 急所

「はあ．．はあ．．はあ．．っ」

ムーンライトは荒い呼吸を繰り返し、二体のスミロドンに集中していた。

さすがに厳しい自然界を今まで生き抜いてきた猛者とだけあって、戦い方は心得ている。力は強く、動きも素早い。それを二体も相手になると、ムーンライトといえども少しも油断できなかった。油断した瞬間に犬歯の餌食になるのは重々承知だったから。

ムーンライトを中心に時計回りに動いて彼女を包囲していた二体のスミロドンが再び吠え、襲撃を仕掛けた。最初に爪牙を放ってきた一体のがら空きとなった腹部を思いつきり殴打し、ムーンライトは応戦する。喘ぎ声に近い声で吠えた一頭を殴り飛ばしたものの、間髪入れずすぐ二体目が鋭い犬歯を肉薄させた。

「っ．．．．．」

一秒でも反応が遅れば、小首に突き刺さっていたかもしれない犬歯を危ういところで回避。だが完全にはかわせず、爪が右頬を掠り、小さく鮮血が飛び散った。

「きゃあっ！」

即座に聞こえた悲鳴に反応し、ムーンライトは急いで視線を飛ばす。一体を相手に戦っていたレモネードが身体をスミロドンに地面へと押さえつけられ、犬歯が彼女の顔に迫っているのだ。レモネードも両手で応戦するが、力の差は歴然している。徐々に牙の先端が彼女の小首に接近する。

「レモネード！」

ムーンライトはすぐさま駆け出し、レモネードを押さえていた一体を横から強く一蹴する。蹴られたスミロドンは軽く吹っ飛び、地に体を叩きつけたものの、すぐに起き上がり、再び四足で襲撃体勢を取った。

「ムーンライト、どうしましょう・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

背中合わせとなり、レモネードが尋ねるが、ムーンライトは答えなかった。彼女も周囲を時計回りに歩んでいる三体のスミロドンに対して、何の知恵も浮かんでこなかった。

なんて頑丈な体なのだろう。女といえどもパンチひとつで凄まじい破壊力を発揮するプリキュアのパワーをまともに受けても倒れないとは。頑丈な体のうえに力も強く、動きも敏捷・・・色々な敵を相手にしてきたが、おそらく彼らが最大の強敵だ。なにしろ、邪な目的のためではなく、ただ『生きる』ために全力を発揮しているのだから。

生きるためならどんな生き物だって、現実には信じ難い底力を限界以上に出し切り、残酷になる。それは太古の捕食者、スミロドンプレデターも変わらない。頑丈さと剛力、敏捷性も備わっていて厄介だが、最も厄介なのはあの大きな犬歯だ。あの牙に噛まれたらその時点で自分たちの命はアウトに繋がる。・・・・・・・・牙？

「！・・・そうだわ！」

ムーンライトはスミロドンの犬歯を見て、閃いた。

「レモネード、一体だけでもいい。スミロドンの動きを止めて！」

「動きをですか？」

「そう。早く！」

「分かりました！」

ムーンライトに言われ、レモネードは急いで両腕を交差し、手の甲を光らす。

「プリキュア！プリズムチェーン！」

無数の光の蝶で形成されたチェーンが彼女の両手から飛ばされ、それは三体のスミロドンに直進した。これに素早く反応した二体が即座に横に跳び、かわした。だが、残った一体が反応が遅れ、光のチェーンが体を束縛し、動きを制御された。

しかし、動きを止められてもスミロドンの力は強い。レモネード

の足が引き摺られ、「くっ・・・」と表情が歪む。剛力で引き寄せ、彼女を噛み殺そうと考えたのか、スミロドンは犬歯の生えた口を大きく開いた。・・・それがムーンライトの目的だった。

「レモネード！手を離して！」

レモネードがチェーンを離すと同時に大口を開いたスミロドンにムーンライトは瞬時に迫り、犬歯に両手をかざした。

「ムーンライト・シルバーインパクト！」

光芒が炸裂し、強い衝撃がスミロドンを襲う。再びスミロドンは吹っ飛んで地面に撃墜し、また起き上がったものの、今度は様子が違っていた。ムーンライトが両手から発生させた白銀の衝撃波により、自慢の犬歯が破壊されたのである。さすがのスミロドンもこれには悲鳴に近い咆哮をあげた。

武器や狩りの道具としては最強であり、最適でもあるが、使い物にならなくなってしまうたら当然だが何の意味も持たない。犬歯を破壊されたスミロドンは血液がこぼれる口を痛々そうに閉じ、ふたりに背を向いて離れ始めた。残りの二体も相棒の犠牲に恐怖を感じたらしい。彼女たちを狩るのはあきらめ、後を追って森の奥に消えた。

「やった・・・やりました！さすがです、ムーンライト！」

嬉々となり、レモネードが声をかける。

「ええ。でもいつまでもふたりでいると、またいつ猛獣が襲ってくるか知れないわ。レモネード、少しでも仲間と合流するわよ」

「はい！」

ふたりは歩み出し、その場から離れた。

一方でカリコテリウムと死闘を繰り広げていたアルガティアとリベリオンも苦戦していた。

拳銃を片手に次々と巨体に銃弾を当てるが、やはり体は頑丈にできているらしく、小銃程度では歯が立たない。もっと殺傷力のある

ものに代えたいが、同様に片手が手錠で繋がれているリベリオンがカリコテリウムの攻撃をかわしてちよくちよく移動するうえに少しでも余所見をするとたちまち彼らの爪が襲い、かわすのが精一杯で困難なのだ。

隙を見てリベリオンの頭蓋骨に穴を空ければ、少なくとも厄介が一つ減り、猛獣相手に十分戦えるが、仮にそんなことをしてリベリオンが死の寸前で報いを与えるために手錠を爆発させ、片腕を犠牲にしてしまったら、アルガティアも失血死してしまう恐れもある。

たとえ死ななかったとしても片腕を失うのは大きな痛手だし、その状態のまま単独で森の中を進むのはまさに『飛んで火に入る夏の虫』同然。

ちくしょう。こんな悪魔と関わったばかりに……。

「ちよつと、今私を殺そうかなと思っただでしょ？」

鉤爪で一体の腕を除けたリベリオンがアルガティアに声をかけた。超能力者が、おまえは。

「べつつつに！ただ事故として、カリコテリウムと間違えて誰かを誤射するかもしれないけれど！」

嫌味を含んでアルガティアは返す。

「・・・言つとくけど、あなたの片腕と命は私が預かっている。私が死ぬ時はあなたも死ぬということをお忘れないように！」

「どうもご忠告ありがとう。おかげで今にも蜂の巣にしたいという衝動を抑えることができるんだから！」

「ほっほう、蜂の巣ねえ。女の子なのにそんな危ない発想をするとは、いつそ私の催眠学習を受けて頭を最初からゼロに戻したら？」

「お生憎様。一度世界を滅ぼすのに失敗したくせに二度も同じ失敗をした貴様にご教授願いたくない！」

「・・・なんですって。負け犬がいつまでも遠吠えしてんじゃないわよ！」

「誰がいつおまえに負けた？再戦をご希望なら、いつでも相手になつてやるつか？なんなら、この手錠を外したら今すぐにでも！」





カリコテリウムは接近を図り、再び攻撃を仕掛ける。彼女たちとの距離を詰め、片腕を再度大きく振り上げ、すぐに降ろした。

ぐおおおおおおおおおおつつつつ！！！！

だが、銃声が木霊し、カリコテリウムは痛々しい咆哮を轟かせた。「え？」とよく見ると、振り上げた腕の爪の一本が破壊されている。リベリオンはすぐに銃声が聞こえた方角を見やった。銃口から硝煙が漏れた二挺拳銃を両手に持ったアルガティアがいた。

アルガティアは一旦は二挺拳銃を仕舞い、代わりにクロスボウのパーツが装着したマシンガン、クロス砲を召喚、トリガーを引いて圧縮した高压ガスを解放させると同時に装填した矢を撃つ。

矢はリベリオンとロモモを襲おうとした一体の首筋に直撃、一体は途端に体を激しく痙攣を起こし、その場に倒れ伏す。大きく揺らぐ大地。さらに周囲にいた残党の攻撃を地を転がるなりして回避、素早く喉に矢を次々に撃ち込む。矢にはどんな巨体も一瞬にして麻痺させる薬品が塗料してある。そのため、喉を狙われた残党らは瞬間に体が痙攣し、動きが鈍くなった。そこをアルガティアは再び二挺拳銃を召喚し、両腕の爪を狙撃して破壊する。地面を抉るほどの殺傷力を見せる爪だが、破壊力が大きいほどそれを失った時の痛手もまた大きい。激痛に喘ぎ、カリコテリウムらは痙攣する体をなんとか起こし、逃走し始めた。すぐに森の奥へと見えなくなる。

アルガティアは二挺拳銃を仕舞い、倒れているリベリオンに近づいた。

「立てる？」

「少し時間が経てば、ね」

「・・・言うておくが、手は貸さない」

アルガティアの言葉に、リベリオンは苦笑を浮かべた。

「・・・どうして私を助けた？」

「勘違いするな」

疑問を口にした途端に否定される。

「おまえじゃない。おまえが大切に思っているその妖精を助けたん

だ。おまえはただ偶然巻き込まれたに過ぎない」

「ああそう・・・ところでさ、カリなんとかってヤツも逃げちゃったし・・・闘<sup>や</sup>る？」

その台詞に、ふたりは再び視線を合わせた。一時の緊張感が空間を支配する。やがてアルガティアは拳銃を取り出し、銃口をリベリオンに向けた。ロモモはあわあわとなるも何もできず、ただ宙に浮いているだけだった。

しばらく双方の間に静寂が続いた。双方とも視線を少しも逸らさない。その時間は長くも感じたし、短くも感じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

やがてアルガティアは両目を閉じ、銃口を上空に向けて拳銃を仕舞った。

「なぜ？」

「おまえと違い、怪我人を撃つ行為など私のプライドが許さないから」

嫌味を交え、アルガティアは目を開いた。

「それに、おまえは自分の身を危険に晒してまでその妖精を守った。おまえは嫌いだが、その行為は賛辞に値する。だから・・・今回だけだ。今回だけ見逃す。ミラクルライトを渡してやるから、おまえは自分の世界に帰れ」

「・・・悪いけれど、そうもいかないの。セイバーも私よ。自分を救うのは自分しかない」

「・・・そう。じゃあ勝手にして。私は私で、勝手にさせてもらうから。・・・二度と会わないことを願うわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アルガティアは彼女に背を向けて、歩き出した。すぐに視界から見えなくなる。

やれやれ、トリベリオンは大の字になった。ここからは自分で身体とロモモを守るしかない。この森は色々と魑魅魍魎<sup>いっしょう</sup>が跋扈<sup>はつご</sup>しているけれど、それでも進むしか方法がない。大切な人を救い出すため

には。

「・・・仕方ない。行こうか、馬鹿妖精」

「馬鹿妖精って呼ぶのはやめる口モ！」

身体が回復し、立ち上がったリベリオンの後を口モモは頭から蒸気が噴きながらも宙を飛んでついていった。

#### 次回予告

猛獣を倒し、三人で森の中を進むマリン、ベリー、ブルーム  
彼女たちのそれぞれの夢が、遂に形を成して叶えられる

次回『願望』

夢は大きければ大きいほど、叶った時の喜びもまた大きい

## 急所（後書き）

ひさしぶりにまた長くなった。でも後悔はない。

## 願望

プリキュアたちの多くが森の中を彷徨い、猛獣と戦っている中、マリン、ベリー、ブルームの三人も突如出現した猛獣を相手に激闘を開始していた。

相手の名は、ミノタウロス。ギリシャ神話に登場し、クレタ島の迷宮にて英雄テセウスに退治されたという頭が雄牛で、体が人間の怪物だ。10メートルを超える巨体と一撃で樹木を粉砕した剛力に当初は呆気にとられたものの、どうやら力だけが自慢で知恵はないらしく、三人はいつものパートナーがいなくてもチームワークを発揮、ブルームがバリアで一撃を防御しつつ、マリンとベリーが攻撃に入る。「マリン・シュート！」と片手で弧を描いて発射した複数の水の塊にひるんだところで、ブルームとベリーが巨体を支える足を力を含めた拳と蹴りで思いっきり叩き込むと、ミノタウロスはバランスを崩し、背中から地に倒れた。ミノタウロスが上半身を起こした時点でマリンとベリーはそれぞれマリンタクトとベリースードを召喚、

「花よ煌け！プリキュア！ブルーフォルテウェイブ！」

「プリキュア！エスポワールシャワー！フレッシュ！」

必殺技を発動して青の花弁の光弾とブルーのダイヤを発射、ミノタウロスを光の中に封じ、浄化した。

「ふう・・・」

怪物を倒したベリーは一息吐くと、変身を解除し、蒼乃美希の姿に戻った。そして目の前にある扉を開く。中に意外な人物がいて、美希は思わず目を瞬きさせた。

「おはようございます、美希さん！」

「えりか？どうしてここに？もしかして今日のショーのファッション、えりかが仕立てるの？」

「そのとおり！いやあ、突然お偉いさんから声がかかったって、

ほんと人気者は辛いね」

「でもよかったじゃない。えりかのファッションセンスは抜群なのは私も認めるし、今日のショーも成功は決まったも同然よ。さすが世界的有名ファッションデザイナーは一味違うわね！」

「いやあ、それほどでも……ありますよ!!」

えりかはやや古いネタを引っ張り出して威張り気味に答えた。

「でも本当よかったわね。お互い夢が叶って……」

「まあね。でも、ま、私も美希さんもともと才能あったし、当然っしょ！」

そう。以前からずっと将来の夢を語っていた美希とえりかは遂にそれを叶えたのだ。美希は誰もが羨むカリスマモデルの頂点に立ち、えりかは世界中のモデルから依頼が殺到する人気ファッションデザイナーに。お互い毎日が忙しさに溢れながらも、それを喜びに感じ、『幸福』だった。

「ああそうそう。美希さん、夢を叶えたの私たちだけじゃないんですよ。咲さんもなんですよ」

「咲が？」

「そう。確か……これこれ！」

次のショーに出場する美希の衣装の仕立てに急ぎながら、えりかは小さな記事を彼女に渡した。そこには『ソフトボール天才少女、最年少で日本代表確定!』と記載されていた。

「へえ、最年少で日本代表だなんて凄すぎるじゃない！」

「ですよね!咲さん、今度の試合に初出場するみたいですし、一緒に応援しましょうよ。同じ夢を叶えた仲間として！」

「そうね。咲もきっと喜ぶと思うわ。もしかしたら、燃えちゃうかも」

「燃える……いいねえ、なんだか私も燃えてきたあゝっ! 私たちも咲さんに負けてられない!美希さん、今日のファッションショー、絶対に大成功させましょう！」

「え……ええ。それはいいけど、火傷しない程度にね……」

両目に橙色の炎を宿したえりかに、美希は思わず笑顔が引きつった。

「まもなく本番です。蒼乃さん、スタンバイお願いします」

「あ、はい！」

ノックし、楽屋のドアを開けて伝えた女性スタッフに返事し、美希は

「じゃあ行ってくる、えりか。あなたも今日のショー、楽しんでいて」

「もっちゃんですよ、美希さん。美希さんのカリスマ性で私の世界一なファッションをじゃんじゃん宣伝してくださいね！」

「ふふっ」

美希は微笑を返し、ドアを開ける。楽屋からステージまではそう距離はない。そこから一步先は、数えきれないほどの観客が自分を待っている。

さあ、カリスマモデル、蒼乃美希の出陣だ。みんな、今日は心ゆくまで楽しんでいって。

天井の照明スポットを浴び、えりかが仕立ててくれた衣装を纏って、美希は歓声が湧き上がるステージへ足を踏み込んだ。

咲はヘトヘトになって、ソファに腰掛けた。そこは喫煙所となっており、ソファの他にコーヒーの自動販売機が置いてある。今の時間は咲以外誰もいなかった。

「疲れたあゝ。記者会見って、ほんと疲れるなあ」

咲はつい数分前に記者会見を終えたばかりだった。14歳で女子ソフト日本代表入りなど、現実ではありえない前代未聞の出来事到大勢の記者が注目、契約手続きを済ませた彼女に緊急記者会見が行われ、かなりの質問攻めを受けたのだ。当初は『14歳で日本代表に選ばれたことを自分でどう思うか?』『将来的には世界でも活躍したいか?』といった内容のものが続いたが、そのうち『好きな人



「はいる？」『学校の成績はどう？』『スリーサイズは？』『罵ってください！』と、関係のない質問を次々に受けて困惑（最後のは質問ですらない）、強制終了となった。疲労を感じるのも無理ない。

「でも、この私が日本代表かぁ・・・」

やはり日本代表に抜擢され、みなから注目されるのは悪くなく、とても清々しい。無論プレッシャーも大きいが、期待も膨らむ。

「よし！」

咲はソファから立ち上がり、大きく背伸びした。

「今日も絶対調ナリ！頑張るぞぉっ！！」

「随分張り切ってるね、咲ちゃん」

「え・・・？」

声が聞こえ、咲は振り向く。よく知った顔がそこにあった。

「ふ・・・ふえっ！？か、和也さん！？」

驚いてその名を口にする、舞の兄・美翔和也は優しく微笑んだ。

「ど、どうして和也さんがここに！？」

「舞から聞いてやって来たんだ。最年少で日本代表だなんて凄いよ。おめでとう！」

「そ、そんなわざわざ、わ、わ、わ、私のため・・・ために・・・」

「来月から試合なんだって？絶対観に行くよ」

「ははははは・・・はいっ！あ、ありがとう・・・」「うざいます・・・」

両頬が熱くなり、うまく舌が回らず、咲はつい目を下に向ける。

そんな彼女を見て、和也は再び微笑むと、

「咲ちゃん、今日僕の家に来れる？」

「ふえっ・・・！？」

突然の誘いに驚く咲。

「き、今日ですか？大丈夫だと思いますけど・・・」

「よかった。実を言うと今日は父さんも母さんも舞も家に帰っていないんだ。僕だけしかない」

「和也さん・・・だけ？」

「うん。それで一人で過ごすのもなんか寂しいからさ、咲ちゃん、一緒に夕飯食べない？ふたりだけで」

「ふ・ふふふふふ・ふたりだけでっ！？い・い・いいんですかっ！？」

「咲ちゃんならいつだって大歓迎だよ。咲ちゃんの大好きなもの作るし、一緒に食べよう。ね？」

「は、はいっ！！」

「じゃあ今日の夕方、家で待っているからね」

そう伝えると、和也は喫煙所を出て行った。

咲はしばらく頭が回らなかった。視線も虚空を見つめていた。

「今夜は和也さんとふたりつきり・・今夜は和也さんとふたりつきり・・今夜は和也さんとふたりつきり・・っ！」

思わず顔がにやけ、両頬に手を当ててしまう。片想いの人と一緒に時間を過ごすなど、最年少で女子ソフトボール日本代表に選ばれたことよりも嬉しくて、『幸せ』を感じていた。夢なら覚めないでほしい。

そんな状態のため、背を向けて歩き出した美翔和也が次第に栗色の長髪をした青い瞳の白地のワンピースを着た10歳ほどの少女に姿を変え、ちりん・・と鈴の音を鳴らした直後に消え去ったのに彼女は気づきもしなかった。

## 次回予告

突如水棲獣の襲撃を受けるアクア、ミント、イーグレット、リズム  
凄まじい威力にアクアが危機に晒されてしまうが・・・

次回『偽りの平和』

ここなら誰も恐れることなく、いつまでも平和で幸せでいられる

## 願望（後書き）

これも気づいた方もいるかもしれませんが、えりかの台詞の一部が『プリキュアvsプリキュア』の『10五枚の鏡』とリンクしています。

## 偽りの平和

森のすぐ近辺は海が広がっていたらしい。アクア、ミント、イーグレット、リズムの四人は海上に位置する全長約10メートルの小島にぽつんと座っていた。

小島は岩で形成されていると思えるが、それにしても表面が滑らかに見える。が、今の彼女たちにそんな些細なことはどうでもよかった。粉塵爆発にて吹き飛ばされた四人は運が良くも悪くもこの小島に着地したのだが、それから先はどうすればいいのか途方に暮れていた。

もちろん、離れ離れになってしまった仲間を探しに泳いででも森に戻りたいのだが、彼女たちの視界に陸地はどこにも見えない。それに当てもなく適当に海を泳いだところでここは得體も知れない海獣が自在に生息している。いかにプリキュアであろうと、水中戦に慣れていない彼女たちにとってはこの海域では力を存分に発揮できずに海獣の餌食になる可能性は見えていた。だからといって、いつまでもこの小島でじっとしているわけにもいかず、なんとか知恵を振り絞って森に戻る方法を考案しているのだが、知性派が四人揃ってもこれといったアイディアは浮かんでこなかった。

アクアは隣に座るミントの横顔を見た。彼女の緑の瞳は下に向かい、表情が沈んでいた。何の知恵も浮かばずにただ時間が無駄に過ぎていくのに焦燥感を少しずつ感じていることもあるだろうが、おそらくエクスとセラフから聞いた別世界の自分の存在に苦悩しているのだろう。無理もない。全くの別人とはいえ、同じ顔と名前を持つ人間が『世界破壊派』に所属し、拳句の果てには未遂とはいえ人の命を躊躇なく、しかも残酷に奪おうとしたなどと聞かされたら、誰だって耳を塞ぎたくなるに違いない。アクアだって信じたくない。中学一年の頃からの親友が世界の敵に仕立てられたからといって、彼女がそんな非道を選択したなど思いたくもない。

たぶん、プリキュアが世界の敵に仕立てられる前はエクスたちの世界の『秋元こまち』も優しく、本が大好きで、おしとやかな少女だったのだろう。それがなぜこうまで豹変してしまったのか。そこまで考えて、アクアは昨夜の就寝時にふと思いついたように、やはりもうひとりの自分たちは何者かの陰謀に嵌められたのではないのだろうかと思う。まだエクスたちの世界を訪問してないし、きつと訪問することもないかもしれないから、自分の推測が的を射ているかは分からないが、一度エクスとセラフに話してみる価値はあるかもしれない。彼女たちが近寄り難い（特にエクス）雰囲気を漂わせていたため、話す機会と度胸が出なかったが、もう一度彼女たちと再会するためにも一刻も早く陸地に戻る必要がある………それなのに、どうしたらいいのやら。

「きゃあっ！！」

突然、リズムが悲鳴をあげた。三人同時に反応し、振り返る。

「どうしたの？リズム」

イーグレットが聞く。

「う・海・海から・め・めめめめめめ……目玉がつ！

？」

「目玉？」

アクアが返すと、リズムは急ぎ説明した。

彼女が言うにはふと海面を覗いていたら、突然海中にふたつの丸い怪しげな光が灯ったのに気づいたのである。何だろうと思って、少し近づいてよく見ると、それは巨大な眼球であり、リズムと思いつきり目が合ってしまったと言うのだ。

リズムの話聞いて、思わず三人が身震いをする、

「……！！」「……」

突然、彼女たちが立っているこの小島が動いたのである。それはわずかな微動であったが、確かに動いた。瞬時に彼女たちの頭の中を嫌な予感がよぎった。

「あの・さつきからこの小島、気になっていたけれど、なんだか

表面が綺麗なくらい滑らかに出来ているし、もしかしてこれ、小島じゃなくて……」

「おそらく……巨大な生き物の背中……というより、カメの甲羅!?」

「図鑑で読んだことがあるわ。中生代白亜紀の海には恐竜並みに大きい肉食のカメが生息していたって」

「だとしたら……これはとてつもない獰猛なカメだわ!」

イーグレット、リズム、ミント、アクアの順に喋った次の瞬間、四人を乗せた小島……いや、巨大ガメの甲羅が海面上で大きく盛り上がり、彼女たちにその凶暴な顔を露にしたのである。

アーケロン。それがミントの言った中生代白亜紀に生きていた巨大ガメの名だった。学名は『統治するカメ』と言われ、主にクラゲ、イカ、アンモナイトを主食していたと考えられているが、自らの甲羅の上に乗っていた四人の少女も餌と判断したのだろう。咆哮をあげ、四人を食わんと首を伸ばす。だが、その首が短かったために急ぎ後方に避難した彼女たちにアーケロンの口が届くことはなかった。ならばと思ったのか、アーケロンは突如甲羅ごと海中に潜る。これにはたまらず、四人は海中に放り出される形になる。水泡が口から漏れる中、アーケロンが前肢のヒレを活かし、四人の少女に肉薄を迫った。陸地ではトロクても海中に入れば、もうそこは彼の領域。あつという間に眼前に到来し、岩より硬い巨体を食らわせようとするが、

「(くっ……!)」

精霊の力を込めた両手でイーグレットが水中でバリアを張り、ものの凄い力に歯を食い縛りながらもなんとか回避に成功した。

とはいえ、その程度であきらめるアーケロンではなく、旋回して再び襲撃を仕掛ける。さすがに疲労を感じ、イーグレットはバリアを張る力がすぐに出なかった。

「(プリキュア!エメラルドソーサー!)」

やむをえず、今度はミントが緑の円盤状の物体を召喚、巨大化さ

せてアーケロンの攻撃を防ぐ。しかし今度は脆く、アーケロンが激突した瞬間に円盤は砕け、四人は危うく巨体を回避したものの、アーケロンの突進により発生した強力な水圧による衝撃を受けて口から悲鳴の水泡を吐きながら、少女たちの身体は大きく吹き飛ばされていく。

アーケロンは再び旋回し、単独になったミントに狙いを定め、三度目の突進を図った。

「（プリキュア！サファイアアロー！）」

だが、親友の危機にアクアが急いで水の矢を撃ち、複数を巨体に浴びせる。ほとんどが強固な甲羅に当たったため、アーケロンはほぼダメージを受けていなかったようだが、狙いはミントからアクアへと移した。スピードを増し、彼女の目の前にまで急迫、大口を開いた首を伸ばす。だが、それがアクアの狙いだった。

アーケロンは甲羅こそ強固なものの、前肢のヒレや後肢、尻尾、そして首の表面はそれほど硬くないはず。しかも顔を攻撃されれば、アーケロンでなくともかなりのダメージを受けるだろう。アクアは自身を食わんとアーケロンが目の前にまで接近して首を伸ばすを待っていたのだ。

この作戦は成功する。ギリギリのタイミングを見計らって、アクアは強力な一撃を大口に撃ち込む。さすがのアーケロンも顔を攻撃され、大ダメージを受けたようで巨体が少しだけ後退した。

だが、アクアはひとつだけ思慮が浅かった。たとえ大ダメージを受けようとも美味しそうな餌を目前にしたアーケロンの執念深さを彼女は視野に入れていなかった。

「（なっ・・・！？）」

一瞬ねじれた首を戻し、アーケロンの大口がアクアの身体を捉えた。歯噛みしてアクアはなんとか両腕と両足で踏ん張り、大口が閉じるのに抵抗するが、徐々に限界が来ており、彼女を啜えた口が閉まろうとしている。

アクアの危機にミント、イーグレット、リズムの三人がすぐに動

いた。再びミントが必殺技の緑の円盤を召喚し、今度は防御ではなく攻撃に使う。円盤が首に直撃したアーケロンはひるみ、アクアを解放、せつかくの餌を逃したのに怒ったらしく、再度ミントを狙って突進を図るが、

「（イーグレット、お願い！）」

「（ええ！）」

ミントの片腕を引つ張り、イーグレットが海面へと浮上、精霊の力を込めた脚力でふたりは太陽が照らす宙へ跳躍する。ふたりを追ってアーケロンも首を伸ばし、海上に再び巨体を晒す。

「リズム！今よ！」

「任せて！」

だが、アーケロンが海上に出た途端、頭上にリズムが待機していた。彼女は専用武器・ファンタスティックベルティエを召喚、

「翔けめぐれ、トーンのリング！」

上空で大きく弧を描くと、

「プリキュア！ミュージッククロンド！」

描いたエネルギーリングを飛ばし、アーケロンの巨体を拘束した。動きを止められたアーケロンに対し、リズムは

「三拍子！1・2・3！」

ベルティエを指揮棒のように振ると、

「フィナーレ！！！」

振り返ると同時にエネルギーリングを爆発させた。さすがのアーケロンも全身に衝撃を浴びれば、ひとたまりもない。苦痛の咆哮をあげて海中に潜ると、即座に敗走し、去った。

アーケロンに勝利し、空中から再び海に戻り、海面から顔を出した四人。

「アクア、大丈夫？」

「ええ、なんとか。ありがとう、三人とも。海上に誘うなんて私も考えなかったわ」

ミントに微笑で返したアクアはふと、突如上空を黒い雲が覆い始



めたのに気づいた。

やがて稲妻が迸り、雷鳴が轟く。豪雨がと強風が穏やかだった海を荒波へと変え、嵐が巻き起こった。

「みんな、手を繋いで！絶対に離したらダメ！」

イーグレットが叫び、四人は手をしっかりと繋いだ。大自然の脅威の前にはプリキュアの力も皆無だった。高波が彼女たちを襲い、衝撃に負けてアクアがミントと繋いでいた手を離してしまった。

「きゃああああああああ．．．つつ！！」

「アクア！！」

ミントが叫ぶが、アクアはすぐに荒波の呑み込まれ、見えなくなる。それどころか、ミントも次に頭上から襲ってきた高波に呑み込まれ、水泡を吐き続けながらもがいているうちに意識が遠のいていった。

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

．．．．．

「起きろ、こまち！」

「えっ！？」

こまちは突然目を覚ました。視界に青年姿のナッツが入ってきた。「ナッツ．．．さん？どうしてここに？アクアやイーグレット、リズムは？」

「何を寝ぼけているんだ。もうそろそろ授賞式の時間だぞ」

「授賞式？」

「忘れたのか？こまちが書いた小説が直木賞に選ばれて、その授賞式が今日行われるんじゃないか」

「え．．．ええっ！？」

直木賞の授賞式？私が！？

「もうすぐ開場だ。今日の主役が出ないとまずいだろ？一緒に行ってやるから、早く仕度しろ」

「え・・・ええ」

こまちは少々戸惑っていたが、ナッツに言われ、急いでソファから立ち上がった。

それからしばらくして、こまちは会場にて直木賞を実際に手に取り、ごく数分の受賞した喜びを招待客のみなに伝え、喝采の拍手を浴びると、準備された豪華な料理に手を着け始めた。

「おめでとうございます、こまちさん」

ふと横から声をかけられ、こまちは振り返る。ドレス姿の舞がグラスを片手に握って立っていた。

「舞さん、あなたも来てくれてたのね」

「ええ。種類は違うけれど、同じ受賞した者としてなのか、招待カードが事前に届きました」

「受賞？舞さんも何か賞を獲ったの？」

「こまちさん、もうお忘れですか？私、つい先月世界的な芸術家の方々に絵が認められて、賞を贈られたのを」

「ああ・・・」

そういえば、新聞にも載ったけ？

「しかも今度国立美術館で期間限定で私の絵画展が行われることにもなったの！」

「本当？凄いわ、舞さん」

「ええ。自分の作品を見てもらうのは少し恥ずかしいけれど、たくさんの人たちに観に来てほしいです！こまちさんにも後々チケット贈りますから、ぜひ観に来てください！」

「ええ。喜んで行くわ」

「舞さん！こまちさん！」

またも声をかけられ、ふたりは背後を振り向く。白のパーティシエ衣装を身に纏った誰かが手を振りながら笑顔でふたりに近づいてきていた。



「プログラムに書いてあったと思うけど、実はこの後演奏会があつてね、僕もヴァイオリンで参加するんだ。全部で三曲弾くから、ぜひ南野さんも楽しんでいつてほしい」

「は・・はい！そ、それはもう喜んで・・た、楽しませてもらいます！」

「うん。ああそれと・・南野さんはクラシックは好き？」

「え？え、ええ、はい。クラシックはよく聞きます！」

「よかった。実は今度の日曜日にずっと行きたかったクラシックコンサートがあつて、そのチケットを手に入れたんだけど、そのチケットが二枚あるんだ。だから、もし南野さんがよかつたら、一緒に・・」

「へ？え・・ええええええ！？せ、先輩、そ、それって、デデデデデデデデ・・ッ」

「それじゃあ南野さん、今度の日曜日楽しみにしているから」

王子先輩は最後まで爽やかな笑顔のまま立ち去った。

「よかつたわね、奏さん。憧れの人なんでしょ？その人からデートに誘われるなんて」

「そ、そんなデートだなんて、お・・大袈裟ですよ、こまちさん」

「でもふたりだけでコンサートに行くなんて、素敵だわ。奏さん、これは心ゆくまで楽しんでいかないと絶対損よ。頑張つて！」

「が、頑張るって、何を頑張るんですか、ふたりともおっ！！」

先輩のふたりに応援され、奏はますます顔に熱が籠ったが、心の中では嬉しさでいっぱいだった。

波打ち際で目を閉じて眠っている三人の少女のそばを栗色の長髪をした白地のワンピースの少女は静かに立ち上がった。三人の少女はどれも幸せそうな寝顔をしている。少女は青い瞳でその寝顔を見て、満足そうに微笑んだ。

これでいい。夢の中なら、あなたたちはいつまでも笑顔を決やす

ことなく、幸せでいられる。

そこには自分を不安にさせるもの、恐怖させるものも存在しない。永遠に平和で、笑っていられる。

そんな幸せな夢の中で、いつまでも平和に笑って過ごすといい。ちりん……。

白のワンピースの少女は両耳の鈴を鳴らし、その場を立ち去った。

#### 次回予告

それぞれのグループを形成して森を進むドリームとミューズ

森が深くなる中、彼女たちは思いがけない人の姿を見かけ、走り出す  
次回『疾走』

こんな所にいるはずがない、けれどあれは間違いなく……

## 偽りの平和（後書き）

次回、非公式であり、しかも映画にしか出てないのに今もなお根強い人気を誇る『あの娘』が遂に登場します！

## 疾走

突如発生した嵐だ<sup>スコール</sup>ったが、徐々に強風も豪雨も収まりを見せ始め、数分後には止んだ。

巨大な葉陰に身を隠し、風雨を凌いだドリームとミルクは黒雲が去るのを確認すると、びしょ濡れの身体をふるふる奮わせ、水滴を弾いた。

「ミルク、大丈夫？」

「大丈夫ミルク。このくらい・・・」

ぽんっ！

「どうってことないわ！」

煙を発し、ローズの姿に変えたミルクは相変わらずエラソーな態度で踏ん返り返り、ドリームは苦笑した。

「でも・・・本当にここはどこかしら？早くみんなを探して合流しない・・・」

とはいえ、やはり離れ離れになった仲間の身を案じているらしく、ローズの声のトーンが低くなる。実を言うと、彼女たちはつい先ほど一体のブロントザウルスを目撃したのだ。

ブロントザウルス。中生代ジュラ紀後期から白亜紀初期にまで生息していたとされる全長約25メートル、体重約50トンもの巨体を誇る草食性恐竜。キリンのように太く、長い首が特徴である。あまりもの巨体のため、足元の地面にドリームとローズが立っていたなど気づくことはなかったが、たとえ彼らの目にふたりの少女の姿が映ったとしてもネズミのように小さく見えただろうから襲ってやることもなかっただろう。

それはともかく、危害を加えなかったとはいえあんな巨体を持つ生き物が悠々と森の中を歩行していたのにローズは仰天した。絶滅したものや架空や伝説上の生き物が自然のままに自由に生きていると事前にエクスとセラフから聞いてはいたが、実際に生眼で見ると

やはりその迫力に圧倒される。フロントが去った後もローズはしばし両目を白黒させて、その場から一步も踏み出せなかった。・・・にも関わらず、ドリームはというと、

「うっわあっ、すつつごおおーい！！ローズ、恐竜だよ、恐竜！うわあ、おっきいなあ・・・私もあの長い首に乗って一緒に散歩したいなあ・・・！！」

と、キラキラと目を輝かせて、至つてのん気な発言をし、別の意味でローズをまたも仰天させた。なので先ほどローズがネガティブな発言をしても、

「大丈夫大丈夫。なんとかなるなる」

と、実にポジティブにVサインをしてみせた。ドリームらしいと思いつながらも、ローズは軽いため息を吐く。

「あのね、ドリーム。世の中そう甘くないのよ。周りを見てみなさいよ。こんなに広いのに、どうして簡単にそんなことが言えるわけ？」

「大丈夫だって！私、信じてるもん。みんなのことを信じていれば、たとえどんなに遠く離れてても、必ずまた会えるよ。プリズムフラワーの時には一回みんなとお別れしたけど、また会えたじゃん」

「そ・・・それはそうだけど、でも、だからといって奇跡がまた起きるとは・・・」

「それじゃあ、ローズはみんなと会いたくないの？このままココやナッツたちと会えなくなってしまうていいの？」

「そ、そんなことないわよ！私だって、ココ様やナッツ様にすつごく会いたいわよ！」

「じゃあ信じようよ。信じていれば、きっと奇跡は何度でも起きるよ。ほらほら、ローズもそんな顔しないで、元気出してみんなをさつさと見つけようよ！」

「・・・もう」

と、ローズは言うものの、これ以上ドリームと議論しても無駄だと悟り、口を噤む。



ドリームの言葉は正直言って甘い考えではある。しかし、彼女が言うとなぜかその通りに納得してしまう気がするから不思議だ。実際、ドリームの言ったことは必ずそうなり、不可能を何度でも可能にした。

たとえどんなに絶望が迫っていたとしても最後まで希望を見失わない。それがローズの知るドリームの強さなのだろう。彼女は勉強もスポーツも何をやってもドジを踏んでしまうある意味とんでもない才能の持ち主だが、どんなに大変でも一生懸命頑張り、努力するのを忘れない。その姿に自分を含め、多くの仲間が励まされ、どんなに絶望的な状況に追い詰められたとしても彼女に続いて次々に立ち上がっていったのだ。ローズはそんなドリームが何回も奇跡を起こしたのを知っている。

だからかもしれない。ドリームがそう明るく笑顔ではつきり言うのと、つい自分も絶望が忍び寄っていた心に希望の光が灯り、信じてみようかなと思ってしまふ。たった一人で周囲の人間に希望を持たせるのも、また彼女の才能なのかもしれない。

そこまで考えて、ローズはふとエクスとセラフが言っていた彼女たちの世界に存在する『夢原のぞみ』の話进行を思い出す。世界の敵に仕立て上げられ、プリキュア同士の死闘に巻き込まれた彼女は今や絶望に心を犯され、精神がギリギリの段階で保てられているという。ローズはその話をとても信じる気になれなかった。

いくら仲間同士で醜い争いが繰り返されているとしても、ドリームなら絶対に最後まで希望を失わないはずだ。ましてや精神が崩壊寸前など冗談だと思いたい。たとえば彼女が別世界に存在する全くの別人だとしても、同じ名と顔を持つ少女ならばきっと、仲間たちとともに力を合わせて混沌とした世界をまたもとの平和な世界に戻してくれるはずだと信じたい。・・・その点に関してドリーム自身はどう考えているのだろうか。不躰<sup>ぶしつけ</sup>だったが、ローズは思い切って彼女に聞いてみると、ドリームはいともあっさりと返答した。

「ああそのこと。そのことも私はなんとかなるなるって思ってるよ」

「えっ？でも仲間同士が本気で戦い合っているのよ。『のぞみ』だって、もう巻き込まれてる。いつ『彼女』が仲間をその手で・・・」  
「ストップ！ストップ！！」

殺すかもしれない、と吐きそうになったローズの口をドリームは慌てて止めた。

「そりゃあ私も嘘だと思いたいよ。エクスたちの世界に行つて、もうひとりの私と話したいとも思つてる。・・・でも、私思うんだ。どんなに絶望が来たって、誰の心から希望がなくなることなんてないって」

「誰の心からも・・・？」

「そう！たとえどんなに絶望したつて、生きてさえいればきつとまた心に希望を取り戻すことができる。私はそう考えてるんだ。確かにもうひとりの私たちはもう後戻りすることもできないくらい追い詰められているかもしれない。でも、また新しく始めることもできるはずだよ！」

「新しく・・・始める？」

「そう！確かに『つぼみ』さん、『いつき』さん、『こまち』さんの三人がやったことはひどいし、許されることじゃないと思うよ。でもね、私は三人がまだ完全に人を捨てたとは思つてないんだ。だって、三人は誰かを殺しかけたことはあつたけど、結局今のところは誰も殺してないみたいなんだよ。それつてさ、ただ失敗したんじゃないくつて、三人の中にあるプリキュアとしての心がまだ生きていて、殺すのだけは止めたんじゃないかなと思うんだ。殺したら最後、もうずっとみんなと友達でいられないのを三人も分かっていると思うから・・・それはきつと、もうひとりの私も同じだと信じたい」  
「・・・ドリーム」

「私は信じてるよ。別の世界の私やみんながまた手を繋ぎ合つて一緒に力を合わせる時が来るのを。だって、同じ顔と名前を持つ人たちなんだもん。きつと大丈夫だよ」

「・・・全く」

本当に敵わないな、とローズは軽く息を吐く。けれど、それがドリームであり、彼女の強さ。もし世界中の人々が彼女のようにポジティブ志向でいたら、戦争も起きることなく、永遠に平和でいられるかもしれない。

ローズがそう思っていると、ふとドリームの表情が物憂げに沈んだ。

「ただ・・・私、ちょっとだけ羨ましいんだ。もうひとりの私のこと・・・」

「羨ましい？ どうして？」

「うん・・・エクスがそつと教えてくれたんだけどね、もうひとりの私の所には『あの娘』がいるみたいなの」

「『あの娘』・・・？」

ローズは首をちよつと斜めにしたが、すぐに思い当たったようにハツとなる。ドリームを見返すと、彼女も我に返ったような表情になり、

「ああごめんね。変なこと言って。今はとにかくみんなを探さないと。よし、張り切って行つくぞぉっ!!」

と、元気いっぱい声を出して前方に振り返り、上空へ片腕を挙げて再び歩き出そうとした・・・が。

「えっ・・・？」

歩みだそうとしてすぐにドリームはまた足を止める。視界が何かを捉えたからだ。

「どうしたの？ ドリーム」

ローズが背後から尋ねるが、ドリームの瞳は焦点を失い、少しも合っていないかった。

「ドリーム？」

ローズが彼女の肩に手をかけたが、ドリームは突如その手を振り切り、走り出した。

「ドリーム！ どこ行くのよ!？」

ローズが叫んで追いかけるが、ドリームの姿は徐々に見えなくな

る。ローズはあっという間に彼女の姿を見失った。

「ドリーム・・・いつからあんなに足が速くなったのよ？」

ドリームを探しているうちにローズは森を抜け、海岸に出ていた蒼い小波さざなみが寄っては戻っている。海岸をしばらく散策していたローズはふと波打ち際に誰かが倒れているのに気づき、近づいた。

「！・・・アクアー！」

それは荒波に呑み込まれ、気を失っているアクアの姿だった。

一方その頃ホワイト、ブロッサム、ミューズの三人は突如出現した猛獣との激戦の真っ最中だった。

相手は50メートルの全長を誇る大サソリ。両刃のハサミで猛攻し、さらに尻尾の先端から毒針を発射するというかなりの強敵だったが、ホワイトが隙を突いて毒針の生えた尾を両腕で持ち上げて背中の中甲羅から地へ叩きのめし、ひるんだところをブロッサムとミューズが攻撃。ブロッサムタクトによるプリキュア・ピンクフォルテウェイブとキュアモジュールによるプリキュア・スパークリングシヤワーを一齐に浴びせ、浄化した。

猛獣との戦いに勝利し、ブロッサムはホワイトに笑いかけ、ミューズにも声をかける。

「やりましたね、ミューズ！」

「・・・べつに。あんなのどうってことないわ」

しかし、ミューズは冷たい口調で答えた。彼女の返事にブロッサムは幾分窺うかのようにミューズの顔を覗き見る。

「ミューズ・・・あの、私、何か気に障ることもしましたか？」

「べつにあんたのせいじゃないわ。さっさとみんなを探そう」

と、ミューズはまるで輪から抜けるようにいそいそとした様子で先を急ぐ。

「あ、ミューズ、待って。ひとりで行ったら危ないわ！」

ホワイトが呼んだが、彼女は聞く耳持たなかった。

ミューズがご機嫌斜めだったのは彼女自身、他の仲間に対して年齢の壁を感じていたからであつた。ノイズに操られ、悪の心を持った父を救いたい想いでプリキュアに覚醒した彼女だったが、自分以外はみな年齢が中学生に至り（ムーンライトに至っては高校生である）、小学生である彼女と同年齢あるいは少しでも歳が近いプリキュアは一人も存在していないことにギャップを感じていたのである。現在同じ加音町に暮している響、奏、エレンとは交流を深め、親近感が湧いているものの、彼女たち以外の仲間とはあまり接したことがないため、どうしても年上の先輩に対してうまくコミュニケーションが取れないのだ。以前プリズムフラワーを巡って、彼女たちとともに戦った響と奏はもちろん、途中からプリキュアに覚醒したエレンでさえもさっさと仲を深め、友達になったというのに（ちなみにどういふわけかは知らないが、せつなと妙に馬が合った）。

「・・・はあ」

先頭を歩きながら、ミューズは背後を歩くホワイとブロッサムに聞こえないよう、小さくため息を吐く。今さらながら、故郷であるメイジャーランドに帰りたくなつた。

プリキュアとして覚醒した以上、ノイズの脅威から世界を守るために加音町に残つて戦うことを決意したとはいえ、やはり愛する父と母と離れて暮らすのはまだ9歳である自分には相当堪える。自分が寂しくならないように祖父も一緒にいてくれるが、それでも彼女はやはり両親が恋しくて恋しくてたまらなかつた。

でも今さら、そんな我侭が通るわけがない。

それも分かつているから、ミューズはどうしても憂鬱にならざるを得なかつたのだ。

「ん・・・？」

ふと、ミューズは前方に目を向けていたミューズは気づいた。彼女の視界に、何か人影が見えたのを。一瞬だったが、彼女はその人影を知っていた。

「なんで・・・どうして・・・？」

「ミューズ？」

そう言葉を漏らしたミューズにブロッサムは後ろから声をかけたが。

「！・・・ミューズ！」

「ミューズ！」

突如、ミューズは駆け出し、ブロッサムとホワイトは驚いて声をあげた。

「ミューズを一人にさせたら危ないわ。早く追いかけるわよ、ブロッサム！」

「はい！」

先輩に返事を返し、ブロッサムとともに走り出すが、複雑な自然の迷宮と化している森の中で一人の少女を探し出すのは困難だった。

ふたりの少女は走った。

全速力で走った。

自分たちが見たもの、それをはっきりと知りたくて。どうしても確認したくて。

限界を超えて力を完全に出し切るまで走って、走って、走り続けた。

「！！！！・・・」

そして、遂に彼女たちは出会った。

「ママ・・・パパ・・・」

「ダーク・・・ドリーム・・・」

## 次回予告

意識を失っているアクアを急ぎ救助するローズ

彼女を介抱しているうちに、ふたりだけの時間が彼女たちを優しく包み込む

次回『姉妹』

大切な人との時間、それはあまり機会がないからこそ貴重な存在

## 疾走（後書き）

ムーンライトの時も心配したけれど、ミューズは彼女以上にオールスターズの中で浮かないかな？



## 姉妹

アクア……。

起きて、アクア。

ねえ、起きて。

「ん……」

耳元で呼ぶ声が聞こえ、アクアは閉じていた目をゆっくりと開いた。

樹木の枝葉に差しかかる木漏れ陽が、まずアクアの目に映った。

「アクア！」

次に心配げなローズの表情が見えた。

「ローズ……？」

「アクア……よかった」

ローズはほつと安堵したようにアクアに微笑んだ。そこでアクアはようやく自身が地面に仰向けに倒れているのに気づく。

「ここは？……！……そうだ、私、突然嵐に巻き込まれて……それで波にさらわれて……ミントたちと離れ離れになって……」

記憶をすぐに反芻させたアクアは上半身を起こそうとしたが、

「ダメよ、アクア。まだ寝てなくちゃ……無理しないで」

すぐにローズに抑制され、再び地に背中を着ける。

「ごめんなさい……」

アクアはローズに謝った。

さやさや、と優しい風が枝葉を揺らし、爽快に吹いていく。

近辺には小鳥が飛んでいるらしく、姿は見えないが、チツチツ、ピイピイピイ、と鳴き声が時折聞こえた。

多種の猛獣が生息している恐ろしい森でもあるが、やはり自然に囲まれながらゆったりとした時間を過ごす、とてつもなく心が癒されていく。深呼吸をすると、空気はおいしく、アクアもローズも

つい先ほどまでアーケロンやプロントザウルスに遭遇した恐怖が徐々に薄まり、心が隅々まで綺麗に洗われていく清々しさを感じていた。

「・・・ねえ、アクア」

「なあに？ローズ」

風の心地よさを肌で感じながらローズが声をかけた。アクアも地面に横になったまま、返事する。

「アクアは覚えてる？いつだったか私が風邪を引いて、アクアに看病してもらったのを」

「ええ・・・覚えてるわ」

忘れもしない。あの日があったから、彼女は夢を見つけることができた。

まだミルクイローズに覚醒する以前、ミルクは突然発熱を起こし、仲間たちの目の前で倒れてしまった。急遽ミルクは水無月邸に運ばれ、仲間が風邪を治療する力を持つピンキーという小妖精を探している中、かれんは一人に残り、彼女のために冷却タオルを交換したり、りんごを切って摩り下ろして食べさせてあげたりと、一生懸命に看病してあげた。大変ではあったが、ミルクが元気になってまた笑顔を見せてくれるなと思うと、かれんは少しも辛くなかった。

だがそこで、かつての宿敵であるナイトメアが襲撃した。仲間たちがまだ駆けつけない中でかれんは単独でキュアアクアに変身し、真っ向から敵と渡り合った。全ては可愛い妹のような存在であるミルクを守るため。仲間が駆けつけた後もアクアは苦戦しながらも愛馬チャーリーに跨り、敵を跳ね除けたのだ。

その後、ピンキーの力で元気になったミルクの笑顔をもう一度見ることができたかれんはこれがきっかけとなって、医者になるのを決めた。医者になって病気を治し、ミルクみたいにたくさんの人がまた元気になって笑顔を見せるようにしていきたいと。

ローズもあの日のことを一度も忘れたことがない。アクアを恩人だと感謝しているし、ココとナッツと同程度あるいはそれ以上に大

切な人だと慕っている。プリズムフラワーを巡る戦いにおいて仲間と告別した際には彼女はリーダーののぞみでもなく、りんでもうららでもこまちでもなく、誰よりもかれんとの別れに涙したのだから「まるであの時の立場が逆転したみたいね。今はアクアが患者で、私が看病しているほう・・・」

「そんな大袈裟よ。私は風邪引いてないし、しばらく休んでいたらすぐに治るから」

「でも大変なことがあったばかりなんですよ？無理はしないで。大丈夫。アクアが休んでいる間は今度は私がアクアを守るから！」

「・・・ありがとう」

両手の拳を握って張り切るローズを見て、アクアはついくすりと笑った。彼女がいつの間にかこんなにも頼もしくなったのに嬉しさを感じていた。

ローズは単独でもプリキュア5以上のパワーを発揮するが、戦士として戦いの経験は浅く、またもとはパルミエ王国住民のため常識外れな点もしばしば見せたのでまだまだ幼く、甘えん坊な印象も見受けられた。けれど、熾烈な戦いを重ねるうちに彼女自身も戦士として成長、今や立派に自分の考えで生きていけるようになっていく。

あんなに小さかったミルクが、ここまで随分と大きくなったものね。

少し寂しい気もしたが、アクアは心から彼女の成長を喜ばしく感じ、笑みが止まらなかった。

「じゃあお願いするわね、ローズ。私は少し休むから」

「ええ。任せて」

ローズの返事を確認し、アクアは心から安心したように目を閉じ、深い眠りに着く。すやすやと寝息が聞こえ、ローズも微笑を浮かべ、思わず手で彼女の青い髪に触れた。

アクア、本当に安心しているよう・・・。

自分を信用して任せてくれると分かり、ローズは嬉しくなっ

た。

もちろん、ローズの中では主人であるココとナッツ、それからのぞみたちも大切であり、はたまた守りたいと思っっている存在だ。そんな大切な存在を守る力を手に入れたのを彼女自身、心から喜んでいた。

だけど、とローズはふと思う。

もし、自分がのぞみたちと同じような普通の少女に生まれるとしたら、もしかしたらかれんの妹に生まれたいと願うかもしれない。もちろん、ココとナッツ、のぞみたちのことは好きだ。でもかれんはそれ以上に好きだ。

もし神様が願いを叶えて、本当にかれんの妹になれば、彼女といつもいつでも一緒にいることができ、毎日が心から薔薇色に見えるような気さえする。

朝はふたりだけで楽しく食事を取った後は一緒にお喋りしながら登校。

午前の授業が終わり、一緒にお昼を食べながら今後の予定を楽しむ会話。

学校が終わった後は生徒会長の仕事で帰宅が遅い姉のために自分がキッチンに立ち、彼女のための手料理を作る。

そして夜は一緒にお風呂に入り、そしてふかふかのベッドに潜り込んでともに安らかな眠りに着く。

そして、また希望に満ちた朝が来るのを待つ。

「……贅沢かしら？」

ふと、そう声を漏らし、首を小さく左右に振る。

分かっている。そんなのは夢のまた夢であることは。

かれんが医者になりたいという夢があるように、自分もお世話役として主人のココとナッツに永遠の忠誠を誓い、生涯仕える夢がある。そんな夢を叶えるためにも自分は自分が決めた道を突き進まなければならぬのだ。幻想の世界で遊んでいる暇などない。いつまでも彼女に甘えてはならない。自分はもう、力の弱い子供だった昔

の自分から変わったのだから。

だから・・・この時間は、今だけ。

ほんのちよつとだけしかないのだから、悔いのないように過ごしたい。

決意を固めたローズはアクアの青い髪を何回も触れ、優しく掻き下ろす。

ふたりだけの時間。滅多にない、とても貴重な時間。

誰にも邪魔されることのない、ゆつたりと安心できる時間を過ごし、ふたりの少女の心は『幸福』で満たされていた。

#### 次回予告

単独で森の中を進むルージュは途中である人物と再会を果たす

彼女の無事に安堵し、ともに行動しようとする・・・が

次回『激怒』

こんな『幸福』、自分は少しも望んでなどいない

姉妹（後書き）

次回の話が今年最後の執筆になります。

## 激怒（前書き）

ルージユの視点で書いてます。

## 激怒

こんなワケの分からない森の中をどれだけ進んだのだろう。

もうそろそろ、森の中央ぐらいだとは思っただけだなあ。

道すがら、七色に発光する蛍の群れを見かけて感嘆したり、湖畔で長い髪を優雅にとかす人魚マーメイドの美しさに思わずため息を吐いたり、オスらしい頭に角の生えたウサギみたいな小さな動物が角の生えてないメスを求めて追いかっこしているのを見て思わず微笑んでしまったりと、まあ退屈はしなかったけど。

ドリームは今頃どうしてるんだろう。私はどうしても彼女だけが気がかりだった。

誰か一人でもドリームと一緒にいてくれればいいけど、もし彼女一人だけだったら迷子になって泣き出しているんじゃないかなあ。

いや・・・べつに信用してないわけじゃないよ。ドリームもプリキュアとして戦いを重ねるにつれて成長しているし、強くなっているのは私だって認めてる。でも、ドリームのことは幼馴染の私が一番よく知っているのも事実だ。だから頭ではドリームのこと信用しなくても、どうしても心配せずにいられないのよ。

・・・って、私、誰に言い訳してんの？

ドリームを心配すると同時に私は今回の敵であるマルガのことも思っていた。存在だけで世界を滅ぼす力の持ち主である『彼女』に、なんだか重大な意味が秘められているような気がして、早く正体を見定めたいたい想いに私は駆られていた。

突然森が切れて、私の目に一面の砂丘が飛び込んだ。その砂丘の上空を巨大な鳥が数羽、しきりに旋回している。大きな翼の先に、鋭い鉤爪が生えている。

「あれって・・・始祖鳥!？」

私はいつか読んだ恐竜図鑑に始祖鳥が載っていたのを思い出した。鳥類のご先祖様に当たる始祖鳥は確か、恐竜と鳥の境目に位置する



ような動物だと聞いたことがある。大きなくちばしに牙が並び、肉食獣のように獲物を引き裂いて食べるという。

「危ない危ない」

私は急いで森の中に戻った。うっかり砂丘に出ると、途端に上からパクリと食<sup>や</sup>られるところだった。

と、今度は砂丘のあちこちがぼこぼここと蠢いたかと思うと、砂の中から緑の鱗に覆われたワニみたいな爬虫類が何匹も湧いて出てきた。どうやらたった今卵から孵ったばかりの赤ちゃんみたいだ。もつとも、赤ちゃんと言っても体長は１メートルほどもあったけれど、とか思ってたなら、上空を飛行していた始祖鳥が突然急降下を開始した。あつという間に一匹がくちばしの餌食になり、バリバリとその牙に体を碎かれる。それを見た途端に私は始祖鳥が子供の爬虫類の孵化の時期を知っていて、待ち伏せていたのを理解する。弱者は生まれた瞬間に食べられてしまう。厳しいようだけど、これも自然の摂理。弱肉強食の世界はマルガが作ったというこの『楽園』でも変わらない。私はその様子を黙って眺めていた。

「おい、ルージウツツ!!」

と、よく知った声が聞こえ、私はすぐにその方向に振り向く。

「ドリーム!」

「ルージユ、よかった。無事だったんだね!」

「ドリームこそ」

ドリームは笑いながら私の前で足を止めた。ついさっきまで心配していた当の本人が全く元気であることに私もほっと安心して微笑む。

「ルージユ、何見てたの?」

「卵から孵ったばかりのトカゲの赤ちゃんが鳥に食べられちゃうところ」

「鳥?・・・うわあ、おつきいっ!」

始祖鳥がまた一羽、砂地に突っ込んできた。すると、砂丘から突然何かが飛び出てきたかと思うと、一瞬にして始祖鳥が、パクリ、

と食べられてしまった。砂の下に潜んでいたのは緑に輝く鱗にびっしりと覆われた、長い首を持つ巨大な生き物だった。

「これって・・・まさか、龍!？」

ドリームが絶叫した。それはまさしく龍だった。燃えるような紅い眼。頭には二本の角。長い首の下はまだ砂の中だから全長がどれほどあるかは分からないけど、とにかくバカでかいことは間違いない。

きつと、この龍は子ワニたちの母親に違いない。まだ口の中にいる始祖鳥を八つ裂きになると、なお子供を狙う鳥たちに怒りを露にして咆哮し、威嚇した。けれど、鳥たちもひるまない。母親の死角を狙っては子供たち目がけて突っ込んでいる。どちらも必死の様子だ。砂埃と大絶叫の中で生き物の壮絶な戦いが始まった。

これは凄いことになったと私もドリームも呆然と立っていた。砂埃の中、何かがびゅんびゅんと、素早く動いているのが見え、私は目を凝らした。それは龍の尻尾だった。その先は、針のように鋭く尖っていた。

ここは危ない。早くドリームとここから離れないと。

私がドリームに声をかけようとした時、砂埃が一瞬晴れたかと思うと、

ドンッ!!

衝撃が私の身体を震わせた。

何が起きたのか、すぐには分からなかった。でも喉に込み上げてきたものが口から溢れ出てきて、それが大量の血だと分かった時、振り回していた龍の尻尾が自分の胸を貫通したのをようやく知った。  
「・・・・・・・・!!」

意外にも、痛みも苦しみもなかった。ただ、驚いた。

ああ、これは助からないな・・・・。

身体を貫かれたというのに私は自分でもびっくりするくらい冷静

にそう思った。

蒼白な表情のドリームと目が合った。ああ、そうだった。ここは危険だった。龍は今度はドリームを狙ってくるかもしれない。

「ドリーム・・・逃げて！」

そう叫んだら、がくん、と身体から力が抜けた。ドリームが慌てて私の身体を支える。ドリームは何かを言おうとしているかのように唇が震えていた。

「ドリーム・・・私のことはいいから・・・早く、逃げて・・・っ！」

ドリームの表情が引きつった。理屈は分かるけれど、納得できないようだった。気持ちは分かる。分かるけれど、迷っている時間なんかない。私は一秒でも早く、ドリームに逃げてほしかった。

「何やってんの・・・早く・・・早く行ってよ、ドリーム！！」

すぐ目の前のドリームの顔に、私の吐いた血飛沫がかかった。私を見つめるドリームの瞳と、血の気の引いた白い顔色と、そこに飛び散った赤い血が、目に焼きつくようだった。

突然、ドリームが私を力いっぱい抱き締めた。

「ド・・・！？」

「・・・」

ドリームは何も言わなかった。ただその瞳には、何の迷いもなかった。どこまでもまっすぐに澄み切った眼差し。ドリームは、いつものにこにこした顔で私に笑ってくれた。

龍と始祖鳥による砂埃が舞う中、咆哮が轟き渡る。大気を震わせるほどの吠え声にひるむこともなく、ドリームは私を抱いたまま少しも動かなかった。私は笑顔でいるドリームの瞳をただ見つめた。

「一緒に死んでくれるの？ドリーム」

「・・・うん。ルージュをひとりぼっちになんてさせないよ」

私の問いに、ドリームは純粹な笑顔で答えた。

「そう・・・そうか・・・そういうことか」

私は、そのドリームに微笑んだ。なんだか泣きたい気分だった。

ゆっくりと目を閉じ、また、開く。

私は、表情を引き締め、ドリームの腕を振り払った。瀕死だったはずの身体はすぐに立つことができた。すると、周りの景色がたちまち霧のようにぼやけ、ダイヤモンドダストのように無数の粒子が煌いては消えた。

私は、森の中に、ドリームとふたりでいた。

そこに子供を襲っていた始祖鳥も、母親の龍もいなかった。私の胸に空いた穴も血もなかった。

私は目の前にいるドリームを睨み、呟いた。

「これがあんたのやり方なの……『幸福<sup>マルガ</sup>』!!」

そこにいたのはドリームではなく、10歳くらいの女の子だった。栗色の長髪と青い瞳。薔薇色の頬と唇。白いワンピースを着て微笑むその姿は、天使か、それこそ妖精のように見えた。

ちりん……。

両耳の鈴を鳴らして、女の子……マルガは小首をかしげて言った。

「どうして拒むの？ 幸せだったんでしょう？」

……ああ、確かに『幸せ』だった。『幸福』以外の何物でもなかった。

でも……こんなの本当の『幸せ』じゃない。私はこんな『幸福』なんて、来てほしくない。

「今すぐ失せて。さもないと……燃やすわよ！」

私は今までにない怒りを目に込めてマルガを睨み続けた。けれど、マルガはちよつと困ったように青い瞳をクリクリさせただけで、先ほどの幻影と同じように、自身を霧と化して姿を掻き消した。

森は静かで、風の音だけが聞こえていた。少し色を深めた青空が、一層美しく見えた。暗い木立の奥で、動物や植物たちが発する光が明滅していた。

私は、ただ立ち尽くしていた。握った拳がぶるぶる震える。頭の中に、エクスが言った言葉がゆっくりとよぎった。

「マルガはあなたたちの望む幸せを与えてくれる」  
「でも、あなたたちは『彼女』の誘惑に負けないで、絶対に」

「・・・なるほど。こういうことだったわけね・・・ふ・・・ふふ・・・はははは」

あつ はははははははははははははははははははははは  
きや はははははははははははははははははははははは  
わっ ははははははははははははははははははははははは  
私はけたたましく笑い、空を見上げると、  
「ちつつくしょおおおおおつつつつ！！！」

叩きつけるように吠えた。

私の叫びは、青空に吸い込まれて、消えた。

次回予告

ダークドリームと奇跡の再会を果たしたドリーム互いに手を握り合い、二度と離れないと誓い合う

ねえ……今の私は、ちゃんと笑えている？

## 激怒（後書き）

次回の話は来年になります。みなさん、良いお年を！

## 抱擁（前書き）

あけましておめでとうございます！2012年もよろしく願います！！

## 抱擁

ダークドリーム。

鏡の国の支配者シャドウにより、夢原キユアドリームのぞみの影として誕生した彼女はオリジナルを倒すことのみを使命として誕生した。

だが、たとえ自身の影コトでも友達としてドリームは受け入れ、当初はオリジナルを心から卑下して嫌っていたダークドリームは徐々に彼女に想いを寄せるようになり、いつの間にか『大嫌い』が『大好き』に変わっていた。そして、わずかでもドリームとともに生きるのを心のどこかで望み始めていた。

しかし、主人は自身の生み出した部下の裏切りを許しはしなかった。ダークドリームはオリジナルを庇ってシャドウの力をまともに受け、その影響で消滅。『私、どうすれば笑えるのか分からなかったけれど』と優しい微笑を残して腕の中で消えていった友達を救えなかったドリームは今もその過去を悔やみ、彼女の存在を決して忘れまいと心に決めた。

その彼女が、今、目の前に、確かに、存在している。

「本当に・・・ダークドリームなの？」

ドリームは慎重に言葉を選んで、目の前の彼女に尋ねる。

「私以外の誰だっけ言うの？」

ダークドリームは、そう言って最期の時と同じように、優しく微笑んだ。その声、その微笑み、その優しさ。初めて出会い、永遠に別れた姿そのまま、ドリームの胸を強く締めつけ、涙腺が崩壊し、目から続々と溢れ出た。

「う・・・うえっ・・・うえっ・・・」

「?・・・どうして泣いてるの？」

まだ人間としての感情を完全には理解できていないダークドリームは、嗚咽を漏らしてオリジナルが突然泣き出したのを不思議そうに首をかしげ、尋ねた。ドリームは次から次へと溢れ出てくる液体



を拭い、まだ目頭に溜まったままの状態で彼女に微笑した。

「涙つてのはね、悲しい時にだけ出るんじゃないんだよ。嬉しい時にも出るの」

「嬉しい・・・」

「そう！私は今、とっても嬉しい。ダークドリームとまた会えて・・・」

ダークドリームはまた微笑んだ。

ふたりの少女は少しずつ距離を詰め、互いに抱き合った。

強く、優しく、いとおしく。

もう二度と離さないというかのように。

一瞬にして、気持ちさが、彼女が夢見た未来へと連れて行く。

春の野道を、仲良く手を繋いで笑いながら歩き、夏には海でともに楽しく水浴びと花火を。秋には森の中で栗拾いや木の実を力を合わせて？ぎ取り、冬には雪合戦や雪だるまを作って遊んで、夜は互いに身体を温めながら明日が来るのを待つて眠る。

もし、ダークドリームと友達・・・いやそれ以上の存在になれていたら、ドリームは彼女とともにこういう未来を生きたかったかもしれない。そんな未来の中で、ドリームは主人への忠誠以外何も習っていないと発言した彼女にのびのびと育って、色々なことを知ってほしかった。

「私も、ドリームに会いたかった・・・」

「・・・」

一度は堪えていたものが、再びドリームの目から続々とこぼれた。どうして友達を、救えなかったのだろう・・・。

何度も何度も、何百回、何千回、何万回と、そう自分に問い、責めた。

せっかく仲良くなれたのに、せっかく友達になれたのに、せっかく一緒に生きることができたかもしれないのに。

彼女の命は、不甲斐ない自分を庇ったためにわずか数時間で奪われてしまった。彼女を死へ導いてしまったのは自分だと愕然した。

悲しくて、いとおしくて、それでも自分を守ってくれた彼女のた  
めにもドリームは世界を絶望の闇から守り抜こうと人一番懸命に戦  
い、決して希望を失わなかった。それは彼女のような悲しい存在を  
二度と生み出さないためでもあった。

それでも大切な人を失い、胸にぽっかりと空いた穴はどうしても  
埋まらなかった。夜が来ると、時折ドリームは鏡に映る自分を見て  
は泣きじゃくったりもした。後悔ばかりが先に立ち、どうにもなら  
ないと思いながらも月日が虚しく過ぎていった。

「ねえ、ドリーム。今の私は、ちゃんと笑えている？」

「うん……」

「そう、よかった。キュアドリーム、私がこうして笑えるようにな  
ったのは、あなたと出会い、友達になってくれたからよ。あなたが  
私に手を差し伸べてくれたから、私はシャドウ様の僕でもない、た  
だのダークドリームになれた。あなたがいてくれたから、私は人間  
になれたの。感謝してるわ。心から……」

「ダークドリーム……」

「だからドリーム、あなたが自分を責めることなんてないのよ……」  
ダークドリームはオリジナルの両手を胸に抱いた。ドリームの手  
に、温もりが一層伝わる。

「あなた、ずっと自分のことを責めてきたんでしょ？どうして私を  
助けられなかったんだらうっていつも苦しんでいたんでしょ？」

「……」

「ごめんね、あなたのことをずっと苦しませて。でも、もういいの。  
やっと……やっと、こうしてまた会えた。後悔も、悲しみも、苦し  
みも、もうすぐなくなるわ。あなたはもう、自分を責めなくていい  
の」

「ダーク……ドリームう……っ」

よしよし、とダークドリームはオリジナルの頭を優しく撫で、さ  
らに抱き締めている身体をより一層強くした。ドリームは心の中に  
波が立ち、小刻みに震えが全身に伝わった。

「もう、私はあなたの目の前で消えることなんてない。いつまでも一緒。ずっと、一緒よ」

「ずっと?」

「うん。あなたが思ってくれるなら、私はずっといられる。ずっと、ずっと、あなたのそばに・・・」

「うん・・・うん!」

知らないうちに、ダークドリームの目にも涙が溢れていた。ドリームも涙に濡れた顔で、微笑み続けていた。

ふたりの周囲にはいつの間にか黄色の菜の花畑が満開に広がり、白い蝶々が数多く飛んでいた。

春の太陽が暖かく照らし、ふたりの少女を優しく静かに包み込んでいく。

大切な人とまた出会い、ともに未来を生きることができる喜びに感謝し、少女たちの心は、壮大な『幸福』感に満ちていた。

#### 次回予告

故郷に暮らす父と母と再会し、驚くミューズ

優しい親子愛がまだ幼い彼女を抱き締め、少しずつ甘受させていく  
次回『最愛』

無理することはない、ここならいくらでも甘えても構わない

## 抱擁（後書き）

『DX3』でシャドウが復活すると聞いた時、「シャドウなんか正直どうだっていいからダークドリームを復活させる！」と激怒<sup>マジギレ</sup>した人々、手挙げて。

## 最愛

ミューズは自身の目の前に広がっている風景に何度も目を瞬きさせた。

瞳に映るのは、彼女の故郷、メイジャーランドそのものだった。

彼女が愛した街。

彼女が愛した国民たち。

彼女が愛した音楽。

その全てが確かに存在しており、彼女をしばし呆然させた。

だがそれ以上に彼女は驚かせたのは、すぐ目の前に立つふたりの人物。優しい微笑を向ける両親、女王アフロディテと国王メフィストだった。

「お帰りなさい、アコ」

「お帰り、私の可愛いアコ」

ミューズを見るなり、両親は微笑んだまま、その言葉を発した。

「な、なんでパパとママが？・・てゆーか、私、ついさっきまで森の中にいたはずなのに、どうしてメイジャーランドが・・・・？」

突然の故郷と両親の登場に、当然ながらミューズはそう疑問を口にするが、

「きゃっ!？」

そんなことはいざ知らず、突然彼女の父親がミューズの身体を両腕で抱き上げた。そして、髭の生えた顔を寄せてゆっくりと左右に振って、娘の顔に擦りつける。

「よしよし。可愛いアコにまた会えて、パパはとっても嬉しいぞ。本当によく帰ってきてくれたなあ」

「ちよ、ちよっと、パパ。く、くすぐりたいから離して」

父親のスキンシップに赤面しながらミューズは伝え、父親の腕から離れる。

「た、確かにパパとママに会いたいとは思ってたけれど、一体どうな

っているの？私はついさっきまで『永遠の楽園』とかいう森にいたんだよ。それなのに、どうしてふたりがいるの？どうしてメイジャーランドまで出てくるの？」

心のどこかで愛する父親と母親に会いたい、三人でまたメイジャーランドに平和に暮らしたいと、確かに願っていたかもしれない。父親がノイズに操られて悪行を開始し、身の安全を確保するために母親のもとさえも離れて、祖父とともに加音町で暮らすことになった彼女は深い悲しみと寂しさに涙を流す日々を送ることになった。愛する父をなんとかしても救いたいと願う彼女はプリキュアに覚醒した後も、結局父を救う方法や力を発揮できずに思い悩み、自分より後にプリキュアに覚醒しながらも徐々に力を発揮していくメロディヤリズム、ビートと自身を比較してさらに苦しみ、彼女たちに羨望の眼差しを向けていた。

現在では父親をノイズの洗脳から解放することに成功して、親子三人で故郷に暮らせることが可能となり、またノイズの来襲から世界を守るためにプリキュアとしてメロディたちと力を合わせて戦うのを選択したことで少しばかりは苦悩も吹っ切れ、自分自身強くなったとは思うが、それでもやはり故郷に帰りたい、両親とまた一緒に暮らしたいという小さな願いは今も消えずに残り、彼女を苦しめている。だからそのためにも一刻も早く、ノイズを倒して世界を不幸から守り抜こうと彼女なりに一生懸命になっていた。

ところがまだノイズを倒していないというのに、突然ミューズはメイジャーランドに帰ってきてしまったのである。こうして再び故郷に足を踏み入れたのは、ノイズの手先として出現した怪物・ハウリングが母親の身体を支配し、世界中から音楽を消し去った事件以来だった。

今度のメイジャーランドはハウリングの時と違い、彼女が暮らしていた平和で美しい世界のままだったが、やはり何の前触れもなく、故郷や両親が目の前に現れたことに、ミューズは訝しげに感じずにいられず、警戒心が募った。

もしかしたら、これも空色朝顔が見せる幻覚？

でも、父親に抱かれた時の感触は確かだったし……でも、それすらも幻覚だとしたら。

このまま引き返すべきか否か迷っていると、突然父親が思いがけないことを言った。

「何を言ってるんだ？アコ。おまえはノイズを倒して世界を不幸から守ったから、メイジャーランドに帰ってきたんじゃないか？」

「え……？」

ノイズを倒した？世界を不幸から守った？

それって……戦いは、終わったってことなの？

「そうよ、アコ……」

母親が微笑のまま膝を折り曲げ、娘と目線を合わせて言った。

「あなたは私たちメイジャーランドの人々を……ううん、それどころか世界中の人たちを守ったのよ。今までよく頑張ったわね。アコは私たちの誇りよ。だから……」

きゅっ。

母は両腕を娘の背中に回し、身体を優しく抱き締めた。

「マ……ママ？」

「もういいのよ、アコ。やっと私たちはまた、親子三人で暮らしていける。今日ぐらいは甘えていいのよ」

「そうだぞ、アコ。見てみなさい、このメイジャーランドを。おまえが一生懸命戦ったから、みんな平和に、笑って暮らせるようになったんだぞ」

「みんな……が？」

ミューズは母の背中越しに故郷をもう一度眺めた。

溢れんばかりの国民たちが笑い合い、音楽を奏で、平和に時を過ごしている。みんなみんな、とても幸せそうだった。

「私、本当にみんなを守った……の？」

「ええ、そうよ。みんながあなたに感謝している。アコも見たでしょう？あの笑顔と音楽が証拠よ。だから……もう、アコは戦う必

要はないの」

「さ、アコ。パパとママと一緒に城へ帰ろう。今日はパパがひさしぶりにアコの大好きな歌を歌ってあげるからな」

すると、父親の言葉に娘から腕を離れた母親が振り返り、悪戯っぽく微笑した。

「あら？パパひとりだけじゃ寂しいわ。せっかく親子三人揃ったのだし、みんなで歌いましょう。それがいいわよね？アコ」

「う・・・うん」

ミューズは無意識のうちに警戒心を解いていた。

何の邪心もない、純粋な両親と国民の笑顔と身体を美しく楽しげな音楽が彼女を爽快にさせ、少しずつ無抵抗にしていく。

そうか、私は、みんなを守れたんだ。

また、パパとママと一緒に暮らせるんだ。

幻覚ではないかと警告を発していた脳も鈍らせ、彼女を徐々に惹き込んでゆく。

突然両親や故郷が出現した点についての疑問も、どうでもよくなってきた。

ふわふわと、全身が気持ちよく感じていく。

「さ、私の可愛いアコ。帰ろう」

「帰りましょう、アコ」

父と母が手を差し出す。

長く触れることがなかった、愛しい手。

「・・・うん。帰ろう」

ミューズは何の躊躇いもなく、ふたりの手を取った。優しくて、柔らかくて、温かい手だった。

激しい戦いに身を投じることも、自身の力不足に思い悩むことも、もうない。

深い悲しみと寂しさに身を沈めることもない。

これからはいくらでも甘えてもいい。ずっとずっと、大好きな人たちといられるのだから。



平和で、何もかもがいとおしく見える『幸福』な世界に、わずか9歳の少女は完全に惹き込まれ、眩い笑顔を見せていた。

突然走り出したミューズを追い、ホワイトと二手に分かれたブロッサムは懸命に森の中を搜索していたが、彼女の姿は未だ見えない。彼女を一人にするのは危険だ。この森には幾多の巨大生物がまだ潜んでいるというのに。

そもそも、彼女は最初からどこかとっつきにくく見えた。シャイなのか誰とも関わりたくない雰囲気醸し出して、存在自体がほうつておいてほしいと言っているようで、けれどもほうつておけない存在感があった。

まるで、初めて出会った頃のあの子と似ているような気がしますね……。

ふと、ブロッサムはまだ9歳の年齢である彼女にある人物の姿を重ね合わせる。

花の都で出会った彼に。

彼もまた、ミューズと同様の雰囲気を出していて、どこかとっつきにくかった。けれど、自分たちと出会ったことで彼自身チェンジすることができて、心から笑えるようになった。彼との出会いは、今もなおブロッサムの中では大切な記憶として保存されている。

今頃、彼はどうしているのだろうか？

まだ父親と一緒に世界中を旅しているのだろうか。

ブロッサムがそう考えに耽っている。

突然、誰かにぶつかった。

「うっ・わぁっ！」

と、ブロッサムは身体のバランスが崩れて上半身が後方に倒れそうになるが、

「危ない！」

すんでのところでは腕を？まれ、転倒に至らなかった。

「大丈夫？ごめん、ぼうつとしていた」

「い、いえ、私こそ、前を見ていなくて・・・」

あれ？この声、どこかで・・・。

そう気づいたブロッサムは声の主に顔を上げ、一瞬で動悸が激しくなった。

「あなたは・・・！」

#### 次回予告

ブロッサムが出会った人物、それこそ彼女が思い出していた『彼』だった

突然の『彼』との再会と変化に、ブロッサムは戸惑いつつも満開の笑顔を咲かす

次回『金木犀』

人は『彼』をこうも呼ぶ・・・・狼男、と

## 最愛（後書き）

映画『プリキュアオールスターズNew Stage』にあの五人の他に、映画限定の29人目の新プリキュアが登場・参戦するそうです。

## 金木犀

転倒しかけたブロッサムを？んで助けたのは、薄い銀髪の少年だった。少年は上のボタンを外した白いシャツに紺のジャケットを着服し、ブロッサムよりも背が高かった。

だがブロッサムは少年の姿に見覚えがあつた。先ほどの声といい、顔立ちといい、どこかで見たような気がする。しかし、どこで見たのか喉まで来ているというのに、彼女は思い出せずにいた。

「あの、すみません。私たち、どこかで・・・」

「つぼみ・・・」

「えっ？」

不躰ながらも聞いてみようと考え、口に出したブロッサムだったが、突然少年に名前を呼ばれ、すぐに噤んだ。銀髪の少年は深い黄色の瞳でブロッサムを見つめていた。

「えっと・・・あの、あなた・・・は？」

「僕だよ、つぼみ。思い出せない？」

「ええ・・・と」

まだ思い出せないようだ。少年は軽いため息を吐くと、こう言った。

「つぼみ、マフラー大事にしてる？」

「マフラー？」

少年の言葉にブロッサムは一瞬キョトンとなった。しかし次の瞬間、その単語がブロッサムの脳裏からある記憶を引き出した。

その記憶は、花の都パリを訪れた記憶。えりかの母による海外初のファッションショーの開催のモデルとして選ばれ、参加することになった彼女はパリの街を散策しているうちに突然空から舞い降りてきたひとりの少年と出会った。少年は400年の眠りから覚めた男から世界の破壊を回避するために逃走していたが、遂に捕まり、男に枯れかけていた心の花を利用して巨大な怪物にされ、パリの

破壊を開始した。

ブロッサムは仲間と力を合わせて怪物をなんとか浄化し、男の手に囚われていた少年の救出に成功。本当の名を知らない少年に彼の心の花にちなんで名前を与えた。その名前が・・・

「オリヴィエ・・・オリヴィエなんですか？」

「やつと思ひ出したか」

銀髪の少年は少々呆れ顔でブロッサムを見た。

オリヴィエ。

それが彼の心の中に咲いていた金木犀の花にちなんでブロッサムが与えた名前だった。オリヴィエは幼い頃から両親を知らずに修道院にて育ち、ずっと外の世界を知らずにいた。ところがモンサンミッシェルにて父親と母親が欲しいと祈りを捧げていたところ、突然耳に聞こえた声に導かれ、彼は地下である男の封印を解いた。

サラマンダー男爵。

400年前、地球を砂漠の星に変えようと襲来した砂漠の王が初めて送り込んだ最初の砂漠の使徒。しかし、彼は自身を生み出してくれた王の心を知りたいと欲が湧いたために『世界の砂漠化』ではなく『世界の破壊』という王の命令に背く行為を実行したために失敗作として捨てられ、そして彼の暴虐を制止するために現れた初代プリキュア、キュアアンジェに敗北して封印、400年もの気が遠くなる時間を過ごすことになった。

400年目になって、オリヴィエの手で再び自由になれた男爵だったが、キュアアンジェによって力の結晶がバラバラになって世界各地に封殺されたうえに封印の影響のために身体にも亀裂が少しずつ広がっていて、時間が残り少ないのを知った。だから彼は急いでバラバラになった力の結晶を求めてオリヴィエとともに世界各地を旅し、一度は失われた力を時に彼にも与えて『ルーガル狼男』に変えていきながら取り戻していき、再び世界の破壊を企てていた。全ては、自身を一度殺した砂漠の王とプリキュアへの復讐のために。

だがオリヴィエは男爵に世界の破壊をやめてもらいたくて彼が数

年かけて取り戻していった力の結晶を強奪、旅をしているうちに擬似親子のような関係にもなっていた男爵に初めて反抗し、彼のもとから逃走を開始した。そして、キュアブロッサムら四人のプリキュアと運命的な出会いを果たしたというわけだ。

けれど逃亡を続けながらオリヴィエは悩んでいた。彼は男爵に世界の破壊をやめてもらいたかったのであって、男爵を嫌っているのではなかった。むしろ、両親を知らない自分を時としては守り、『父さん』と呼ぶことも許してくれた男爵を心から愛していたため、彼にそんな悲しい行為を繰り返してほしくなかった。でもどうすればいいのか分からず、ただただパリの街を逃げ続けるしかなかった。そんな彼を変えてくれたのが、プリキュアだった。うざったいと思いつながらも四人の少女たちと交流し、言葉を交わして打ち解けあっていたうちに彼は自分の想いを男爵にちゃんと伝えていないことに気づき、彼女たちのもとを去ると、再び男爵に世界の破壊をやめるよう、想いを伝えた。息子の成長をしみじみ感じながらも結局、男爵は長年積もりに積もった憎悪のほうを優先し、暴走へと至ってしまったが、オリヴィエの心に金木犀の花はしっかりと咲き誇っていた。

現在ではまたしてもプリキュアに敗れ、邪悪な心が浄化されて改心した男爵と再び世界中を旅している。別れの際にオリヴィエはせめてもの礼としてブロッサムに肌身離さずに首に巻いていたマフラ―を渡し、今も彼女は大切な思い出の品として保存している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ブロッサムは突然現れたオリヴィエをじつと、訝しげに見つめた。

「？・・・・どうしたのさ、つぼみ」

「ほ・・・・本当にオリヴィエなんですか？」

「は？何言ってるのさ、つぼみ」

「だ、だって、私よりも背が高いじゃないですか！？」

「・・・・ああ」

オリヴィエはようやく得心がいったようにうなずいた。

確かにブロッサム言うとおり、以前のオリヴィエは彼女よりも（ついでにえりかよりも）背が低かったのだが、今日の前にいるオリヴィエは明らかに背がブロッサムより高くなっている。ブロッサムが立つて、少しだけ顔を上げないと、彼の顔は見えない。

「そりゃ、背ぐらい伸びるよ。僕もいつまでも子供じゃないんだから・・・」

「う・・・」

さも当然に言い返したオリヴィエの言葉にブロッサムは思わず口ごもる。

「そう・・・ですよ。背ぐらい伸びますよね」

この時ブロッサムは少しも気づいていなかった。

いくら背が伸びたからといって、オリヴィエと初めて出会い、別れるまでそう年月が経っていないのに、急に背が高くなるわけがないという常識に。

「大きくなりましたね・・・オリヴィエ」

「だからそう子供みたいに言わないでよ、つば・・・っ!？」

今度はオリヴィエが口を噤んだ。最後まで言う前に突然ブロッサムが彼の身体に抱きついてきたからだ。

「つば・・・?」

「会いたかったです、オリヴィエ。ずっと、ずっと・・・」

大きくなった彼の背に手を回しながらブロッサムは目を閉じて微笑んでいた。

「私、オリヴィエに話しておきたいことがたくさんあるんです。実は私、お姉さんになったんです。妹が生まれたんです。妹はふたばって、言うんですよ。ふたばはよく私になついていて、泣き虫で、でも笑うととても可愛い・・・まるで天使のようなんです。ふたばが生まれた時、オリヴィエにも伝えたかったんですが、どうしても連絡する方法が見つからなくて・・・でも、まさかこんな森の中でオリヴィエにまた会えるなんて思ってもみませんでした!」

「森？ここはドイツのど真ん中だけど、つぼみ」

「え？ドイツ・・・？」

そう言われて、ブロッサムはようやく彼の身体を解放し、周囲を見回す。

ついさっきまで歩いていた木立が見えず、代わりに歴史を彷彿させる古い建造物が建ち並んでいるのが瞳に映った。その建造物の隙間をごく真新しいカラフルな電車が汽笛を鳴らして過ぎ去っていく。パリと同様のヨーロッパの街であるのは雰囲気で見分けるが、ここはパリではない。もしオリヴィエの言うことが正しければ、自分はなぜかドイツにいるということになる。

「な・・・なんで・・・私ついさっきまで森の中に・・・」

一体自分に何が起こったのかさっぱり分からない。

ひょっとして、何かの次元に触れて、その拍子で空間を超えてドイツに来てしまったのだろうか。

だとしたら、かなりヤバイのでは。何も言わずに『楽園』から出てしまったのでは、まだ『楽園』内にいる仲間がきつと心配する。

それにドイツから日本までは遠距離だ。マントに変身できるシプレがないと自分は飛行できないし、かといってドイツの空港から日本行きの飛行機に乗るお金もない。

せめて連絡が取れればいいのですが、どうしよう・・・。

色々と不安に駆られ、沈んだ表情のまま考えに耽るブロッサムだったが、

「つぼみ」

「え？」

突然手を握られ、ブロッサムは再びオリヴィエを見た。綺麗に整った彼の瞳には強い意志が宿っていた。

「もうすぐ陽が暮れる。今日は僕たちの家に泊まりなよ」

「えっ？で、でも、そんなの悪いですよ。それに今は私、宿泊している場合じゃ・・・」

「遠慮なんかしないでよ、つぼみ。つぼみたちは前に僕たちを助け



てくれた。だから今度は僕たちがつぼみを助けたいんだ。大丈夫、男爵もきつと分かってくれるし、僕も一緒につぼみが帰れる方法を探すから」

「オリヴィエ・・・どうして私のためにそこまで？」

手を強く握ったまま離さない彼に、ブロッサムは尋ねた。表情が引き締まり、光が瞳から消えることのないまま、オリヴィエはつきりとした口調で返事した。

「・・・決まっているじゃないか。つぼみにはいつまでも笑っていてほしいからだよ。つぼみがそんな顔をしていると、僕も悲しくなる。だから・・・力になりたいんだ！」

「オリ・・・ヴィエ・・・」

「嫌だといつても手伝うからね。だから、笑顔でいてよ、つぼみ」  
「オリヴィエ・・・はい！そうですね！笑顔が一番です！」

そうだ。どんなに絶望的な状況になったとしても最後まで決してあきらめてはいけない。それはプリキュアとしての戦いにおいて基本中の基本だったではないか。

「案内してください、オリヴィエ。あなたたちの家に」

「うん。じゃあこつち来て」

ブロッサムは手を握られたまま、オリヴィエと一緒に駆け出した。熱が籠った、温かくて強い、頼りがいのある手だった。

本当に、大きくなっただんですね、オリヴィエ・・・。

自分よりも背が高くなったのは驚いたが、それ以上に彼が頼もしく見えて、心も成長したのにブロッサムは心から嬉しく感じ、いつの間にか変身を解いていた。

陽が傾き、町並みが橙色に染まる中、力が強く入った手に引っ張られて、つぼみは心からの『幸福』に満足していた。

その頃、ブロッサムと同様にミューズを探していたホワイトも森の中を散策していた。

大声で名前を呼んでみたいが、この森は未知の領域。どんな猛獣が潜んでいるかも分からない。だとしたら、なるべく刺激を与えてはいけない。しかし、声を出さずに広い森の中で9歳の少女を見つめるのは至難の業だった。

「ミップル、感じる？」

「ダメミポ。ミューズの気配を感じないミポ」

一応ミップルの感知能力を駆使しているが、それだけではまだ心細い。今頃、ミューズは猛獣に襲われたり、怪我したりしていないだろうか。

そんなミューズのことを考えていると、不思議と、『彼』を思い出した。

思い出した理由はおそらく、彼も当初はとっつきにくい印象があったからだろう。誰とも交わらない、交わろうとしない彼が自分たちと付き合っていくうちに少しずつ変わり始め、最後には自分たちにも想いを託して自ら闇へと還ったあの時・・・助けることができたかもしれないのに助けられなかったあの時が今もホワイトの心に残り、苦しめている。

もう二度とあんなことは繰り返したくない。だから、絶対にミューズを見つけないと。

ホワイトがそう決意を固め、再びミューズを探そうとすると、

「ほのかさん」

ぼん、と後ろから肩を叩かれた。

「え？」

ホワイトはすぐに振り返る。すぐに瞳孔が大きく開き、声が震えた。

「あなたは・・・！？」

## 次回予告

ホワイトの肩を叩いた人物、『彼』こそ彼女の心に最も残った人

悲痛と後悔が募った長き月日が一気に氷解していく  
次回『転校生』

もう自分を苦しめることはない、むしろ許しなさい

## 金木犀（後書き）

次回、記念すべき改心キャラ第一号が登場します。

## 転校生

ホワイトの肩を叩いたのは、ひとりの少年だった。オレンジ色のＴシャツと黒の短ズボンを穿いている。ホワイトはその少年に見覚えがあった。

忘れもしない。その端麗な容姿と切れ目。どこなくミステリアスを醸し出している雰囲気。そう、彼こそがホワイトの今までの人生の中で今も印象が強く残っている人物……。

「キリヤ・・・君？」

ホワイトがその名を呼ぶと、少年「キリヤは大きくうなずいた。入澤キリヤ。」

なぎさとほのかが通うベローネ学園中等部に突然来た謎の転校生で、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能と欠点がるでなく、彼はすぐに全校女子から人気を博し、なぎさも彼に好印象を持っていた。しかし、彼にはもうひとつ別の顔を持っていた。それはかつてブラックとホワイトが戦っていた宿敵、ドックゾーンに所属する幹部の顔だった。目的は一つ。端麗な容姿でプリキュアを籠絡、亡き者にするためであり、容姿、才能ともども自信のあったキリヤはその目的を容易に遂行できると信じて疑わなかった。

ところが、そんな彼を困惑させる存在が現れた。それが雪城ほのか「キュアホワイトである。相手に好印象を与える挨拶をしても素っ気無い反応で返した彼女にキリヤは戸惑い、逆に彼女のことを少しずつ気になり始めていた。そして、彼女と触れ合っていくうちに彼の中で妙な気持ちが生え始めていた。

自分の中で何かが変わり始めていたのをキリヤ自身も気づいていた。そして、自分自身で解答に辿り着いた。

ああ、そうか。自分は学校がいつの間にか楽しく感じていたのだと。

特にほのかさんに会うのに至福を感じていたのだと。

そして、自分がほのかさんのことを好きになっていたのだと。

プリキュアを籠絡するつもりだったのに、ミイラ取りがミイラになってしまったのをキリヤは自認し、否定しなかった。

けれど、闇の出身である自分が光であるプリキュアと一緒に生きることが許されないというのも彼は理解していた。どう足掻いてもすでに決定づけられた自分の運命は変えることができない。そう絶望し、自分の宿命を呪いながらもキリヤは生きるためにブラックとホワイトに戦いを挑むのを選んだ。

だが、『運命なんて変えてしまえばいい！』と言い放ち、傷ついた身体を崩したホワイトにキリヤはこれ以上プリキュアを苦しめることはできなかった。彼はメップルとミップルの故郷である光の園復活に必要な黄色のプリズムストーンをふたりに渡し、永遠の闇へと還っていった。自分の分まで運命を切り開いていつてほしい、と想いも託し、泣きながら何度も名を呼ぶホワイトとキリヤは告別した。

その後、光と闇の間を彷徨っていたキリヤだったが、ドックゾーンの支配者、ジャアクキングが遂に今までにない強大な力を発揮した影響で人間界と闇の世界に歪みが生じ、脱出。最終決戦時においてキリヤはブラックとホワイトに再会し、協力。ジャアクキングが倒された後は『自分の居場所を見つけました』と呟いて、今度は光の中に還るようにキリヤは消えていった。のちにほのかは彼に瓜二つの少年を見かけて戸惑ったが、その少年がキリヤが転生した姿だったのかどうかは不明である。ただ、ほのかは再び彼と別れるにしろ、ちゃんとさよならができなかったことにほんの少ばかり不満が残っている。

「おひさしぶりです、ほのかさん」

「キリヤ君・・・どうしてあなたがここに？」

そのキリヤが目の前に存在していることにホワイトはしばし思考が停止した。キリヤはそんなホワイトに悪戯っぽい微笑を向けた。  
「驚かしてすみません。ですが、どうしてもほのかさんに会いたく

て来てしまいました」

「私に？」

「はい。実は僕、ほのかさんにちゃんとお礼もお別れも伝えてなかったことに気づいて、でも今さらそんなこと言ったところでほのかさん許してくれないんじゃないかなって思ってた、それでずっと避けていたんですけど、やっぱり伝えたいことは伝えないといけないなと思ってる……遅くなって、すみませんでした」

キリヤは深々と頭を下げた。

「そ、そんな……いいのよ、そんな畏まらなくても。それに……私だって、キリヤ君にずっと謝らなくちゃと思っていたことがあるの」

頭の中をよぎるのは、やはりあの時の記憶。

まだ力がなかったために、目の前で闇に還ろうとした彼を助けることができなかった。

もしかしたら助けられたかもしれないのに、とその時の後悔は彼女の心に深く押し掛かり、何回も非力な自分を責めた。結局彼は助かっていたと分かって少しは安堵したとはいえ、それでも彼女の中では最悪の過去の一つとして数えられ、涙を流した。

「キリヤ君、ごめんなさい……私に力がなかったばかりに……ずっと……ずっと……あなたに辛い思いをさせてしまって……もしかしたら、あなたを助けることができたのかもしれないに……」

「ほのかさん……」

忌まわしい過去を思い出して、ホワイットの目から涙がぼろぼろとこぼれた。嗚咽も口から漏れた。二度も目の前で彼女が泣いたことに、キリヤは戸惑った。

「ほのかさん……」

キリヤはホワイットの両肩を優しく？んだ。ホワイットは涙が溢れる両目を彼に向けた。

「ほのかさん、あの時に選んだ道について僕は少しも後悔していま

せん。ほのかさんの言うとおり、僕は自分で自分の運命を変えたんです。また会えるまでに時間はかかりましたけれど、僕が闇に還ることなく、今もこうして生きていられるのもほのかさんが僕を励ましてくれたからなんです。ほのかさんのおかげで、僕はようやくドックゾーンの住人ではなく、ただのキリヤとして希望を持って生きることができたんです。僕はほのかさんに感謝こそすれど、恨む気持ちは少しもありません。それに、またこうして会えたじゃないですか」

「キリヤ・・・君」

キリヤは静かに微笑みながら涙に濡れているホワイトの顔を見つめた。

「だからほのかさん、そう自分を責めないでください。むしろ、もう許してあげてください。他の人が許さなくても、僕がほのかさんを許します。だから、笑ってください。・・・ほのかさんの笑顔は素敵で、僕は好きでしたよ」

「キリヤ君・・・ありがとう。でも・・・」

「！・・・ほのかさん？」

突然、ホワイトが相手を抱擁するかのように体勢を少し傾け、脱力した身体をキリヤに預けた。いきなり自分に身体を倒してきたホワイトにキリヤはさらに困惑した。

「ほ・・・ほのかさん？」

「お願い・・・キリヤ君。少しだけでいいから、このままでいさせて・・・」

「・・・」  
まだ嗚咽が漏れる声でホワイトが伝えると、キリヤは無言で承諾した。

やがて、ホワイトは大きく叫んで号泣した。今まで溜まりに溜まったものを一気に吐き出すかのように泣き続けた。キリヤはそんな彼女のそつと撫でた。

泣かないでくださいとは言ったが、今回ばかりは気が済むまで泣



かしてあげようとキリヤは思った。

そして、願った。

泣き止んだ後、『幸福』に満たされた彼女が最高の笑顔を見せてくれることを。

とさつ。

ふたりの少女の身体がゆっくりと、静かに倒れた。

やがてすやすやと寝息が聞こえ、白地のワンピースを着た少女、マルガはふたりに近づいた。

両者とも今のところはまだ表情に変化がない。おそらく、夢に入ったばかりなのだろう。しかし、そのうちふたりも他の者と同じように笑顔を見せてくれるはずだ。

さあ、何の苦しみも悲しみもない、喜びと幸福だけが存在する世界で永遠に暮らさない。

今まで苦しみ続けてきたあなたたちは、十分幸せになる権利があるのだから。

幸せになっていいのだから。

ツインテールをした13歳の黄色の衣装を着た少女「キュアレモネード」と藤色の長髪と衣装をした17歳の少女「キュアムーンライト」の表情が徐々に微笑を浮かべ始めているのを見て、マルガは満足そうに笑いかけ、その場を立ち去った。

ちりん……。

いつものように『幸福』の音色を響かせて。

## 次回予告

幸福な夢の中に溺れていくレモネードとムーンライト

徐々に幸福感に蝕まれ、抵抗できなくなっていく彼女たち……だが  
次回『自覚』

確かに夢の中ならいつまでも幸せでいられる、しかし所詮は夢

## 転校生（後書き）

個人的にキリヤ君との戦いの回はせつないけれど、『ふたりはプリキュア』では二番目に好きな話です（一番はホワイトがさらわれ、ブラックが必死で救出しようとする回です）。

## 自覚

盛大な歓声が会場から次々に湧き上がった。自分を一目見たいがためにはるばる遠方から来たファンも声を揃えて彼女の名を叫び、キヤーキヤー喚く。

そんな観客の海を目の前にして、ステージ上に立つうらはは今さら怖くなってしまった。

大女優であり、歌手でもあった母を目指して母と同じ道を行き、数々の苦難を乗り越えて遂に初めて巨大ステージでの単独ライブに至ったのだ。マネージャーの鷲尾からその話が来た時にはその場から跳び上がるくらい歓喜に打ち震えたではないか。

それなのに、数えきれないほどのお客さんを舞台裏から見た途端に心臓がバクバクし始め、恐怖を覚えた。ドクドクドクドク、と激しく打ち、いつものようにお客さんと向き合えない。でも、ステージ上に出た以上、今さら引き下がれない。足ががくがくして、声一言も出なくなる。もうBGMは流れている。一分後には歌わないと・・・ダメ、どうしてもできない。

誰か・・・誰でもいい・・・助けて・・・。

「うらはは」

突然横から声が聞こえた。とても懐かしい声だった。うらはは反応し、すぐに振り向いた。

「!・・・お母さん」

かつて大女優兼歌手、そしてうらのの母親でもある春日野まりあが娘にやさしく微笑みながら立っていた。

「ど・・・どうして、お母さんが・・・?」

「うらが初めて大きなステージでライブすると聞いたから、来ちゃった」

「『来ちゃった』って、お母さん・・・」

悪戯っぽく舌を出した母にうらはは呆れたように言った。

「でもうらら、随分と緊張しているようね。もしかして、怖くなつた？」

「・・・お母さんには全部お見通しなんだね。うん、こんなにいっぱいのお客さんを見て、嬉しくもあつただけど、なんだか怖くなつちやつて・・・もし恥を晒してしまつたらどうしようつて・・・この程度でひるむようじゃ、私、まだまだ未熟ですね。お母さんみたいな凄い人にはなれません」

「・・・うらら、それは違うわ。お母さんだつて、いつも怖かつたのよ」

「え・・・っ？」

うららは驚いた。いつも大勢の観客の前で演技も歌も完璧にこなしてきた母親が『怖かつた』なんて言葉を口にするなんて思いもしなかつた。

「本当よ。いつもいつも歌詞を間違えたり、マイク倒したりしたらどうしようつて、不安だつたわ。自分は本当は女優も歌手も向いてないんじゃないかと思つたことさえあるのよ。でもね、全てが終わつた後、とびっきりの笑顔で拍手してくれるお客さんを見て、また頑張ろうつて気になれるの。お客さんたちの応援が、私の力になれるの。もちろん、うららの応援が一番力になつたわ」

「お母さん・・・」

「だからね、うらら、怖がることなんてないのよ」

母親は娘から瞳を逸らすことなく、凝視続けた。

「失敗しても恥をかいてもいいの。大切なのは、目の前のことに自分はどう向き合えるかつてこと。うらら、あなたが女優や歌手になつたのは何のため？お母さんと同じようになりたいため？」

「・・・いいえ！」

母親の質問に、娘ははつきりとした口調で返事した。

「確かに最初は私、お母さんを目標に頑張っていました。ですが、途中から私、気づいたんです。たくさんのお客さんが私の演技を見たり、歌を聞いて笑顔になつてくれるのを。そんな人たちが増えて

いくと、私はとっても嬉しいんです。私はもつともつと、たつくさんの人たちを笑顔にしていきたい。そんな夢があったから、今まで辛くても悲しくても頑張つてこられました」

「そう・・・そうよ、それでいいの」

母は再び娘に微笑んだ。

「歌いなさい、うらら。あなたが歌わなければ、お客さんはみんなガツカリして悲しむわ。みんなに元氣と勇氣を与えて、明日からまた頑張ろうと笑顔にさせるために、大きく声を出して歌うのよ」

「はい！お母さん！」

そして、うらはは母親から再び観客席に顔を向けた。その表情は吹っ切れていて、少しも恐怖していなかった。激しく鼓動していた心臓もいつの間にか収まっていた。

うらはは歌った。声に出して歌った。母親に言われたように、大きく、強く、はつきりと。

偉大なる大女優兼歌手でもあった母親ではなく、今までで一番の感情を込めたうらの歌声が会場を一気に支配し、全ての観客の心を？み、テンションをマックスにさせる。短い時間だったが、うらはは確かな『幸福』と生きている実感を感じた。やがて歌い終え、一礼した瞬間、爆発的な歓声お客席から舞い上がった。頭を上げたうらははどのお客さんも笑顔でいるのを確認し、自身もはじけそうな笑顔を見せた。

「うらら・・・」

母親が拍手しながら娘の横に再び来た。

「お母さん」

「よく頑張ったわね。それでいいのよ。あなたが私の影を追うことなんてない。あなたはあなたのやり方で行けばいいの。これからも、そうやってみんなを笑顔にしていきなさい」

「・・・うん、ありがとう、お母さん」

「さて、それじゃあ今日はうらのためにご馳走を作らなきゃね。何がいい？うらら。あ、そうだ。ひさしぶりにお母さん特製のスペ

シャルカレー作ってあげようか？」

「本当？」

「ええ。だから楽しみにしてて・・・」

「・・・でもいいよ、お母さん」

「え・・・っ・・・？」

母親は耳を疑った。聞き違いでなければ、今誰よりもカレーが大好きな愛娘が自分の作るカレーを食するのを拒絶したのだ。

「あ・・・あれ？どうしたの？うらら。今日はカレー以外のものが食べたい？」

「ううん、そうじゃない。私も本当はお母さんのカレー、また食べたいよ」

「じゃあどうして？・・・もしかして、どこか身体の具合が悪いの？」

母親はそう尋ねたが、うららは力なく首を振るばかりだった。彼女はどこか悲しみに満ちた瞳を母親に向け、寂しそうな微笑を浮かべると、こう伝えた。

「今日は本当にありがとう。あなたが私に言ってくれたことは絶対に忘れません。これから私は、私のやり方でたくさんのお客さんを笑顔にしていきます。だから・・・もう十分です。もうこれ以上の『幸福』はいりません、お母さん・・・偽者でも会えて嬉しかったです」

母親が目の前に現れた時、うららはすぐに気づいた。というより、最初から分かっていた。

なぜなら、母・春日野まりあは自分が幼い頃に亡くなっただのをうらは知っていた。だから、今の自分の前に現れるはずがない。

母の姿が風に吹かれて消えた。観客の海も立っていた巨大ステージもどこにもなかった。あるのは、森の中に立つ自分「キュアレモネード」の姿のみだった。

「お母さん・・・」

亡き母との再会と二度目の別れを経験したレモネードは、少しだけその場で泣いた。

どうしてこれが目の前にあるのだろうか、とムーンライトは思わず首をひねった。

彼女の視界、そこには一本の巨大樹が伸び、周囲にはゆるゆると白雲が流れる聡明な空が広がっている。それだけで、ムーンライトは自分が今どこに立っているのかが分かった。

「どうして、私、こころの大樹に・・・？」

こころの大樹。

全ての人の心の花を咲かせるという天空を浮遊するその伝説の大樹は、かつて砂漠の使徒の襲来から世界を守るためにプリキュアを誕生させるパートナーの妖精を生み出す防衛システムの役割も果たしていた。過去最強と謳われたプリキュア、キュアフラワーの手によって一度倒された砂漠の王の復活と同時にこころの大樹は破壊されてしまったが、その際に残された種が健やかに育ち、プリズムフラワーの時の際には完全な復活を遂げている。

そのこころの大樹がなぜ突然目の前に？

そもそも、自分はレモネードとともに森の中を歩いていたのではないのか？

「そういえば、レモネードは・・・？」

「ムーンライト」

「ゆり」

一緒にいたはずの彼女を探そうとして背後を振り返ったムーンライトだが、突如呼びかけられたふたつの声に、全身が一瞬で硬直した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まさかと思い、もう一度こころの大樹のほうに向き返る。

「ムーンライト」

「ゆり」

再び、名前を呼ばれた。胸の鼓動が一気に上がった。



「・・・コロン・・・お父さん・・・っ・・・」

もう二度と会えないと思っていた存在が、そこにいた。  
コロン。

かつて一人で砂漠の使徒と戦っていた時のキュアムーンライトのパートナー。しっかり者で、小さな身体ながらもムーンライトを励まし、支えてくれた存在だったが、砂漠の使徒との乱戦の最中、彼は危機に追い詰められていたムーンライトを庇って敵の光弾に直撃、細かな塵と化して彼女の目の前で消滅した。彼の死に衝撃を受けたムーンライトはその直後に敗戦し、変身能力を失い、途方にも巨大化した絶望と長く戦い続けることとなる。

だが、コロンは肉体こそ失ったものの、魂はこころの大樹の中で生き続けていた。自分はもうプリキュアになれないと戦うのを拒絶する彼女にコロンはもう一度心からプリキュアになりたいと願えばまたキュアムーンライトに変身できると言葉をかけ、ブロッサムたちの三人と力を合わせて戦うことを選択したゆりは再びプリキュアになりたいと心から願い、その想いが届き、遂に復活を果たしたのだ。その後、コロンはパートナーと永遠の別れを告げ、再び彼女の前で消えた。

そしてゆりの父、月影博士。

植物学者としても優秀な彼は三年前に『こころの大樹を探しに行く』と愛する妻と娘に告げ、フランスに旅立ち、それからの消息は不明となる。実はその時彼は砂漠の王と出会い、彼からある仮面を渡された後洗脳され、砂漠の使徒の一員、サバーク博士に変貌を遂げたのである。そして砂漠の王の忠実なる僕と化した父親は運命の悪戯か、同時期にプリキュアに変身した娘と激闘を繰り広げることになる。

仮面が破壊されたことで洗脳が解けた父親は娘とようやく涙の再会を果たすも直後に現れた砂漠の王が放った光弾から自身を犠牲にして娘を庇護、跡形もなくなるほどの壮絶な死を遂げる。こうしてムーンライトは愛する存在をふたりも目の前で失ったのだ。

「コロン・・・お父さん・・・」

「ムーンライト」

「ゆり・・・」

ムーンライトは、ゆつくりとふたりに近づき、父親の大きな身体を強く抱きしめた。再会を果たした時には『抱きしめる資格はない』と言って最後まで娘の身体を抱くことはなかった父親だったが、今度は優しく抱きしめ、微笑んだ。そんな父娘にコロンも、微笑みながらそつと近づく。

「お父さん・・・お父さん・・・つ・・・」

「ゆり・・・すまなかった。おまえには本当に辛い思いをさせた」

「・・・・・・」

「洗脳されていたとはいえ、あの時の私は娘であるおまえを殺すことに少しも躊躇いはなかった。私は父親失格だ。本来なら、こうしておまえに会うことすら許されんかもしれないというのに・・・」

「謝らないで・・・お父さんは何も悪くない・・・悪くないんだから・・・つ。たとえ他の誰もがお父さんのことを許さないと言っても私が許す・・・娘の私がお父さんのことを許すから・・・だからっ！」

「・・・ありがとう、ゆり」

そこにコロンが口を挟んだ。

「ムーンライト、せっかく父娘水入らずのところが悪いんだけど、もう一人会ってほしい人がいるんだ」

「会ってほしい人・・・？」

「うん。月影博士」

コロンが声をかけると、父親はうなずき、こころの大樹に振り返った。

「さあ、おまえ。恥ずかしがらずに出てきなさい」

「お父さん、一体誰と・・・？」

その時、大樹の影から誰かがそつと現れた。一瞬にして、ムーンライトは息を呑む。大樹の影から姿を現した者は片目を閉じ、両頬

を幾分紅潮させ、少々言葉が詰まりながら発した。

「ひ・ひ・ひ・ひさし・ぶり、ね、姉さん」

「ダーク・プリキュア・・・！」

ダークプリキュア。

漆黒の短いドレスとロングブーツを纏い、背に蝙蝠のような片翼を生やしたムーンライトと同年齢に見える少女は彼女を倒すために月影博士に生み出された生体兵器だった。ムーンライトの一部から誕生した彼女は生みの親である博士に忠誠を誓い、彼のためにどんな非情な行為を繰り返した。だが、同時に自身がムーンライトの影<sup>コト</sup>であり、かつ博士が娘を倒そうとしながらもどこかでそれを抑えようとしていることに憎々しげに感じ、オリジナルが消えてしまえばきっと博士は自分だけに愛情を注いでくれると考えたダークプリキュアは姉であるムーンライトを目の仇にし、何度も彼女と死闘を繰り広げた。

しかし、結局コピーはオリジナルに勝てなかった。最終決戦において敗北した彼女は博士が洗脳が解かれたことに焦燥感が募り、自分は何もかもオリジナルに奪われてしまうのかとこのうえなく絶望した。ところが、信じられないことに博士が抱きしめてくれたのはオリジナルではなく、コピーである自分だった。そして彼の口から自分を娘だと言ってくれたことに最後の最後で自身の幸福を感じたダークプリキュアはオリジナルにも今まで見せたことがなかった優しい微笑を見せて、博士の腕の中で永遠に消えた。

「さあ、ダークプリキュア。ここへ・・・」

父親が言うと、ダークプリキュアは姉のもとへと歩み出した。一歩ずつごとに距離が縮まっていく。ムーンライトの前まで来て、彼女はようやく足を止めた。

「ダークプリキュア・・・」

「ね・姉さん」

ダークプリキュアの表情は相変わらず片目を瞑ったままだったが、それでも頭の中で必死に言葉を選びながら懸命に伝えようとしてい

るのが読み取れた。

「姉さんには・・・その・・・今さら言っても遅いかもしれないが・・・どうしても言わなくてはならないことだから、言おうと思う。その・・・あの・・・い、今まで、本当に、すまなかった」

「ダークプリキュア・・・」

まさか面と向かって、かつての宿敵の口から謝罪の言葉が出るとは思わなかったムーンライトは一瞬小さく驚いたが、すぐに微笑み、そして、きりりと表情を引き締め、両眼を細くした。

「本当に言うのが遅いわよ」

「姉さん・・・！」

「ゆり・・・」

「あなたが今までやってきたことがどれだけ私を苦しめたと思っているの。何回も殺されかけたこともあったわよね？」

「う・・・」

「ゆり、言いたいことは分かるが、だからって・・・」

「でも・・・」

父親の言葉を遮って、ムーンライトは再び微笑んだ。そして、

「！・・・ね、姉さん」

妹の身体を優しく抱きしめた。

「許すわ。だって、あなたは私の妹だもの」

「姉さん・・・」

「お帰りなさい、ダークプリキュア」

「・・・うん。ただいま、姉さん」

ふたりの姉妹は、互いに抱き締め合った。双方とも、目頭から一筋の涙がこぼれる。そんな姉妹の抱擁を、父親とコロンは優しく見守った。

ムーンライトは心から『幸福』を感じていた。ずっと、こうしていたいと思った。それが可能となるのなら、どんなにいいだろうと願いたくもあった。

「・・・でも、ここまです」

ムーンライトは妹の身体を解放した。

そして、そのまま彼女たちから離れ始めた。

「姉さん……?」

「ゆり、どこに行く?」

「ムーンライト……」

自分に呼びかける愛しき者たちにムーンライトは涙を拭い、心からの笑顔で返事した。

「ごめんなさい、みんな。できるなら、ここでいつまでも一緒にいたかった。でも、できないの。あなたたちは、本当は、ここにはいないから……」

「姉さん……」

「ゆり……」

「ムーンライト……」

「でも、たとえばんの少しでもみんなとまた会えて、嬉しかったわ。本当に『幸せ』だった。だから、もし私の幸福を願うなら……今度は『いま現在』の私の幸せじゃなく、『これから未来』の私の幸せを願って。

みんなのことを決して忘れず、そしてみんなの分まで私が幸せになれば、その時こそが本当の幸福だから」

無言で佇んでいた父親と妹、そしてパートナーたちが煌めく霧となつて舞い散った。こころの大樹も消えていた。ムーンライトはまた瞳から涙を流した。

「さようなら……ありがとう」

ムーンライトは再び片手で拭くと、すぐ近くに立つてこちらを見ていたレモネードに気づき、互いにうなずき合つて再び行進を開始した。

## 次回予告

一人でピーチとブラックを探すパッションは海岸に倒れる仲間を見かける

急いで救助しようとする彼女の前に現れたのは・・・

次回『和解』

おそらくは幻影、けれどようやく心の整理がついた

## 自覚（後書き）

書いてて、ムーンライトのOVAが出たら絶対に観たいなあと思いました。

## 和解

パッションは、いなくなったピーチとブラックを探して森の中の道なき道を進んでいた。しばらく進んでいるうちに森を抜け、海岸に出たパッションは、波打ち際に誰かが倒れているのに気づいた。ミント、リズム、イーグレットの三人が両目を閉じて身体が微動だにせずになっていた。

「三人とも、大丈夫!？」

慌ててパッションが倒れている三人の身体を激しく揺らしている  
と、

「イス」

背後から突然声をかけられた。それは彼女のよく知る声だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

パッションは、自分でも全身が強張るのを感じた。

まさか・・・・・・・・・・。

思わず鼓動が大きくなった身体を抱きしめたくなる。しかし、確かめないわけにもいかない。彼女はゆっくりと立ち上がり、身体ごと振り返った。

「イス」

「メビウス様・・・!」

かつて心から思慕していた人物が、そこに立っていた。

総統メビウス。

パッションはイスの故郷、ラビンス全ての管理人にして全パラレルワールドの支配を目論んだ者。その正体は、ラビンスの間たちが開発した球体の国家管理用巨大コンピューターであり、優秀なプログラムゆえに、やがて自我に目覚めるようになる。次第に何もかもをコンピューターに任せきりになり、遂には国の管理にまでコンピューターに任せようとした自国の人間に絶望を見た彼は、全端末から自国の人間を洗脳し、管理下に置いた。当然イスもそ



の一人だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

パッションは、突如現れたメビウスに対し、即座に臨戦態勢の構えを取った。かつては心から忠誠を誓っていた彼だが、プリキュアに転生した今となっては敵。もしかしたら、ミントたちを倒したのもメビウスかもしれない。

「イス・・・おまえがこの私にそう態度を取ってもやむをえぬ。なぜなら、私は一度、おまえを殺したのだから。誰よりも優秀で、私に忠実でいたおまえを・・・」

「？・・・・・・・・・・・・・・・・」

メビウスの物言いは、どこか寂しげで、穏やかだった。今まで自分が見てきた彼とはどこか雰囲気が違う。罷だろうか。

「イス、私を許せとは言わぬ。だが、教えてほしい。私は、間違っていたのであるうか。ただ全パラレルワールドを『苦しみも悲しみもない世界』にしようと考えた私は・・・」

メビウスの言葉に、パッションは思わずハツとした。

確かに総統メビウスは非情な手段を用いてでも全パラレルワールドを自分の管理下に置こうと実行した。しかし、彼は同時にそれらの世界で起きている醜い争いなども抑制し、自分に忠実でありながらも人々にいつも正しくあろうとする『悲しみも苦しみもない』理想世界も作るうとした。彼は彼なりにいつまでも平和な世界を作ろうとしたのも確かだ。

第三者からの視点に立てば、それは傲慢で、身勝手な世界かもしれない。けれど、国の管理にまで機械に任せようとした人間に絶望を見、このままではいけないと考えた彼にとってはそれが正しいと信じて疑わなかったのも無理もなかったのではないだろうか。現に、自分も彼の考えは全て正しいと信じていたのだから。

他国の管理にまで彼が手を出すのは、道理が行くわけがない。しかし、彼をそこまで追い詰めてしまったのは他ならぬ自分たちだ。あまりにも自分たちが怠慢だったから、メビウスは自分以外に正し

いと思えぬようになってしまった。人間というものを、本当の幸せを理解できなかった。ピーチに彼が思い描いた世界を『思いやりも、喜びも、幸せもない』と反論されても最後まで分かってもらえずにいた。メビウスをそこまでさせてしまった自分たちにも、責任はあるのだ。

「メビウス様・・・」

パッションは、臨戦態勢の構えを解き、メビウスに一步步近づいた。

「残念ながら、あなたの考えが間違っていたかどうか私には答えられません。私も、かつてはあなたの考えに賛成していたのですから、ですが、これだけは言えます。人には誰しも無限の可能性があり、自分の手で幸せを？むことができます。現に今、あなたがいなくなったらラビリンスでは、もう機械に任せたりするようなのではなく、人と人が手を繋いで協力し合い、自分たちの考えで成り立ちながらも、多くの人が笑顔溢れる幸せな国になるうとしています。だから、メビウス様みたいな存在が二度と生まれることはないとは私は確信しています」

「・・・そうか」

「しかし、メビウス様、みんなが自分の力で立ち上げられるようになったのは、メビウス様のおかげでもあるんです」

「ぬう・・・？」

「あなたの絶望を知ったから・・・あなたという大きな存在があったから、もう二度と同じ悲劇を繰り返すことのない、新しいラビリンスに生まれ変わることができたんです。これは皮肉ではありません。少なくとも私は、今もあなたに感謝しています。あなたがいなかったら、私はずっと幸せというものを知ることなかった。だから・・・できればあなたと一緒に、新しい国家を作っていきたかった」

「・・・イス、おまえは今、幸せか？」

無表情だったが、メビウスは心の奥底から確認するように問うた。

パッションは、彼の目を直視しながら静かにうなずいた。

「はい・・・私は今、とても幸せです」

そこには苦しみも悲しみもあるけれど、思いやりも喜びもあるのだから。

何より、人々が心から笑って暮らせるのだから。

「そうか。ならばいい」

メビウスも彼女から視線を逸らさないまま、続けた。

「おまえや国民が新しく生まれ変わった国家に不満を抱いていないようであれば、それでよい。もうおまえたちは、全てを私に預ける必要もない。懸命に、そして幸せに生きよ。私は・・・永遠の絶望の中で見守っているでしょう」

「メビウス様・・・！」

パッションは、首を激しく振った。

「誰にだって、幸せになる権利があります。それはメビウス様も例外ではありません。あなたはずっと不幸でした。しかし、もうあなたも自分の手で幸せを？んでもいいんです」

「しかし、私には幸せになる方法が分からぬ」

「あきらめないでください。チャンスも、時間も、いくらでもあります。生きる権利もまた、平等に与えられているのですから。だから、メビウス様・・・」

パッションは、メビウスの目を見ながら、はつきりとした口調で言った。

「あなたが自身の手で幸せを？むのを心から祈っています。メビウス様、今日はこうしてあなたと再会し、心ゆくまであなたと話ができたことにずっと胸につかえていたものがなくなって、私はとても『幸せ』でした。しかし、いつか・・・幸せになったあなたと巡り会えることができれば、それこそが私にとって本当の幸せです」

「イス・・・」

「だから、どうか・・・」

パッションは専用武器のパッションハープを召喚し、手に取った。

「もう私に構うことなく、ご自身の手で幸せになってください。今まで本当にありがとうございました。……さようなら、メビウス様」

必殺技の発動を確認し、パッションは渾身の想いで叫んだ。

「プリキュア！ハピネスハリケーン！」

身体を中心に回転させるとともに無数の小さなハートの嵐が巻き起こった。豪風を受け、メビウスの身体が一瞬にして掻き消される。必殺技を終えた時、パッションは目の前に白地のワンピースを着た、愛らしい少女が立っているのに気づいた。彼女が、自分たちの最大の敵『幸福<sup>マルガ</sup>』だと一目で分かった。

「幸福に、本物も偽物もないわ。自分がそう願えば、それが本当の幸福なのよ。どうして拒むの？幸せになればそれでいいじゃない。誰だってそう願っているわ。幸せになりたいって。幸せになりたいのよ」

「ええ。だといいわね・・・」

マルガはちよっと小首をかしげたが、すぐに霧のように消えた。

パッションは、海岸の向こうを見た。

森を抜け出たばかりのムーンライトとレモネードが波沿いにこちらへ向かおうとしていた。

### 次回予告

森を行進中、エクスはある忌まわしき過去を思い出す

なぜ『怪物』と呼ばれるのにひどく傷心されるのか、理由が判明する  
次回『忌憶』

たったひとつのミス、それが彼女の心を大きく蝕む

## 和解（後書き）

きつとパッションは、メビウスとこつこつに話がしたかったんだと思います。

## 忌憶

エクスはセラフ、そして妖精たちとともに森の中を引き続き進んでいた。

エクスの表情は、どこか吹っ切れたようにも見えていた。それは人造人間「イノベイド」でありながらも妖精たちに温もりのある人間だと言われ、また少々ぎこちなかったセラフとも氷解し、自身を受け入れてくれたかむらかもしれない。いずれにせよ、彼女の中で何かが変わったのは確かだ。

突然だが、なぜエクスは自身がイノベイドであることを誇りに思っているのか、『怪物』『化け物』と呼ばれるのにひどく傷心してしまっているのか、その矛盾の説明をここで記すでしょう。

もつとも本来なら、その理由を一切伏せたままにし、曖昧模<sup>あいまいも</sup>糊にしても構わないのだが、その理由には後に彼女を強く決心させるきっかけにも繋がる。エクスの決心が何であるかは後々語るとして、とにかく矛盾の説明をしないまま、何事もなかったかのように次の場面にまで展開を早送りするわけにはやはりいかないだろう。

とはいえ、そんなに複雑な話ではない。

簡潔に説明すると、彼女は、まだ戦闘型イノベイドとして覚醒してからまもない頃に自身の所属するチームが数か月に渡って内偵・潜入捜査を続けてきた、ある麻薬取引に関わる極秘作戦を、自分の責任で台無しにしてしまったのである。相棒である剣を、肝心なところで振り下ろせなかったばかりに。

人間を相手に斬ったことがないなんて、青臭いことを言うつもりはない。ましてやエクスは『ヴェーダ』によるシミュレーション空間にて戦闘訓練を何回も受けた優秀なイノベイドだ。潔癖ぶるうとも、誠実ぶるうとも思わない。

それなのに、あの時は斬れなかった。

振り上げた刀身の先にあった対象が、自分と同じ14歳の少女だ

ったから・・・では、少しも理由にならないだろう。14歳の少女だろうが80歳の妖怪ババアだろうが、彼女は凶悪な犯罪者<sup>テロリスト</sup>だった。実際に彼女が属する組織による残虐行為のせいで、同年齢の子供も犠牲になったことさえある。それなのに、エクスは彼女を取り逃がしてしまった。そのせいで、多くの仲間が時間と労力を限界まで費やし、どれほど膨大な捜査力を犠牲にしたかも分からない極秘作戦を、何の成果も挙げないままに、終結させてしまった。ピリオドを打ったのである。少女をはじめ、一人も逮捕者も出さず、死者こそ出なかったものの、同僚の中には二度と現場に戻れないかもしれない重傷を負った者もいた。費用対効果としては、最悪の結果だった。いくら彼女が組織内において弱い立場にあつたとはいえ、それでも『ヴェーダ』に役立たずとして捨てられることなく、休職扱いで済んだのは御<sup>おん</sup>の字というものだろう。

どうして剣を振り下ろせなかったのか、エクス自身も本当に分からない。イノベイドとして、そしてプリキュアとしての自覚・・・いや、覚悟がなかったのかもしれない。いずれにせよ、エクスはその件については弁解する気はないし、仲間にも心から申し訳ないと思っている。

ただ、エクスはどうしても思い出してしまふ。

剣を振り上げた時。

あの少女が自分に向けた眼を。

信じられないようなものを見る眼・・・まるで死神にでも出会ったかのような眼だった。そして次の瞬間、同年齢に見えるエクスに対して、少女はこう喚いたのだ。鬼、悪魔、怪物、化け物・・・その言葉一つ一つがエクスの剣を鈍らせる結果となった。

今にしても馬鹿馬鹿しいと思う。自分が人を殺すことはあっても、自分が人に殺されることはないとしても、思っていたのだろうか。殺す以上は殺される覚悟があるはずではないのか。犯罪者としての覚悟。イノベイドおよびプリキュアとしての覚悟。何にしても、覚悟組織の一員であること。あの少女も、組織の一員であつた。そうす

ることで、覚悟は薄れ、痺れ、寂れてしまったのかもしれない。それはエクスも同様だったのかもしれない。何しろ、たかが言葉に惑わされ、敵を斬ることができなかったのだから。

しかし、本当のところはどうなのだろう。出自を辿れば、あの少女には更生する機会どころか、正しく生きることさえも許されていなかった。そんな人間に、イノベイドであるエクスはどんな覚悟を求めるべきだったのであろう。それを期待することが、どれだけ酷なことか。あの少女がああいうふうに生きられないのは、自明の理であった。最初から運命づけられていた。だが、それでもその運命は受け入れなければならないのだろうか。どういうふうに生きて、どういうふうに死ぬか、もともと決まっているとでもいうのか。人の生と、人の死は、何者かにいいように操られているとでもいうのだろうか。

それ以降だった。イノベイドであることに誇りと喜びを持ちながらも、エクスは『怪物』などといった単語に敏感になり、ひどく自分を傷つけるようになった。それは過去のトラウマに由来しているが、やはりどこかで任務とはいえ、敵を躊躇なく斬り伏せ、手を血で染めても平然としているのに自分が自分でなくなっているような気がしていたかもしれない。自分のことなのに、自分が分からない。それは単独で戦地に向かうよりも、ずっとずっと、怖かった。  
「（ティエリア・・・）」

エクスは、再び心の中で呼びかけた。

ティエリア・アーデ。彼もエクスと同様に『ヴェーダ』に生み出されたイノベイドの一人であり、『ヴェーダ』とリンクする能力を持っていた。当初は気難しそうなイメージがあったが、仲間の意思を誰よりも尊重し、時にはぎこちないながらも冗談を言ったり、仲間を叱責して諭す面も見せる本当は心の優しい人であり、エクスにとっては兄貴分のような存在だった。任務に失敗し、休職扱いになったエクスを不器用ながらも励ましてくれたのは彼とアニニューだった。



アニュー・リターナー。エクスと同じ顔を持つ彼女は仲間から『宇宙物理学、モビルスーツ工学、再生医療、操船技術、料理に長け、おまけに美人』と評されるほどの逸材で、後に戦死した兄の遺志を受け継いで私設武装組織『天上人』<sup>ソレスタルビーイング</sup>に加入したライル・ディランデイの素性をつ知ったことがきっかけで、彼と恋仲になり、幸せを？んだ。現在では別々のメンバーとして活動、遠距離恋愛中だが、度々『ヴェーダ』を介して連絡を取っているので、恋愛関係に亀裂が入る心配はない。

エクスの『きょうだい』であるふたりのように、中には心のある優しい者もいるが、非情な者も少なからずいるもので、その代表となるのが、イノベイドたちのリーダーである彼、リボンス・アルマークだった。

好きか嫌いかと問われれば、まあ『嫌い』に近いかもしれない。短気で、仲間に八つ当たりに近い形で手をあげたことすらあり、任務に失敗したエクスを殴打まではしなかったものの、激しく罵声を飛ばした。個人的に彼は自身の力のみで計画遂行に固執し、同胞であるはずのイノベイドすら道具としか見ていない気さえする。今回の『幸福狩り』の任務は彼の耳に届き、了承を得てはいるが、短気なりボンスのことだ。帰りが遅いのには苛立ちが募っていることだろう。アニューに気苦労をかけたくない。

任務は、迅速かつ正確に、だ。

少女を斬ろうとしたあの時も、任務に失敗したエクスは誰よりも自分を責め、激しく罵った。自分で自分を許せず、生きていることを恥に思い、死ぬことさえ考えた。だが、自分で自分を殺しても、世界的に見ればただ単に役立たずの人造人間が使い物にならずに壊れただけで何も変わらない。悪は今まで以上にはびこり、新たな犠牲を生み出していく。

ひどく辛酸を舐めさせた出来事だったが、彼女は苦悩した末に潔い『死』よりも無様な『生』を選んだ。ただし、自分に対してさえ一切の甘えも許さないという条件付きで。

それが、彼女の決心。彼女の覚悟。

イノベイドとしても、プリキュアとしても。

「!.....」

ふいに、エクスは感知した。背後を振り返る。セラフも妖精たちも同様の反応を見せていた。

闇の気配。ここからそう遠くない。

マルガに接触を図ろうとする者が、近くに、いる。

「行くわよ!」

地を蹴り、エクスは走り出した。あとからセラフ、妖精たちが続く。

マルガに接触する者たちの存在を見極め、場合によっては打倒すれば少なくとも自分たちの世界は破滅の脅威から遠ざかる。

そう、任務の前にこれは何としても遂行しなければならぬ唯一の機会。

イノベイドとしても、プリキュアとしても。

『使命』という名のもとに。

巨鳥・アルゲンタビスを八つ裂きにし、ようやく打倒に成功したデスバイア、グライファー、バインドの三人だったが、このエリアに来て、初めての焦燥感が彼女たちの心を蝕んだ。巨鳥に連れ去られ、リーダーのサバーニヤを見失ったのだから。

まさかサバーニヤともあるう者が巨鳥の餌になったとは思えにく  
いし、無事に逃げ出したと信じてはいるが、さすがに彼女を単独に  
させてはまずい。彼女は、自分たちの心の支えであり、絶対に守護  
すべき存在なのだから。彼女がいなければ、今まで進んできた道を  
進むことも戻ることも、立ち止まることすらも許されなくなっ  
てしまふのだから。

彼女の無事を願いながら、三人の『監視者』は急いで搜索を始める。

同じ招かれざる者同士の衝突が、まもなく起きようとしていた。

#### 次回予告

マルガの罠にかかった者の存在に気づくルージュ

幸福の呪縛を解くために、彼女はある手段を用いる

次回『解除』

夢から覚ますには、これしか方法はない

## 忌憶（後書き）

エクス過去のエピソードは私が考案しましたが、剎那氏から許可をいただいています。

## 解除

起きなさいッ!!

びっくうつつつつっ!!!!

身体が過敏に反応して、ミント、リズム、イーグレットは瞬時に身体を起こした。視界にムーンライト、レモネード、パッションの姿が入ってきた。

「ムーンライト・・・レモネード・・・パッション・・・?」

「あれ?王子先輩は・・・?」

「ここは・・・?」

「三人とも、大丈夫ですか?」

「怪我はない?」

順に言いながら周囲を見回す三人にレモネードとパッションは心配そうに声をかけた<sup>マルガ</sup>に<sup>マルガ</sup>に対し、ムーンライトは、

「あなたたち、『幸福』に魅入られたのよ」

と諭すように言った。その一言で、三人はすぐに自分の身に何が起きたのか理解した。

「そう、私たち、まんまと罠にかかったのね・・・」

「よく考えてみれば、いきなり私が直木賞を獲るなんて出来すぎよね・・・」

「せっかく王子先輩とデートできそうだったのに、ちょっともったいなかったかな・・・」

「何を言っているの?あなたたち、あのままでいたら、いずれ海の藻屑になっていたわよ」

視線を下に向けて少々残念そうに呟くイーグレット、ミント、リズムにムーンライトは呆れたコメントをしたが、彼女自身も三人の気持ちは少しは分かっていた。何しろ、自分とてついさっきまで幸福な夢に浸り、一瞬でもずっとこのままでいたいと思ったのだからそれはレモネードもパッションも同じだ。

自力で幸福な夢から覚めるには、激しい葛藤が必要だ。自らそれを体験したムーンライトとレモネード、パッションだからこそ、他者によって夢から覚まされた三人の残念な想いはよく分かる。たとえ夢だと分かってても、辛すぎる体験。そんな思いをするくらいなら、いつまでも甘えていたいのが人間としての心情だ。

ミントは、ムーンライトと目を合わせた。

「私たち、とてもいい夢を見ていたわ」

「ええ」

「とても『幸せ』だった・・・」

「分かっているわ」

「本物じゃなくて、残念だったけれど・・・」

ミントは再び緑の瞳を伏せた。

しかし、すぐにその顔をあげた。その表情は少しだけ笑っていた。でも、私・・・なんだか夢で見たようなことを現実でもできそうな気がするの。現実はその甘くないのは知っているけれど、夢からこう・・・元気・・・あるいは勇気をもらった気がして、とにかく現実の世界でも頑張ってみようと思ったの

「それ、私もそう！」

「私も！」

ミントの言葉に、イーグレットとリズムも弾んだ声をあげた。

「そう・・・そうなの」

ムーンライトは、ミントたち三人単純な、しかし強靱な精神力に感心した。

たとえ敗北し、傷ついて倒れても、すぐにそこから立ち上がる。より、強くなって。

たとえどんなに失敗しても、彼女たちは次のチャンスに向けて一杯夢に向かって努力を重ねる。

現実の世界は厳しいけれど、それでもあきらめなければきっと夢は叶う。

彼女たちには、無限のチャンスがまだあるのだから。

まだまだ強くなれる可能性を秘めているのだから。

それが、伝説の戦士、プリキュア。

「さあ、そろそろ行きましょう」

「立てる？」

三人の言葉を聞いてムーンライトと同様に微笑を浮かべたレモネードとパッションが、イーグレットとリズムに手を差し伸べた。ムーンライトも無言で、ミントに手を差し出した。

微笑を絶やさぬまま、ミントはその手を握った。

ふと、気配を感じた。ルージュは歩を急ぐ。

しばらく歩いていると、倒れて両目を瞑っているピーチとブラックの姿が見えた。

よく見てみれば、なんとも幸せそうな寝顔をしている。ブラックに至ってはよだれが口から溢れていた。

さては、美味しいものを頬張っている夢を見ているな。

彼女たちらしいと思いつながら、ルージュは苦笑を浮かべる。

「こんなふうになるのか・・・」

マルガが見せる幸福な夢、その中で起きている幸せこそが現実であり、感じる感覚も気持ちも本物となる。どこか何かおかしくても、当人たちはとても幸せだから、なかなかそれに気づかない。

つまり、今のピーチとブラックの状態だと、幻覚を見ながら、幸せな気持ちのまま、いずれ衰弱死してしまう。それがどれほど恐ろしいことなのか、当人たちは最後まで気づかない。それがマルガの最も恐るべきところなのだ。当人は何も知らないまま幻術にかかり、それが本物の幸福だと思い込んだまま、幻を見続ける。

だが、人は水を飲まなければたった三日で死ぬ。幸福な幻に浸っているうちに身体は徐々に弱り、それに気づくことなく、なす術もなく、やがて命を終える。そこに、死の恐怖も微塵の苦痛もない。だからこそ、マルガのもたらす死は、『恐ろしい』以外に表現のし

ようがない。

なるほど、これならマルガは存在するだけで、本当に世界をわずか数日で滅ぼしてしまうだろう。

ルージユはようやく合点がいった。

問題は、どうやってマルガの与えた幸福の呪縛からふたりを解放するかだが。

「・・・やっぱり、強力なショックを与えなきゃ、ダメか」

ルージユは小さくため息を吐くと、眠っているふたりの胸ぐらを？み、自分のほうに引き寄せた。

大きく深呼吸。

「起きんか、このバカタレがああつつつつ！！！」

「うわあああああつつつつ！！！」

「ひゃあああああつつつつ！！！」

耳元で炸裂した凄まじい怒号に、ブラックもピーチも瞬時に悲鳴をあげ、驚愕の表情で跳び起きた。

「わあああゝつつ！！？何？一体全体何が起きたのよおっ！！？」

「わわわわっ！！？一体、何？ここどこ？ウサピョンやトイマジンは！！？」

幸せな夢にどっぷりと気持ちよく浸っていたふたりだが、いきなり襲いかかってきた恐怖の波動に驚天動地。身体中が非常警報を鳴らしてパニックが発生し、視界が一瞬真っ白に染まった。

そして眼前に、額に青筋が浮かび上がり、腕組みして仁王立ちしているルージユの姿に気づいた。ルージユは跳ね起きたふたりに、にこり、と笑いかけた。

「お帰り。ふたりとも、いい夢は見られましたか？」

いくら表情では笑っていても目は笑っていない彼女に黒く闇のような瞳を向けられ、ブラックもピーチも、心臓が凍りつきそうなくらい恐怖した。自身の身に何が起きたのかは全く分からないが、またヘマをしてルージユを怒らしてしまったのだと理解はできた。これ以上、彼女の怒りを買うのは得策ではない。・・・というより、



そんな恐ろしいこと、できるはずがない。

「お許しくださいつつつつ！！！！」

怒りの大魔神に、ふたりは即座に五体投地でひれ伏した。土下座である。

彼女たちは、誰が、どんな場合に、何をすればいいのかを、理屈ではなく、感覚で分かっているのだ。ふたりが怒声一発で一氣に目が覚めたのは、ルージュが自分の声に、両者が間違いなく起きるだろう恐怖や苦痛の波動を込めたからだ。

「あゝあ、せっかく藤P先輩との結婚式がまだ途中だったのに・・・」

「私も、もう少しショーを見ていきたかったな・・・」

ようやく自身が見ていたものがマルガの与えた幸福な幻覚と理解しても、それでも少々悔しがる反応を見せたふたりを無言で見つめ、強く拳を握り締めた。自分が遭遇した『幸福』がまざまざと脳裏に蘇った。

あんなやり方は許せない。人の一番弱いところに突け込み、当人も知らない甘い夢を引きずり出すような真似は、はつきり言っ下<sup>ス</sup>衆<sup>ゲ</sup>のやり方だ。

誰にでも、心の奥底に仕舞っておきたいことがある。

思い出したくないことや、自分勝手な想い、どうにもならないこと、現実だと決して解決しないこと。だからこそ、みな心の中の引き出しにそつと隠しているのである。それを無理やり引っ張り出し、さあ夢が叶ったよ、喜びなさいと言われても所詮は幻・・・偽物に相違ない。ルージュは怒りに震え、いつも情熱が宿っている赤い瞳が、冷たく燃え上がった。

抗い難い夢を餌にするのは、卑劣だ。それを『幸せでしょう？』と決めつけるのは、傲慢だ。

そのやり方に、ルージュは心から本当に、怒<sup>いか</sup>る。

マルガの見せる夢は、本物ではない。だから、どこかおかしい。それは夢見る者にとってだけ、都合の良いように作られているのだ。

場合によっては、ありえないことも体験してしまう。

『一緒に死んでくれるの？ドリーム』

『・・・うん。ルージュをひとりぼっちになんてさせないよ』

そう・・・自分はあるえないものを見た。あきらめるドリームなんて、絶対にありえない。たとえ自分の命が本当に尽きようとしても、涙を吞んで果敢に何度でも挑んでいくのが、ルージュの知るドリームだ。

だから、ルージュは自分が会ったあのドリームが偽者と分かった。だが・・・それでもありえないことを、ありえないと認めてしまうのは本当に辛かった。

「・・・行こう、ふたりとも」

「え？う、うん」

ブラックとピーチに声をかけ、ルージュは歩み出す。一度遭遇したからか、マルガの持つ気配が、彼女たちにも自然と分かった。

森の中を、風を切って突き進む中、ルージュはふと思う。ドリームもマルガに遭遇し、幸福な夢を見せられて眠っている状態なのだろうか。

眠っていようと眠ってなかうと、途中で彼女の無事な姿が見ればよいが、いずれにせよ、マルガをこれ以上野放しにしてはおけないのがよく分かった。彼女が全ての人々を幸福にしようと世界を滅ぼしてしまう前に、一刻も早く倒さなくてはならない。それだけマルガは危険な存在なのだから。

決意を胸にし、ルージュはキツと前方を見据え、ブラックとピーチとともに森を進んでいく。

最強の敵との決戦が、少しずつ近づいていた。

## 次回予告

巨鳥から解放され、衝撃で気を失っていたサバーニヤ  
やがて起きた彼女の目に映ったのは、二度と戻らない過去  
次回『決別』

できれば一緒にいたい、けれど本当はここにはいない

## 解除（後書き）

眠くて大変でした。やっぱり無理は禁物ですね。

## 決別

ふと、誰かが自分を呼ぶ声が聞こえる。

遠くからではなく、すぐ近くだ。

とてもよく知る声……二度と聞くことがないと思っていた声。

今日子……今日子……今日子……今日子……。

「今日子！今日子！」

「ん……？」

サバーニヤは閉じていた目を開いた。視界にある人物の顔が入る。

「リドワン……？」

「やっと起きたのね、今日子。この寝坊助……」

彼女はそう言っただけで呆れたような小さなため息を吐いた。

キュアリドワン。それが彼女の名前。

サバーニヤが過去指揮していたチーム『エンジェルズ』の一員で、担当は作戦参謀。かつてプリキュアであるのを隠すために常にロングジャケットと帽子を纏っていたが、サバーニヤに『べつにプリキュアでもいいじゃん』と声をかけられ、彼女と交遊していくうちにリドワン自身自分を偽るのをやめる。口癖は『私と、契約しない？』。

……とまあ、彼女の解説はここまでにするとして、なぜリドワンがここに？

だって、彼女はかつて自分がこの手で……。

そこまで思った時、サバーニヤは、ふと自分が左眼に眼帯をしていないのに気づいた。懐に片手を突っ込むと、眼帯はそこにあった。ああでも、今は付けなくてもいいか。

サバーニヤは再びリドワンに顔を向ける。

「リドワン……あたしもう、涅槃ねはんに入ったの？」

リドワンは首を左右に振った。

「ううん、今日子はまだ生きてるよ。それよか今日子、またマルー

トがいなくなつたの」

「またあ？つたく・・・マルトって、ハルトと違ってホントあたしの手を煩わせるのが好きね・・・」

サバーニヤの反応に、リドワンはくすくす笑う。

「あとでアズリエルからO H A N A S H I決定だね」

「怖あ・・・」

でもまあ、その程度で済む分、マシかもしれないな。

そう思い、サバーニヤはゆっくりと立ち上がる。

「しょーがない。さつさとマルトのバカを見つけるとしますか」

「イエッサー」

リドワンは、ビツ、と額に片手を構えて返事した。

場面は、雲一つも流れていない爽快な碧空が広がる緑の草原に変わる。

風が気持ちよく身体中を吹き抜けていくのを感じながらサバーニヤを歩を進め、周囲を見渡していく。やがて立ち止まり、ふん、と鼻を鳴らす。その場で小石を二つ拾い上げた。

「そこ！」

びゅっ！

ごっ！ごっ！！

「「いつたああああつつつつ！！！」」

別々の方向に投げた小石は、草原の一定位置に身を隠していた者に両方とも当たり、悲鳴をあげさせる。しばらくして、頭に小さくタンコブができた瓜二つの少女がその身を晒した。

「マルト、ハルト、見ーっけ！」

ニヤリ、と笑むサバーニヤ。

キュアハルト&キュアマルト。彼女たちの本名は、そうせいしずか双生静、そうせいしずく双生動といい、二人一組の一卵性双生児プリキュアで、『エンジェルズ』ではアタッカーを務めている。双子ということを利用した攪乱戦法が得意で、時々『訓練』という名を借りてサバーニヤをはじめ、同胞にちょっとした悪戯を仕掛けてくる。もっとも、悪戯好き

なのはマルートのほうで、ハルトは渋々付き合わされているようだが。

「サバーニヤ、何も石投げることはないじゃんか！」

「隙を突いてふたりであたしを驚かせようたって、甘い甘い」

「私はただマルートにいつものように付き合わされただけなのに・・  
・痛い」

生意気なマルートには挑発発言したサバーニヤだが、普段は彼女を困らせたりはしないハルトに対してはそうはいかなくなった。頭にできたタンコブを抑え、少しだけ涙が滲んで頬を伝っている。さすがにちよつと罪悪感が募った。

「ご、ごめん、ハルト。泣かないで」

「その娘はマルートよ、サバーニヤ」

振り返ると、ややくすんだ金色のトランペットを大事そうに両腕に抱いた少女が、微笑を浮かべながらこちらに歩いてきていた。その後ろに、左腕にかなり分厚く、重量がありそうな書物を左腕で軽々と抱えている、無表情の少女の姿も見える。

キュアイスラフィル&キュアアズリエル。本名は、さばきかなで さばきとがびと裁奏、裁罪人

イスラフィルは『エンジェルズ』の索敵担当で、『音楽』を司るプリキュアだ。トランペットの音色で周囲を索敵するため、チームの目と耳を引き受けている。当人も大の音楽好きで、『ケージ・カワイ』とか『ケンジ・タカナシ』といった、どこかで聞いたことがあるようなような、とにかく有名な作曲家を尊敬している。

アズリエルは『エンジェルズ』のナンバー2で、『死』を司るプリキュアだ。左腕に持つその分厚すぎる書物の中には全ての生者の名が記され、そこから名を消されると、消された者は半永久的かつ強制的に消滅されてしまうという、なんか数年前に世界中で社会現象を起こした、名前を書くだけで殺人を容易に実行できる死神のノートを思い出させるトンデモナイ能力を秘めているが、とにかくにも彼女だけにはサバーニヤもあまり逆らえないのは重々承知している。事実、彼女は『それ以上逆らうと、名前消すよ』を口癖に敵

を脅すこともあるのだから。

とはいえ、アズリエルは普段そんなに怖いかと問われれば、違う。むしろ、普段はかなり気さくで、滅多なことでは怒りはしないし、そう容易に人を消すような真似もしない。時には軽食を作ってメンバーに振る舞うこともある。だから怖い面もあるが、サバーニヤはアズリエルのことが好きだった。

ちなみに、当人たちはどうやら知らないようだが、イスラフィルとは腹違いの異母姉妹の関係である。

「イスラフィル？え？この娘、ハルートじゃないの？」

「マルートよ。私には分かる。最初に文句を言ったほうがハルートで、今あなたの目の前にいるのがマルート。自分が普段おとなしいハルートだと思わせて、サバーニヤがマルートだと思っていたハルートが隙を突いてサバーニヤをびっくりさせる……そうですよ？」

イスラフィルが指摘すると、サバーニヤの前にいたハルートだと思っていた少女が憤慨したように言った。

「だああゝっ、もう！うまくいったと思ったのに、バラすなよ、イスラフィル！」

「ありや、本当にマルートだったの」

サバーニヤが一瞬呆気にと取られていると、マルートだと思っていたハルートがいそいそと彼女に近寄って、軽く頭を下げる。

「ごめん、サバーニヤ。ハルートが今日はこれで行こうと聞かなくて……」

「いいよ。石ぶつけて悪かったわね。まだ痛い？」

サバーニヤはハルートの頭をよしよと撫でた。

「ああ！私だつて石ぶつけられたのに、ハルートばかりズルい！」  
ぐあんっ！！

突如、真上から強い衝撃がマルートの頭部を襲い、彼女は頭を両手で抑えながらその場に屈んだ。

「……つつつうううつつつううっ！！何するのさ、アズリエル！



？」

「おまえにハルートを責める資格なんてない。名前消さなかっただけ、ありがたいと思え」

アズリエルは思いつきり拳骨を与えた右腕の拳を解きながら言う  
と、

「・・・ま、マルートの自業自得ね」

と、リドワンがまとめるかのようにコメントした。

「さあさあ、みんな、今日はここまで。いいお天気だし、おやつに  
しましょう！」

ぱんぱん、と両手を鳴らしてイスラフィルが呼びかける。『はい！』と、みながみな、即座に笑顔（無表情だったアズリエルも、この時は微笑を浮かべた）で元気に返事し、草原上に広げられたビールシートに座る。リドワンとハルートはもちろん、さっきまで喧嘩していたマルートとアズリエルも仲良く・・・顔は笑っているが、たぶん、背後に回れば互いに手を伸ばして背中を痛くつねっているのだろう・・・バームクーヘンを口にしていた。イスラフィルは抱いていたトランペットを咥え、幸福のメロディを演奏していく。そんな状況の中で、サバーニヤは心から満足し、『幸福』を感じていた。いつまでもここにいたいとも思った。

でも、同時に少したが辛くも感じた。なぜなら、本来ここにいるみなと共有していた時間・・・もしかしたら、現実でも本当に持つことができたかもしれない時間は、何を隠そう自分が破壊してしまったのだから。壊れてしまった時間ときは直すことができないのだから。

だから、みんなといるこの時間は『幸せ』だが、残酷だ。これ以上ここにいたら、頭がおかしくなりそうになる。そもそも、自分は今、この時間を共有することを許されない身なのに。

「（心のどこかで、あたしは自分に甘えていたのかしら？ だったら・・・）」

サバーニヤは、立ち上がった。全員が彼女を見た。イスラフィル

も演奏を止めた。

「今日子……もう帰るの？」

無言で立ち尽くしている彼女を見て、悟ったらしい。リドワンが聞く。サバーニヤは静かにうなずいた。

「うん。ウチのバカ妹たちが待つてるからね」

「そりゃないんじゃないかな。せつかくまたこうしてみんなと……」

「ハルト、ごめんね。そんな顔しないで」

「ハルトの言うとおりだよ。ずっと、ここにいてもいいじゃん。何が不満だって……」

「マルト、黙れ」

抗議しようとしたマルトをアズリエルが制した。無言でいるその額には、うつすらと青筋が浮いている。

「い……イエッサー（アズリエル怖あ……っ）」

サバーニヤは思わず、くす、と笑った。

「サバーニヤ、途中までだったけど、私のトランペットどうだった？楽しんでくれた？」

「ええ、イスラフィル。久々にいい気分転換になったわ。ありがとう」

礼を伝えた後、サバーニヤは最後に無言でいるアズリエルに近寄った。

「アズリエル」

「……何？」

サバーニヤは彼女の耳に、そつと伝えた。

「今日、マルトに O H A N A S H I するのは勘弁してもらえる？」

「なぜだ？」

「あんなのでも、あたしにとっては大切な仲間の一人だし、それに……もつ、みんなとまた会えることはないだろうから……ね、お願い」

「……仕方ないな。今日だけだ」

アズリエルは了承したように息を吐いた。その返事にサバーニヤは満足し、彼女から離れ、懷から眼帯を取り出し、左眼に付けた。

「さてと、それじゃあ・・・」

辛く悲しいけれど、達成すべき目的が存在する現実世界へ。

「行ってくるね、みんな」

「・・・・行つてらっしゃい！」「・・・・」

最高の笑顔を残して・・・・仲間たちはそのまま消えた。

視界は森に戻り、単独で立っていることに気づく。ふいに激痛が襲い、「く・・・」と声を漏らした。巨鳥から解放され、地上に撃墜した衝撃が今になって彼女を苦しめ始めたのだ。

膝を着き、激しく呼吸を繰り返すサバーニヤ。ふと、前方に白地のワンピースの少女が立っているのが見えた。

「『獲物』・・・・！」

遂に目の前に現れた。サバーニヤは急ぎ、『彼女』を仕留めるために用意した猟銃に手を伸ばそうとした。しかし、全身の苦痛にうまく手が動かない。

「どうして・・・・？」

ふいに『獲物』がサバーニヤに尋ねた。彼女は猟銃を取ろうとした手を止めた。

「どうして、あなたも幸せになろうとしないの？」

「アンタ馬鹿あ？」

サバーニヤは妹の台詞を借りた。『獲物』は青い両目を瞬きさせた。『獲物』を見据え、不敵に微笑みながらサバーニヤは続ける。

「『幸せ』つてのは、過去いままでじゃなく、未来これからにあるものなの。確かに心地よかったけれど、もう私には必要ない・・・・必要としちゃいけないのよ」

そう、自分たちがここまで来たのは、全ては未来のために。そのために、苦汁を舐めてまで登り詰めたのだから。

「・・・・分からないわ」

『獲物』はそう呟いて、霧のように姿を消した。逃げられたか。

だが、まだ機会はある。サバーニヤはなんとか着いていた膝を立て、一歩ずつ歩み始める。

歩きながら、最初に自分と再会したリドワンの顔が浮かんた。自分を偽るのをやめ、新しい自分にチェンジした彼女は誕生日に纏っていたロングジャケットと帽子をプレゼントしてくれ、それらをいたく気に入った自分は『エンジェルス』のロゴをジャケットの左胸に刺繍したのをサバーニヤは思い出した。

そういえば、あれ、どこに仕舞ったつけ？

無事に帰ったら、探してみようと、彼女は密かに決心していた。

## 次回予告

リベリオンと離れ、単独行動していくアルガティア  
そこで対峙するのは、かつて失った同胞

次回『ラストゲーム』

現実では、もはや叶うことのない最後の体験

## 決別（後書き）

ふと疑問。イスラフィルさんは、『ナオキ・サトウ』は尊敬しているのかな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1030y/>

---

プリキュアオールスターズDX 3 Revival 導いて！幸福の成す奇跡

2012年1月13日14時46分発行